

第 2 部

写真で見る100年

埼玉県立川越高等学校々歌

Moderato

古谷喜十郎 作詞
内田久米太郎 作曲

むらさきにかうむさしののて
していのじょうしこまやかにかぜ
んよもふかきかわじえにかかし
しのゆうぎまたあつくか
えのかわのきほひろくいしずえすえしーまな
びにはしらすじつにつきらをたがやしてーとく
びやはちちおのみねーのゆゑるぎな
をしくわがこうふーはみよしの
くいとまのみずーのすえながーし
のいとまのみずーのすえながーし

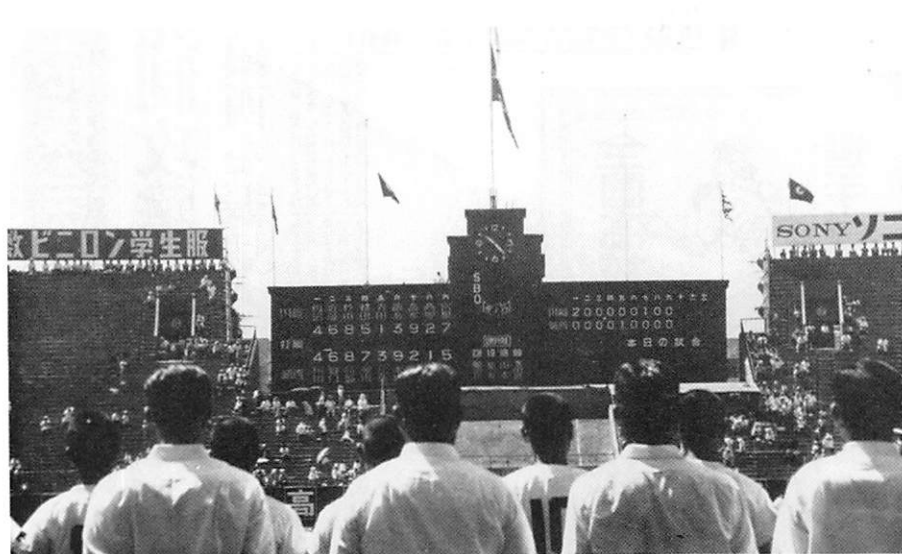
一、紫匂う武蔵野の
天与も深き川越に
教えるの庭の規模広く
礎をえし学舎は
秩父の嶺の揺るぎなく
人間の水の末長し

二、師弟の情思深かに
切徳の友誼亦厚く
華英にはしらす実に着き
智を耕して徳をしく
我校風は三芳野の
社頭の梅と薫るなり

憧れの甲子園 初出場



甲子園初勝利—校歌を聞くナイン



川越高校 勝利
対鎮西高校(熊本)
校旗掲揚



[illegible]

全國高校野球選手権大会

[illegible]

第三日

三河川	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
三河川	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

川越	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	㊵	㊶	㊷	㊸	㊹	㊺	㊻	㊼	㊽	㊾	㊿
西	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	㊵	㊶	㊷	㊸	㊹	㊺	㊻	㊼	㊽	㊾	㊿

夏空に響く応援合戦

まいた先制攻撃

川越鎮西を振切る

[illegible]

今日の本

二時	新聞
三時半	新聞
四時	東、北、下、館
五時半	小牧原一巻
六時半	三時半
七時半	手取町工一店

昭和34年 8 月16日付
朝日新聞

選手権大会

全国高校野球

A black and white illustration of a baseball player in a batting stance, wearing a uniform with a cap. The player is positioned in the center of the page, facing right. The background is plain white.

第六日

きょう白熱の準々決勝

[illegible]

高知、機敏な走塁

初陣の川越に辛勝

高知商
川越

川が内川の陸橋を成すに打ちかゝるすべからず、奥のなほスイングでそれでは中流に打してチヤンスをつかんだ、もうとわ川が力を得たとしてこの川をたぎらさず、さうして、

[illegible]

第41回全國高等学校野球選手権大会

西関東代表 埼玉縣川越高校

選手メンバー

監督 家村相太郎
野球部長 大久原秀雄

背番号	守備位置	氏名	学年
1	投手	保作弘稔	3
2	捕手	富栄	3
3	一塁手	島田	3
4	二塁手	沼田	3
5	三塁手	芳三	3
6	遊撃手	育三七	3
7	左翼手	根田	3
8	中翼手	本辺	3
9	右翼手	崎正	2
10	捕手	誠宏	
11		栄紀	
12		田康	
13			
14			
15			
16			
17			
18			

近畿埼玉県人会
後援 埼玉縣関西商社親和会
埼玉銀行大阪支店

西関東大会を制覇し甲府球場での優勝行進



優勝メンバー

嶋本・丹代(旧吉田)・高・渡辺・田中
高野・中島・近藤・杉田・高松
横田(主将)・家村監督・飯島・宮根・内沼



本川越駅頭で

栄冠は君に輝く

全国高校野球大会の歌

作詞 加賀 大介

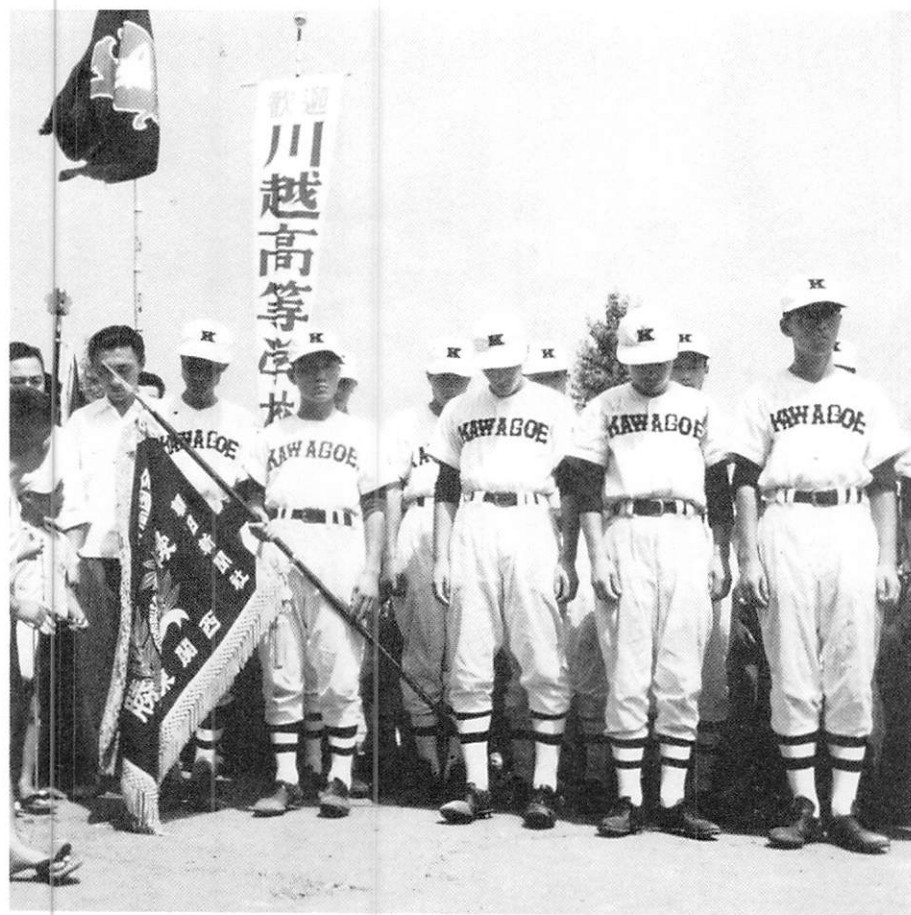
作曲 古関 裕 而

明朗に、力強く
(M.M. ♩ = 116)

1. く か も は わ き ひ か り あ れ て
2. か そ ぜ を う だ い ち ふ け り て
3. そ ら を き た ま の い の ち に

て く ん た - か - く じ ゅ ば く の た き ゃう そ と ぶ
く か ゆう - な - き の は う く つ く た ち か え そ わ さん ぞ
わ わ こ う ど よ い さ ま ま い じ り は か い ん こ た た え
わ わ こ う ど よ い さ さ み っ き う て き し ゅ の は か か け す
い せ さ い ぎ ゃん し の ほ ん え か た む き つ ほ ー ー あ
か い ん げ - き - を は さ ま が へ に え が ー ー け あ
あ あ え え い い か か ん は き み に か が や く
あ あ え え い い か か ん は き み に か が や く

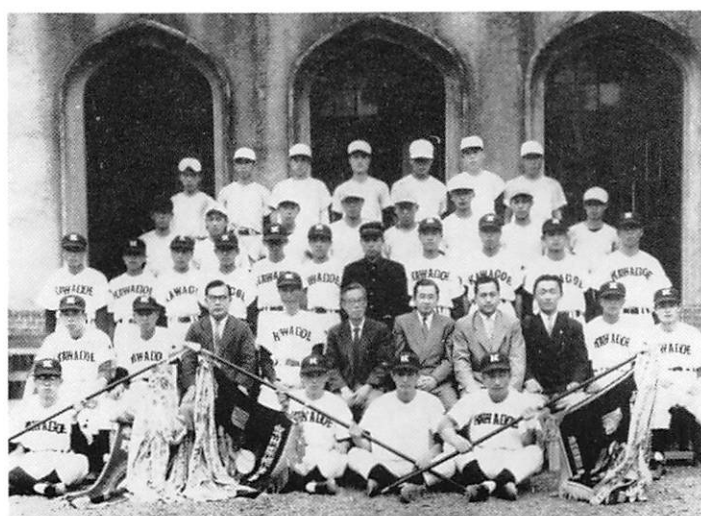
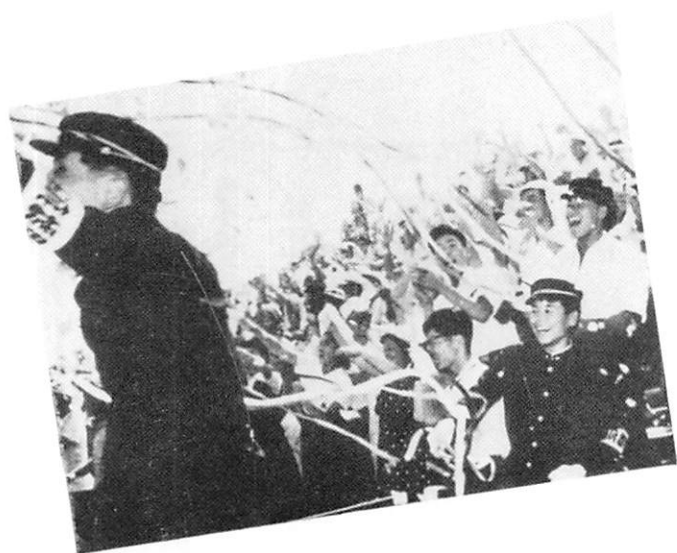
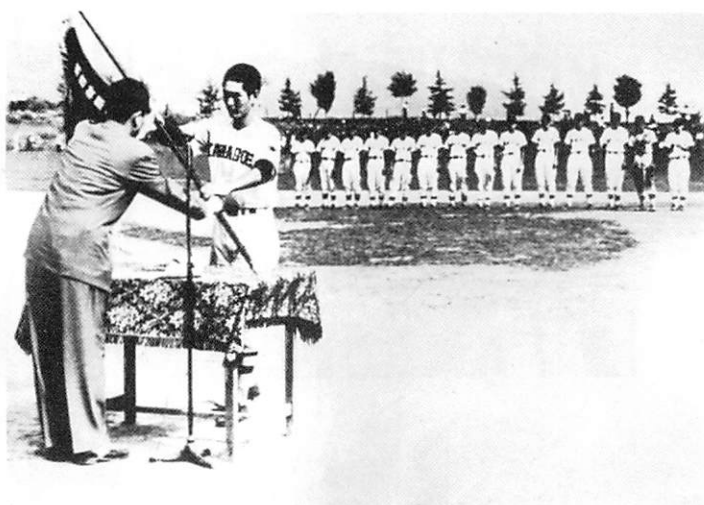




本川越駅頭で



本川越駅頭で





選抜高等学校野球大会歌

薄田 泣 龍 作詞
陸軍戸山学校軍楽隊 作曲



ラ 毎 日 ラ ラ ラ ラ	あ げ よ 凱 歌 を 波 の ご と	何 人 ぞ ほ ま れ に 酔 う は	戦 士 ら よ 雄 々 し か れ 輝 く 王 冠 の	二、 戦 塵 あ が る 春 な か ば れ	燃 え よ 血 潮 は 火 の 如 く	ラ 毎 日 ラ ラ ラ ラ	一、 陽 は 舞 い お ど る 甲 子 園 若 人 よ 雄 々 し か れ 長 棍 痛 打 し て 熱 球 カ ッ と と ぶ と ころ
---------------------------------	--	--	--	--	--	---------------------------------	--

第七十回全国高校野球選手

権記念大会(朝日新聞社、日本高校野球連盟主催)の開催要項は次の通り。

一、期日と場所(全国大会)八月八日から十四日間(雨天順延)、阪神甲子園球場。

《地方大会》全国四十七都道府県高校野球連盟と、その地方の朝日新聞社の本社、支社、総局または支局が協議して決める。原則として夏休みまでの土、日曜日と夏休みを

利用する。

二、大会運営(全国大会)

日本高校野球連盟と朝日新聞社が適任者を選び、運営委員

日新聞社の本社、支社、総局または支局とで運営委員会を設け、大会の運営に当たる。

地方大会とも、すべての試合は一九八八年度公認野球規則、並びに定められた特別規則による。

六、申し込み 参加を希望する学校は、申し込み規定や手続きを、加盟している各都

費(全国大会)一校十七人(選手十五人、責任教師一人、監督一人)を限度として、旅費と滞在費を別途規定に従って主催者が支給する。

高校野球の開催要項

《地方大会》全国四十七都道府県高校野球連盟と、その地方の朝日新聞社の本社、支社、総局または支局が協議して決める。原則として夏休みまでの土、日曜日と夏休みを

三、試合方法 全国大会、地方大会ともトーナメント方式。

四、試合規則 全国大会、五、大会参加校と参加者の資格 全国大会、地方大会とも、昭和六十三年大会参加者資格規定に適合したもの

道府県高校野球連盟に問い合せ、必要書類を提出すること。

七、出場選手の旅費、滞在費(全国大会)一校十七人(選手十五人、責任教師一人、監督一人)を限度として、旅費と滞在費を別途規定に従って主催者が支給する。

八、大会諸経費(地方大会は含まず) 入場料と朝日新聞社の補助金をあて、剰余金が出たときは、運営委員会が協議して処分する。不足が生じたときは朝日新聞社が負担する。

8月8日 甲子園で開幕

第70回 全国高校野球選手権記念大会

都道府県代表 49校が参加

朝日新聞社と日本高等学校野球連盟が主催する全国高等学校野球選手権大会は、歴史を重ねて、ことし第七十回の記念大会を迎え、八月八日から十四日間、阪神甲子園球場で開催します。

代表校は従来どおり、四十七都道府県(北海道は南と北、東京都は東と西)から四十九代表校が参加します。日程は第一日の八日午前九時から開会式、そのあと午前

十時から三試合、第二日から第四日までと、第六日から第八日、第十日から準々決勝まで、いずれも四試合。第五、第九日は

三試合を行います。試合開始は四試合の日が午前八時、三試合の日は午前九時から。準決勝は午前十一時から、決勝は午後零時半からとします。

この大会は野球を通じて青少年を正しく、力強く育てることを目標にしています。大正四年に朝日新聞社が大坂・豊中グ

ラウンドで開催した「全国中等学校優勝野球大会」がその第一歩です。その後、太平洋戦争で中断するという暗い時期はありましたが、昭和二十一年、全国中等学校野球連盟(現日本高等学校野球連盟)と力を合

わせ、いち早く本大会を復活して今日にいたりました。高校野球が情熱を傾け、数多くの名試合、胸を打つシーンなどが日本の野球史に刻み込まれるとともに、いまでは国民的行事といわれるまでに発展して、全国の人たちに親しまれています。

全国の参加校は年々増え続け、昨年は三千九百校、今年はさらに増える見込みです。各地方大会は六月下旬から始まり、七月末には全代表校がそろそろ予定。今大会に参加を希望の学校は、大会開催要項(運動面に掲載)に従ってお申し込み下さい。

朝日新聞社・日本高校野球連盟



第100回 全国高校野球選手権記念大会

8月5日開幕

朝日新聞社と日本高等学校野球連盟は、第100回全国高等学校野球選手権記念大会を8月5日から21日まで（雨天順延）、兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で開催します。代表校は、例年2校が出場している北海道、東京に加え、埼玉、千葉、神奈川県、愛知、大阪、兵庫、福岡の7府県からも2校ずつ出場。史上最多となる56代表校が出場します。

▼14面＝開催要項

開会式は5日午前9時から。今回も連日、小中学生らを無料招待する「ドリームシート」をバックネット裏に設けます。準々決勝翌日の19日は休養日とし、決勝は21日午後2時開始予定です。

組み合わせ抽選会は2日午後4時から大阪市北区のフェスティバルホールで行われます。

後援 日本高等学校野球連盟 毎日新聞社 阪神甲子園球場 特別協力

朝日新聞 平成30年6月6日



第100回 全国高校野球選手権記念大会

開催要項(要旨)

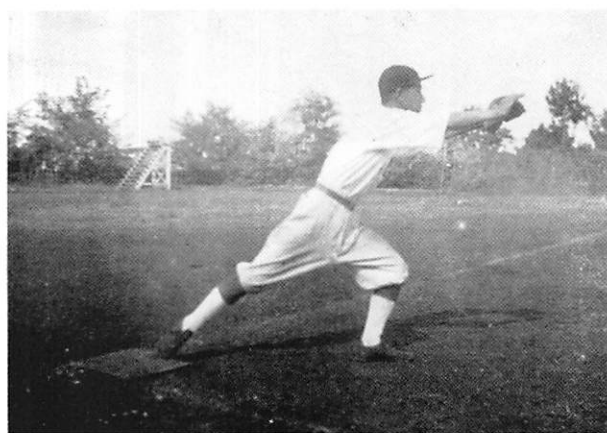
- 1 日程
 - 《地方大会》全国47都道府県の高校野球連盟と朝日新聞社の本社、あるいは支社、各総局とが協議して決める。
 - 2 運営
 - 《全国大会》日本高等学校野球連盟と朝日新聞社が適任者を選んで運営委員会を構成、大会運営に当たる。
 - 《地方大会》各都道府県高野連と朝日新聞社の本社、あるいは支社、各総局とが運営委員会を設け、大会の運営に当たる。
 - 3 登録選手
 - 《全国大会》1校18人以内とする。
 - 《地方大会》原則として全国大会に準ずる。しかし、各地方大会の運営委員会による協議で、ある程度の増員ができる。
 - 4 健康管理
 - ①校長は参加選手の健康証明書を学校医から受ける。また、保護者の同意を得る
 - ②主催者は大会中の選手の負傷、疾病に対し応急手当をする以外には責任を負わない
 - ③試合が延長戦に入り、十二回終了時に同点の場合は十三回からタイブレークを開始する。ただし、決勝ではタイブレークを採用せず、延長回は十五回で打ち切り、翌日以降に改めて再試合を行う。
 - 決勝の再試合ではタイブレークを採用する
 - ④全国大会では投手の関節機能検査を実施。肩、ひじに重大な障害が発生している事実が確認できれば、投手としての登板を禁止する。
 - 5 出場選手の旅費と滞在費
 - 《全国大会》1校20人（選手18人と責任教師、監督各1人）に、旅費と滞在費を規定に従って支給・負担する。
 - 6 大会諸経費（地方大会を含まない）
 - 入場料を充てる。剰余金が出た場合運営委員会などで協議し処分方法を決定する。不足した場合過去の剰余金で積み立てた大会準備金を充てる。
- ▼1面参照



大正10年青山学院大学平川コーチを迎えて

※浜野左翼手は欠

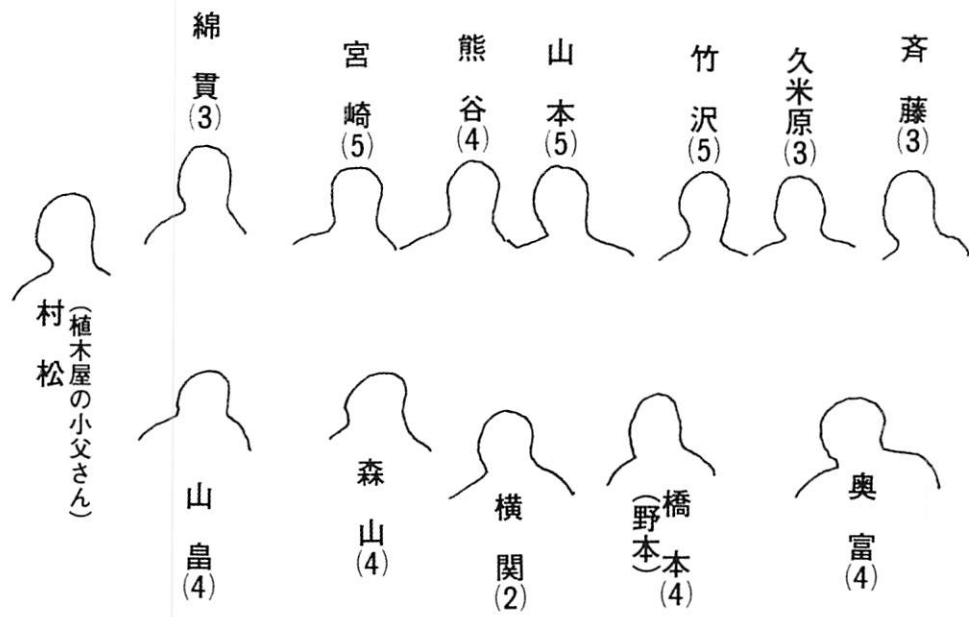
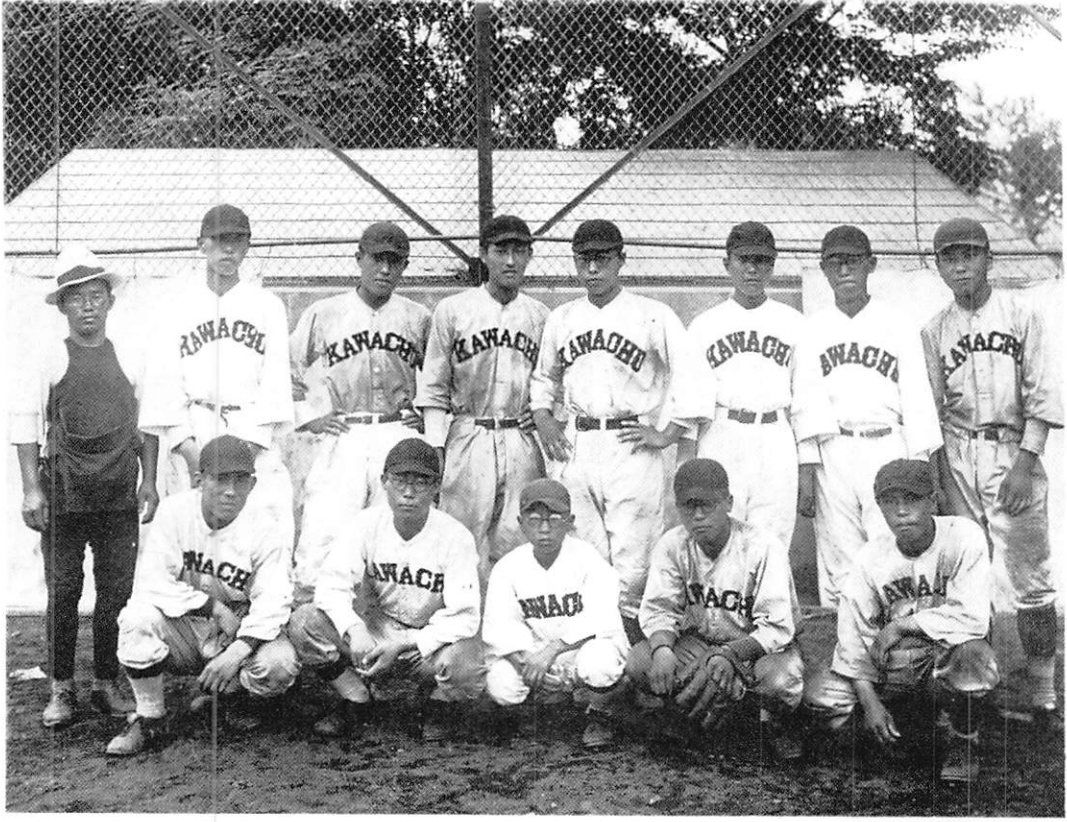
新井(補)	平川	吉沢(補)	杉田(補)	前田	田代(補)	久保(補)	長又右翼手(補)
伊藤	羽島	本橋	増田	平川	小山	水村	田中
遊撃手	中堅手	一塁手	捕手	投手	三塁手	右翼手	二塁手

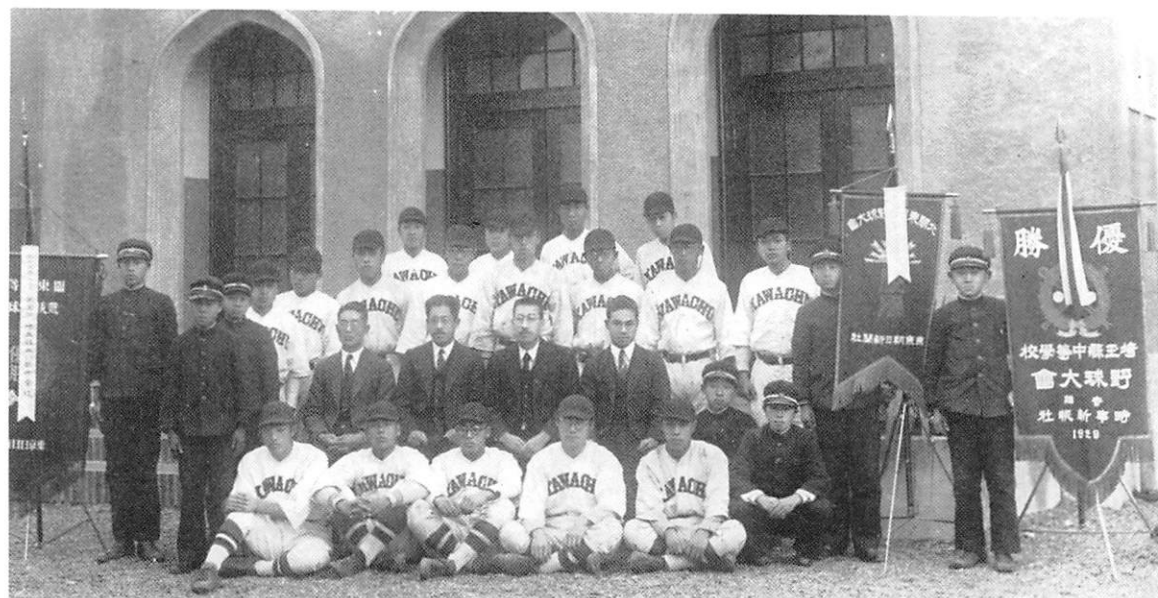


大正11年当時の 練習風景

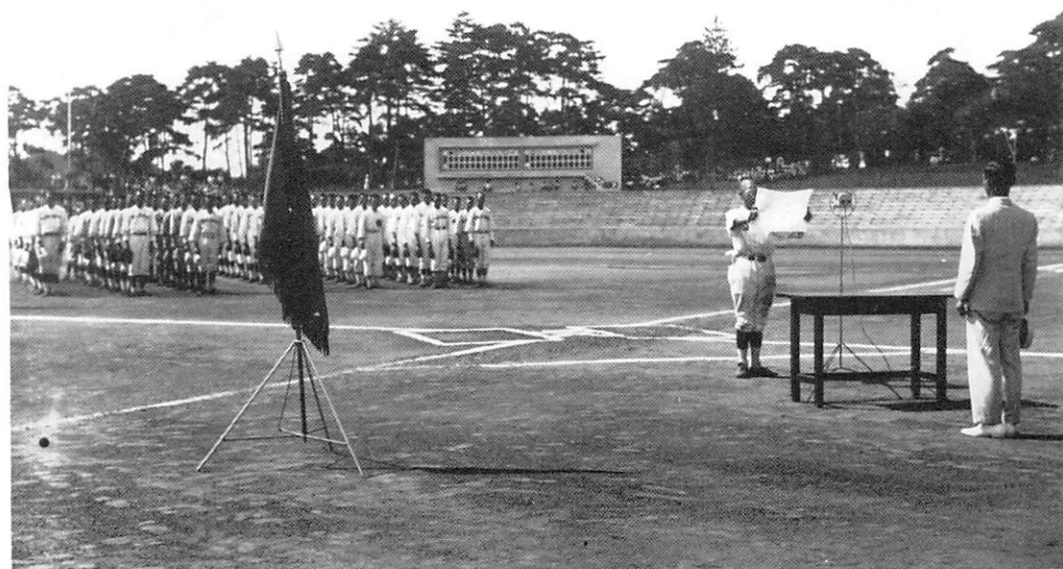


昭和5年当時のメンバー

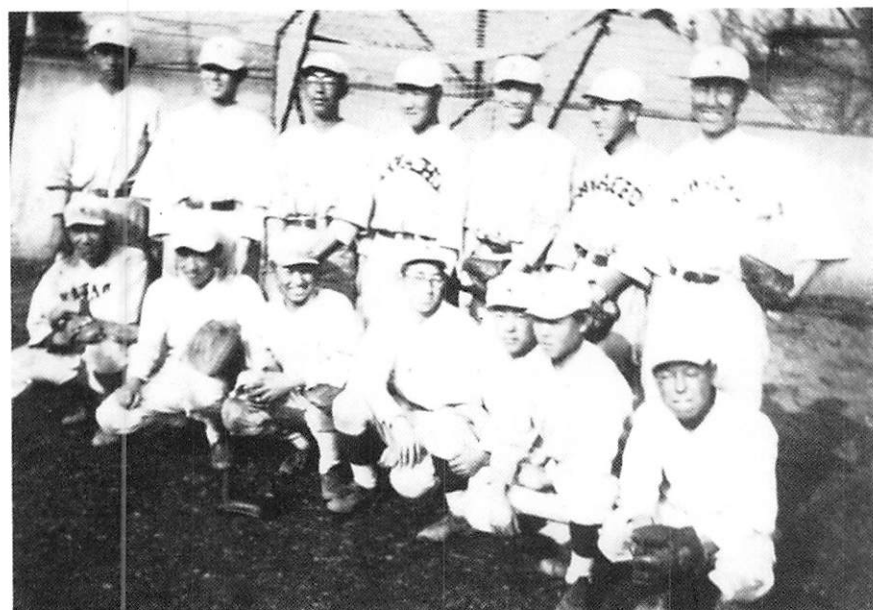




昭和6年埼玉県予選会で優勝した川越中学野球部、5年生卒業記念スナップ

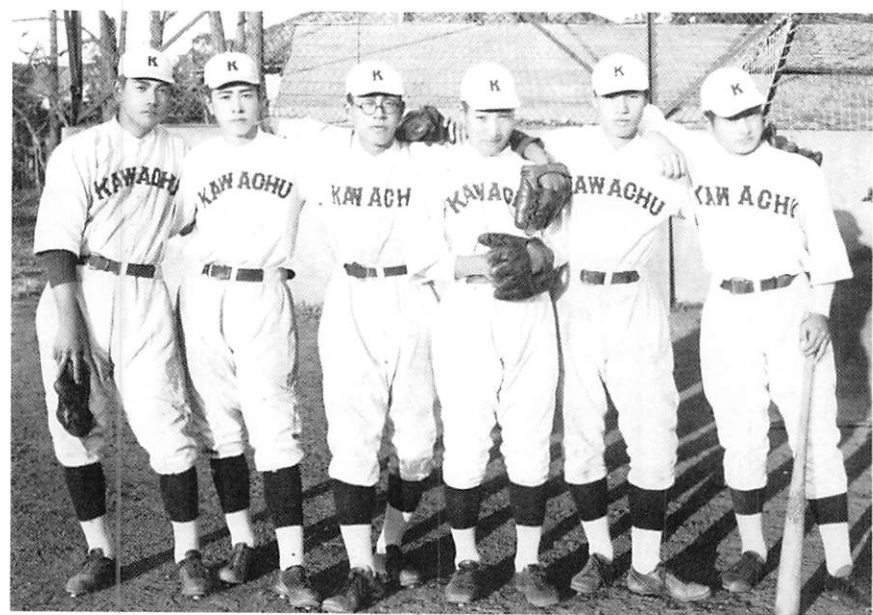


昭和8年7月25日埼玉大会開会式にて横関主将選手宣誓



昭和7～8年頃伊丹コーチのもとで甲子園をめざして

昭和10年卒業の部員



・三	・小	・高	・齊	・平	・二	・木
投	左	右	中	平	二	一
上	翼	翼	堅	岡	壘	壘
手	手	手	手	手	手	手
武	敏	正	榮	敬	一	和
夫	夫	巳		郎		男

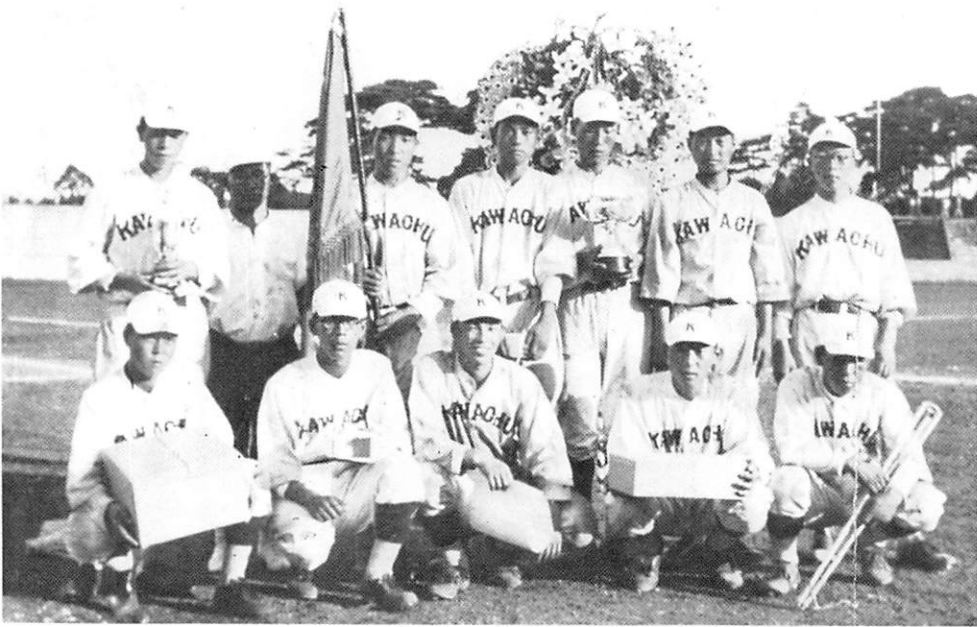
昭和9年7月28日、浦和中学との準決勝戦に逆転勝ちした喜びのナイン



三上投手・平岡二塁手・伊丹監督・斉藤中堅手・朴投手・岸野三塁手
浅野遊撃手・木村一塁手・大塚捕手・高橋右翼手・小峯左翼手・増島遊撃手・増島先輩

第20回 昭和9年優勝

昭和9年7月29日、決勝戦(大宮球場) 豊岡実業に快勝後の優勝記念

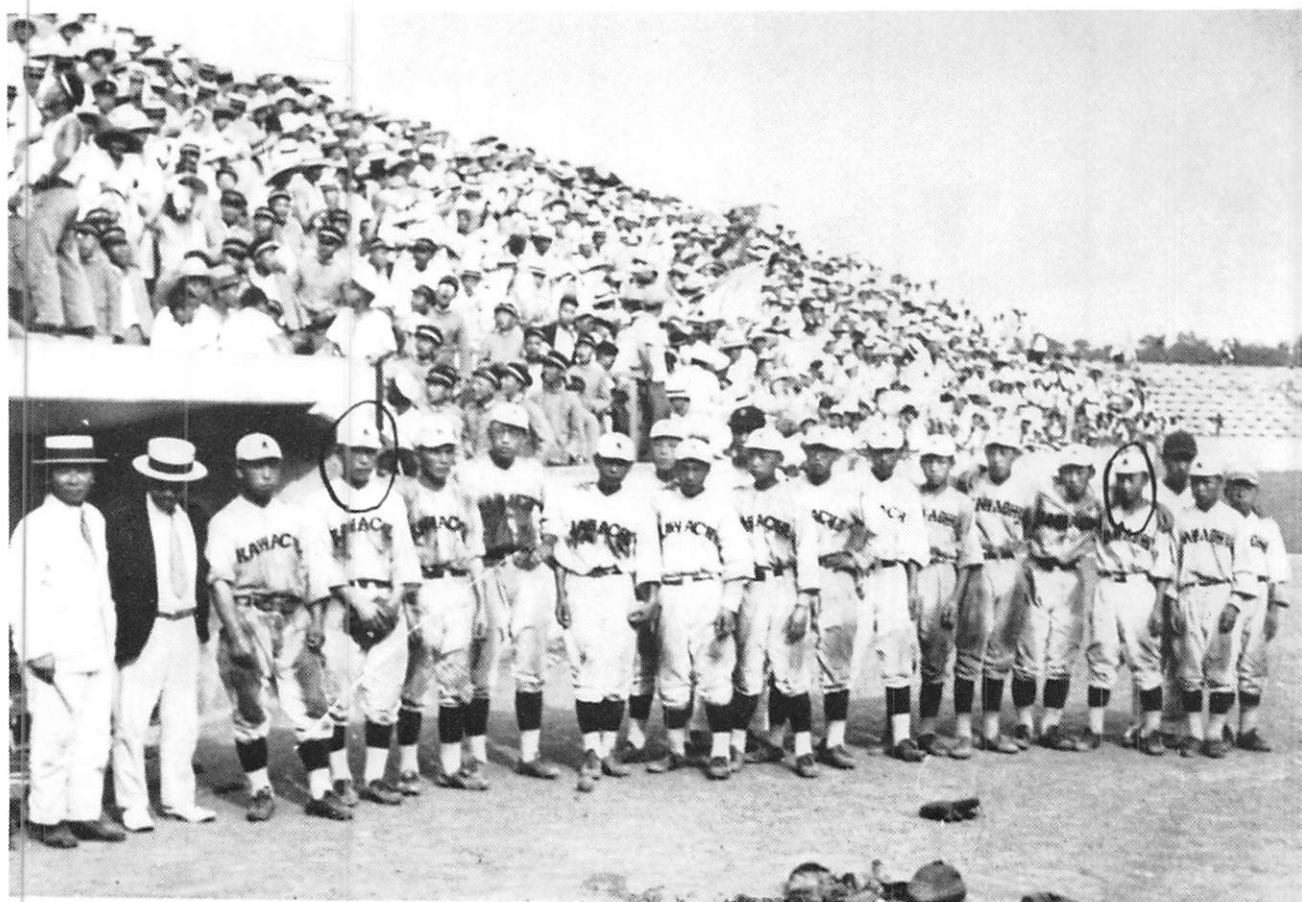


○印五年生

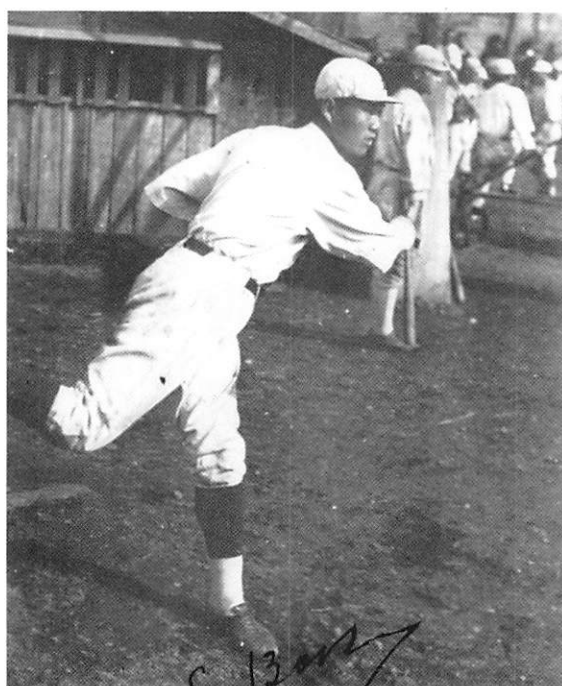
小	植	斉	三	○	木	増
峰	木	藤	上	朴	村	島
	屋	○	高	平	○	岸
		浅	橋	岡	大	野
		野			塚	



朴・大塚



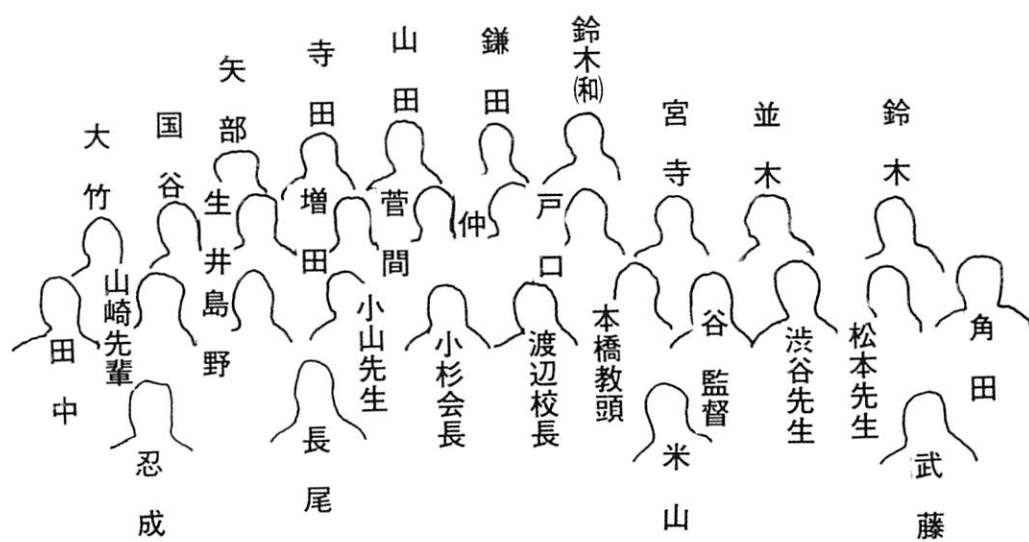
昭和11年7月 豊岡実業に勝ち優勝 ベンチ前にて



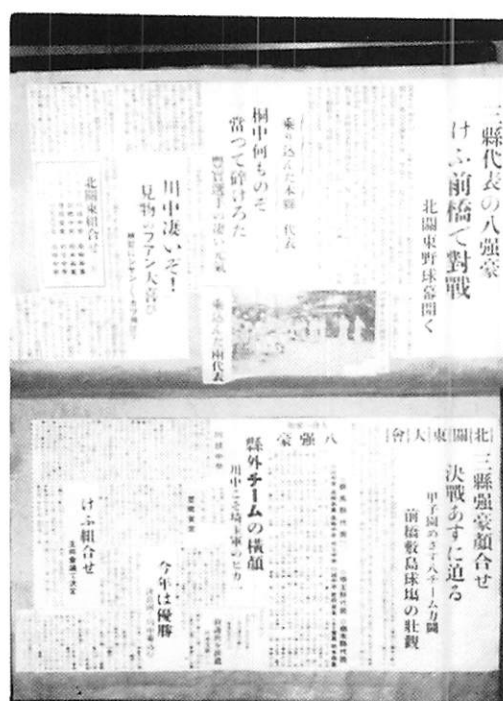
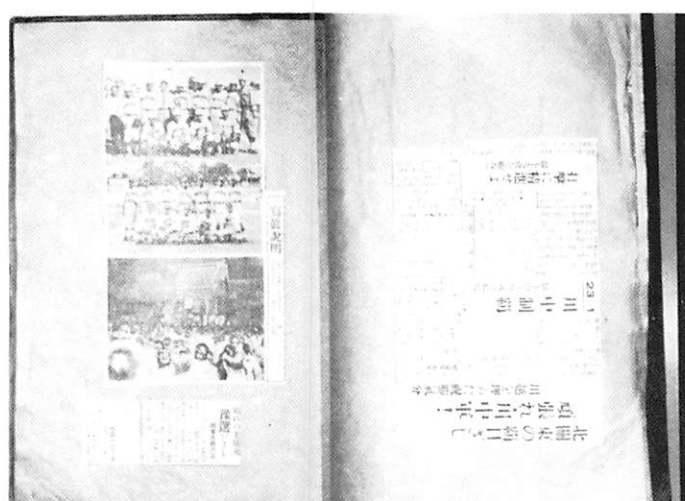
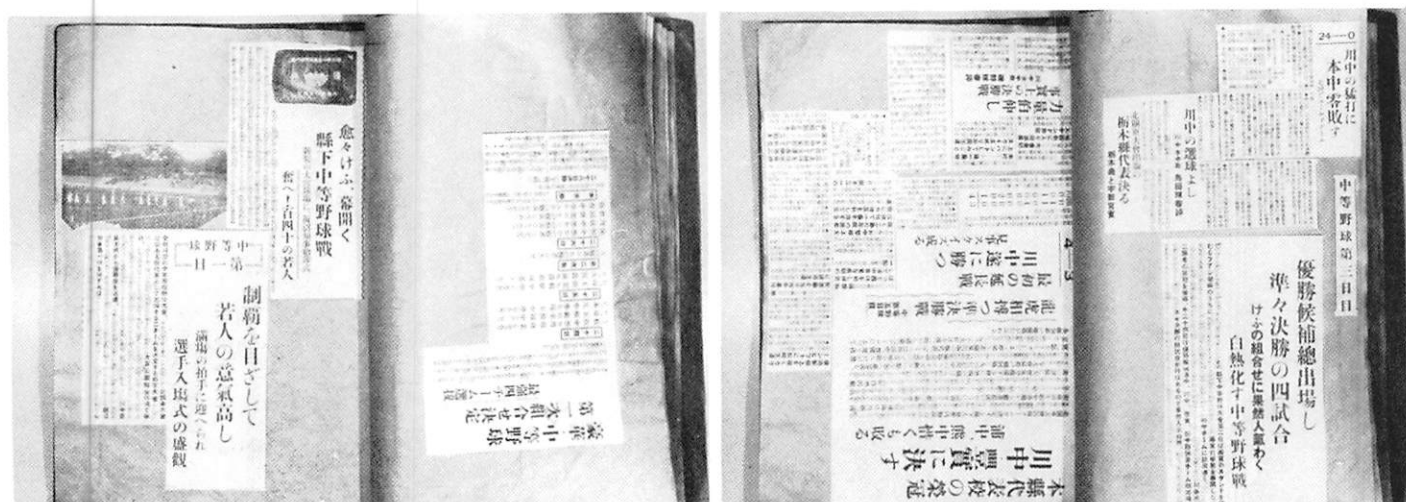
昭和8～10年のエース家村(旧姓朴)選手



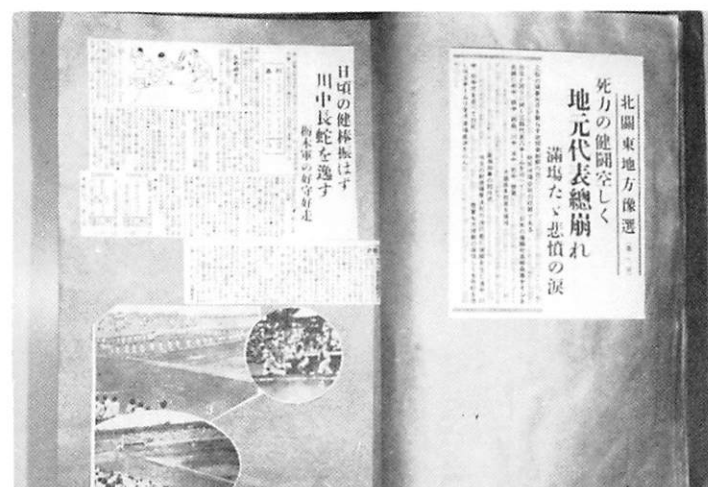
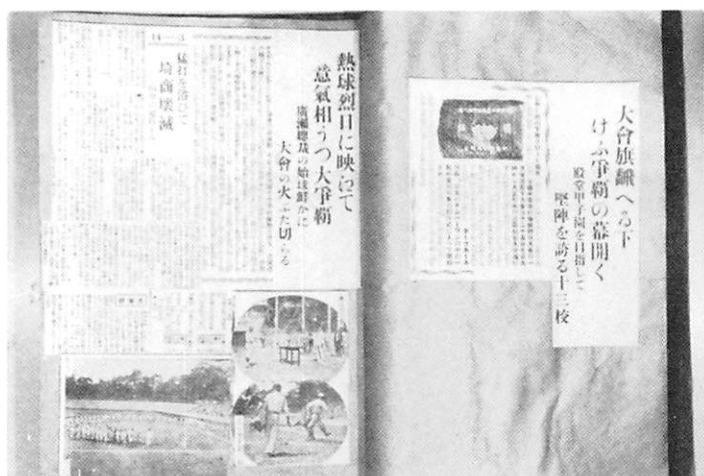
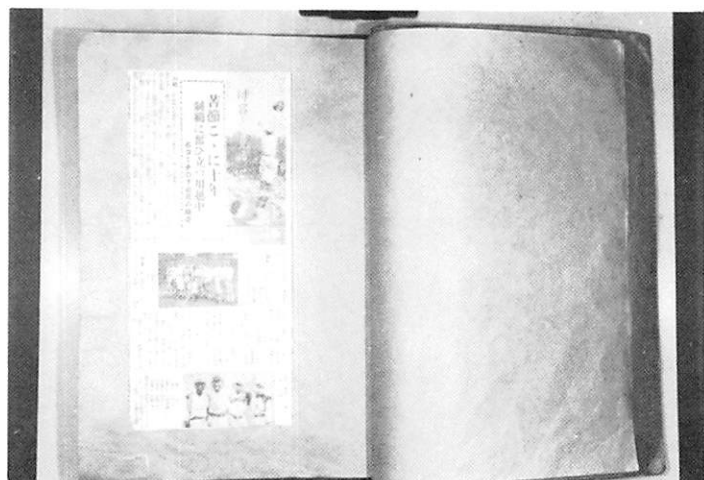
昭和29年夏、18年ぶりの優勝メンバー



スクラップブックに見る川中黄金時代

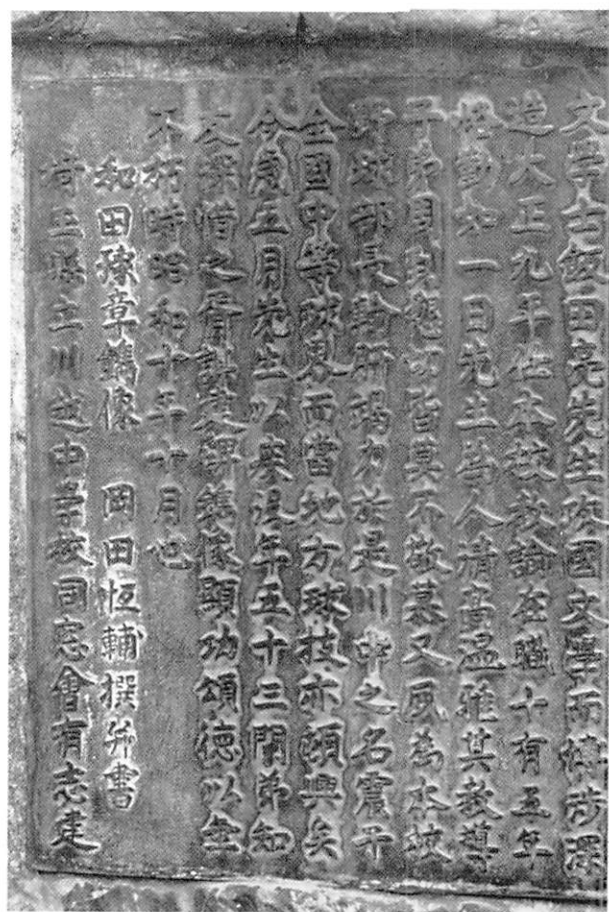


(旧中学33回平岡敬一郎氏所有)





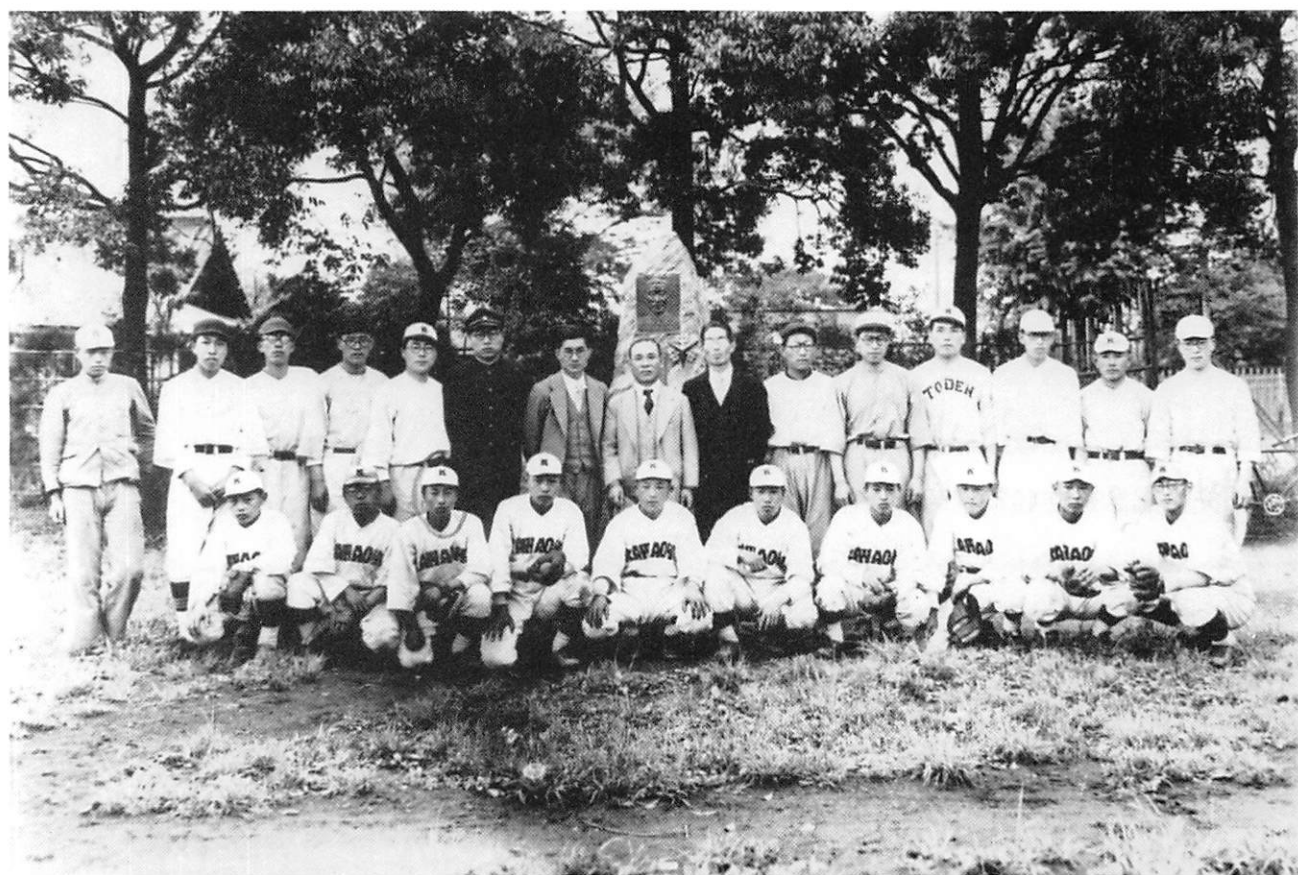
飯田 亮先生記念碑
(昭和10年11月1日建立)



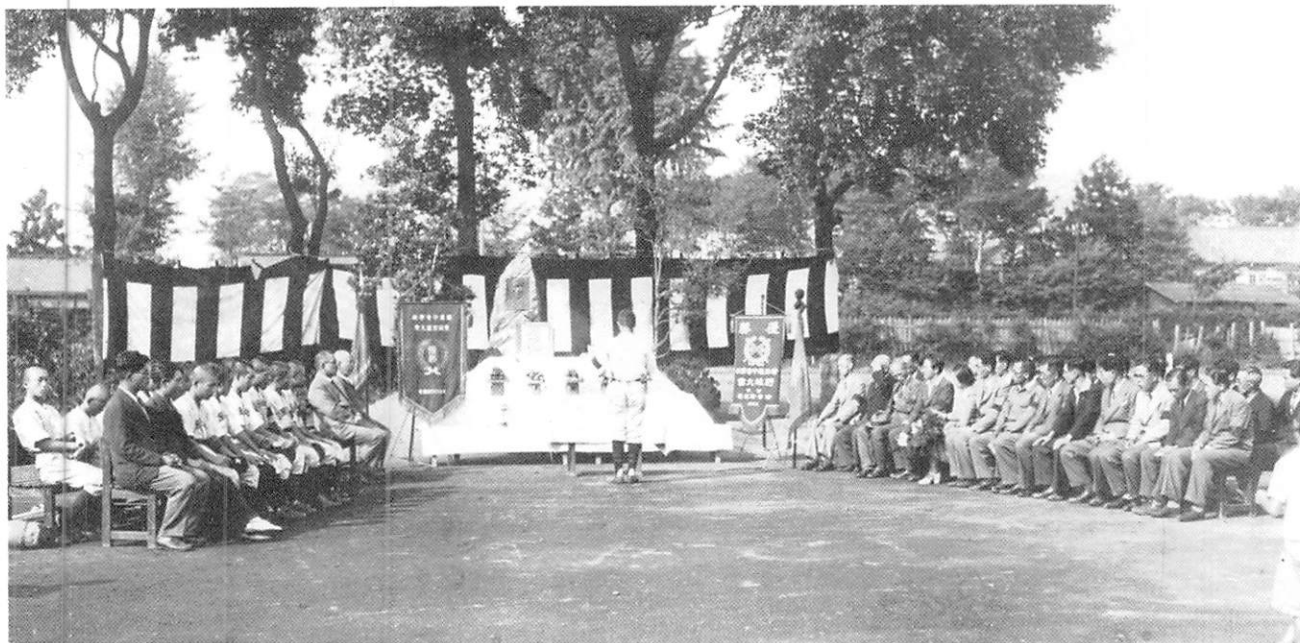
碑 文



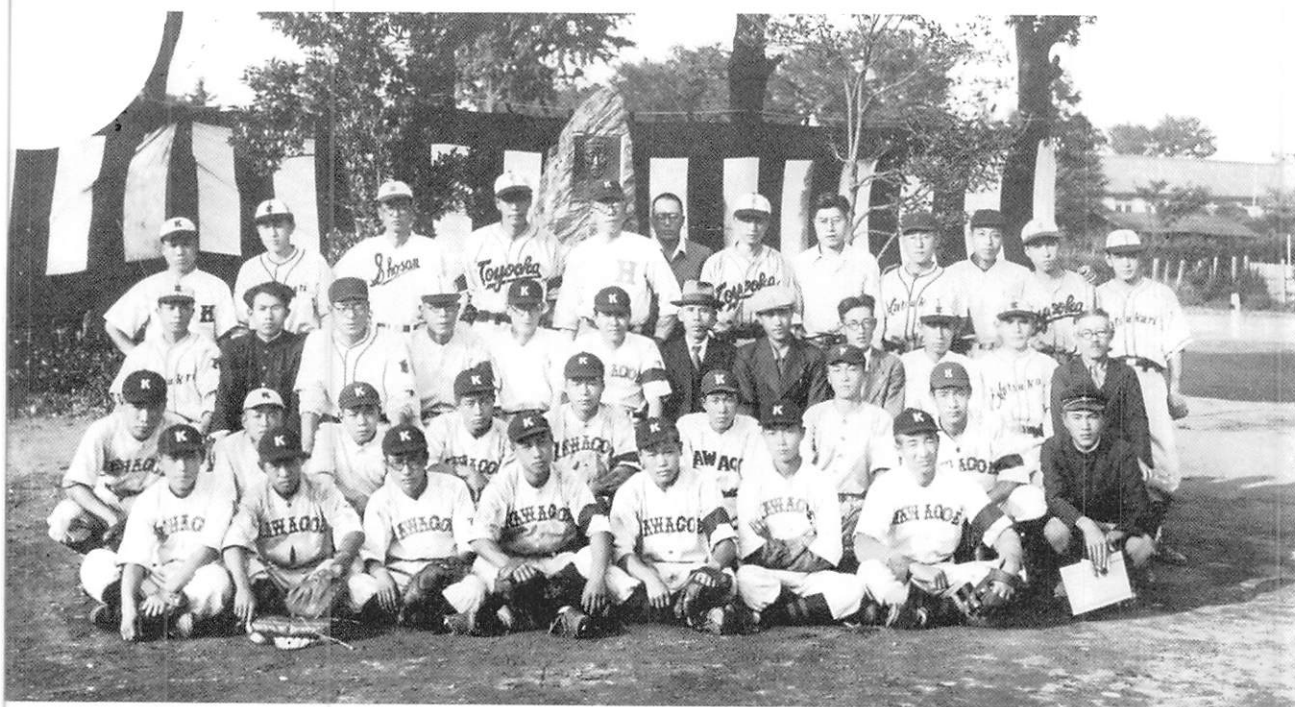
昭和9年 飯田部長追悼試合
山田・大塚・綿貫



昭和11年 故飯田部長 3 回忌



昭和23年 5 月 故飯田部長15回忌



飯田先生記念建立40年祭昭和50年 11 月川高生徒ホール於





飯田亮先生記念碑建立五十年祭 昭和60年10月27日於川越高校

一塁	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
二塁	0	0	0	0	4					4
三塁	0	1	0	0	1					2

記念紅白試合スコアー



昭和60年10月28日 川越
 恩師の碑建立50年 朝日
 大正から昭和にかけて川越中
 学現、川越中の野球部を立
 立させた飯田亮先生の碑が建立
 五十年を迎え、二十七日、同高
 校グラウンドの碑の前、先
 生OBや現役選手が集まり、先
 生の徳をしのんだ。
 飯田先生は大正六年から昭和
 十年にわたるまで野球部の監
 督部長を務め、A級には
 県初の甲子園出場に導いた。



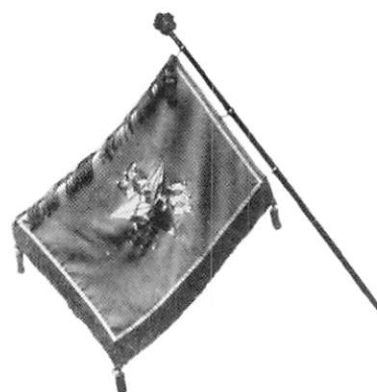
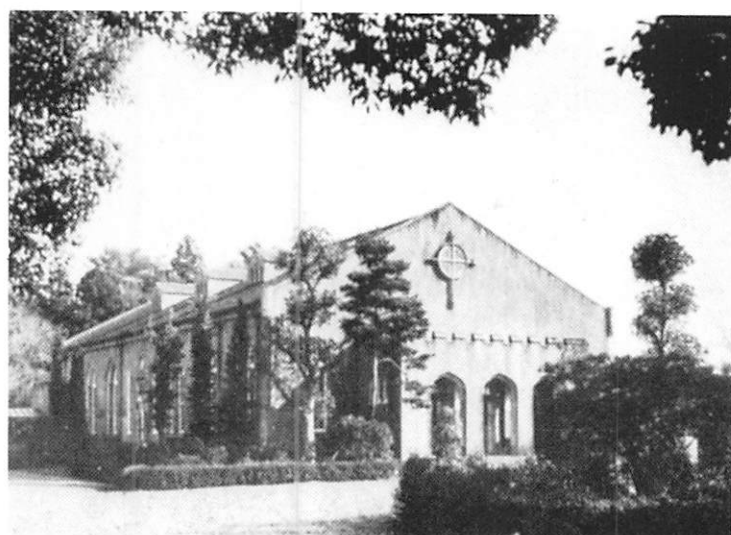
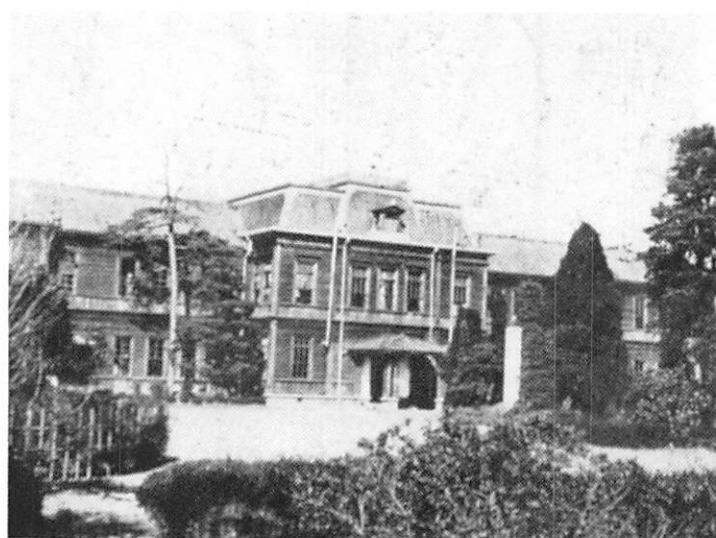
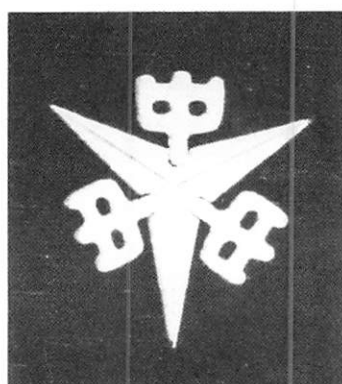
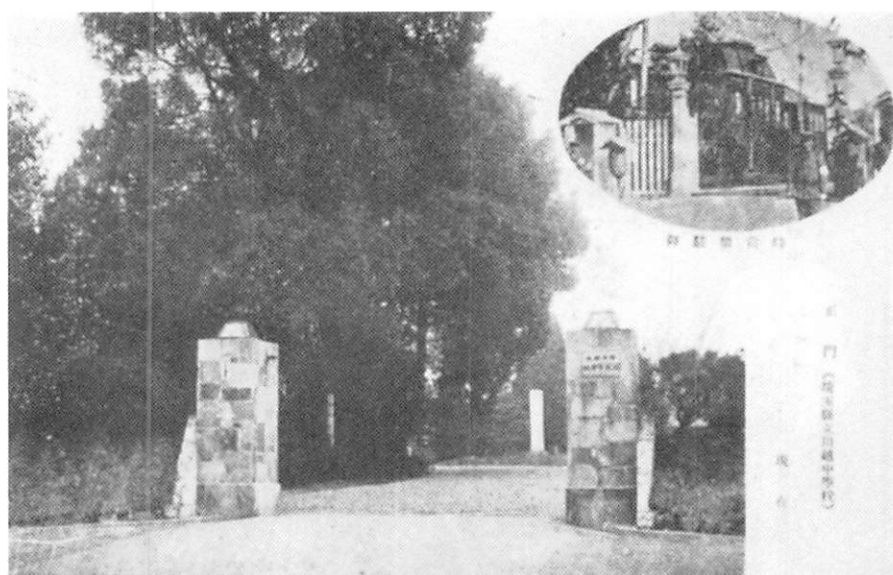
後援会長小杉太郎先生の喜寿を祝って（昭和56年9月丸広デパート桜草の間）



昭和20年～24年の部長白井正先生を囲んで（昭和50年秋）

井	大	田	増	野	山	関	横	広
上	附	中	島	口	川		田	沢
毅	清	幸	成	健	健	博	昌	孝
一郎	久	夫	郎	二	夫	夫	明	志
				(玉川)				

学校風景(旧制中学時代)

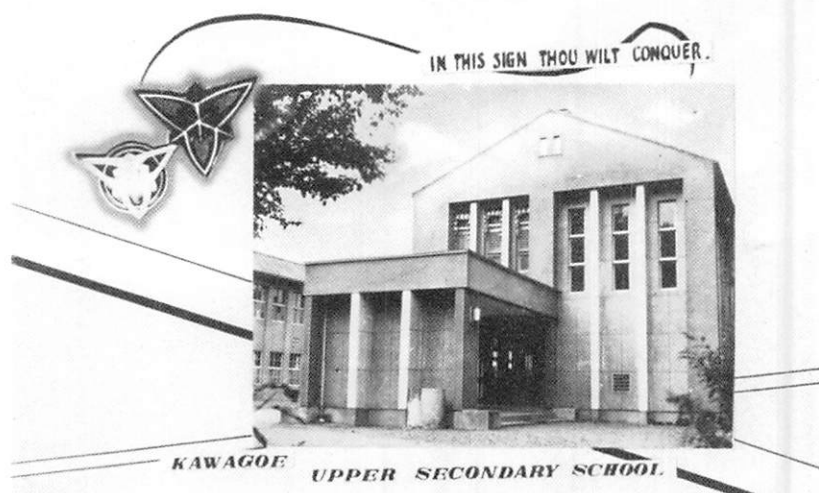
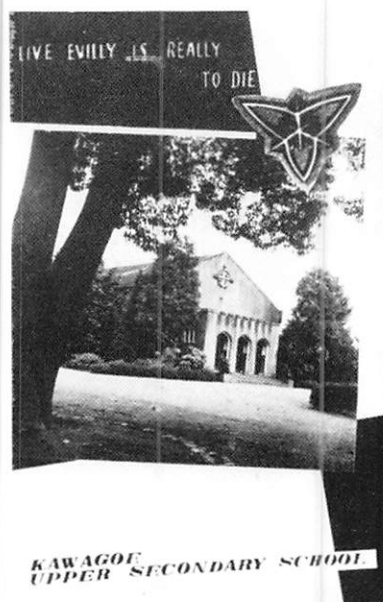




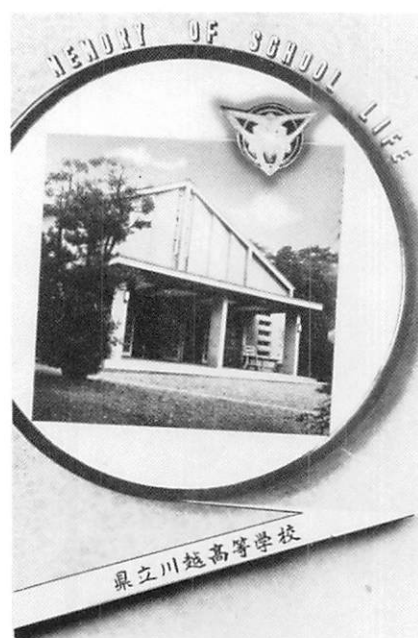
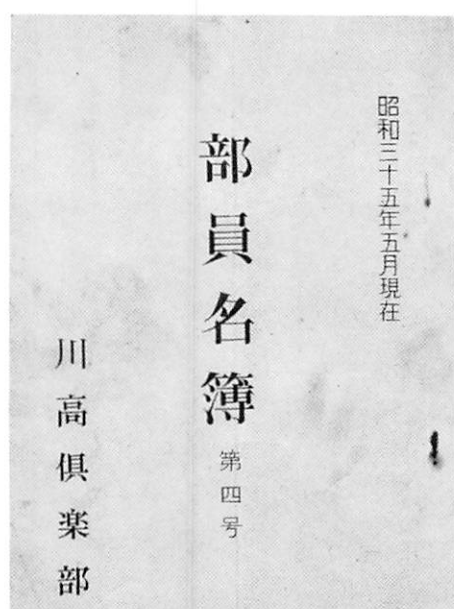
昭和20年代教室として使用した川越城本丸御殿



昭和30年頃の学校風景



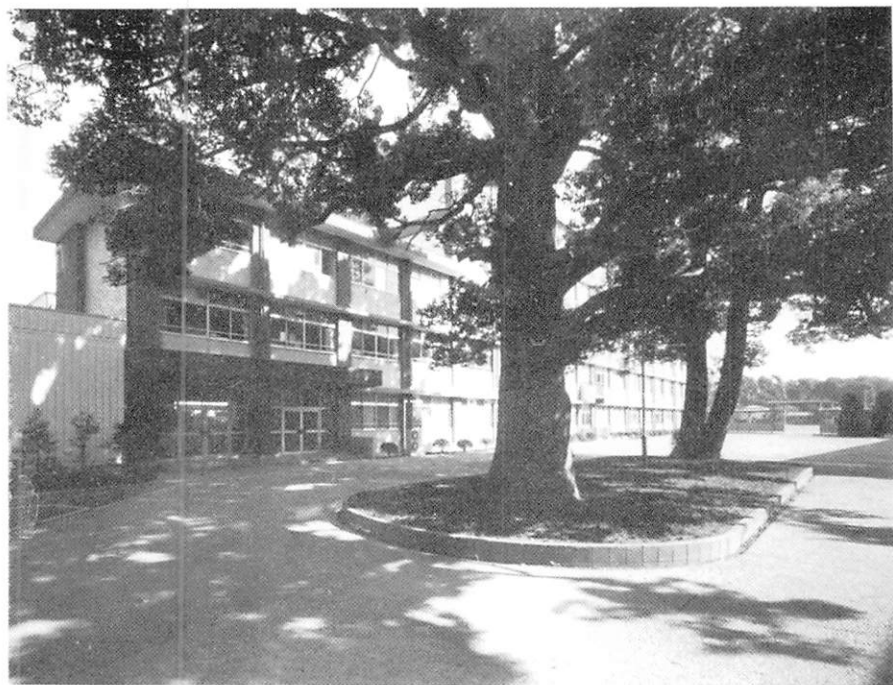
昭和30年代の校舎・講堂



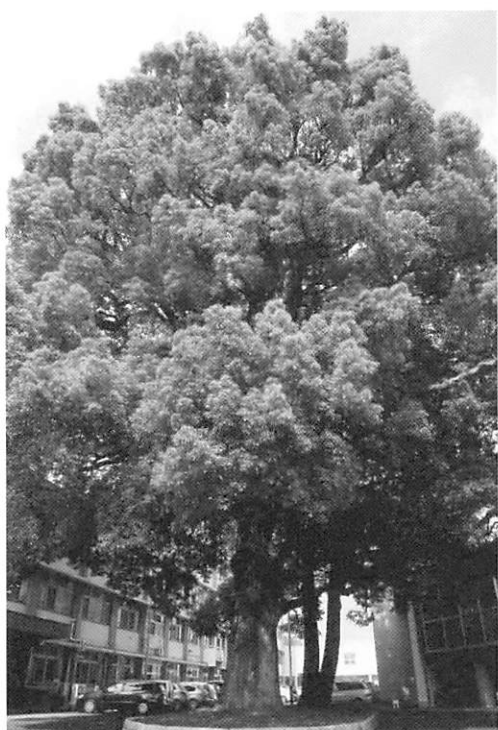


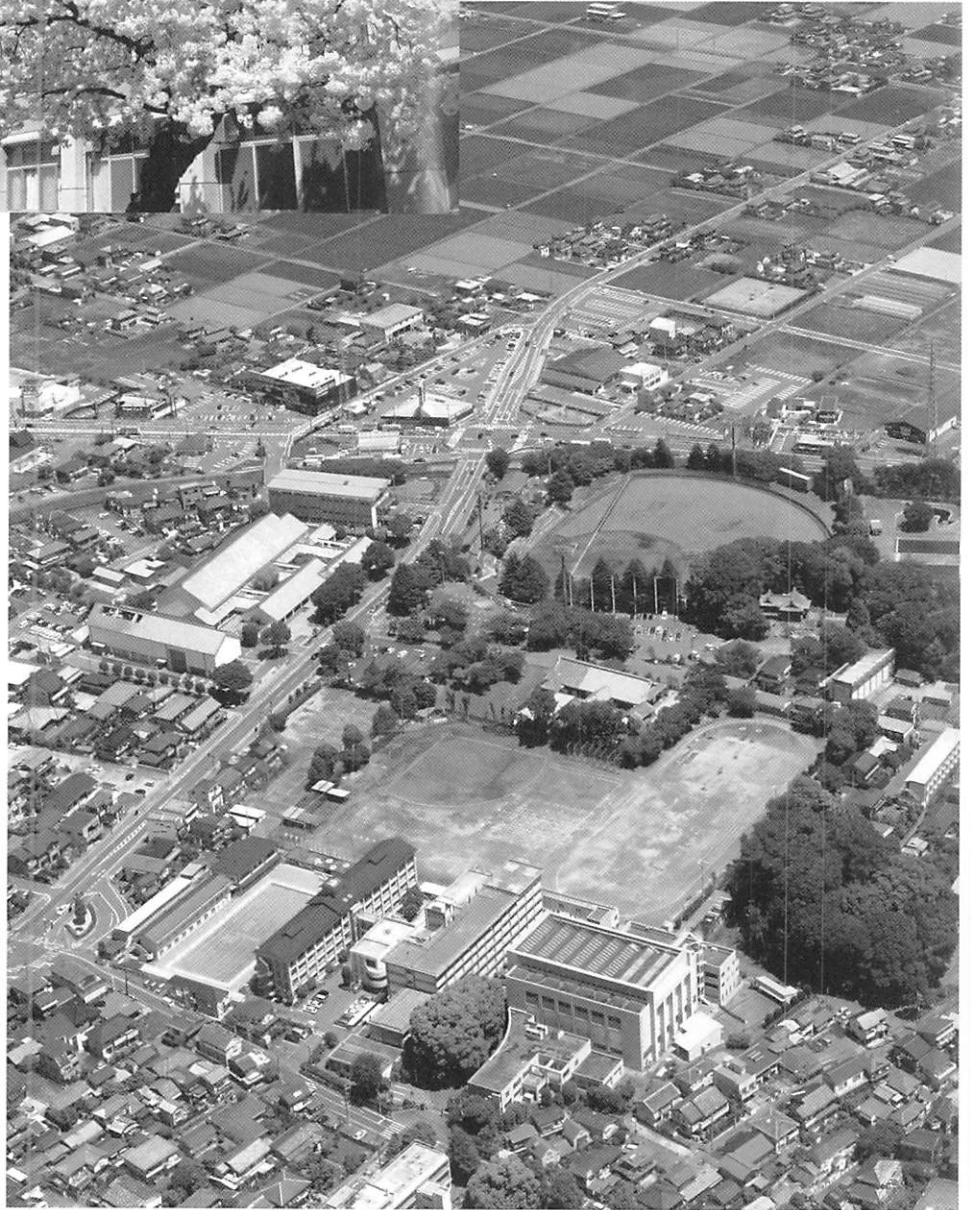
学校風景（平成元年）





現在の校舎





第3部

思い出

～100年の歴史から～

応援歌（奮え友よ） 山本 明 作詞

力強くおおらかに

牧野 統 作曲

ふる え と も よ ふ る い た て い ま
は つ か り の こ う き は た め く む さ し の に き た え し わ れ ら
え い こ う の で ん と う ま も り ね っ け つ の と う こ ん た か く い ま こ そ ほ こ
れ し ゅ う り の お う ざ し ゅ う り の お う ざ か わ こ う か わ
こ う か わ こ う か わ こ う お お わ が か わ こ え こ う こ う

応援歌

（奮え友よ）

山本 明 作詞
牧野 統 作曲

振え友よ

援い立て今

切麗の

校旗はためく

武蔵野に

鍛えし我等

栄光の伝統守り

熱血の開魂高く

今こそ誇れ

勝利の王座

勝利の王座

川高 川高

川高 川高

おお我が川越高校

野球部創立当時の追憶

旧制20回卒 本橋九蔵

大正8年 以前は野球はあったが、寄宿舎生を中心に編成した練習試合が年に1、2度行われる程度のもので、一般学生は殆ど関心はなかった。

大正8年 今までの状態ではあまり意義も少ないので、鳴尾（全国大会）への出場を目標に、先ず関東大会（竜ヶ崎）出場を目指して野球部を創立したのが大正8年でした。

当時、関東大会（5県）と京浜大会（東京・神奈川）があり、各々の優勝2校が全国大会へ出場した。創立に際し最上級生の大塚秀仁（5年生）を主将に迎え、又4年生の岩崎・大河原両氏の入部承諾も得ることが出来ました。増田君を始め3年生が中心に、2年・1年生もよく協力苦心して部員を集めて部編成ができましたが、技術的には誠に幼稚なものでした。

当時所沢飛行場に野球チームがありましたので、川中グラウンドに迎えて試合をしましたが大敗でした。このチームは小島六郎投手（後早大選手、読売新聞記者、登山家で有名）を擁し相当強力なチームでした。

大正9年 一学期の終りに飯能町に遠征し、飯能実業団チームと試合しかなり好ゲームをしたように記憶しております。私はその直後脚気（当時の療法は米飯、洋服、靴は厳禁、パン、茹小豆が主食で学校へ行けるようになってからも着物、下駄で暫く通学した）になり、永々就床しており4年生の時は夏以後は野球も出来ずその間のことはよくわかりません。

2学期の後半漸く登校した時、飯田亮先生が赴任して来られ、野球には精通され真の理解者でしたので誠に心強く思われました。これが後年強豪川中野球部の生まれた遠因と思われます。同じ頃、平川龍夫君が盛岡中学から、その後古屋重延（外野手）が姫路中学から転校し入部した為に戦力が増強されました。

大正10年 飯田先生を部長・監督に、平川氏（青山

学院、龍夫君の兄）のコーチを受け猛練習の結果、本格的な野球チームとなって来ました。熊谷中学、浦和中学と対抗試合を行い互格の実力となりました。川越の三芳野俱樂部（川越唯一の実業団）、所沢飛行場、飯能実業団チーム等とは時々試合を行い技術の向上に役立ちました。

当時は全校の者が野球部に好意を持ち、剣、柔道部・競走部・庭球部等器具の整備の計画を控え目にしてくれ野球部の予算を楽にして呉れた事もありました。

大正11年 待望の関東大会（竜ヶ崎）出場が野山校長・飯田先生の決断で決定し、柔道場で合宿練習することになりました。私達は卒業しておりましたが、増田君・小山君等と選手と起居を共にして練習に協力いたしました。然し初めての大会出場だったので、名門大田原中学（優勝チーム）に実力も出し切れず大敗を喫しました。その後もこの大敗にもめげず猛練習は欠かさず行っておりました。

大正12年 関東大震災のためか判っきりした記憶が浮かびません。

大正15年 関東大会は宇都宮で行われ、関口投手（立大に進み遊撃手、主将）を擁し本大会随一の優勝候補と云われた栃木中学と対戦が決定しました。飯田先生の依頼で私が栃木へ偵察に行くことになりましたが、さて敵地に入ってみますとスパイのような意識があったか……気になけなくてもよいことまで気になりましたが見物人に交じり、主として投手の状態（球質、長短所、性格）、捕手のリード、肩の具合、内外野手の連繋動作に加えて打撃の長短所を精しくメモしてくることが出来ました。尚念の為に栃木中学のライバル校へ立寄り、監督・コーチの方から私の見聞したことに對する意見その他詳細に亘って貴重な資料をいただき、大変参考になり宿に帰に早速便箋10枚にしたため報告材料として川越へ帰りました。

その日川中は飯能へ遠征していたので、後を追いかけてベンチの飯田先生に報告書をお渡ししたところ精読されて大変喜んでいただいたことを覚えております。この大会には増田・小室と共に応援

に行き駅前通りの板屋旅館に先生・選手と同宿していたので、優勝候補栃木中学に快勝した時は相擁して感涙に咽びました。この試合前半は思わしくなく先行されておりましたが後半同点に持込み関口投手の同じ球を二球続けて投げる癖を狙い打って好打連発遂に延長11回3点を挙げて7対4で破る大番狂わせを演ずる大試合をいたしました。翌朝の朝日新聞で飛田穂洲大先生から大変長い記事で称賛の言葉を受けました。第二戦は宇都宮中学に5対3で惜敗はしたものの全員よく正々堂々持てる力を遺憾なく発揮し善戦したため再度に亘り称賛の記事で紙面を賑わせていただきました。決勝戦は前橋中学が地元宇都宮中学に勝ち、地元ファンが騒いだため優勝旗授与が球場でできず宇都宮駅でようやくすませた一幕があった。

同年明大の岡田源三郎監督がコーチに来られたので数名のOBが佐久間旅館で岡田監督と共に起居して母校の練習に協力したことがあります。その折静岡中学を長年コーチしていた同監督が雑談の時「捕手の福島（慶大に進み強打で有名）を除いては静岡中学も川越中学の選手も差はありませんよ」と話されたのを聞き皆大変に自身を持つようになり、「必勝の信念を以てすれば如何なるチームにも勝つことが出来る」というこの自信こそ勝負の世界に絶対不可欠のことと思います。因にその年静岡中学は甲子園で前橋中学と19回（レコード）まで戦い全国優勝したチームです。この頃より水村潤一君が飯田先生を補助し選手の指導世話もよくやってくれたので安心して水村君にバトンタッチしたような形になりました。当時おかげで技術も大変に上達し全国的にも強力なチームになったように思われ陰ながら喜こんでおりました。

51年度クラブ日より

野球部誕生の頃

旧制20回卒 小山辰吉

大正十年（1921）といえは遠い昔のことである。17才の私は五年生であった。当時、剣道柔道などは

武道と称して正課であり心修であった。その他の運動は所謂クラブ活動で、生徒の自主的な運営にまかされていた。一つの競技に堪能な者は他の競技にも通ずるところがあって、一人であれこれ兼ねている者もあった。私が野球部に入ったのは四年の頃かと思う。それ以前には、寄宿舍通学等のグループが部を作って楽しみながら試合をしていた。学校の野球部が生まれたので私もその方へ入って行くようになった。

県下の中学対抗試合種目の武道とか陸上とかには、クラブの資金が学校から出されていたが生れたての野球部は余り恵まれていなかった。練習用のボールにしてもていねいに扱わないと補充がむずかしい状態だった。バックネットにしても竹竿に綱を張ったチャチなものであった。私の同級は、増田・本橋・羽島と四人で五年になるとこれが幹部で部の編成をした。投手は四年の平川・加島たち。その他水村・田中・浜野・杉田・新井・内田・久保・伊藤・長又等々一年生まで熱心な部員がいた。いつの時代でもそうであるように、その頃でも練習はきつかった。寄宿舍にいた私が暗くなってあがって来て先生から叱られるようだったのだから、通学の者なんかは相当おそくなって帰宅したのではないかと思う。練習といえば、三塁手だった私は、ゴロ捕えることを随分やかましたくいわれた。練習の最後のバックホームの投球など、もう疲れているのに返球が悪いとて数十回も投げさせられたのには流石に閉口した。見ていた者が同情していたとあとで聞いた。今でも思い出しては苦笑している。

対外試合として浦中へ出かけたのをおぼえている。フリーバッティングなど練習は浦中生にも感心されるようだったが、此の試合見事にまけてしまった。誕生間もない野球部だったので、対校試合をするだけの基礎ができていなかった。近い所に相手になる学校がなく、部員も少く、応援してくれる人達もない状態で、校内練習が精一杯。いくら熱心だといっても遠くまで出かけて試合するという器量はまず乏しかったといわけである。

こう述べて来ると、まことにみじめな野球部と思うかも知れない。しかし、今から50数年前のことで、

プロ野球はなやかなそして高校野球が全国の血潮を湧きたたせる今日から考えるからのことで、当時とすれば、こうした状態の中で、川中のユニホームを着て結構野球を楽しみ、野球を愛し、川中の生徒としての青春を謳歌したものである。川中野球部の誕生に参加した私たちとすると、たとえ関東大会に出場できなかったとしても悔はない。私たちの苦勞がみのって、川中野球部が見事に育ち、野球の名門校川中となったことを思えば、昔の苦勞も報われているというべきである。

51年度クラブだより

関東大会の思い出

旧制20回卒 増田 信平

川越中学が関東大会に参加したのは創部3年目の大正11年であった。

当時は竜ヶ崎中学が強く、この大会も竜ヶ崎中学で行われた。お宮さんのように階段を何十段か昇った高台にあった。選手は大会に備えて雨天体操場に柔道の畳を敷いて、そこで寝起きして合宿した。私もO.Bであったが選手と共に合宿し練習した。大会は1回戦が不戦勝で、2回戦に関東大会の古豪大田原中学と当たって10対0で敗れた。その時、平川主将は捕手のプロテクターを抱いてオイオイ泣きながら帰ったのを覚えている。古豪大田原中学に初参加の川越中学では当然の結果であったと思われる。



第2回参加の時は浦和高等学校（現埼玉大学）で行われた。この大会で、相手校は忘れたが、杉浦中堅手（故人）がセンターライナーを目測を誤り前進

して頭上を抜かれ3塁打としたことを覚えている。この日は暑い日で、私は午前中氷水（当時はカキ氷で甘露を入れただけの物が一杯5銭であった）を10杯飲んだ記憶がある。

第3回の参加は宇都宮で行われた。この試合我々O.B（本橋、増田、小室）3人で宇都宮駅前の旅館に宿を取って応援した。相手は栃木中学だったと思う。前半は押されていたが、後半で追いつき4対4で延長戦に入り11回に3点を挙げ7対4で決勝した。試合後、岸田主将が次の試合の抽籤に本部へ行ったら、飛田穂州先生が居て棄権するなら帰れと言われたと、ウッヘへと笑って兎も角抽籤をすまして来た。

関東大会とは別だが、大正15年の夏、川越中学が横浜へ遠征に来たことがあって試合は横浜商業と商工実習の2校と行ったが、両校とも横浜では名門校であった。この遠征は私の下宿が夏で学生が皆帰郷しているので私の下宿に泊まって頂いた。スコアは忘れたが好試合であったと思う。

昭和51年度クラブだより

思い出の記

旧制21回卒 田中 啓治

山本三郎氏が先日久し振りに訪ねて来られた。卒業以来50年振りの再会のことなので、むかし話に花を咲かせて楽しいひと時を過しました。と同時に川中野球部のことで、いつも熱心にご尽力されている様子を伺い、その御熱意、御努力に対し心から敬意を表した次第でした。その節この度記念誌を編集するについては、小生が思い出すままに述べた思い出の話の二、三を指摘されて、これを記事にしてくれと懇請されました。50余年の前のことなので、或いは正確さを欠いている記述があるかも知れませんが、御参考のようですがともなればと思い、思い出すままに申し上げます。

私が野球部になぜ入部したのか、自分でもその動機が分らないのです。その当時、北校（北尋常小学校のことを当時の子供達はこう呼んでいました。今の川越小学校です）出身の川中在校生達が作ってい

る初雁会というグループがありました。何かの会合のときにはいつも、球投げや或はハウトと称する軟式テニスのボールを使った野球に似た遊戯をして遊んだものです。そんなことから自然に野球になじんだのではないかと思います。同級生の水村君、一年下級の浜野君も野球部に入りました。大正7年頃の野球場は、向きが北向きというのでしょうか、本塁から一塁を結んだ所謂右翼の線が、境を接している武徳殿（当時は日本専売公社川越工場であった巻煙草を製造していました）の板塀と平行になっていたものです。いいかえれば左翼手のうしろが本校舎で物理、化学の階段教室と背中合わせであったわけです。本塁の位置は校庭の真ん中で、武徳殿寄りにあったようです。野球部としてまとまったチームが結成されたのは多分大正7年頃ではないかと思いますが、試合がしたいにも相手がいません。当時川越工業学校、川越農蚕学校にはまだ野球部がありません。幸いにも明文堂書店の岡田多四郎氏（愛称タードン）が中心となって結成されていた市内の実業団三芳野倶楽部があり、少し離れていますが、所沢の飛行学校の軟式飛行船の名前をとったのでしょうか雄飛チームが飛行学校にありました。その何れのチームと試合をしたのか定かではありませんが、川中野球部の初めての対抗試合ではなかったかと思われます。球場は先程申し上げた川中運動場です。審判には、私の母校北校の校長さんであり、恩師でもあられた宮原先生が引受けて下さった。只のお一人で投手板のうしろに立たれて球審、塁審、線審を全部兼務されたのですから大変な重責です。そのいでたちといえば、頭にはカンカ帽といって材質は麦稃で編まれた、一文字に四角張った当時の夏帽子をかぶり、黒の夏羽織をはおり腰には夏袴を召され、夏足袋に二板歯の下駄をはかれて、実に颯爽と、しかも厳然とフィールドに立たれたのです。正に夏の礼装で審判をされたのです。先生が右手をあげたり、セーフのジェスチャーをするうしろ姿を後方の二塁から眺めていて恍惚としたものでした。現在宮下町のお住居で庭木を友に、嬰鑠としてお元気でお暮らしとのこと、御長寿を熱望して止みません。フィールドの方向は僅かの期間北向きでしたが、まもなく

本塁の位置が現在のところにうつされました。飯田先生の碑のある場所です。本塁のうしろ両側に、今は撤去されてありませんが、体操用具の“棚”と“十二階段”とがあって、練習の合い間の憩いの場所として好適でした。

私が5年生になった大正11年春のことです。熊谷に遠征して、県下で最強といわれた熊谷中学校と練習試合をして勝利を得たのです。部長の飯田先生はとても喜ばれて、一同を集めて宣告したのです。

「関東地区大会に出場させてやる。褒美だ。但し遠征費は全部自費である」と。一同は小躍りして喜んだ、夢が叶えられたのだ。関東地区大会の開催地は、当時の有名校、茨城県の竜ヶ崎中学校である。ここで関東六県の選手が勝負をかけたのである。「サア練習あるのみ」とばかりに、第一学期の試験が終わると同時に合宿に入った。もうありませんが、校庭に添うように雨天体操場が南北に長く建っていました。その板張りの北半分が間中先生指導の剣道場、南半分が畳50枚位敷かれてある前田先生指導の柔道場でした。その柔道場が合宿所です。夏のことから、蚊を防ぐために蚊帳（かや）を張るわけです。蚊帳の四隅の吊手に長い紐を結んで三方の板壁にくくりつけるのですが、柔道場が広いのでとてもピンと張れません。蚊帳の天井が寝ていても手が届く位たれさがっていました。炊事についてはあまり記憶がありませんが上級生下級生の別なく交代でやる炊事当番が毎朝、紙屑をひねって燃やしておこした炭火のコンロで何かしたような気がします。とにもかくにも初めて経験する合宿生活です。和気藹々たる中にも凜とした規律が保たれ、一致協力、闘志満々、やる気十分の練習にうちこんだものです。ところが不運にも、出場日間近になって下痢患者が数名出て、遂に出発日になって捕手の杉田君が出場不可能になってしまった。止むを得ず陣容を立て直し、平川投手が捕手に、水村三塁手が投手に、田中二塁手が三塁手にと交替が行われましたが、二塁手に誰になったのか記憶が不確かです。背水の陣と申しますか、不安の陰りが我々の心をかすめたのは否めません。対戦相手は栃木県の太田原中学です。残念ながら7回でコールドゲームを宣告され、初戦を飾るどころ

か惨敗のうき目を見ました。ここで小生のボンヘッドと申しましょうか、大恥を一つ申し添えましょう。何回目かの守備の時に、三塁の塁上をかすめる猛ゴロが来たのです。横っ飛びになって見事に捕球したのです。瞬間、やったぞ…と思いました。それまではよかったのですが次がいけない。体勢をくずしたまま、一塁に投げました。一塁の船津君がクラブを高く差し上げて飛び上ったのですが、ボールは更にその上をゆうゆうと飛び越えて生きました。正に大暴投です。一死をとる代わりに、塁上のランナーに1点を献上したわけです。50余年経った今でも、その時の様子が生々しく脳裡にうかんできます。よほど口惜かったのでしょう。未だに強く印象に残っています。太田原中学校はその大会に優勝し、関東地区代表校として錦を飾りました。初雁会の人達が何人かわざわざ応援にかけつけてくれたのは嬉しかった。

これで川越中学校での私の野球生活は終わったのも同じでした。思えば川越中学校野球部員としての数年間の野球生活は、夢多い、華やかな青春時代の一頁を飾るものでありました。ついでに申し上げますが、川中卒業後旧福島高商に進み、二年生になった時見覚えのある下級生が入学して来ました。かつての好敵手(?)太田原中学校の捕手をつとめた男でした。偶然の再会で、久闊を叙したものでした。

51年度クラブだより

50年の追憶

旧制22回卒 新井 浩

先般川高倶楽部副会長の山本三郎氏より会誌発行に当たり、感想なり思出なりを寄稿されたい旨の長距離電話を戴いた。名簿を見ると山本君は29期の卒業だから一面識もないアカの他人である。然し、川中卒で野球部員であったと言う事だけで10年もの知己であるかの様な錯覚と親しみを感じず。川高倶楽部はこうしてボールの引力が団結を固めているのではないか。小生は目下息子に店舗をゆずり余生を送って居る70の坂を越えた老人であるから50年まえの記憶など殆どないが名簿によって幻を追うことにし

た。先づ先輩としては岩崎清録、羽島佑、増田信干、本橋九蔵、田中啓治氏などが浮かび、同期の桜では浜野清吉、内田正三君は忘れられない。又、後輩では渡辺靱吉、船津鴻之助君などが思い出された。又、物故された平川龍夫、水村潤一、杉田一良、加島仕郎氏や大河原雅雄、杉浦要次、小沢彦二君などは現役中の活躍が大であつた為か特に印象的である。小生の息子の大半が東京、横浜、千葉に在住して居るので年1回位は上京して居る。母校への愛着から戦後二度程川越の地を訪れたことがある。新築された立派な校舎拡張されたグラウンドを見て今昔の感新たなるものがあつた。

川中時代の思い出として終生忘れ得ない事は(1)関東大震災(2)運動部応援に基因した川中殴打事件と同校休校の危機(3)県下初優勝と旗行列(4)野山校長のスパルタ峻烈教育と飯田先生の温顔(5)野球部関東大会初出場と対栃木県大田原中学戦で16:0の惨敗などである。

毎年川高クラブ情報又は朝日新聞等で川高の現況を拝見して居るが川高の野球は強くなったものだと自負して居る。昨年は上尾に本年は川口に僅差で惜敗して居るのが何よりの証拠であろう。勝負に運はつきものの努力は必ず報いられる事でしょう。吾等は夢よもう一度甲子園で英姿を期待して居る。最後に川高倶楽部の益々の御発展と役員各位の御健勝を祈って稿を終わる。

51年度クラブだより

追 想

北関東大会善斗の余勢を駆って
県下に覇を唱えるの記

旧制27回卒 平岡忠次郎

関東大会に関しての川越中学草創期の活躍については、「51年度クラブだより」の増田信干本橋九蔵両先輩の追憶記事で興味深くも明らかにされていますが、名門たるべき川高野球部の礎石は、1925年(大正15年)、北関東大会で、優勝候補筆頭の栃木中学を破り、宇都宮中学に善斗した年に置かれたのではないのでしょうか。むろん宇都宮中学の大会グラウンド

で、今は亡き大久保文衛投手のミラクル軟投を軸とし、これ又物故せる岸田勝太郎主将のガバナビリティー下のナイン一致結束の敢闘が、朝日新聞客員飛田穂州氏より激賞を受けた程に、充分に発揮されたのですが、その拠って来たる所は、第一に、飯田亮先生の温情と熱意。第二に、先輩本橋、増田、小室虎人氏等の炯眼達識によって、大学野球技倆の導入が計られたこと。即ち明大の岡田監督、中村投手、銭村外野手をコーチとして迎え得ての春の錬磨によるチームの様変わり。これが北関東大会で川越中学のダークホース振りを現出した原動力であったのであり、名門への礎石をガッチリ形造ったものと考えています。川越中学のその年の戦力レベルは相当高いものであったと信じます。ご存知かとも思いますが今年の六月、朝日新聞に連載の「甲子園の夢果せざりしの回顧」に私も一文を寄せましたが、趣旨は川越中学は準決勝戦で宇都宮中学に惜敗したとはいえ、この手強い対手は、決勝戦で前橋中学に勝を譲ったものの、全く互角に渡り合い、この前橋中学ナインがこれ又甲子園の優勝戦で静岡中学と19インニングの死闘を斗って6対5の大接戦を演じたという経過を検討すれば、この年の川越中学の力量が抜群のものであったことが判ろうというものです。

私は、この年の浦高大会の成果を最後に述べて回顧録を結びたいと存じます。この年の秋、旧制浦和高等学校主催の第五回県下中等学校野球大会が行われました。この大会は甲子園出場に何等連導しない大会でしたが当時は権威ある県下のビッグイベントでした。参加の各チームは夫々文字通り全学を挙げて、ここに参集し、繰りひろげられる熱闘に選手共々青春の血をたぎらしたものです。筆者も夏と同様、中堅を守ってチームの中に在りました。断じて斗い、念願を達して此の大会で宿敵浦和中学を10対9で破り優勝することができたのです。地力をつけていた川越は此の堅塁を抜くべくして抜いたのです。——ちなみに翌1926年もこの大会を制覇しました——。川越中学のハイレベルの礎石は1952年に定まったとする私の見解の理由を述べた積りです。

(昭和52. 9. 28誌す)

昭和52年度クラブ日より

川中野球部の思い出

旧制34回卒 大塚 敬三

幸か不幸か病氣療養中のため、第59回全国高校野球選手権大会を全試合テレビで観戦することができた。

どのチームを見ても選手の体格が良くなったことに気がついた。その上選手の一人一人が野球をよく勉強しているということである。監督、コーチ等良き指導は勿論であろうが毎日毎晩のように野球のテレビ中継が行われ、細かいサインとかピッチャーの配球とかを解説者が上手に解説していることも事実であろう。

甲子園へ出場すると、どの学校も入部者が増えるというが、私が一年生に入った時は川越中学が埼玉県で初めて甲子園大会に選抜された年だった。そのためか一年生が入部者が30人もいた。この中からレギュラーポジションをとる事は容易なことではなかった。レギュラー選手の呑み水を毎日五回も六回もバケツでグラウンドまで運んだり、フリーバッティング、レギュラーバッティングでボールがなくなると、そのボール探しで一日が終わるのが常であった。練習が終わると肉屋へ行って牛や豚の骨をもらって来てバットを磨いたり、ボールの糸が切れれば針と糸を用意しておいて、それを縫ったりして用具を大切にしていたものだった。二年生になった頃は、内野外野を問わず漸く守備練習をさせてもらう様になった。然しポジションを確保したのではない。この様なことで練習に堪えられず一人減り二人減りして最後まで残ったのは家村君（旧姓朴）と私の二人だけだった。最も三年生、四年生になってから入部して来た者もいたが。

三年生になった時だったと思う、伊丹さんをコーチに迎えた。私はまだポジションを与えられていなかったが、甲子園大会の予選を前にして捕手であった先輩の増島さんが病気の為突然倒れたので私にそのあとをやれと云われ大会開始一週間前だったが、見よう見まねで何んとかそのあとを釜を埋める事が出来た。これが家村君と三年間バッテリーを組ん

だきっかけであり、川中野球部第二期黄金時代を築いたきっかけでもあった。この頃のメンバーは概ね次の通りであった。

〈昭和八年頃〉		〈昭和九・十年頃〉	
投	朴	1	遊 浅 野
投	三 上	2	二 増 島
捕	大 塚	3	捕 大 塚
一	三 上	4	投 朴
二	平 岡	5	左 岸 野
三	岸 野	6	三 島 田
遊	増 島	7	一 佐々木
左	小 峰	8	中 坂 口
中	主 齊 藤	9	右 山 崎
右	高 橋		

52年度クラブだより

戦後の苦しかった野球部

旧制45・46回卒 山 川 健 夫

昭和20年8月15日に勤労動員が終戦と共に終わり9月1日より学校が始まった。誰とはなしに野球でもやろうかと云う事になりました。

たまたま飯能方面の増島成郎、山川憲男君（故人）、加藤君、関博夫君（大宮在住）、名坂弘君（川越在住）、その他でチームを作り、私等が最上級生でもあって、当時はスポンジのボールで健康ボールというのが配給であり、それで練習したように思います。秋になり大会が行われるというので練習をはりきってやっていたとき、エースの山川憲男君が病にたおれ、関君を急遽ピッチャーに仕立、たしか10月の終わり頃だったか当時は参加チームも少なく一回戦は片倉学園を破り、二回戦は深谷商業でした。後年明大野球部のマネージャーをやった佐藤君がエースでかなりの速球投手だったように記憶しています。それを2対0で破ったわけです。何故深谷商戦のことをおぼえているかというと私事ですが私と佐藤君が大学で彼が野球部のマネージャー、私が応援団のマネージャーをしていてよくその話をしたのでおぼえていたわけけです。それで準決勝に進んだのですが対戦相手は熊谷中で、ご承知の通り物不足の

時代で軟式用のバットは一本しかなく（私は地下足袋で外野を守ったように記憶してます）、もう一本のバットは硬式用のバットに「一億一心」とネームの入っている戦争中のなごりのあるもので重くて使えるものではなかったのです。その一本のトラの子のバットが折れてしまい、何といっても当時は食糧難で栄養失調のような体で硬式用のバットが振り回せるわけがありません。参考までに当時私の体重は40キロありませんでした。現在その辺でリトルリーグとやらの選手の方がりっぱな体格をしています。それでも関君が頑張ってくれて2対1の惜敗でした。翌年になり硬式で野球がやれるようになったのですが、練習相手がないのです。川越入間地区で野球部のある学校はとなりの川越商業と豊岡実業しかなかったわけですから、いきおい商業とやる機会が多く、負けた覚えは無かったし豊岡実業に申し込んでも断られ、一度も対戦したことがありませんでした。硬式になって先輩の徳田健吉さんを監督に迎え、コーチは豊岡物産の金子高祈さん、水産講習所の栗原秀夫さん、日大にいておられた松津修造さん等が来られノックバットを振ってもらったように思います。前年のこともあり夏季大会（今の高校野球の前身）にはかなりの自信をもったのぞんだのですが、あいにくと関君が肩を痛めスローボールしか投げられなく、それでも埼玉中学をコールドゲームで破り、二回戦浦和中と対戦したのですが、残念ながら味方のエラーもかさなり、コールドゲームで大敗してしまいました。たしかその時は大先輩の山本さんが審判長をしておられネット裏でやさきもきしておられたという事も聞きました。とにかく学校当局に問い合わせても当時の記録も資料も何もなく、私の記憶と増島君達の話の総合してまとめたつもりですが、とりとめがなくなってしまった事をおわびして筆をおかせてもらいます。

52年度クラブだより

追 想

飯田亮先生記念碑建設の思い出

旧制21回卒 吉崎寅之助

もう40年以上も前のことで記憶も定かでないため、間違っていたら御許を願いたい。

飯田先生は、東京帝大文学部を卒業され（在学中はボート部の選手だったとか）、優秀な国語教師として大正9年川越中学に赴任されてこられた。飯田胡春と号して錦心流薩摩琵琶の作詞を数多く書かれ著書などもあった。



川中野球部の部長になられてからは、よく部員の面倒もみ、心から野球を愛している様子は我々部外者にもよく分かり、部員が羨しい程であった。先生は野球人としての功績ばかりでなく生徒をひきつける格調高い人格者であった。ワイシャツ姿でグラウンドに立ち、部員にシートノックをしていた姿が今でもありありと目に浮かんで来る。

先生が亡くなられた後、私達は先生の徳を偲び、先生の功績を永く記念出来る様にと記念碑の建設を思い立ち、伊藤長三郎君（故人）松崎忠夫君（川中21回卒業生）と共にその計画を推進した。この事について恩師久保提多先生に相談したところ、先生の友人でレリーフをイタリヤで9年間も勉強して最近帰国した和田豫章先生がいるというので依頼したところ、心良くお引受下され乾漆で製作すれば半永久的に大丈夫とのことでそれに決定し、嵌込むのは三波石が良いと言うので産地まで行って来て記念碑が

見事に出来上った。そして、先生が野球の練習をいつでも見ていられるようにグラウンドの北隅に建設をしようと言う事になり、この費用は大部分は川中第20回卒業生以後の各回有志の寄附に依って充当され、準備は全く完了した。ところが、ここで大きな障害に逢ってしまった。



それは、校庭内に記念碑を建設することは絶対に許可する事は出来ないと言うのだ。そこで学校側と我々建設準備委員会と真向から対立する破目になり、我々も何回となく会合を開き、同窓会の先輩諸兄も仲裁に入ったが、なかなか解決の道が見付からず、とうとう同窓会の分裂も止むを得ぬと言うところまで立至ってしまったが、先輩の須永西馬先生にも大変御心配をかけ、最終的には建設を認めると言う事になり、現在の場所と多少違うが完成を見、昭和10年11月1日風はあったが晴天に恵まれて盛大な除幕式が行われ現在に至っている。

先生は、今でも無言で野球の練習を見守り、将来も末永く激励さる事と思う。

先生の御冥福を祈ると同時に、川高野球部並びに川高倶楽部の発展を心から祈っている。

昭和51年度クラブだより

甲子園の思い出 ー選抜大会ー

旧制30回卒 橋本 定

今年、春の選抜で東北の酒田東が沖縄の豊見城に10対0で大敗したテレビを見ながら、すぐ連想した。

「わが川中が中京商に敗れたケースと同じだ」北国のハンデを負って、雪が多い、練習不足、基礎訓練がし上がらない内に、甲子園の檜舞台、何万という観衆に囲まれて、その大歓声の中での一投一打、ポーとして実力が発揮できない内に、エラーにつぐエラー、いくら投手が好投しても、野手はその足を引張っているのだから大敗も已むを得ない。夏の甲子園でも、わが埼玉代表川口工が智弁学園に12対0で敗れたケースも同じだ。3回まで互角に渡り合ったように見えたが、4回二死から大事な所で、守備が乱れ、二失策がからみ大量点を許している。5回にも投手ゴロを一塁に大暴投して、追加点を与えている。ある新聞の見出しに「川口工甲子園の魔性に泣く、二死から痛恨の2失策」「絶対と思っていた守りから破たんが出て、すっかり浮き足だってしまった」と川口工の大脇監督は話していたが、初出場の硬さで、選手が上がっていたということだ。わざわざ本年度春と夏の2例を出したのは、昭和6年に、わが川中が選抜で全国大会に出場し、初舞台を踏んだ時とすっかり内容が同じだからである。甲子園出場の決定は昭和6年の1月中旬頃だった。登校して始めて知らされ、びっくりした。時の野球部長飯田先生から新チーム結成以来の戦績等資料を提出して、一応リストにのっているとは聞いていたが、まさかそれが実現するとは夢にも思っていなかった。その当時は甲子園を核とした西日本勢に強豪ひしめき、関東東北は野球不振であった。川中がその尖端を切って、選抜の栄誉をになったのだ、開会式には一番遠距離からの参加校であるとの意味をも含めて、宣誓の大任を負わされた。始めて甲子園出場に、昭和初頭の不況の嵐を吹っ飛ばす大ヒットと川越市は湧きに湧き、学校も歓喜の明るさに包まれたが、いろいろな条件の中に、かなりマイナスの面もあった。その間雪が3回も降り、その度に全校生徒を動員して雪かき、続く霜どけ。武道場でキャッチボールの真似事、バット振り、スライディングの練習。3時半頃から5時半頃まで、すぐ陽が暮れる冬の悪条件の中それでも立教大学の小笠原選手のコーチ、あるいは当時有名な飛田穂州先生を招へいし、甲子園出場の心得、技術指導のアドバイスを受けたり、諸先

輩が毎日入れ替わり立ち替わり激励かたがたフリーバッティング投手に、内外野のノックに、それぞれテンヤワンヤの指導で2月から3月があったという間に過ぎた。今思えば基礎訓練が充分でき上がらない内に、一応のカッコだけつけて出発したという状況だった。というものの大黒柱のエース熊谷は超中学級で、その剛速球と懸河の如きドロップは、関東地区の他のチームを寄せつけなかった。「名投手あるところ必ず覇権あり」川中、川高野球部の歴史をみると、熊谷・島野・吉田等好投手がいた時は、必ず制覇していた。いかに守りの要である投手の養成が大事であるかが分かる。配するに攻撃面では、駿足好打の奥富、森山、野本の中距離打者。スラッガーの久米原、熊谷、綿貫、斉藤の大砲がおり、一たん波に乗ればすさまじい破壊力があつた。そのよい例が、夏の予選2回戦対熊谷中との試合で、久米原2本、綿貫、熊谷と計4本の場外ホームランを記録したことからも想像できる。当時選抜出場が決まると、出場校同志の試合ならよいが、他校との試合は禁止されていたので、途中静岡に下車して、同じ参加校の静岡中と一戦を交え2対0（途中降雨）で勝ち、幸先よい緒戦の勝利に酔いながら甲子園に到着した。旅館はあつたのだから、費用の関係と思うが、今で言えば民宿で公民館に宿泊した（一寸がっかりしたが）、グラウンドの確保が難しく、甲子園での練習は1回だけ1時間のみだった。1回戦相手は、吉田投手を擁し、夏の全国大会3連覇の記録を樹立した全盛時代の中京商だった。将に相手に不足はなかった。4月3日、当時の神武天皇祭で祝日だった。練習の時はガランとした空洞の中でプレーしているようで武者震いの程度であつたが、今日は予想以上の5万の超満員の大観衆。スタンドは歓声で吼え、その重圧感で足はガタガタ震えていた。アルプススタンドを頂点に、のしかかるようなスロープが、すり鉢の底に追っているようだった。初出場の選手に、これで上がるなどと言っても無理である。サッカー、バスケット、バレーのように最初から最後まで、徹頭徹尾動き廻っているゲームには上がる暇はないが、野球には「静」の時がある。この時、球場内外の空気が追って来て、硬くなり、上がり、浮足立ち、実

力が出し切れない内に、一番悪い面を出してしまう。これが甲子園独特の雰囲気、「甲子園の魔性」というのであろう。戦う前にこれに負けてしまった。投手の熊谷はよく投げたが、安打でなくエラーで負けた。甲子園はエラーした方が負けるとよく言うが。たしか5失策？ チーム随一の強心臓の奥富までが凡飛球を落としてしまった。もっとも甲子園は浜風無情、風向きがぐるぐる変わって、フライがよく流れて、野手泣かせだと言われていたが、たしかに、凡フライを五つも落としている。打っても中京商の吉田に牛耳られて、外野に飛んだのは三つ位で、あとはほとんど内野ゴロ。内野フライで安打は二本？ 当時の昭和6年度の生徒会報に詳しく載せてあるので、それがあれば探したが見当たらないので正確な記録にならないで残念だが、11対0の大敗だった。新聞の見出しのように要約すれば「川越中に悪夢の中盤」「守備の乱れ大量点を許す」「くやしい意外の大敗」「初陣川越中浮足立つ」「白球の青春涙からく、川越中創部10年の夢実らず、初戦の壁は厚かった」只一つの救いは、甲子園の観衆は、その当時から、甲子園大会を育てよう！ 発展させよう！ と願っている心情から、敗者に寛大であり、力強い拍手と激励で「ご苦労さん、また来いよ」と何処へ行っても暖かくいたわってくれたことである。栄光の敗者がいて、敗北の集積の上に、優勝の栄冠があることを思えば敗者をいたわり、また称賛することは当然であるかも知れないが、45年前の屈辱も、虚心坦懐こう書いていると楽しい思い出である。

当時のメンバー

1. 熊谷 2. 久米原 3. 綿貫
4. 橋本(旧姓野本) 5. 奥富 6. 粕谷
7. 森山 8. 山畑 9. 並木(斉藤)

昭和52年度クラブ日より

甲子園の思い出

高校12回卒 内 沼 稔

昭和34年7月30日、山梨県営球場は猛烈な暑さだった。ダックアウトの気温は40度、攻守交代の度に、頭、顔、首と氷で冷やしての戦いであった。我々の相

手は、甲府工だけでなく、埼玉予選では経験したことのない甲府盆地特有のむし暑さと、甲府工側の大観衆であった。しかも県予選五試合完封（連続43イニング無失点）、三振奪取46個の大会新記録をつかった吉田投手が三回表に早くもつかまり、先取点（1点）を奪われたのである。チーム結成以来、公式戦では初めて許した先取点であった。我々はいつも1点か2点取れば、『このゲームはいける』という感じを持っていたものだ。それ程吉田投手を信頼していたのである。それが先取点は取られ、しかもこの暑さ、はたまた、地の不利という最悪の状況に直面し、我々の闘志はやや鈍りかけた。しかしこの時、家村監督のウェディングの指示が出た。この暑さ、甲府工の軟投上田投手も後半必ずつ疲れると監督はよんだのであろう。六回裏その通りとなった。杉田・島本の安打で同点に追いつき、七回には飯島安打の後、腰痛で八番を打つ主将横田のタイムリーヒットで勝ち越した。腰痛のためやっと出場した県大会ではノーヒットの横田主将が、この試合二塁打を含む二安打を放ったのである。ここの一番に強い彼の一端をのぞかせる試合であった。甲子園出場を決めたこの一戦を終わっての感激は、18年も経った今では余り鮮明ではない。あの時はただなんとなく勝ち進んできたというのが実感であったように思う。それが勝運とでも言うのであろうか。ただ私は10年程経って、今度は審判員として同球場に行き、大宮高・川越工等の甲子園出場決定の瞬間に遭遇し、あの時の感激を思い浮かべ見の震えるのを感じたものだ。喜びとか、感激とかいうものは、その度合が強ければ強い程、その瞬間よりもいくらか日時を経た後により強く感じるものである。

さてこの後、先輩諸兄、先生方、同僚、市民の方々から心温まる激励を受け、甲子園へ乗り込むのであるが、何せ17. 8才の純情無垢な高校生であった我々は、何をするにも勝手がわからず無我夢中であった。甲子園での練習でも、何回も出場しているチームを見ては気後れしたものだ。これも初出場組のハンディである。こんなことではゲームに勝てない。しかし家村監督自身は初出場ではなかった。天理高時代に出場経験があり、我々はその時の

話を聞き、又甲子園でのことは『私にまかせろ』と言う監督の力強い言葉に、様々の不安も吹き飛び安心したものだ。大会前の練習場も小峰先輩のご尽力により確保していただき初出場校としては、我々は恵まれていたのである。これも伝統ある川高野球部の先輩諸氏のお力の賜ものと思っている。このように割りときれいに入場式の日を迎え得た。いよいよ入場行進が始まり、マーチがあの大球場に鳴り響いた。後にも先にも、私はこの時程緊張したことはなかった。毎年夏の甲子園大会の入場式をテレビで見ているが、その度にある時自分達が雲の上を歩くような気持で行進した感激が強烈に蘇り、目頭が熱くなるのおぼえるくらいである。どうして入場行進にこんな感激するのか、これという理由が見当たらないが、毎年入場式には五万の大観衆が詰めかけるのを見るとやはり何かがあるのだと思う。

甲子園のゲームの方は、台風の為数日延期の後、先ず熊本の鎮西高と対戦した。一回戦の相手がやはり初出場であったことも我々にツイていた。浮き足立つ鎮西高に対し一回表、私のブロック三塁打等で2点を先取、吉田のコーナーをつく見事なピッチングで鎮西高打線を1点に押え、後半は近藤の安打でダメを押し、3対1で我々の試合ぶりとしては快勝であった。鎮西高も力は我々より上であったと思う。後でわかったことだが、巨人軍の末次等が6番を打っていたのだから相手に先手を取られていたら大敗していたかもしれない。ここが高校野球のおもしろい所である。ツキが試合を決める重大な要因となるものだ。しかしこのツキも、不断の練習努力と断固たるチームワークに依って自分の方に引き込めるものだという事も銘記したい。第二戦は高知商である。名門である。我々は気後れした。甲子園の地下通路で前の試合が終わるのを待っている間呉越同舟となったが、相手はニコニコ笑っていた。我々の方はニコリとする者も無く緊張していた。この時から相手に吞まれていたのかもしれない。試合は高知商の山崎投手にキリキリ舞いさせられ1点も取れず仕舞いだった。ただ吉田が好投し九回表にノーヒットで1点を取られたのみであった。吉田の好投を見殺ろしにしてしまい無念である。この試合に勝っていたら、

吉田投手はアメリカへ行っていただろうと思う。試合には敗れたが我々には無念の涙は無かった。初出場ながら名門校と一応対等に戦いを得たというささやかな満足感からであったと思う。

最後に当たって、甲子園出場に際して川高倶楽部皆様の親身のお世話に対し、18年経った今、改めて深甚なる謝意を表する次第です。

52年度クラブ日より



甲子園での練習場探し

旧制33回卒 小峯 敏夫

甲子園出場校・西関東代表・川越高校!!

夏の夜空にくっきりと阪神デパートの電光ニュース、それは私が森永の堂ビル大阪支店に転勤後間もない夏の夜の出来事でした。

此処は屋上のピヤガーデン、此の日も支店の草野球の練習が終って帰り道での一杯でした。まさかと思ったのですが又もや「ピカピカ」「キラキラ」「チカチカ」「ツーツー」紛れもなく、甲子園出場校・西関東代表・川越高校!! 期せずして万歳乾杯だ。正に感激の坩堝でした。

翌朝はもう支店内は云うに及ばず、工場から商事関係から期せずして電話の雨。あの時の感激がいまだに脳裡に焼きついて離れません。さあこうしてはいられない。何はさておき練習場探しだ。体のタイミングを合わせるには、どうしても適当なグラウンドがなければと思っている矢先、野球部のマネージャーが早々私の処にかけつけ、使用の有無に拘らず、工場の方に、至急連絡確保しておいた方が宜しいと

のことで、早速連絡の結果は好都合に運び承諾の返事あり、全く電光石火、一件落着致しました。

これも山本大先輩の御蔭といまだに感謝しております。私は昭和11年不景気のさなかでした。山本大先輩に連れられ鶴見の森永球場で森永本社野球部の採用試験を受け、ただ一人の合格者になったのです。当時の部員の方は超一流で六大学の錚々たる選手だった。縄岡（立大）・本郷（慶応）・手塚・八十川・小林（明治）・川波（早稲田）其の外多士済済で、ずらりと並んだ試験官でした。地方の中学出の選手では全く胴震いそのもので、まさか合格とは!!今で云えば長嶋・王選手以上だったのでしょうか? 山本大先輩も苦笑するかもしれませんが。とに角森永では野球のピカー北から南の工場に至るまで列島縦断、巨人の星そのものでした。まあ一応この様なこともあってか練習場確保も出来ましたが、これも直接、間接を問わず山本大先輩の御蔭であると感謝しております。（老人の戯言で恐縮の至りですが御容赦下さい）

さて、それから川高ナインの来阪を待ち早速宿舎に赴きました。むし暑い夏の夜でした。たしか芦屋と思いましたが当時は赴任早々で地理不案内のため一時間余りで目指す宿舎に到着致しました。

附近は全く野球色で一杯でした。出たり入ったり色々の人が右往左往、興奮の坩堝でした。遠い昔の選手時代が思い出され、何人とも云えない青春の血を湧き起こし、自分が選手のようになってその中に溶け込むようでした。

早速家村監督（一年後輩）に会いました。昭和10年卒業以来始めて会う顔でした。二昔半ただなつかしいと云う一言でした。

奥座敷の飯田先生の遺影も我々が成し得なかった北関東大会の雪辱を今此処に見事果し、予選地域こそ異り堂々西関東の雄として甲子園原頭に駒を進めた家村監督を始め選手諸君に囲まれ、あの古い中折帽子をかぶり肩巾の広い猫背姿の先生が彷彿として眼の前に現われたようでした。暫らく雑談している中に練習場の話になり、宿舎からは塚口のため若干離れておりましたが森永塚口工場グラウンドを予定通り使用していただくことになりました。



グラウンドでは西関東の雄川越高校来るとのことで工場の関係者、スポーツ記者、見物人その他千客万来、工場でも大変に喜んで御世話が出来ました。何分にも二昔前になりますので不備の点だらけですが以上のような状況で練習も無事に出来てほっと致しました。

尚当時の朝日新聞、団扇のミニ判を同封致します。再び埼玉の雄!! 伝統ある川越高校野球部として甲子園原頭に駒を進める原動力となれば幸甚の至りです。

拙文散文でとりとめありませんが宜しく御配慮の事御願い致します。

諸大先輩、諸先生、諸兄、選手諸君の御健康をお祈り致しまして筆をおきます。

以上

53年度クラブだより

甲子園出場蔭の人

高校12回卒 宮根七郎

母校野球部が昭和34年、夏の甲子園大会へ初出場できたのは、いろいろ好条件に恵まれての快挙であった。その一例として当時マネージャーであった山崎公氏について、思い出すままに記してみる。

氏は昭和32年4月我々と共に希望に満ちて母校に入学し、憧れの野球部に入部した。すでに当初から体格・技術の両面で他の新入部員とちがって卓越したものをもっていた。それは監督の土屋亮先生の注目するところとなり、その素質を一段と磨いていった。

そうして2年生の時には、他の同級生に先んじて試合によく起用されるようになり、大型な上級生チームの中で度々活躍をした。従って34年度の新チームづくりに当たっては中核になるべき存在であり、我々同級生も頼りにしていた。

ところが33年の各県一校甲子園出場の40回記念大会の県の決勝戦で、球運つたなく大宮高校に負れて帰校後、新チームの練習計画の立案に先だって、部長の梅沢先生より報告がなされた。即ち、山崎氏がこれからの1年間我々同級生と一緒に試合に出場することができないというのを聞かされたのである。氏は事情あって川越高への入学が1年おそくなっており、要するに高野連規則の年齢制限の条項に該当したのであった。

この話を聞かされた時の我々の気持ちは、暗闇の谷底へでも突き落とされたような思いであった。氏の頬を声もなく（とういよりは出せないというべきか）熱い涙がつたわった。まったく、この時ほど冷厳な事実を思い知らされたことはなかった。氏の心情を思うとき胸の疼きあるのみであった。

どれほど苦悩し迷ったことだろう。結局、マネージャーとして家村監督の補佐役で最後の1年間を送ることを決意されたのである。チームにとって最もうれしい選択であった。それからというものは、連日フリーバッティングの投手、内外野のノッカーを、また時折行った紅白試合では、レギュラー・チームを相手に一方のチームの投手をやり押え込んでしまうこともあった。そのお蔭で家村監督の指導と相まってチームは日に日に上達していった。

当時のチームは好投手吉田を擁していた上に、実にチーム・ワークがよかった。これによ氏の存在が誠に大きかったと思えてならない。氏の野球への情熱と厳しさには同級生ながら私などは一目も二目もおいていた。

母校卒業後、日本大学へ進んだ氏は大学野球でもう一度自己実現を試みたのである。当時の日本大学は、香椎監督に率いられて東都大学リーグの雄として全盛期にあった。類まれな情熱と一途な努力は香椎監督の信望を得るところとなり、度々の活躍をした。かつての仲間として一味も二味もちがったよろこびをおぼえ拍手を送ったものであった。その後ヤシカカメラに入社し、永年ノンプロ野球で選手生活を続け、のちに監督も勤めた。氏の野球への情熱は端目には余すところなく燃焼し尽されたように思える。

2年程前、嘱望されて(株)ベル・エトワールの担い手となり、海外雄飛の昨今である。

53年度クラブだより

県下に初制覇・大久保文衛投手を語る

旧制27回卒 平岡忠次郎

旧制浦和高等学校主催の埼玉県下中等野球大会は、大正15年（1926年）、この年も恒例の如く9月に開催された。出場校8校丁々発止の末、勝残ったのは古豪熊谷中学と気鋭の川越中学である。

古豪の熊谷は、この大会に既往5年間無敗を誇り、文字通り県下の王者である。

川越はその夏、朝日の北関東大会での大奮戦の余勢を駆って、虎視眈眈、この宿敵を打倒せずんば止まじの意気に燃える、巧緻を秘めた充実の気鋭である。

この戦いは結局5対4の大接戦で好投手大久保文衛を擁する川中の制する所となった。紫紺の大優勝旗を手中に収め得たのである。燦然たる勝利、それはそれとして、体得の一大教訓は、超軟投の頭腦的フェイント投球が、強力な古豪を喰う武器となり得たという、大久保による揺ぎなき実証である。

* * * * *

大久保文衛は、当時県西に於ける実業団野球のメッカとも云うべき飯能市（＝旧飯能町高麗横丁）に、1910年に生れた。平岡は一年後に隣村で生まれ、彼との交友は地縁的にも繁き部類に属する。飯能実業団主催の少年野球大会に小学5年生で投手として出場し、一勝を挙げたことを覚えているが、飯能小学校の当時のチームに大久保の名は無かったと思う。

大久保文衛は川越中学4年で真価を充分に発揮した遅咲きの名花である。男性で名花とは少しくそぐわないが、彼の名の音読がフミエだから、よしとして頂こう。しかも彼は男性的豪球投手とは程遠い、聊か女性的な面影なしとしない軟投の巧緻派投手である。昨今プロの速球投手の投球が、時速140キロ＝秒速40メートル、投手・捕手のプレート間を2分の1秒程で突走るのであるが、大久保の球速の遅さ加減は、腰だめの的に推測すれば、優に8倍はかかっ

たであろうから4秒程度、この超スローボールを基軸ボールとして、カーブの併用、時としては逆モーションの投法等で敵打者を心理的にはぐらかすことが彼の絶妙な投法。速球と軟球との相互のコンビネーションというが如き真っとうな代物ではなく、超軟球と超軟々球の時間差フェイント投法が、前人未踏とも云うべき彼のもつ特技であった。ゴルフで云えば、はやる打棒の待ちチョロを、意識的に造り出す心理学的攻勢だ。遅い球を自在に操った頭脳の投手、これが大久保文衛である。

* * * * *

この稿の結びは、川越中の名応援歌「空蒼茫と夕されば……」たるべきだと思う。筆者等川越野球史上のオールドボーイズが、今をさる53年前、埼玉県下初制覇の宵に歌った勝利の歌を声高らかに唄おうではないか！ 今は無き大久保文衛投手へ捧げる讃歌として。

(1979・9・24・記す)

54年度クラブ日より

わが野球人生と名投手熊谷幸夫

旧制30回卒 橋本 定

私は、満蒙の天地→太平洋戦争による召集→復員→中年34才にして、古谷中学校に職を得て退職するまで、満60才の老監督と言われながら、ノックバットを振って来た。

川中時代、ちょっとした退屈まざれと、淋しさで、クラブ活動で野球を始めたのが運のつきで、野球の魅力にとりつかれ、勉強そっちのけで、野球をするのが楽しくて楽しくてしかたがない青春を過ごした。だから旧チームが解散し新チームが編成された時は、野球ができない衝撃と生活のリズムの乱れから、数日間虚脱状態だった。それが一転満蒙の広野に人生を見出して、すっかり野球を忘れていたが、再転中学校の教師として、野球部の監督として、別の角度から野球を堪能し、60路の年まで、野球と心中しようとは夢にも思わなかった。川中時代の趣味が道楽がよみがえった。芸は身を助けるというが、最後には、助けられ過ぎて「どうしてこんなにやらなくて

はいけないのかしら？」と、気だけ若いのが、動かなくなった体をもて余し、迷いと困惑を感じながら、正直言って悩んだ。野球部の監督は、人間形成とか修養道場とか単なるクラブ活動とか、教育的なことばかり考えていたら決して強くならない。グラウンドに出たら、総てを忘れ鬼になって仕込まなければ、強いチームに育てることはできない。サラリーマンになりすまし、不即不離。ただ、上手にクラブ運営を楽しんでいるのなら誰でもできる。心身共に人間的に鍛え、技術を錬磨し、実践に臨んでは、右に左に動かし、作戦がずばりと適中し勝利の喜びをかみしめた時の爽快な気分は監督として最高の生きがいである。私は、体の中に喰いこんだ野球の虫が、うずくのをどうすることもできなかった。

すぐ短絡的に夢中になる方で、後半生の人生を野球で燃やし切った愚直な人間のおのろけとして、本文を見て頂きたい。

昭和30年、男女併せて250人位の小規模校—古谷中学校にいた頃、中学生として突拍子もなく団体の大きい子供—3年生の時180センチを越えていた—しかもサウスボウ—の子供が野球部に入ってきた。その前の年、栗原健次（川高に入学、駿足好打のトップ打者として活躍）という1年から選手になったよい投手がおり、大変よい成績を収めていた上昇気流の時代だから、彼の体を見た瞬間、すぐ惚れ込み、こいつを仕込んだら、投手としてすなおに伸びたら、県大会優勝まちがえないと確信し、楽しみを倍増しながら、練習に励んだ。2年生から1塁手に使い3年から投手にした。ところがスピードは物凄くあるが、サウスボー特有の荒れ球でノーコンである。これには頭を抱えてしまった。四球を続けて3人出したかと思うと、次打者をバッタバッタと三振にとる。吉崎という捕手が「先生、櫛笥の球は何処へ来るか分りません」「左官屋が壁をぬっているようです」と訴える。従って西武地区代表にもなれず敗退した。余談だがこの子は川越工業に言っても制球力はつかず外野手として活躍し、公式試合でホームラン5本打ったという長打力が認められ、中日ドラゴンズにスカウトされたが、結局芽が出ず3年間でお払い箱になったというのと気の毒であるが、川越出身者プロ

野球選手4人のうちの1人櫛笥厚正である。(現在川口市役所勤務) 参考までに4人とは、川中出身—セネターズ—綿貫 家村 川工出身—大洋—守田 中日—櫛笥。

ところが1年おいて翌年、160センチ位ちょっと小柄でキャシャだが、大変体が柔らかい手首の強い泉名という投手が現われると川越地区の強豪を春秋とも、なぎ倒し県大会準決勝まで行ってしまった。この選手は川農に入学すると1年から投手になり、川農の最強時代を築いた。今川越市役所にいる。

とすると中学、高校の野球では、投手は、巨大漢でなくとも大丈夫。小さな名投手が何人もいる。川越でも何年か前に甲子園を湧かせた川越工業の指田投手がそのよい例である。従って監督として、一番心をくだくのは、守備力の60%前後を占めると言われる投手づくりである。馬力体力があることは確かに名投手の一要素だが、体に惚れこんでふられた例は何回もある。問題は体の柔軟性、やわらかさに富んでいるかどうかだと思ふ。肩の強さが投手の条件であり、足腰の強さが野球の基礎であり、コントロールが投手の生命であると、名投手の条件がうたわれているが、中高の公立校のように制限された一定の30名〜40名位の部員から、エースを養成するのは至難の技で、已むを得ず、適材適所、ちいさな名投手も出現する訳である。従って何年かに一度のエース誕生は偶然性もかなりある。そこへ行くとわが熊谷幸夫は10年に1度のエースとして誕生してきた男であり、昭和の初頭何回となく県大会を連続制覇してきた川中の黄金時代の立役者であった。身長180センチ近く、鼻高く、色白くすらとした、女で言えば八頭身美人で、足腰のバネもあり体もしなやかで運動神経抜群のエースとして先天的要素を備えた投手だった。熊谷は中学3年からレギュラーとなり、ほとんどセンターを守り、リリーフとして投げたのは、ごく僅かである。4年・5年と正投手となり2年間マウンドを守った。

昭和5年(山本三郎主将の時) 42戦37勝 5敗1引分 得点計439 失点計168

昭和6年(野本 定主将の時) 46戦30勝 13敗3引分 得点計313 失点計242

以上が99%彼が投げた成績である。すぐ気がつくことは、4年生と比較して5年生の時の方が失点が多く、成績が悪くなっていることである。これは対戦相手に、実業団チーム強剛、あるいは関東甲信越の超一流チームと戦い、大量得点を許していることと、彼が最上級生になったという気のゆるみ、プライドで、うまみでしのいで行こうとする投球が、却って打ち込まれていた点だと思う。参考のために失点が多く負けた試合をのせておきます。

東京鉄道局18-4 仙台鉄道局16-3 中京商業11-0 銚子商業10-3 松本商業11-7

桐生中11-8(関東選抜) 桐生中9-8(北関東)

栃木中9-3(関東選抜)

先日川高の図書館で、当時の校友会報を調べ、いろいろのデータを電卓ではじいている内に、熊谷に関するイメージが、評価が段々と低くなって行くのに気がついた。

剛速球、懸河の如きドロップ、関東有数の名投手と新聞ははやし立て、我も川高10年に1度のエースと信じ、人にも賛美してきたが、次のような大会行事のいくつかの試合の失点、安打、4死球3振等の投手の防禦率を見ている内に、名投手とは過当評価かなという疑問が湧いてきた。

そのいくつかの記録を参考までにのせます。

	甲子園		近県選抜 石原球場		放送局 開局記念静岡		関東選抜桐生		県大会 (甲子園予選)	
	中京商	川中	浜田商	川中	静岡中	川中	桐生中	川中	松山中	川中
得点	11	0	9	7	7	2	11	8	0	15
安打	11	2	13	11	7	2	8	11	2	11
四死球	3	6	5	6	8	4	6	9	0	10
三振	1	8	2	3	4	10	6	5	10	2

	県大会2回戦		県大会準決勝		県大会決勝		北関東1回戦		北関東準決勝	
	浦和中	川中	熊谷中	川中	豊岡実	川中	高崎商	川中	桐生中	川中
得点	10	13	0	14	2	9	6	7	9	8
安打	8	12	3	15	6	11	6	11	6	10
四死球	11	8	2	4	2	6	7	12	14	5
三振	9	5	6	6	5	4	6	4	4	6

こう言ったいくつかの個々の記録を、現在の高校野球のそれと比較すると、荒っぽさが目立ち失点得

点の大量点→打撃戦→投手記録の寡少性が考えられるが、昭和5年度の勝率8割8分、6年度の勝率6割5分を1人で投げ抜いたことを考えれば、矢張り非凡な投手であった。流れるようなやわらかいフォームで、ハーフクォーターから投げる球は重く速く伸びがあった。時々サイドから投げる柔軟さ、器用さもあったがこれが禍して痛打を喫した。決め球にアウドロの鋭い武器もあった。関東地区のどの投手と比較しても優るとも劣らぬ素質があった。だのに5年生になり伸び悩んだのは、最上級となり、お山の大将になった気のゆるみ、精神的な弱さがあったのではないかと思う。学校ではよく「一人っ子はそれ自体病気である」と言っておる。家庭のキング王様となり、親の愛を一身に受けて、わがまま一杯に振るまってきた子は、学校でも取り扱いづらい。道徳的には、非常に秀れたものを持っているが、社会的に集団の中でもまれりと、苦痛から逃避する。はみ出し現象が往々見られる。プロの世界でも、スカウトは一人っ子の精神的弱さを極力敬遠しているそうだ。熊谷も男一人の家庭（一人姉さんがいると聞いたが）で大事にされ、学校ではエースとして、彼がいなければ試合ができないのだからチャホヤされ（4年生で伊藤、斉藤という投手を養成していたが）必要以上にみんなが気をつかい、今で言えば、いわば過保護現象であった。だから肩が痛いと言えば投球練習を休ませ、毎週のようにある練習試合等に備えて、疲れさせないためスタミナを温存させるようにしていたから、投げ込み不足、全力投球したら途中で息切れするような状況だったから、打たして討ち取る技巧派に転進変化して行った。従ってせっかくの優秀な素質、体力、脚力を持ちながら剛速球の鋭い斬れる味が生かされず、北関東大会、甲子園を目前にして、8対2のセフィテイリードをしながら、9回に桐生中に大逆転され敗戦の悲運に泣いた。肝心要めの所で、竜頭蛇尾、画竜点睛を欠いた悲劇をもたらした。

たかがクラブ活動というなかれ！ 甲子園を頂点とした高校野球は、高校健児の情熱のはけ口であり、人生の試練の場である。一投一打に郷土の期待と母校の名誉をかけ、必死に燃える青春のドラマである。

去る7月22日地方予選川越商業対所沢高校の試合を応援に行ったが、入場料300円を払っても初雁球場を超満員にしたあの熱気と歓声!! そこに野球の魔性と魅力がある。たかが高校の草野球と言わなれ! 記録を争い勝敗を競うスポーツに於いて勝者の優越は、努力の結果として燦然と輝き、勝たんとして勝ち得ざる敗者の悲哀は、人生の教訓として永遠に残るだろう。勝敗は時の運、禍福はあざなえる縄の如し。勝敗にこだわることはないけれど、勝つということは、スポーツの至上命令であり、人間の斗争本能を平和的に満足させる妙薬である。人間は弱い者だから、競走させることによってのみ進歩発展するのだとよく言われているが、玉も磨かざれば光を発せず、埋もれた礎材、最後に悲劇の名投手となりたるも。社会に出ては時流に乗り、その後横浜高商を出て、川越の中央通りに、熊谷税理士の看板を掲げ、コンピューターを導入し、大規模に業務を伸ばし闊達なる成果を上げて、人生の名投手へと発展して、社会的成功者の一人となった。

昭和54年度クラブだより

名投手 家村投手の思い出

旧制34回卒 大塚 敬三

「オーイ!! これからどうする?」急に雨が降り出して来た。遠征試合で惜敗し、打ちひしがれた後だった。

「俺も家へ帰ると親父に怒られるから一人じゃ心細いから家へ来ないか?」負けて帰ると親父のこわい顔が待っている。

雨に打たれながら玄関まで来たら足音を聞いて母が裏木戸から顔を出して、「お父さんが怒っているからこっちから入りなさい」と小声で声をかけてくれたので、親父の顔を見ずに自分の部屋へ家村君と二人で入り、雨に濡れた下着を着換え終ると母が親父にわらかぬ様夕食を運んでくれたのでようやく夕食にありつけた。人間雨に濡れると空腹がよけいにこたえるものである。食事をしながら試合の経過を話し合ったが、ただ残念の一言でしかなかった。

二・三日後授業に家村君の姿が見えない。友達

話だと風邪で休んだとか、午後の授業が終え練習のためユニフォームに着換えグラウンドに出て見ると、欠席の筈の家村君が足腰をきたえるためのランニングをやっている。「奴は学校をさぼっても練習には出て来ているのか？大したやつだなあ」心の中で彼の度胸の良さをうらやましく思った。部員（13人位）が集合すると型通りのグラウンド一周、キャッチボール、トスバッティングと練習が始り、一日2百球から2百50球位のピッチングを受けなければならないが、過労の故かその頃の彼の球は速いのか遅いのかさっぱりわからない。カーブはボールが一回転する位にしか感じられない。それでも冬となると私のミットをはめた左手の甲が紫色にはれ上った。やはり球は重く相当速かったものと思われる。

昭和54年度クラブ日より

島野投手の研鑽努力のピッチング

高校7回卒 鈴木 勇

浦和商業の最後の打者がアウトになるとベンチの中で、長身の渋谷部長と小柄な谷監督が、がっちりと握手をかわした。昭和29年7月26日、川高野球部が昭和12年夏以来、実に18年ぶりに県大会優勝を成し遂げた瞬間であり、川高ナインにとっても前年秋の新人戦の決勝で熊谷高に敗れた日からの、雪辱への努力の花が咲いた日でもあった。

今、振り返ってみると、この年のチームは、戦後の川高野球部の歴史の中でも屈指の強打者として名を残す角田を中心にまとまった打線ではあったが、県予選から南関東大会までの7試合のチーム打率が2割4分4厘、本塁打が1、3塁打が2、2塁打が10という数字が示すように強打を看板としたチームではなかった。又田中、並木、武藤等守りの達者な選手も多かったが、7試合で16失策を記録しており守備面でも完璧とは言い難いチームでもあった。それでは優勝の原動力は何であったかと聞かれれば、エース島野の力投と彼を中心としたチームワークの良さがすべてであったと答えても過言ではあるまい。島野投手は、サイドハンドから繰り出される伸びのあるストレート・鋭いシュート・そして外角低めに

沈み、あるいはスライドする変化球を駆使して全試合を投げ抜いた。南関東大会準決勝、対千葉商戦でこそ4点を失ったが、それまでの6試合は完封が3、失点はわずかに3という見事なものであった。

こう書いて来ると、彼が根っからの変化球投手に思えるが決してそうではなかったのである。中学時代の島野投手は、快速球と大きなドロップを主武器とする剛球投手であった。川高入学と同時に、小杉後援会長宅にお世話になりながら甲子園を目指すことになるのである。そして2年生の秋、熊谷高の福島投手と投げ合って一気に頭角をあらわしたのだった。然しながら彼は、その素質にだけ頼って漫然と練習していたのではない。練習が終って自分の部屋に帰ればどんなに疲れていてもシャドウピッチングは欠かさなかったし、握力の強化等にも大変な努力を払っていた。大附先輩のアドバイスがあったとはいえ、今日のように気のきいたトレーニング機器の無かった当時では、殆ど独学に等しいものであった。

こうして、その好素質は順調に開花するかに見えたのであるが、2年生の冬季練習中に肩を痛めてしまいキャッチボールも出来なくなった。ランニングを中心とした体力作りの毎日であり、彼の心中の焦りも大変なものであったと思われる。その後、肩がある程度回復した後も、従来の上手投げは無理との判断からサイドハンド投法に切り換えたのである。ここから彼の努力は、又大変なものであった。毎日、毎日バックネットのコンクリートの部分にボールを投げては、フォームの基礎固めとボールの握り、あるいはボールの放し方を一人で工夫していた。今にして思えばそれはシンガースライダーといった種類のものであったが、打者の手で鋭く変化する投球には、レギュラーの連中もついていけず、島野投手のボールを打つのを嫌って打席に入るのをゆずり合ったものだった。そして好打者、榎本を擁する早実、立教高校の強豪チームとの練習試合を経て彼の投球術は完成に近づいて行くのであった。

好投手あるところに覇権ありとはよく言われるところであるが、名投手、好投手と呼ばれた選手は、その素質にまかせて、投げまくるだけではなく、いずれも努力の人ではなかったのかと思うのである。

そして又、これらの選手達は、彼を太い柱として、いつのまにか、しっかりとしたチームワークが形成される、そんな、無言のうちに人を引きつける人間的な魅力をも持ち合わせた人達であったとも言えるであろう。

54年度クラブだより

努力の名投手・吉田富保君

高校12回卒 内 沼 稔

今回は川高歴代の名投手シリーズということで、曾ての同僚、吉田富保（現在丹代富保）投手がその1人としてノミネートされ、私としても誠に嬉しい限りである。

吉田投手は川越第一中学時代から傑出し、そのスピードボールは既に高校野球で充分通用するもので、ただ近藤育三郎君が居た初雁中学、そして私や佐々原君（川越工捕手から本田技研監督として都市対抗に数回出場）が居た城南中学が強く、彼はいつも苦敗を嘗めさせられていた。中学時代の彼はスピードは超一流であったが、ノーコン投手のレッテルを貼られていたのである。かくして中学時代の吉田投手は開花しなかったのであるが、私は城南中学時代に同僚の佐々原君と良く話しをしたものだ。『吉田投手は、あのノーコンさえ直ったら必ず一流の投手になるぞ。どこの高校へ行くのか解らないが、敵に廻したら怖いピッチャーだなあ』と。

吉田投手と私は川高へ進み、一緒に野球をやることとなった。佐々原君の予感的中し川越工業は一度も吉田投手を打ち崩すことが出来ずに終わってしまったのである。

吉田君は川高野球部在籍中、土屋先生、島野先輩、家村監督と三方に師事を仰いだわけだが、それが彼にとって極めて幸運であったと思う。や、ワンマン的だった性格は解消され、コントロールもつき、投球術も身に付き、3年生の夏には連続45イニング無失点の快記録を達成するまでになったのである。彼の開花は勿論、彼自身の天性と努力の賜物であること間違いはないが。

吉田投手は、一年生の時土屋先生に依り、野球の

基礎と、不屈の精神力を培われ、二年生になって島野先輩より投球術を学び、早くも一年先輩の川辺投手を助けてエース格となった。この年第40回夏の大会において対児玉高戦で、当時高校野球タイ記録の奪19三振の快挙をやってのけた。この年の埼玉高校野球界は、強打者が目白押しでありました。熊高の加藤、篠沢。川越工の川測。大宮の渡辺、浅子。そして川高は、石井、北野、鈴木と錚錚たる顔触れでした。特に準決勝の対大宮工戦は特筆に値するものです。延長18回引分け、再試合も延長11回サヨナラ勝ちという苦しく厳しい試合を、吉田投手は投げ抜いたのである。更に翌日、前年度甲子園出場の大宮高との決勝戦、3回に川辺投手が2点を先取されてからリリーフに立ったのであるが、3日間で4試合というハードスケジュールに精魂尽き果て、あのスピードも大宮の強打線につかまり、渡辺の右翼ボールに当たるホームランをはじめ、長短7安打を浴び、彼の34イニング無失点の記録は消え、試合も惨敗でした。しかしこの年の吉田投手の好投は高く評価され、彼もピッチングに対する自身を身に付けた大会であったと思う。

その年の秋、家村監督が就任し、吉田投手は厳しい冬季練習のあと、好投手として「完成の域」に達していくわけであり、昭和33年の秋季大会から、川高野球部の唯一人のピッチャーとして、34年夏の甲子園で高知商に0対1で惜敗するまで全試合を投げ抜いたのです。この間、公式戦で2点以上とられた試合は0。県大会での完封試合は9。（他に西部地区大会は殆どが完封）夏の大会は5試合連続完封と45イニング連続無失点の快記録を樹立し、それまでの埼玉高校野球の投手記録を悉く塗り替えたのである。中でも思い出される試合は、対大宮工戦でした。大宮工は吉田投手攻略を目指して、投手板を2メートルも前に置き、彼得意の外角低目の速球打ちを連日猛練習して十分吉田投手攻略の自身を持って試合に臨んできたのである。しかし、家村監督の師事もあって、この試合に限って内角をシュートで攻め通した。大宮工は予期に反した彼のピッチングに翻弄され四球1個の準完全試合の達成を許したのみであった。当時大宮工の監督であった山崎小二郎氏（昭

和43年選抜で全国優勝)は、今でも『あのゲームは印象に残っている。吉田君の頭脳に負けた』と言っています。私も審判員として十数年、高校野球に携わって参りましたが、現在に至っても吉田投手は埼玉高校野球史で、十指に数えられる名投手であると思う。彼の投球は、制球力の良さ、度胸の良さに関しては抜群でした。彼自身「どんな相手でも打たれる気がしない」と良く言っていたものである。この強心臓が、彼の早稲田大学までの投手生活を支えてきた大きな要素であると思う。

さて彼の野球以外のプロフィールも紹介しておくと、性格は単純明朗、見かけによらず素直でした。その為か、同級生等から親しまれ、テストの時など大分援助を受けたようである。因に彼の学業成績は307人中、・・・5番であったようである。なかなかの二枚目であり女子高生に持てましたが、彼は異性には目もくれず野球一途であった。

現在彼は、鷺宮製作所特販課課長補佐として活躍中であり、家族は、元日航ステューアードessであった御婦人と二人の女の小に囲まれています。今後の丹代富保の活躍を祈って筆を止める。

54年度クラブだより



温厚・努力の人 俊足、強打の岸田勝太郎先輩

旧制29回卒 山本三郎



写真は昭和6年秋東京六大学リーグ戦で立教大学初優勝し、優勝トロフィーを持つ岸田勝太郎選手

昔から文武両道と云われているが、学業とスポーツを完全に両立させて一際目立った人は岸田勝太郎先輩であったと云っても決して過言ではない。

市内同心町で三男として生まれ姉治、兄義三郎氏の支へで成長された。天性はもとよりであるが常に沈着冷静・果敢断行行くところ可ならざるは無しで、特に大学時代は苦学力行、今も変わらぬ大学野球の厳しい練習の中で野球と学問を両立させた得難い人であった。

岸田先輩の歩んだ道を回顧し以て後進の灯ともなれば幸である。

少年時代から人並外れた俊足で運動会ではいつでもテープを切っていた。

川中に入學するや陸上競技部で短距離、高跳び走り巾跳びに抜群の成績を挙げていた。

中学二年から野球部に転じ、その俊足と強打は川中野球部草分けの立役者と今尚語り草になっている。

大正15年温厚な性格と掌握力を買われ主将となり、守っては難関遊撃を死守(当時稀であった素早い

モーションとスナップスロウ)、その華麗な守備振りは特筆大書すべきものがあった。

その年明大監督岡田源三郎氏の異例な特別コーチ(小室虎人先輩の斡旋)で意気揚がる川越中学は来た関東大会で大久保文衛投手を助け、優勝候補の栃木中学を破り準決勝で宇都宮中学に善戦一躍川越中学の名聲を博した。

翌日の朝日新聞でこの試合を観戦された球界の古老飛田穂州氏はその健斗振りを讃へ激賞された。次いで秋の県大会では宿敵常勝の熊谷中学を激斗の末降し、栄えある初優勝を遂げた名選手であった。

この岸田勝太郎先輩をして今日あらしめた蔭に見る女大夫の姉治(ハル)さんと兄義三郎さんの献身的な努力があったことを忘れてはならない。この姉弟愛に支えられやがて球界の先駆者として成長したのである。

川中・立教大学とも抜群な成績で、中学時代5番と下っことなく、大学では常に特待生であった。昭和2年立教大学に進み全国から集まった有名選手に伍して何等遜色なく右翼手として活躍、昭和6年秋のリーグ戦では野田監督退陣後の合議制で専ら作戦指揮をとり、東京六大学リーグ戦で立教を初優勝に導いた知将でもあった。

当時早稲田大学の有名な安部磯雄先生は、この優勝を心から祝い、自ら筆をとり「不如人和」と揮毫して額にして立教に贈られた。今尚野球部合宿書(智徳寮)の応接間に掲額されている。

昭和7年卒業と同時に札幌鉄道局監督水谷(立教先輩)さんの強い要請で渡道、札鉄チームの中心として活躍屢々上京都市対抗本大会に出場した。

その後同監督の媒酌で小黑不二子と結婚、一男(貢)一女(和子)をもうけたが、大東亜戦争下旭川駅小荷物掛けの激務で過労から肋膜炎を患い(この期間現会長も結核で鎌倉に療養、同病相隣むの諺どおり互い乏しい中を土地の産物、北海道はバター、鎌倉はわかめ・昆布を、送り送られた時期があった由)、戦時下のことと寒冷な北海道での療養生活も思うに任せず、お子さんの成長を見ずして昭和18年8月5日遂に早世された。令閨も看護疲れで間も無く後を追ひ、幼い二児は義弟小黑達雄氏宅に引き取られ生

長した。長男貢さんは岸田さんに瓜二つで父親の血を引いてか頗る秀才で、たしか旭川の大学で助教授をされていると聞く。和子さんは札幌近郊の前川家に嫁ぎ平和な家庭の人となっている。

墓は札幌市東本願寺藻岩山墓地、分骨は故郷川越市仲町法善寺にある岸田家の墓地に眠っている。終りに貴重な資料を提供下さった令弟正治氏に対し紙上を通じて謹んで感謝の意を表します。

昭和55年度クラブだより

「錬磨と不如人和」を説く 名中堅手 平岡忠次郎先輩

旧制29回卒 山本三郎



県下初優勝の当時は俊敏・快足・強肩・好打で鳴らし、その美技は性来の感の良さと試合度胸で屢々ピンチを切り抜け味方を勝利に導いた立役者であった。

大正15年秋恒例の旧制浦高主催県下中等野球大会は同校与野原頭のグランドで行われた。たしか第5回大会であったと思う。

秋、日曜毎の試合でトーナメント式、現在と違って参加校そのものが少ないので一週一日の日程でも充分であったのだと思う。

浦和中学と、その年の夏朝日新聞の北関東大会での善斗の余勢を駆る川越中学との対戦となった。

両校選手の丁々発止の息詰る攻防が繰り返えされ、試合は終盤戦8回に10-9で川越中学優勢のままもつれ込んだ。この回2死後に思いがけぬ大異変が起こった。

今まで好投を続けて来た大久保投手が突如肩の乱れで、投げる球悉くがボール、文字通りストライクは一球も入らない。たちまち満塁となり、流石大胆不敵の好投手も敵味方応援団の怒号の中に立ちすくむ有様となってしまった。

ところがこの中で唯一人このピンチにもいささかも動じなかったわが平岡中堅手は、起死回生の策を講じつつ次のチャンスを胸に秘めていた。

その起死回生の策とは、勝ち越し点となる二塁走者刺殺のことで、味方の絶好なチャンスに心浮かれ離塁が大きく、その上帰塁を忘れているのを逸早く洞察、目くばせで苦境に立つ大久保投手に合図を送りやがて素知らぬ顔でプレートに立った瞬間、予め浅目に守備した平岡選手は脱兎の勢いで二塁へ入り投手からの送球をランニングキャッチ、奇蹟のタッチアウトで危うく大ピンチを脱したプレーであった。

この瞬間大久保投手は感極まって走り寄り平岡選手と相擁し涙にくれた。結果は「果敢な思い切ったプレーとして称讃されたが—今にして思うと正に薄氷を踏む思いのプレーであった。

通常満塁時の二塁索制は遊撃手か二塁手のなすべきもので、よもや中堅手の二塁索制とは、この意表をうけた機智的なプレーは騒然とした中でのものだっただけに、万一捕り損っていたら走者一掃の最悪の事態となったことを思うと正に冷汗三斗の思いがする。

浦中にしてみれば、終盤戦での投手の乱れで「我れ勝てり」の有頂天の余り、サードコーチやベンチも、ましてや応援団の誰一人としてこの果敢なプレーに気付く者がいなかった。

最終回も無事に切り抜け遂に10-9で辛くも川中の昨年に続く優勝が成ったのである。

尚更に付記すべきは平岡選手の超ファインプレーである。この決勝戦の5回であったかと思う、浦中の有名なスラッガー高橋選手の猛烈な左中間ライナーを背走又背走、外野に張り巡らしたロープまで力走、振り向きざま好捕した神技に等しいファインプレーであった。前述の意表をうけた機知の走者刺殺とこのファインプレーが優勝への大きな要因となったことは、それ自体讃えられるべきことかもしれ

ないが、それ以上に大事なことは「勝利は平素のたゆまざる攻守の徹底的錬磨とチームワークの高度の習練に尽きる」というのが、平岡選手自身の述懐である。

平岡選手は旧制27回、東京商大卒後満洲で平岡洋行を経営、戦後衆議院に連続7回当選、昭和44年政界を引退。現在武蔵野市御殿山1-4-18-1701井ノ頭パークサイドマンションで趣味の絵筆に明け暮れている。現在川高倶楽部 顧問

昭和55年度クラブ日より

初心忘るべからず 俊敏、強肩、好守、好打の山本遊撃手

旧制25回卒 島田久三

想い起こせば古い話。大正15年の春、筆者は旧制中学の5年生になった。クラス担任は当時の野球部長を兼ね、国文学に造詣の深い飯田先生。その先生から新学期早々の或る日思いがけず野球部の人数が足りないから、是非入って呉れとの話があり、お断りする智恵もなし決心し兼ねていたところ他にも同学年の安田君（故人、元川越市議、医師健次郎君、彼は六大学のファンで球界通だった）にも同じ話があったとのことで二人一緒ならとフラフラと部員となった次第。

その時一年生で補欠として一緒に入部したのが、チビだった山本三郎君。

.....

山本君は旧市内郭町で三男として生まれ、少年時代兄弟姉妹が多く経済的にも恵まれなかったが、彼の母と二人の兄の慈しみの下で成長した。当時偶々飯田先生のお宅が近くにあったので先生が散歩の折、路上でメンコ遊びをしていた彼を見て、その手首の強さに着目され「野球をやらない」と、この一言が機縁で、憧れの川中入学となった。前述のように大正15年入学と同時に野球部にはいり小さい体で小真目に嬉々として雑用に明け暮れる日々だった。同年朝日新聞の全国中学野球北関東予選で宇都宮に遠征、駅前通りの板屋旅館に泊り、宇都宮中学のグラウンドで第一戦栃木中学、準決勝の宇都宮中学を彼は目の

あたり見て、我々がチェンジの度にベンチへ戻ると
彼が極度に昂奮していた姿が今以てアリアリと睨の
裏に浮ぶ。次いで、秋の旧制浦高主催県下中等野球
大会には、今年こそ今年こそと云いながら毎年苦杯
をなめさせられていた宿敵浦和中学を優勝戦で辛く
も降し、県下発優勝を遂げた時は現役補欠の区別な
くチーム一同相擁して喜びを分かち合った。

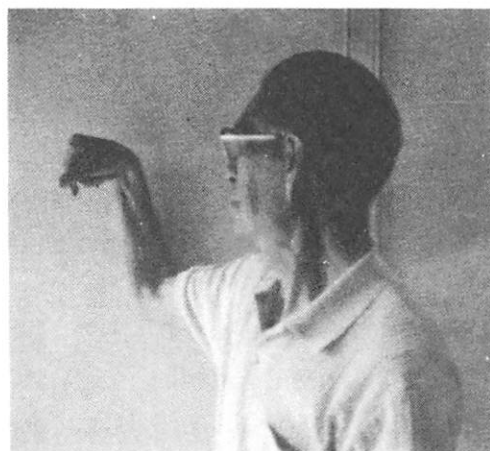
.....

我々の卒業後彼は二年生で難関ショートを守り県
大会には幸運のトリプルプレーを演じ県のベストメ
ンバーの一人に選ばれた。翌三年の時、東長崎の立
教グラウンドで立教予科チームと対戦の時意外のフ
ァインプレーが出て、それが立教側に認められ、そ
の冬奈良での立教の冬季練習に呼び出され（その頃
急に身長体重とも発育した）大学の選手の中での雨
霞の猛ノックに随分泣かされた、との彼の述懐は
度々聞かされたものだ。其の後、5年の時間東甲信
越選抜中等野球大会（桐中、早実、諏訪蚕糸）で優
勝。この年の戦績が抜群（42戦37勝5敗1分）で、
翌年春全国選抜中等野球大会で甲子園に出場した。
当時は中等球界に「大会の彗星現わる」とまで宣伝
されたもので、実に昭和初頭から5年に至る在学中
は燦たる戦果を挙げつづけた。

彼は一年生から大激戦に遭遇し続け、やがて甲子
園を目指し、飯田先生の指導下野球一筋に打込んで
の精神は正に「初心忘るべからず」を地でいった感
がある。

川中黄金時代を築き、熊谷・綿貫を擁した強力
チームの主将としての活躍は特にめざましいもの
があった。

天性の野球に対する感の良さと不撓不屈の努力で
飯田先生並びに我々先輩の期待に応え得たことを彼
は日頃の話題として喜んでいる。



写真は山本君の今なお変わらない右手首の強靱かつ
柔軟さを示すもの

同輩岸田君の素早いモーションとスナップスロー
を盗み、逸早く体得したことが彼の強肩に輪をかけ
たものであり、縷々「彼の送球は矢のような」とい
う評言を何かの新聞の地方版で呼んだ記憶がある。

.....

5年になって間も無く飯田先生に呼ばれ「卒業し
たら立教大学へ行くように」と云われ彼として寝耳
に水のことに吃驚仰天、母に相談したところ「質屋へ
通っても学費位何んとかするから頑張りなさい」と
励まされ、岸田君が現役として活躍中の立教進学と
なった経緯があって昭和6年秋毎日血みどろな練習
に耐えているうち、野田監督退陣後合議制の立教大
学は岸田君の作戦指揮で東京六大学リーグで初優勝
を成し遂げた。

彼にとって中学・大学での入学早々の再度にわた
る初優勝、この喜びは何物にも代え難いものがあ
ったに違いない。

昭和7年春立教新人で東北・北海道遠征に参加、
仙台・函館・小樽・札幌・旭川へと転戦、この遠征
で最多安打・リーディングヒッターで秋のメンバー登
録となって、リーグ戦で伊達・三原を擁した早立戦
を皮切りに活躍した。

立教から東鉄（東京鉄道局）に入り常にクリーン
アップを打ち、その好打と好守で「東鉄に山本在
り」と云われた。

当時の東鉄（全大宮）は名将藤本定義監督（巨人
軍）の下、慶応の名中堅手楠見・法政の成田、西
垣・国学院の前川投手等錚々たるメンバーで都市対

抗でも赫々の戦績を残した。

.....

戦後川高監督時代県体育課長の推挙で豊多摩刑務所職員チームの監督、27年第7回天皇賜杯全国軟式野球大会で優勝、天皇杯を初めて関東に持ち帰った。その頃並行して県野球連盟に関与、永く審判部長として後進を導いた。

その後昭和39年筆者の紹介で八王子カントリークラブに入社、同じく筆者の右腕として昭和46年(勲)遠山記念館に勤労の傍ら川高倶楽部でも総てを山本君に任せ今日に至っている。

終生野球から縁が切れず、良き師(飯田先生)・良き諸先輩(岸田勝太郎氏等)の援護のおかげで順風満帆の野球生活を送り得たことは、彼として誠に幸せなことだったと常に口癖のように云っている。

彼は家庭的にも非常に恵まれ、目下三男一女孫九人平穏な生活を送っている。

最後に彼の永年球界に貢献した結晶として、本年10月4日日本社会人野球協会埼玉県支部から、球界の功労者として表彰状と楯を授与されたことを付言して彼の名誉を称えて筆を措く。

離川在京の間約30年、草稿中種々山本君の手を煩わせたことを付記する。

昭和50年度クラブ日より

野球人生の優等生綿貫惣司先輩

旧制32回卒 横 関 夏 夫

川中野球部の生んだ名選手の一人として、旧制31回の綿貫惣司先輩がいる。

先輩は埼玉出身のプロ野球選手の第1号であろうし、創世期の職業野球界に見込まれて、この社会に飛び込んだ先駆者の一人だったから、その技術的な評価はいまさら言うまでもあるまい。



先輩が川中に入学したのは昭和3年であり、川中野球部は黄金時代を迎えようとしていた時期である。川越市民の川中に対する期待も大きく、その熱意、関心も最高潮に達して行く環境にあった。

当時の中高等学校野球界のレベルは年々向上の一途をたどっておったものの、現在の様な全国的なものではなく、西高東低というか西日本に傑出したチームが多く、関東以北ではその実力はBクラスの域を出なかった。

まず第一に気候の関係で練習量に大きな差を生じていたし、野球技を競う相手に恵まれないということは野球のセンスを養うことに不利だったから、ただひたすらにスパルタ教育ともいえるべき猛練習によって選手を育てようとしていた。それには練習時間の多寡が左右され、体で覚える野球として一理はあるものの、そのために脱落するものも多かった。個人技の習練が基本ではあるが、まず適材を適所にとり各個人の特性をよく生かせることが、より向上させる道なのであろう。

川中野球部が昭和6年春の第8回選抜野球大会に出場できたのは、攻守の大黒柱熊谷投手が生まれたことによるだろうが、この時先輩はその身長を利した一塁手として堂々三番に座り、初安打を放ち無失策と健闘している。この時の貴重な体験が後年の野球生活に大きな影響を与えたことは間違いない。

この大会の思い出を少し書いてみよう。初めて大会歌が誕生し「蒼空高き甲子園」に始まるその歌詞の中に「オール」と「ヤング」という英語が使われており、皆んなで声高らかに歌い上げて幕を開け、まだ平和の息吹きが聞こえていたのだった。

だが、その年満洲事変から上海事変と拡大して戦時色が濃くなり、野球統制令も出され翌年からこの歌詞は使われず、第11回大会から現在の大会歌が生まれたという歴史の一ページを飾る時代だった。

選手達は初めて背番号がつけられたため、背中がとても重そうだったし背番号だけが、やけに大きく見えたものだ。

また、試合の思い出の一つとして中京商業に11対0で敗れたが、マンモス甲子園という魔物に魅入られてしまった、ということは二死からの高い内野フ

ライでの失策が再三あって、この大敗を招いたものである。今年の夏の大会での準決勝でも、これが見られ50年前を思い起こし感慨無量だった。

多少脱線してしまったが、先輩はその後持駒不足から捕手として女房役に廻ることになるが、昭和7年度選ばれて主将となり、マスク越しに又外野の一角からチームの牽引者としての手腕を発揮しながら、攻守に群を抜く活躍を始め、その華麗なる守備と打球をバットに乗せて高々と外野深く運んでいく独特の長打力は超中学級と認められるようになった。

昭和8年山本三郎先輩を慕って立教大学に入学し一塁手となるや、恰も水を得た魚の如く全盛の六大学野球界で更に磨きをかけることになるが、中でも同期の影浦将選手（松山商一立大一阪神、日本野球界最強打者の一人）という偉大な対抗馬を得たことが、その後の打撃術向上に著しく貢献したと思われる。特に川中グラウンドで二人のデモンストレーションともいうべき打撃競争を目にしたわれわれ後輩に、野球技の向上のためには強力なライバルというものが如何に重要なものであるかを深く印象づけ、感銘を与えてくれた。

昭和11年「東京セネタース球団」に入り一塁綿貫、二塁荏田、三塁高橋、遊撃中村は百万ドル内野陣といわれ、プロ野球の看板となったのが満開の時代とすれば、終戦後ノンプロ球界に一石を投ずるチーム作りに情熱と努力を尽くし、卓越したリーダーシップで数多くの優秀な後輩を育て上げ、今日までその名を残す名監督として結実した。

先輩は、川越で培われた野球を通じて学んだ技と心で、野球道ともいうべき一つの信念をもって人生を貫き通し、そさを最大限に生かし得た名選手でもあると敬服している次第である。

昭和56年度クラブだより

家村さんのバット

旧制35回卒 岸 野 利 雄

家村さんの実弟、金井塚順吉君は私の中学時代からの親友で、今以って家族ぐるみでおつき合いさせていただいて居る。現在霞ヶ関で盛大に電機業を営

んでいる。

これから記述しようとする家村さんの少年時代は、金井塚からじかに聞いた話で、大変興味深く家村さんの知られざる一面をかいま見たような思いであった。

家村さんは朝鮮慶尚南道蔚山に生まれ元の名を朴相憲と云った。11才の時に家族と共に来日し、当初霞ヶ関尋常小学校に入学し、三年生の時に川越中央小学校（元の南校）に移った。家村さんは私より4才年長だが中学校は一年先輩であったのは11才の時に小学校に入学したそのためである。家村さんには二人の弟さんと一人の妹さんがあり、今尚健在で夫々立派に一家をなしている。

家村さんの球児としての素晴らしい素質はその頃から序々に人の目にふれ始めていた。

小学校四年生の時に町内対抗野球で六軒町の選手として出場し、すごく野球のウマイ少年が居ると評判になった。父君の仕事の都合で東京に移り住み野方第五尋常小学校に転校した六年生のその頃は、小学校とか高等小学校の野球対抗試合が盛んであった。不思議なことに家村さんはその頃立派な素質を持ち乍ら、野球に対してはあまりやる気がなかったらしい、が、周囲がそれを承知しなかった、本人よりもまわりの人がその素質をすでに見抜いていたのである。

ある時小学校と高等小学校の対抗試合に当たった時、ピッチャーとして出場し何と22対1で勝っている。

家村さんと川越の縁は深く其後再び川越に移り住むようになってから、町内野球などに出場し、一躍野球少年として名実共に名をはせるようになった。それが川越中学校の恩師飯田先生の目にとまらぬ筈がない、しかし、父君が野球に反対であり長男であった家村さんを別な道に歩かせたかったのだろう。飯田先生は先ず父君を口説き落した。今のスカウトである。飯田先生の熱意がついに父君を翻意させたのである。かくして家村相太郎氏は川越中学校に入学し野球人としての輝かしい第一歩を踏み出すことになった。黄金時代の幕あけである。時に昭和7年であった。今から約50年も前である。当初野球に反対した父君は、そうときまると一変して野球気違い

になり、家村さんが出場する試合にはソワソワと仕事も手につかず心配で夜も眠れぬ程であったと云う。又試合に負けて帰ると飯も与えず外に立たされていたこともあったと妹さんから話を聞いたこともある。厳しいが愛情深いお父さんであった。

家村さんは人望が厚く上級生や同窓生には信頼され、下級生には慕われた。一年後輩である私は家村さんから野球の技術や精神面での教示を受けたが一度も叱られた覚えがない。いや叱ったり怒ったりすることのない方であった。

投手としての重い速球は粘りがあり、その性格を反映しているようであった。容易に打崩せない力を秘めピンチにも動じない忍耐の投手であった。又打者としてもいつも四番を打ち、中、長距離打者として貫録を身につけていた。自然流の静かなバットのかまえから一閃してバットが振られると糸を引くようにと云うが、その打球を見て美しいと感じていたのは恐らく私だけではあるまい。打球の行方に惚々するような一種の風格さえ感じられた。

家村さんが愛用していたバットは、たしかウイリアムス型で握りが少々細く先が太めのバットで芯に当たる箇所が一定しその部分だけ木目がとび出しはげていた。握りは一握り上を持っていた。今、この稿を起し乍らそのバットが目の前にチラついて動かない。静と動を一瞬の中に凝縮し、起爆させる流麗な投打、正に野球の美学を知らされる思いであった。

そうして県下に名をはせ常勝していたが、県代表となつて北関東や南関東大会に出場したが、残念ながら今一步の所で甲子園に行けず涙をのんだ。

以後の家村さんについては多くの人の知るところであり家村さん御自身の略歴や思い出なども書きそえられているので、以下転用させていただく。

家村さんは現在奈良の天理大学野球部の監督をつとめられている。益々球界のために活躍され、いつまでも御元気で私達の指標であつて下さるよう念願してやまない。

御健康を祈りつつ

(追記)

家村さんは又このように述懐されておられました。昭和9年の秋、伊丹さんが病気で川中をお去りに

なり、間もなく東京の入院先から主将の私宛に、御手紙を下され「親にもまさる名部長飯田先生を戴いている君達は日本一の幸せ者である。先生のこの御恩に報ゆることこそ君達のなさねばならぬことであり、また男子たる道である。一層一致協力して奮起されたい」と書かれてあつた。この一節は主将の私には強烈であつただけに、今もって記憶に残っている。

伊丹さんが去られた事での御心痛が因で翌年(10年)5月飯田先生は亡くなられた。

私は五年生で主将であつたので野球部をかかえて途方にくれ、しょんぼりしていたものだった。

* * * * *

夏の大会では決勝で豊岡実業の渡井君に左翼スタンドにホームランを打たれ2対1で敗れその時はわけもなく涙が出て仕方がなかった。

* * * * *

昭和8、9、10年と3年続けて投手をつとめたが、其の間先輩の金子良雄さんが応援団長で、蓮馨寺境内で市民による華やかな応援練習の集いがあつたが、私達は合宿所に禁足令が出て先輩が交代で厳重な監視をしていたために一度も見に行けなかった。

記録の上では川中は5年連続県下の制覇を遂げて華やかだったが、その舞台裏で育てられる私達には厳しい日々であつた。

* * * * *

今にして思えばその厳しさのおかげで、其後の私達の野球生活が生れたのだと今も、飯田先生、伊丹さんに心から感謝致して居るわけである。嬉しかったのは34年の夏川高の選手達と共に監督として甲子園に初出場出来たことであり、長い間の心の荷物がやっとおり本当に感激した。

(球歴)

- | | | |
|---------|----|--------------------|
| 昭 11. | 3 | 日本プロ野球東京セスター軍 |
| 〳 15. | 4 | 一塁手 外野手 |
| 〳 15-16 | | 全京城(朝鮮)野球団選手 一塁手 |
| 〳 16. | 10 | 第14回全国都市対抗野球大会で初優勝 |
| 〳 17-18 | | 華北棉産改進会 北京球団選手 |
| 〳 27. | 6 | 天理高等学校野球部監督 |
| 〳 31. | 8 | 甲子園初出場 2回出場 |

- ♪ 33. 8 川越高監督 甲子園初出場
- ♪ 38. 8
- ♪ 40. 4 千葉県習志野高校コーチ
- ♪ 43. 9 第42回全国甲子園大会初優勝
- ♪ 50. 4 天理高等学校野球部コーチ
- ♪ 51. 6 甲子園春・夏出場
- ♪ 54. 3 天理大学野球部監督

昭和56年度クラブ日より

母校野球部史上最大の悲劇

旧制32回卒 横 関 夏 夫

川中から川高にかけて母校は90年の歴史と伝統がある。そのなかで野球部も名門に恥ない輝かしい足跡を残しているのである。その母体となったのは、創立後間もない明治36年に運動部として野球が認められ、その後校内体育活動として生徒、職員との間で真似ごとの様に行われていたことが記録で伺われる。

大正8年になって始めて対外的な活動が認められ、川中チームとして実業団チームとの試合が行われたのを野球部の誕生と決めると昭和64年が70周年になるのを機に記念誌を発行すべく、野球部OB会では各年度にわたってその資料を収集し、記録をまとめる作業を進めている最中である。

われわれ32回生は昭和4年から5年間丁度野球部の黄金時代に在学した。当時の野球部の活躍は華々しく、各地に転戦する機会も多かったから休む間もない毎日を過した。特に昭和6年4月には埼玉県のチームとして始めて全国選抜中等学校野球大会に出場、憧れの甲子園で試合する栄誉に輝いた。

当然この年の夏、前橋で挙行された北関東大会では優勝候補の筆頭であり、一回戦で事実上の決勝戦とみなされた上毛随一の強豪高崎商業に7A—6とせり勝った。続く準決勝では前年度の代表校桐生中と対戦、8回を終って8—3の絶対優位で川中の勝利を疑う者は誰もなかった試合経過であった。ところが9回に入って一挙6点を奪われ9—8で敗れ春夏連続甲子園の夢が断たれたのである。最終回多少の気の緩みがあったとはいえ、熊谷投手の突然の乱

調で桐生中の攻撃はバットを振ること僅かに2回、8四球に野選が加わったものであったから選手、応援団は呆然自失帰途につき、これが悲劇の引き金になろうとは……。

断腸の思いに語る言葉もない一行は午後10時をすぎ大宮から川越への電車に乗り換えた。この電車は明治時代から運行されている、いわゆる市内電車、四輪の小さな電車で勿論満員になっていた。大宮を出て6、7分たった頃、下り勾配の直線で惰力がつきすぎバウンドし始め、あっという間もなく車内は真暗となりガタガタと脱線、右側の道路に転覆したのである。一瞬の出来事であり車内の乗客は全員将棋倒しとなり混乱したが、天井側となった窓から助け合って脱出したのである。道路の左側は田んぼであり、こちらに倒れたらと思うとゾーっとしたが外は暗くあたりに家屋もまばらな辺鄙な場所だった。誰かが「電車の下に入っている者がいる」と大声でどなった。脱出した乗客全員ですぐに電車を持ち上げにかかったが、小さいとはいえ人力では簡単に動かない。早速挺子となる材料をさがさなければならぬので、近くの民家に援助を求め丸太を数本借り受け、全員の協力によって下敷きとなった5年生山畠選手、4年生斉藤富吉選手の2名を救出したが、瀕死の重傷であり救援の車で大宮の病院に送った。

両選手は満員で昇降口近くに居たため、脱線の際振られ車体の下敷となったものである。山畠選手は背骨を折り腹部に重圧を受け大小腸の切取接続を行なう大手術も効なく、3日後の夜死亡されたのである。斉藤選手は再起不能の重傷とみられたが、幸にも革靴の底が車体の重みに堪えてくれたとかで左足踵関節の骨折で約2カ月で退院され、翌年には大活躍して卒業された。(後年、毛呂山町教育長、故人)

殉職ともみられる山畠選手の死によって、この事故は野球部史上最大の悲劇となった。当時の校友会々報第27号には3頁にわたって岩泉善太郎会長名で「山畠君を悼む」の文と、12月5日全校生徒、職員が参加し行われた追悼式に述べられた弔辞が載せられている。その要旨は

野球部選手一同は北関東予選大会で、力戦の甲斐

も空しく尽きぬ恨みを呑んでの帰途この奇禍に会い、何という運命の悪戯とその経緯を述べ、山畠選手が現代医術の最善を尽くしても救命されなかったこと、この不測の災禍の余りに深刻なのに驚天して、悲嘆の涙がとめどなく込上げてくるのを禁じ得ないと嘆く。

山畠選手が学生として優秀なばかりでなく野球部の重鎮としての功績と特に春の選抜大会での活躍を讃え、ご家族へは何と申し上げてよいかその言葉も涙に消えて行く思いである。野球部は将来必ず君の霊を慰め得る日の遠くないことをお誓いする。願わくは安じて瞑目し給え！と結んでいる。

追悼式後現役とOBによる追悼紅白試合を行なっている。

また、同会報の野球部記事の中では「諸君永遠に記せよ昭和6年8月4日を」に始まる「前橋の帰りに」の一文に、当日の敗戦が如何にショックであったかを伝え特にこれをもって学窓を去る5年生の思いを披瀝し、その帰途に遭遇したこの事故の模様と、この犠牲を無駄にするなど後輩に訴えている。

今回この想い出を書くに際し、級友仲君がわざわざ新聞記者に依頼してコピーさせ提供して戴いた昭和6年8月6日の東京日日新聞埼玉版の記事によれば、「県下中等学校野球界の雄、川越中学野球部選手一同は前橋市敷島球場からの帰途、同夜10時27分ごろ北足立郡三橋村並木地内で西武電車が横倒れとなり……」とその詳細を報道している。この中には「雨天には車内で傘をさすの珍事、車輛検査に通過するのが不思議、ボロボロの西武電車」の見出しもある。

この年は、飯田先生が甲子園遠征以来健康を損ねられ、6月に入って大橋先生が野球部長を代行されるようになっていた。

事故の報道された同紙面に、大橋部長談として「昨日の桐生中学との試合は当然勝てる試合をああして敗けたのは、かえすがえすも残念です。6月21日にも桐生球場で同校と試合し、11対8で負けているが桐生中は川中にとってどうも苦手です。……」とありますが、この6月21日の大会参加のため20日午後3時久保町駅発の大宮行に乗り、この電車が途

中高木附近の下り坂で脱線、危く電柱に支えられ田の中に転覆を免かれた。この時にはやはり昇降口に居った熊谷、野本選手は田の中に飛び降りたという事故により桐生到着が2時間も遅れ、翌日の試合では前半8-5のリードも後半突如の乱れから一挙6点の致命傷を受けたもの等が大橋部長の頭にこびりついていたものでしょう。

大橋部長は、まだ新進気鋭の士だったからこの事故ではかなり感情も高ぶり武勇伝があったとしても頷けるような気がするのである。

野球部の悲願となった夏の甲子園出場は、昭和34年の後輩によって達成され、緒戦に勝ち校旗を掲げ校歌を斉唱した。当時の監督は、この事故に乗り込んでいた1年生朴相憲（家村相太郎）君であるのも因縁か。

旧制川越中学校第32回「同窓会誌」第五号から



(昭和6年8月6日付東京中日新聞)

伊丹安廣先生と「ひとつばたご」 —飯田先生記念碑に「なんじゃもんじゃ」植樹

元川越高校野球部顧問 森 光 真 幸

川越高校一塁側のグラウンドの一隅に「飯田先生」の記念碑がある。碑は40年祭を迎えた折、つつじを植えて盛り土した一段高い場所に据えられ、先生の温顔をひめたレリーフは終日グラウンドを見つめている。

「ひとつばたご」（俗名なんじゃもんじゃ）は、この碑の左右に植えられ、そばに「伊丹安廣氏・寄贈」の高札が立っている。春を迎えて、1メートル50センチほどのそれは、やわらかい芽ぶきを見せている。花をつけるのももう間近かもしれない。

このひとつばたごについて、伊丹先生は、昭和49年11月12日、NHKから「明治神宮外苑の“なんじゃもんじゃ”」について随想形式でつぎのような放送をされている。

青山通りから明治神宮外苑に入ると銀杏並木がある。その左側テニスコートの一角に「名木ひとつばたごの碑」が立っている。大正13年この木は天然記念物に指定されたが、昭和8年枯死した。その間この木は、白井光太郎東大教授によって保護された。

その由来については、江戸後期、尾州藩士であった植物学者水谷豊文が「とねりこ」に似たこの木を、尾州山中で発見して「ひとつばたご」と命名したとある。外苑のこの木は江戸期にある学者が水谷豊文からもらいうけ碑の立つ場所に植えられたのであらうと伝えられている。

昭和10年頃、伊丹先生の義父中川望氏が赤十字社副社長として満州・朝鮮を視察した時朝鮮の李王家から、名木としてこの木を贈られ、そのうちの3本を譲り受け庭に植えたのが育ち、白い花を咲かせた。だが第二次大戦を迎え危いところを2本だけ、しかも雄と雌が残り、終戦翌年5月になると白い美しい花を咲かせるようになった。やがて双葉の実生が見えはじめ、盆栽にすると4、5年で花を咲かせるようになった。

昭和30年頃、庭に育った4、5年生の実生を数本

外苑に献木。34年に外苑長に奉職し、外苑の木の生き字引きといわれる大沢佐平氏とともに「なんじゃもんじゃ」の種を数百粒外苑の苗圃に蒔き、発芽させ育て上げた木で外苑の周囲と中央広場を囲むための移植が行なわれている。

「なんじゃもんじゃ」は公害に強く、花は清楚で気品に備えているので、外苑にはぴったりの木である。

これまで母校をはじめ、神社等に成長した木を贈り、うれしい便りが地方からとどくこともある。皇居吹上御苑の玄関わきにも、献上したこの木が育って白い花を咲かせているということである。将来この木が大木に育ち5月の青空のもとで、純白の花に包まれた外苑を思い描くのが夢である。（以上「談」のまとめ）

伊丹先生は、佐賀中学から早大予科に入学直ちに野球部に入部されている。早大時代の監督飛田穂洲先生。アマチュア野球の血脈はここに誕生すると見てさしつかえあるまい。

伊丹先生が、川高（当時の川中）と縁を持たれたのは昭和6年のことである。（80年記念誌・野球部史参照）

昭和51年10月5日、故飯田亮先生の40年祭でご出席いただいた折、「なんじゃもんじゃ」2株の寄贈を申し出され、後日川高クラブ前会長であった岩崎清録氏が、受領して植えられたのである。この木が育つように、選手たち、大きく育ちなさい、白い美しい花のように、美しい心を持った純心な青年に育ちなさい、そんな思いが託されているような2本の木である。他界された先生、天国で飯田先生と歓談されているかもしれない。

「ひとつばたご」

俗 名 なんじゃもんじゃ

寄贈者 明治神宮外苑長 伊丹安廣殿

昭和51年3月9日

大正10年、昭和8年、9年、10年、11年、12年、13年卒業 野球部員 建之

昭和55年度クラブだより

飯田・伊丹両先生を偲ぶ

旧制32回卒（昭和9年） 増 島 良 平

川中川高80周年を迎えるにあたり、母校の堅実な発展を喜ぶと共に、野球部の一〇Bとして感慨一入なるものがあります。私は昭和4年に飯一小より川中に入学しました。当時飯能は野球の盛んな土地柄でありまして、埼玉県での揺籃の地としての自負がありました関係で、その影響をうけて小学5、6年には、神宮球場で行われた全国少年野球大会に出場して覇を競いました。

川中に入学早々飯田部長先生のすすめで野球部に入りましたが、この時代は諸先輩の方々の活躍で県内は相手とせず、ひたすら栃木群馬埼玉3県のいわゆる北関東大会の甲子園出場を目指す黄金時代のさなかでありました。

今にして振り返れば、川中に過ぎた教育者と言われ、常識豊かな飯田先生を部長に戴き、先輩の汗と涙の猛練習の結果に培われた伝統がようやく実を結んだ全盛時に、光栄ある部に属した幸せに恵まれたわけです。江森、北野、水村、山本、熊谷、橋本、森山の先輩方々の熱心な御指導は厳しい中にも温みがありました。そして綿貫、伊藤、久米原、斎藤、双木、粕谷、山崎の上級生、横関、田中、大谷、平岡、北風、小峯、木村、斎藤、高橋、家村、大塚、浅野、佐々木、会川、島田、岸野の同僚達と共に連日飯田先生の前で、張り合いのある練習に、試合に青春時代を過したことをしみじみと懐しく思います。

昭和7年秋、飯田先生の要請で六大学野球黄金時代の早大主将で、捕手として有名な伊丹安廣さんが、川中の監督をお引受けになり、それより昭和9年秋までの間、学生野球の真髄を精神技術共に教えられた貴重な2年間でありました。

飯田先生の熱意と伊丹さんの真摯なお人柄が意気投合されて、昭和8年春には川越通町に東京より居を移されるほどの力の入れようでありました。しかし、北関東大会ではいま一步のところで、念願を果たせなかったことは心残りでありました。

私個人に及んで恐縮ですが、この川中時代を契機

に昨年まで、伊丹さんとの45年間に及ぶ恩師と教え子、先輩と後輩、そして上司と部下との関係が続いたのであります。私は昭和9年に早大に入学、野球部マネージャーとして5年間、そして伊丹さんが明治神宮外苑長として活躍され、昨秋10月19日に逝去されるまで、常に、従って今日までまいりました。その間の薫陶は善意と誠実を通しての教えでありました。川中に入学し野球部に入ったお陰で、良き先輩に恵まれ同僚と楽しみ、名部長の飯田先生により伊丹さんに接するの機会に得られたこと、この間の処生訓はすべて川中時代より胚胎しておったと申しても過言ではありません。この意味において母校と野球部に改めて感謝したいと存じます。

昭和50年10月5日、飯田亮先生40年祭が川高クラブ主催で母校において執り行われましたが、伊丹さんも御多忙の中を出席され、御冥福を祈られました。そして同先生のレリーフ碑の復元周辺整備工事に、明治神宮外苑のめいばく「ひとつばたご」一俗名なんじゃもんじゃの植樹を岩崎清録会長に託され、宮根監督選手諸君の努力で今日見事な成育振りをみせております。このことはその清楚な白い花と共に飯田先生と伊丹さんとの友愛と人柄を象徴するかの如く感ぜられ、今は亡き両先生を偲ぶこれ以上のものはないと思います。私も碑に額づくたびに懐かしさと感謝がこもごもにこみあげてくるのを覚えます。

伊丹さんと神宮球場は、不可分のものでありました。その著「一球無二わが人生と神宮球場」の中にも、川越のことに触れておりますが、私は現在その神宮球場に奉職しており、飯一小―川中―飯田先生―伊丹さん―神宮球場と、何か目に見えない深い絆で結ばれ、感慨無量なるものがあります。この上は甲子園と並ぶ学生野球のメッカ神宮球場をより充実してまいりたいと存じます。このことが飯田伊丹両先生への報恩であり、また今日まで育てくださった母校と諸先輩並びに同窓の皆様へのお礼に微力を尽したいと思います。

終りに近年いささか沈滞を感じる母校野球部が、より奮起して往時の先輩の偉業に応えるよう努力して欲しいと願いたします。

（明治神宮野球場長）

賄方奮戦記

高校3回卒 菅 間 昭

この夏、暫くぶりに、大宮球場へ母校の応援に出かけてみた。その日は3回戦ということで、対戦相手は秩父農工、ひいき目にみても実力にやや開きがあり、2対0と完封されてしまった。残念ではあったが、後輩たちの精一杯の戦いに対して、スタンドから思い切り声援を送りながら現役時代の熱い気持ちが胸の中に湧き上ってくるのを感じた。グラウンドに散っている選手たちにオーバーラップして、当時の級友たちの懐かしい顔々が、次々に浮んで来るのであった。

試合終了後、宮根監督に一声ねぎらいの言葉をかけてから帰ろうと思い、ダッグアウト上の通路で待っていた。うなだれた選手たちに続いて、肩を落して引き上げて来る宮根監督の横に、思いがけず家村先輩の姿があった。「ご苦労さん、良い試合を見せてもらってどうも有難度う」監督にそう声をかけると、家村先輩も「ミスのない試合で本当に良かった。1回に先制されたのが何としても痛かったね」といたわるように言われた。

昔とちっとも変わっていないな。家村先輩の穏やかな、思いやりに溢れた声を聞きながら、私の想いは遠く30年前に飛んでいた。

昭和23年の夏、家村監督に率いられた私たちは、前の年大宮工業に緒戦で敗れた屈辱を晴らそうとの決意に燃えて、猛練習に励んでいた。

そして大会直前、学校で一週間の合宿を行うことが決まった。今では想像もつかない食糧難の時代に合宿を持つことは、非常に難しいことではあったが、戦前の輝かしい伝統を受け継ぐためには、どうしても必要なことだという考えが部の大勢を占めたからであった。

合宿の初日、顔を揃えた部員たちは、マネージャーの私に米の入った袋を手渡した。その時、部一番の剽軽者である浅井が、「これで家の米櫃はすっからかんだよ。あとは何を食っていくんだろう」と

言って皆を笑わせた。母に無理を言って、失張家中の米をかき集めて合宿に持参した私も、「苦しいのは我家だけではないんだな」と内心ほっとしたものを感じたのを記憶している。

こうして、主食の方は何とか確保できたが、朝、昼、晩、三度の献立を考えるのが、またひと苦勞であった。部長だった白井先生が主に智恵をしぼられたが、私もよく先生のお伴をして買い物に出かけ、安くて栄養のある物を探して歩いた。ある日、連弊寺の境内の闇市で生^{なまりふし}節を買ってきて昼食に出したところ、それが古かったせいか、全員蕁麻疹が出て、練習に大いに差し支えるといった失敗があり、賄方としては大いに恐縮したものであった。

町の肉屋で打っている殆んど芋だけのコロッケが、当時としては大変な御馳走で、部員の中には、三度三度コロッケでもいいよ、などと言う者さえいた程だった。勿論毎日の食費もできるだけ切りつめなければならず、賄方としては、1個5円のコロッケをレギュラーは2個、補欠の選手は1個半といった具合に、まことにみみっちい計算をしなければならなかった。

楽しみと言えば、夕食後近くの銭湯へ行く時、氷水をすすったり、アイスクャンデーをかじることであった。家村監督からは、冷たい物は絶対にとらないようにと厳しく申し渡されていたが、練習に疲れた選手たちは、甘い物の誘惑に抗しきれなかったようであった。ただ氷を食べても、後で熱い湯につかれば大丈夫だということにしていたのが、今から考えると随分可笑しく思われる。古い生節による蕁麻疹以外はこれといった事故もなく、開幕の日が近づいてきたが、賄方としては、肝腎の米櫃の底が次第に見えてきたのが気がかりであった。

そして試合の前日、残りの米を量った結果、明日天気が良ければ、レギュラーは合宿から球場へ直行するが、レギュラー以外の者は、家へ帰って弁当持参で球場へ行くことが決められた。当日は朝からかなりの雨が振っていた。今日は恐らく試合はあるまい。朝食後、全員米を取りに家へ帰せばよいと考えていたところ、昼前、大会本部から、雨が上ったので試合を決行するとの連絡が入った。

取るものも取りあえず、選手は全員大宮へ向い、私たち賄方は、あわてて残りの米をかき集めて握り飯を作り後を追いかけた。私たちが、汗をふきふき球場へ弁当を持ち込んだ時、対戦相手である地元の大宮工業ナインは、既に雨上りのグラウンドで悠々と練習をしていた。家村監督が「試合開始時間の延期を頼んだが、聞き入れてもらえなかった。早く支度をするように」と緊張した表情で言われた。

あわてて呑みこんだ握り飯が胃の中に落ち着く間もなく、プレーボールがかかった。試合の経過については、正確な記録は手元にないが、開始早々、こちらの気持ちの動揺につけこまれ、先取点を奪われてしまった。そのままずるずるとした試合展開で進み、終盤ようやく無死満塁の反撃機を持ったが、スクイズの失敗で無得点に終わり、遂に逆転はできなかった。

まことにあっけない、何とも口惜しい敗戦で、一年間の努力はまったく報いられなかった。ただ当時のチームには最上級生がいなかったので、翌年に望みを托すことができたのが、わずかな救いであった。

重苦しい気持ちで川越駅に降り立った頃、試合中は上っていた雨が、また降り出していた。駅前の氷屋で氷水を流しこんでわずかに空腹をいやした私たちは、傘もなく、そば降る雨に濡れながら、とほとほと合宿所に向った。このまま家に帰る気持ちにはなれないという。田中、松本、相沢さんたち上級生の意見に、谷、小野、それに私など数人の下級生が従っていた。途中、私の履いていた下駄の鼻緒が、ふつんと切れてしまった。片手に下駄をぶら下げて、一層みじめな気持ちで学校へ帰る私たちに、顔なじみのファンが、「中学はどうした」と声をかけて来た。「軽く負けました。これからはもう期待しないで下さい」と日頃冷静な相沢さんが、捨て鉢な返事を返したのが、妙にはっきりと私の頭の片隅に焼きついている。それから2、3日合宿所で為すこともなく過した後、解散して家に帰ったが、何だかすっかり力が抜けたようで、新学期が始まる迄、随分長く感じられたのを憶えている。

53年度クラブだより

消えたバット

高校3回卒 管間 昭

もしあの時、熊高との試合の最中に、川高のダッグアウトから一本のバットが消えてなくならなかったら、埼玉県の高校野球の歴史は今とは随分変わったものになったに違いありません。

それはともかく、「バット事件」として野球部関係者の間で語り伝えられている。あの日の出来事を思い出す時、私の胸の中には多少の懐しさを伴いながらも、言い様のない無念さがこみ上げて来るのです。そして、マネージャーとして、ダッグアウトの中から一部終始を目撃した私としては、一度機会があったら当時の記憶をまとめて置く責任があるとかねがね思っておりまして。昭和24年夏、全国高校野球選手県大会埼玉県予選に出場した川越高校は、緒戦で優勝候補筆頭の熊谷高校と対戦することになりました。

当時、夏の甲子園大会に代表を送ったことのない県が全国に二つあり埼玉は九州の宮崎と並んでその不名誉な記録を保持していました。対戦相手に決まった熊高は、それまでの実績から見て、今年こそ千葉勢を倒して、甲子園への道を切り開いてくれるものとして、単に熊高ファンだけでなく、県下の野球ファン全体から、非常な期待を寄せられていました。相手にとって不足なし。熊高を破れば、一気に甲子園目指して突っ走ることができるだろう。山本三郎監督に率いられた私たち川高ナインは、大会を前に連日暗くなるまで、校庭で白球を追い続けました。

打倒萩原。私たちの最大の目標は、熊高のエースと言うよりは、埼玉高校野球界の大黒柱である名投手萩原の速球を打ち込むことでした。百戦錬磨の山本監督は、萩原攻略の方策として、バッテリー間の距離を短くしてのバッティング練習を、私たちに命じました。当時としてはまだ珍しかったこの練習法に、最初は戸惑いを見せた私たちも、速球に対してバットを短く持ち、鋭く打ち返すバッティングのこつを、徐々に身につけて行きました。

いよいよ決戦の日がめぐって来ました。7月22日、

抜けるような青空から強烈な陽光が照りつける、大会日和の暑い日だったことを記憶しています。氷川神社に程近い監督の知人の鈴木康夫さん宅で、昼食をとった私たちはユニフォームに着替え、揃って球場へと向いました。やるべきことはすべてやった。気負いもなければ、不安もない。苦しい練習から解放されて、今こそ戦える喜びが、全員の胸に漲っていたのをはっきりと思い出すことができます。

その頃、一通の不幸な報せが大会本部に届いていました。「チチキトク スグカエレ」山本監督宛の電報です。

球場に着いてすぐ、このことを知らされた監督は、「親父が危ないそうだ。俺はすぐ帰らなくてはならない」そう言われると、マネージャの私を伴って、一塁側のスタンドへ足向けられました。試合を前に、川越から駆けつけたファンで一杯のスタンドをさっと眺めやった監督は、目指す相手を見つけると、足早に歩み寄りました。

「夏っちゃん」と呼びかけ、手短かに訳を話し後を託されたのは、横関夏夫先輩と、金子高祈先輩のお二人、いずれも当時都市対抗野球の強豪、豊岡物産の花形選手でした。突然ベンチをあずかることになった両先輩の驚きもさることながら、長い間手塩にかけた後輩たちの晴れの舞台を前にして、止むを得ず球場を後にしなければならなくなった山本監督のお気持ちはどんなものだったのか。

まだ少年の域を出なかった私には、監督の辛い胸の中を十分に察することができませんでした。ただ、思いもよらぬ不運に見舞われながら、私たちの闘志がいささかも鈍ることがなかったのをはっきりと憶えています。待ちに待った一戦は、熊谷の先攻で火蓋が切られました。

その時のスコアブックが手元にないのが残念ですが、私の記憶にある川高のラインナップは次の通りです。

- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 左 松本（3年） | 2. 二 浅井（2年） |
| 3. 投 相沢（3年） | 4. 中 大野（3年） |
| 5. 一 小野（2年） | 6. 捕 田中（3年） |
| 7. 右 谷（2年） | 8. 遊 松崎（1年） |
| 9. 三 横田（1年） | |

一回表、熊高は、三番荻原の左中間を破る痛烈な二塁打で先ず1点を先取しました。荻原を相手に、この1点が負担になるかと思われたのも束の間、一回の裏から川高は、猛攻撃を開始しました。各バッターは荻原が自信を持って投げこんでくる速球を、練習で身につけた通りの打法でセンターを中心に鋭く打ち返します。

一回3点、二回2点、三回1点、川高ランナーが次々にホームベースを駆け抜けます。たまりかねた熊高ダッグアウト前では、控えの投手がピッチングを始めました。

夢想だにしなかった事態に、慌しい動きを見せる三塁側にくらべ、川高ダッグアウトの中には押せ押せムードが満ち溢れていました。6対1、圧倒的なリードに余裕を見せる私たちの前に、熊高の細谷投手が駆けてきました。キャッチャーミットの革紐が切れたので貸してほしいというのです。私たちが、気持よく先方の希望をいれたのは言うまでもありません。

その直後のことでした。この日当たりに当たっていたラストバッターの横田三塁手が打席につく際、皆んなが使いなれた貴重な「タモ」のバットが見当たらないというのです。「多分熊谷の方にまぎれこんでいるんだろう。言って聞いてこい。」ベンチの指示を受けて三塁側に走った横田は、「そんなものはない。」との冷たい答えを貰って帰ってきました。横田は仕方なく代りのバット（物資欠乏の時代で残りの重い反った櫓のバット）を持って打席に立ち、私たちは消えた一本のバットのことをそれ程重要には考えませんでした。

五回を境に試合の流れが徐々に変わりつつありました。荻原投手がピッチングのペースを変え川高の打線をピッチリと抑える一方、熊高は実に執拗な反撃を開始しました。五回1点、六回1点、七回にもまた1点、それも二死後から四球で出したランナーに盗塁を許した後、内野にエラーが出るといったいやらしい点の取られ方が続きました。

そして八回にも、1点を追加され最終回を迎えた時は遂に6対5と、最少得点差まで詰め寄られていました。九回表、熊高最後の攻撃はトップバッター

の奥からという好打順です。

相沢投手が、渾身の力を振りしぼって投げ込むボールはダッグアウトからは絶好球に見えましたが、審判は無情にもボールの判定。結局、俊足の奥を四球で歩かせてしまいました。相沢投手は、このピンチに動じることなくランナーを一塁に釘づけにしたまま、次打者を打ち取りました。三番の荻原は良い当りのライトフライ。懸命にバックした谷が体勢を崩しながら、よくこの打球を掴みました。ツウアウトです。しかし、ねばる熊高は四番の山本が緩いライナーを右前に放って得点圏にランナーを進めます。

こうして迎えるバッターは、二年生ながら強打をもって知られる細谷捕手です。最後の気力を振りしぼった相沢投手はストライクを先行させ、カウント有利に細谷を追込みました。勝負一球、相沢、田中のバッテリーは、ベンチの指示を仰ぎました。

「相沢のベストピッチは何だ。」「カーブはあまり曲がりません。」「よし、それでは早い球でアウトコース低目をつかせよう。」金子先輩の指令がバッテリーに伝えられました。

アウトコースを狙った投球がやや真中へ寄ったと見た瞬間、快音を発した打球はライナーとなって鋭くレフト方向へ伸びて行きます。「取れる」ダッグアウトの中は、全員総立ちになって打球の行方を見守ります。しかし、横関臨時監督の指示により前進守備を布いていたはずの松本左翼手の守っていた位置はやや深く、ダイレクトでキャッチすることができません。二塁ランナーの奥は、三塁ベースを蹴ってホームへ殺到。「バックホーム！」私たちの悲鳴にも似た叫び声は肝腎のレフトには届きませんでした。力のない返球がサードに送られる間に、同点のランナーは、悠々とホームを踏んでしまったのです。

その後のことは、もう書くに忍びありません。延長10回表勢いに乗った熊高が、大量4点を挙げ両軍死力を尽した熱戦に遂に幕がおろされました。

川 高	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0	6
熊 高	1	0	0	0	1	1	1	1	1	4	10

あと一歩で勝利を掴みかけながら、逆に敗戦のどん

底に突き落された私たちは、応援団のエールの交換を茫然と聞いたあと、重い足を引きずって夕闇迫るグラウンドから引き揚げようとしてしました。その時でした。熊高の学生応援団が帰りぎわに、一本のバットをグラウンドに投げて寄越したのです。試合中に消えて失くなった、あの貴重な使いなれたバットに違いありません。敗戦の悔しさを辛じて抑えていた私たちの胸に激しいものがこみあげてきました。チーム切っ手の激情家である松本さんは脱兎の如くネット裏へ駆け込んで、熊高の荻原主将に喰ってかかりました。

「あ、あんな、ス、スポーツマンシップに反することをしてもいいんですか。」溢れ出る涙をぬぐいながら迫る松本さんの見暮に荻原主将は返す言葉もなく、ただ立ちすくむばかりでした。

「松本もういい。もう終わったんだ。さあ行こう。」追いかけてきたキャプテンの田中さんが、松本さんの肩を抱くようにして連れ戻して行く時の二人の姿を、私は今でもはっきりと思い浮べることができます。

帰り支度を整え、大宮駅に着いた時は日はもうとっぷりと暮れていました。打ちひしがれた気持で川越行の汽車を待っている私たちを、自転車に乗って追いかけてきた人がありました。お名前は憶えていませんが、豊岡実業高校の先生で西部地区の代表として高野連の理事をしている方でした。

「熊高のああいふ真似は絶対に許せません。連盟に提訴して、是非とも再試合を行うべきです。」先生はこう言われるのです。

「そうなればいいなあ。」とは思いましたが、「あのことでゲームの結果を白紙に戻すことは無理だろう。」私たちは、疲れた頭でそう考えたりもしました。

とにかく川越へ帰って、山本監督に相談しよう。私たちは川越に着くや否や、真っすぐに監督のお宅を訪ねました。

「やあ、みんなご苦労さん。残念だったなあ。」山本さんは、意気消沈した私たちをやさしく迎えて下さいました。

「お陰で親父の死に目に会うことができたよ。親父

は最後まで野球のことを心配してね。勝っていると教えると喜んでくれたんだが……」山本さんはしみりとした表情で、そう言われました。

試合の経過、それにバット事件のこと、思わず激してくる私たちの訴えを「うん、うん」とうなずきながら聞いておられた山本さんは、「再試合は当然だな。」と興奮した私たちをなだめるようにおっしゃってから、「最後に、浅井にほうらす手があったなあ。」と作戦について、感想めいたものを述べられました。

野球センス抜群で、度胸の良いピッチングをする浅井を、マウンドに送ることによって熊高の後半の猛攻を、あるいはかわすことができたのではないかな。大切な一戦で、自ら指揮をとることができなかった山本さんの無念さが、浅井起用の一言に窺われました。高野連は緊急会議を開いたようですが、私たちの願いもむなしく試合はあのまま成立することになりました。苦戦をものにして意気拳る熊高は、その後順当に県代表の座を勝ち取り、南関東大会でも千葉の強豪を次々に退けて、甲子園行の切符を手に入れました。

大正10年、埼玉県の代表が関東大会に始めて参加して以来、実に30年ぶりの快挙でした。県民の長年の夢を実現してくれた熊高ナインを賞賛する新聞記事を読ませられる私たちの気持は複雑でした。

もし、山本監督のお父上が、試合当日に亡くなることがなかったら、もし一本のバットがグラウンドから消えて失くならなかったら、私たちは、あの試合に勝つことができたのではなからうか。しかし、もし私たちが熊高を破ったとしても、南関東大会で最後まで勝ち抜くことができたでしょうか。こうした答えの得られない数々の疑問が、次から次へと私たちの頭の中に湧いてくるのでした。今思うと、試合には負けましたが、私たちにあの波瀾万丈の一日の中に、また激しかった三時間余りの試合の中に、人生のきびしさを、連続して見ることができたのです。

それは、スポーツに打ち込んだ者にとっての特権であり、机の上からだけでは絶対に得られない貴重な体験だったと思うのです。夏休の一日、教頭を始めとする熊高野球部の関係者が川高を訪れ、事件に

ついて正式に陳謝の意を表し、全国的な話題にもなったバット事件に、最終的なピリオドが打たれたのです。

昭和52年度クラブだより

小杉先生と川高野球部

高校7回卒 嵐野昌甫

「埼玉県高校野球連盟30年史」という本によると戦争で中断されていた中等野球が復活したのが昭和21年夏。この年の県予選参加校数18校。母校川越野球部の戦後史第一ページもここに始まる。

戦後間もない混乱期で食べるモノもグローブやバットの野球道具も満足に手に入る筈のない時代だったが、野球が好きでたまらない中学生にとってはつい先頃まで芋畑と化していたグラウンドに出てキャッチボールできることがどんなに嬉しかったことが容易に想像がつく。

以来川高野球部の戦後史も既に30年を越える。大正8年創部という古い歴史と伝統を誇り戦前は県下有数の名門と謳われた川高野球部だが復活後数年は苦難の道が続く。



小杉先生が野球部に関係するようになったのはこの頃のことで森田先生とその当時の教頭木村先生が予算も少なくまた戦績も低迷気味の野球部のピンチ

を救う為小杉先生を口説いて引っ張り出したらしい。

その後野球部を強くしたいという関係者の努力と意欲は少しずつ実を結んで、26年には南関東大会出場、29年実に18年振りの県制覇、30年準優勝、更に33年記念大会では甲子園目前での惜敗、そして34年西関東代表として念願の甲子園出場という工合に言はば川高野球の戦後の黄金時代が形成されて行く。

この間、小生が関係したことだけでも28年の行田高との痛恨の5回コールド負け（前日雨による中断後の再試合だったがこの日も朝から雨でグラウンドは泥んこ。審判団立会いの下で試合開始するなら9回までやる事が約束され始められたが5回が終ったところで突然のゲームセット、川高は5対6の無念のドロンゲーム、この措置を廻り提訴沙汰まで発展した因縁の試合）、29年決勝前夜の集団中毒事件、33年準決勝大宮工との二日続きの延長戦（この年は記念大会で1県1校、準決勝の大宮工戦は延長18回0対0でケリがつかず翌日再試合、この試合も2対2で再度延長に入り結局3対2で勝ったものの選手に疲労が残る決勝は大宮になす術もなく敗れた。この年はツブぞろいの強いチームだっただけに監督の小生がもう少し冷静に試合を進めることができていたら、と今でも悔いが残る。）など忘れられない出来事であった。

この「高野連30年史」や古い新聞のスクラップなどでこの頃の戦績や経過を見ているともう20数年も昔のことが断片的に浮かんでくる。当時の川高には小杉先生を中心とする熱心な若手OBの集団があった。校長先生も野球部に理解があったし野球部員に目をかけて呉れる先生も多かった。毎日練習を見に来て呉れる街のファンの方達もいた。野球が強くなるというのは結局そういうことなのだとつくづく感じる。

今とは違うとしても当時は当時なりに進学校としての幾つかの制約を負いながら或程度の成績を挙げ得た川高野球の戦い振りを眺めて居ても小杉先生の庇護なかりせば、と感ずるのは小生だけではあるまい。

この30年間の川高野球部の歴史に於ける小杉先生

の存在の大きさを語ろうとする時一体何んと表現したら良いのか、ボキャブラリーの貧弱な小生などは大いに迷う。

歴史に「IF」はあり得ぬことだが結局、もし小杉先生の野球部に対するあれだけの愛情と情熱がなかったら戦後の川高野球の軌跡は今とは全く違うものになった。少くともあの甲子園出場はなかったろうし、また先生を中心とする戦後OB達の独特な人間関係は存在し得なかったというのが一番適切な表現になるのではないか。

小杉太郎先生・川高野球部後援会長

明治36年生れ、現在74才

川越中学から東京歯科大学を経て米国、イリノイ州ノースウエスタン大学に留学、
マスター・オブ・サイエンス。

この会報を読む人には今更説明を要することではないが、小杉先生は戦後の物資欠乏時代から現在まで実に30年の永きに亘り野球部後援会長として物心両面から野球部の活動を支援され続けて来た。強い時も弱い時も、興隆期にも衰退期にも、先生は終始一貫変らぬ愛情と情熱を野球部及び野球部を巣立って行く若者にそそいで来られた。

高校野球の創成期は勿論のこと、昭和20年代の終りの頃までは世の中もそうであったが野球部の台所も特に窮乏の時代で勢い先生や後援会また諸先輩の援助に頼るところが大きかった。

豊かな時代になって最近はハングリースポーツというのは無くなったようだが、その頃の野球は精神的というよりむしろ物理的な意味で相当なハングリースポーツで、とに角野球の練習は腹の空くことだったから。卒業後20年以上も経た今でも小杉先生の野球部に対するパトロネージを食うことと象徴的に結びつけて連想する人も多い。何にしろ育ち盛り喰い盛りの連中が激しい練習で腹を空かすのだからその食欲の凄じさは想像を絶する程で、合宿時の部長の先生やマネージャーの食糧調達と遣り繰りの苦労は並大抵なものではなかったらうと思う。

ある先輩に聞いた話では、友達の家をメシを御馳走になった時5杯喰って一旦箸を置き更にすすめられると「じゃ遠慮なく」ということでそれか更に10杯喰って家人を仰天させた豪の者も居たそうで、

その他練習の前後にコッペパンを何もつけずに3ツづつ喰った奴などこの種の話しには事欠かない。

野球部の序列は厳しかったから合宿では、下級生は上級生の洗濯をしたり、また食事時は給仕をしながら自分のメシをかき込まなくてはならない。モタモタしていると自分のお菜は誰かに喰われてしまうというサンタンたる結果になる。合宿などに於けるこういう弱肉強食、厳しい生存競争を経て野球部員は段々「早メシ型」になりまた遅しくなっていく。

練習に明け暮れる毎日で然も普通の高校生の様な遊びは制限されている状況だから喰うことは単に空腹を満たすこと以上に一つの息抜き、また娯楽としての意味があり、卒業後20数年も経つ今でも野球の思い出がどこかで喰うこととつながっているのも満更故無いことではない。

そんな状況であったから小杉先生の奥様の手料理、例えば肉のたっぷり入ったロールキャベツなどは「世の中にこんなウマイものがあったの」という強烈な印象で球児達を魅了し25年卒以降のOBの多くは卒業後も奥様の料理を御馳走になることを目的の一つとして先生宅に出入りしたものだ。尚卒業後当時の味を忘れ兼ねて有志の間で一方向的に奥様の「ロールキャベツを頂く会」が結成され無理矢理御馳走になるケースが出る程であった。

喰うことと関連して忘れられない思い出がある。前に一寸触れた中毒事件の事だ。

昭和29年夏の大会、準決勝で宿敵熊谷を2対0で破り翌7月26日浦商との決勝にのぞむ晩のことであった。この年は小杉先生のお宅で合宿中だったが、その晩は戦後どうしても勝てぬ相手に、前年の秋の大会でも決勝で苦汁をなめさせられている熊高に完勝したことで大いに意気が上がり選手達の食欲も旺盛、翌日の決勝もやる前から「イタダキ」位の雰囲気だった。ワイワイ言いながらの楽しい夕食が済んで2時間位した頃、大変な騒ぎが持ち上がった。誰だったか忘れたが突然吐き気、腹痛を訴え始めたのだった。症状は連鎖反应的に選手間に広がりレギュラー6、7人がダウン。このままでは明日の試合も憂慮される様な状況だったから小杉先生・部長の渋谷先生・監督の谷さんなど首脳陣も大慌て。直ちに小杉

先生と親しい内科の広沢先生が招ばれ応急手当を受けたが選手の動揺もあり監督OB連は明日の試合をどうするかで深夜まで鳩首会談を続ける有様だった。注射を打ったり氷で冷やしたりでフラフラしながらも浦商との決勝は2対1で乗り切り、とに角18年振りの県制覇となった訳だが原因は選手の喰い気にあったのは確かだとしても結局つかめずじまいだった。差入れのボタ餅や何かが喰い過ぎを懸念されて冷蔵庫に隔離されているのを知っている選手達が下級生に命じ監督達の目を盗んでとり出させかくれて喰ってしまったのは事実で、それが原因とも言われたが皆同じモノを喰って何んでもない奴も居たのだから合点がいかない。とに角青春の喰い気に起因する事故で然も決勝の前夜ということで今だに忘れられない事件だ。

こんな事を書くとおコラレルかもしれないが、もう20何年の昔のことだからお許し戴くとして余談を披露する。この頃小杉先生の奥様は若かったし美しく青春前期の野球部員にはいささかマブシイ存在だった。この下痢事件の晩「ハラが痛い」と訴えろとそのマブシイ存在の奥様に看病して貰えるというので痛くもないのに「ハラが痛い」と申告しハラをなでて貰って嬉しかったというサムライが何人か居たということだ。こんなことだとあの集団中毒はどこまでホントだったのか疑われるし、また本気で「痛くもないハラ」をなでて下さった奥様には誠に申し訳ない次第だが当時の部員の悪ガキの程度から類推して矢張りあり得る話しだと思う。奥様には改めてお許しを乞う次第です。

喰い気でも先生にはお世話になったが怪我や病気でも大いに面倒をおかけした。骨折、捻挫、ボールやバットによる事故、肩の胡椒等技術レベルも低かったのだろうしグランドコンディションも良くなかったせいであの頃は怪我や故障が多かった。28年の秋の大会などでは準決勝かその前の試合で3番、4番を打ち攻守の中心だった角田、田中の両君が続けざまに足を骨折、決勝の熊谷戦は言はば飛車角落ちの対戦となり後に東映で活躍した福島投手に手もなく捻ねられるというケースもあった。

延べ10年も先生宅に置いて頂いた小生自身だけで

も骨折、捻挫、骨髄炎、盲腸、肩の故障、右掌の貫通等野球以外にも含めて怪我、病気は枚挙に暇がない程だ。小杉先生にお世話になる様な怪我は野球部通算ということになると大変な数だろうと思う。その都度先生は御呢懇の赤心堂栗城先生に依頼し治療の面倒を見て下さった。2年生の春に肩をこわし全然投げられなくなった時は野球をしていて一番辛かった。この時も治療は勿論また投法についても先生や先輩のアドバイスでサイドスローに変え立ち直れたが先生や奥様の温い励ましが精神的にどんなに支えになったか分からない。

「人生は出会いだ」と言ういささか年寄じみた言ひ方だし少々キザな感じになるかも知れぬが、小生の場合正に先生との出会いがそれだったと思う。

昭和26年の夏か秋。当時東上沿線中学野球大会というのがあり、決勝で小生の大河中と角田君の富士見中が対戦した。その後川高で一所にやることになる武藤君、並木君も両軍に分かれて出場していた。試合は角田君と小生の投げ合いで多分2対1位で富士見中が勝ったが小杉先生や田中さん達の先輩がこの試合を見ていたのだそうだ。これがキッカケで川高進学を勧められた。小杉先生と田中さんは当時的大河村の片田舎、山間の小生の家まで2度もその為に来て下さった。今考えると信じられぬ思いがするが、東上線の小川町の駅から山峡の小生の家まで距離にして4.50キロの道のりを先生と田中さんは小雪のチラツク様な寒い日にわざわざ歩いて来られたということだ。

川高を強くしたいという情熱がそれだけ強かったということだろうが小生にとってはこれが人生の大きな岐路となった訳で今だに感謝の言葉もない。当時は学区制というのがあって高校は松山高と決っていたし、また15才でもありオヤジとしても相当悩んだらしいが結局先生の熱意と好意に甘えることとし先生のお宅に御厄介になることになった。

以来、高校、浪人、大学そして就職するまで約10年間もの間そのまま先生のお宅に置いていただいた。小生の後も武藤君、鈴木君、栗原君が小杉先生の家庭で家族同様の扱いで野球生活を続けた。先生の家には野球部の先輩連中が年中押しかけて来ていたか

ら小生達の部屋は勢いOBのたまり場という格好になった。入れ替り立ち替り誰かが来ていて野球談義に花が咲いた。メシ時になると皆んな当り前の様な顔で奥様に御馳走になった。

先生は家に居る時は歯科の治療で忙しいから時折顔をのぞかせる程度だが奥様は家の用事とわれわれや先輩の食事の台所仕事で年中テンテコ舞いだった。今考えてみても奥様はあの広い家の中を何時も小走りにしていられた様な記憶があるが実際食事だけに限っても多い時は家族以外に10人近くの喰い盛りの連中の面倒を見ていたのだから大変なことだと思う。28年、29年と夏の合宿は小杉先生宅で行われたが恐らく監督、部長を始め20人以上が厄介になっていたのだから炊事洗濯など、家の中は戦場同然だったのではないだろうか。

小杉先生の川高野球に対する愛情と情熱の深さ、大きさというのは結局奥様のこうした献身的協力と自己犠牲に裏付けられたものと言うのが正しい。言うなれば奥様、子供さん、司先生、おばあちゃん等御家族が一体となって川高野球を支援して下さいた訳だ。

前のところで「クレオパトラの鼻」式に、もし先生の援助なかりせば……と書いたが、それと全く同じ意味で、もし奥様のこうした内助がなかったら先生の川高野球部へのパトロージも全く異質なものになっていたと思う。

この30年間に野球部を巣立って行った球児の数は多い。野球に明け暮れた3年を終えて球児達とはに角精一杯やったという誇りと満足感を胸に野球部を卒業して行った。無論正しくは高校を卒業したと言うべきだが小生の知る範囲、つまり24年夏組の高校2回の年代から34年の甲子園出場組位までのOB達の場合、それは文字通り「野球部卒」と言うにふさわしい野球一途の高校生活であった。甲子園を夢見て白球に賭けた青春と言えバカッコイイが実情はただ野球が好きなのであった。試験の難しくなった最近では考えられぬことだが、われわれは野球がやり度くて川高へ入り部屋とグラウンドを往復する高校生活を送った。授業中は居眠りをしたり針と糸を持って古いボールを修理したりしていた。然しそれだ

け野球ばかりやっていたくせに不思議に甲子園のことは頭に無かった。実際甲子園への道は意識するには余りにも遠過ぎたし、また白球に賭ける青春という甘い感傷にひたるには練習が厳し過ぎた。今とちがってマスコミも発達していなかったから一般の給仕には甲子園は気持ちの上ではるかに遠い存在でもあった。練習は1年を通じ辛く苦しかったし、また休みも殆ど無かった。先輩は皆鬼の様に恐かった。その恐ろしい先輩達が小杉先生の前に出るとネコのおとなしくなるのも不思議だった。先生は温顔で恐れ筈はない。実際先生が部員やOBを叱ったことは一度もない。技術的なことを口にしたこともないし監督やコーチのことで口をはさんだこともない。先生は何時も微笑を絶やさずわれわれの話を「そうか、そうか」と聞いて下さるだけだ。卒業後20数年も経ってハラが出かかったり髪の毛の薄くなり始めた中年の分別盛りのわれわれだが先生の前に出ると忽ち20年も昔のイガグリ坊主時代に戻ってしまう。われわれにとって高校野球イコール小杉先生だから、先生と共に「あの時は……」「この時は……」ともう何回も繰り返した昔話しに花を咲かすのはこの上なく楽しいし、またしゃべっている内にあれだけ苦しかった筈の野球の思い出はすべて甘ずっぱい青春の思い出に変質してしまう。単なるノスタルジーに止まらず野球を3年やり遂げたという自信、誇りは野球部を巣立って行ったすべての者の胸の中で「野球をやった位一生懸命やれば何とかなる」という形でその後の人生の支えになっている筈だ。小生の場合も先生に喜んで頂きたいという気持ちと野球位一生懸命やればという気持ちが苦しい時のスプリングボードになって来た。

先生とわれわれをつなぐこうした人間関係の絆、また先生を取巻くOB達のつながりは、人と人との関係が希薄になりつつある現代に於て際だって太くまた厚い。野球から得たものはと、きかれれば、小生はためらいなくこのようなかけがえのない人間関係を自分の能力一杯まで努力することの意味を知ったことと、答えることができる。甲子園は高校野球の勲章だが甲子園に出ることだけが高校野球のすべてという訳ではない。今年のPL野球に象徴される

夏の甲子園騒ぎはエスカレートするばかり、その一方で受験戦争もますます激化して行く。そういう世相の中で伝統ある川高野球部が方向を見失うことがなければ幸いだと思う。

昭和53年度クラブ日より

華かなりし、かつての応援団

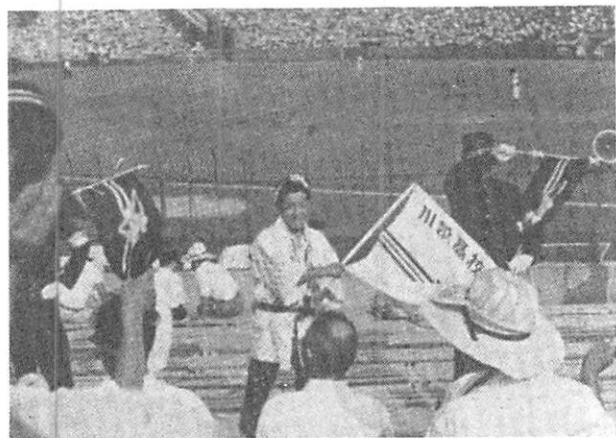
旧制27回卒 金子良雄

今年の春、山本君から川中応援団について書くようにと云われて、いざ筆をとってみると私の卒業が昭和4年、既に半世紀も前のこととて、ちぐはぐな点や誤りも多々あること、と思いますがお許しを願ひ、川中野球部と共にあるいた数多くのファンの人々を偲びながらご報告したいと思います。



毎年私達27回卒業の同窓会が2月か3月開かれております。宴酣となると、「団長やれ」と声がかかり、私はワイシャツをまくりあげ大声をはりあげ、校歌や応援歌の音頭をとります。この瞬間私は若き中学時代を思い出し感激をあらたにするのでした。そして例の三三七拍子をやります。

「俺はこの時が一番感激だ」と、50年の長い歳月を忘れて若き日を思い出すのです。



村松鉄五郎と云っても誰かなと、思う人もあるでしょうが植木屋の“鉄つあん”と云へば川越では知らない人はいない川中野球部の名物男であり色は真黒で髭づらの背の低い人で半天にニッカーズボン、ハンチング姿で、殆ど毎日グラウンドで球拾いをしていた。後年伊丹さんが明治神宮球場長になってから“鉄つあん”も整備員をやっていたと云われていたが、この人こそ一生を野球と共に生きたと云える人であり、その息子さんは現在川越市議会の名事務局長で、おふくろさんも今尚お元気である由です。「頑張れ」とドスのきいた洪い声が今でも聞こえて来るような気がします。その名物男も昭和25年63才で世を去りました。

幸町（鍛冶町）の「ないものはない」で有名なキンカメ時計店の親父さんの松崎幸太郎さんも野球狂といわれた人、埼玉師範卒・小見野小学校二代目校長の経歴の人で御子息は現在盛業中であり、連馨寺境台の鐘撞堂の上でキンカメの親父さんが浴衣姿で禿げあがった頭をふって蛮声をはりあげていた姿が眼にうかぶ。昭和25年73才でこれ又亡くなられた。

毎日新聞販売店主の板倉敏夫さんも忘れられない人であり連雀町角、富士銀行（現在カシヤマ）の場所に板倉新聞店があって川中が県下で優勝し、愈々北関東大会出場となると板倉さんの出番で当時は現在とちがってバスが少なかったので応援団を桐生とか前橋に送るには大変であり、速い羽生からもバスを廻送して貰ったもので、5台10台のバスが川中応援団の旗をなびかせて堂々と出発したものです。板倉さんも昭和45年他界されました。

私が応援団長をやめたあとは六軒町の石井菊太郎

（理髪店主）さん通称“石井の健ちゃん”が応援団長として大宮球場で大活躍され、昭和45年12月世を去りましたが、挿入した写真は昭和34年8月甲子園で高知高校と対戦した応援振のなつかしい思い出のスナップであり、今は亡き石井団長の颯爽たる姿で、御子息はこの時の着衣はすべて火葬の際納棺したと眼をうるませていました。

その他変ったファンは青木組の親分で青木義寛さん、後に「太陽」というローカル新聞を発刊し市政発展に活躍した奇人で、私達は随分お世話になりました。前中グラウンドで中里三塁手がレフトオーバーのホームランを打った時その判定をめぐってトラブルが起き青木さんに色々お世話になった思い出があります。

中央小学校裏にいる関根勝太郎さん（ガラス店々主）も古いファンの1人で「私は当時水村ガラス店（喜多町水村捕手の家）に勤めて、野球が好きで浅海さんが後援会を作った時には毎月50銭の会費を払った。この50銭は私の1ヶ月の大事なお小使いで当時はお米が1斗1円45銭であと15銭だせば近江の1等米（すし米）が喰べられたもので、今の世代の人には到底想像もつかないたとだ」と語っていました。

連雀町熊野神社脇の大工の柳沢清一さんも川中ファンの代表と云われた人であり、小学校2年の夏休みに友達2人とチンチン電車賃20銭がないのでテクテク歩いて大宮球場まで3時間半かかって応援に行った、と言う有名な話があり球場で大人達がビックリしたということです。

「今晚応援の練習があると街中自動車でふれあるのですが当時は自動車に乗るのが嬉しくて私は号外に使う鈴をチャンチャンと鳴らして廻ったものでした」と、語っていました。

本川越駅前の料理店福富美の親父さん（坂口選手父君）も川中野球部のかげの応援者の1人でした。家村君が監督時代で西関東大会、前図書館裏に合宿した時、選手の食事一切を無料でまかない、怪我人は名倉堂で無料奉仕をした思い出があると語っていましたが、選手のお母さんや柳沢さんの奥さん等が選手の世話をした由でその年川高は西関東で優勝し、甲子園に出場できたのもこのような涙ぐましいファ

ンの皆さんの熱烈な応援があったからだということを忘れてはならない。

キンカメ時計店隣の小谷野さん、西小仙波の料理店の松津耕平さん（松津歯科医院父君）同大川仲蔵さん、志義町（仲町）の平沢下駄屋さん、谷沢久輔さん連雀町の宮倉文具店の親父さん、海産物問屋の藤和三郎、浅海弥吉さんは織物問屋の御主人で御子息は松江町で紙問屋をやって盛業中で浅海さんが初代の後援会長だったと思います。

久保町の田代歯医者さん、宮下町の伊藤正代書さん、三久保町の経理士柿田亀之助さん、自転車屋の小山の運ちゃん、遠藤薪炭店の御主人、そして鶴川座にいた中山彦朗さん（スカラ座経営）にはいつも映画を無料で観せてもらったものでした。同じく大野秀峰さん、中央通りの山崎信三郎さん、久保町の鮎川の勝ちゃん（表具店）、明文堂のタードン、郭町の福田貢さん、板屋の藤ちゃん（文具店）渋谷寅男さん、山本のチャーチャン、亀里英男さん、神明町の粟生田さん、宮下町の図書館長をした奥富さん、三光町の宮島馬造さんの管笠姿、裸で鉢巻で応援した新宿の相原魚屋さん、子供の頃雷ぎらいの石原町の撞木屋の武ちゃんが雷が鳴っているのに連馨寺へ応援に行った思い出、宮下の横田炭やさん、元町のおかの屋食堂の近藤さん、神明町の岩渕のおやじさん、熊谷名投手のお父さん、等々特に思い出されるのは宮下の篠原大工さんには私が甲子園へ応援に行った時御親戚に一週間も泊めて戴いたことは忘れられない思い出であります。

当時の川越は静かな城下町で現在のような自動車氾濫時代とはおよそ想像もつかないのんびりした街で夏ともなると道ばたに縁台を出して夕涼みがてら野球狂の人達が集まって、今年の川中はどうか熊中が強いとかと野球の話でもちきったものでした。

川中が大宮球場に出る時は殆どの商店は開店休業となり、主人も小僧さんも皆大宮へ大宮へとチンチン電車や自転車で出かけたもので大宮川越間が自転車の列で続いたものでした。

又毎日川中のグラウンドは2、300人の町のファンが集まり特に伊丹コーチ時代には街のおやじさんが一流の野球通になって、あのキャッチングではだめ

だとか、あのホームではインコーナーは打てないとか玄人はだしの批評をする程の熱の入れ方でした。

次に話を少し前にさかのぼらせて私が現役の応援団長の時代、即ち5年生の頃の事を書いてみましょう。

川中応援部は団長以下13名で高野先生（数学）が担任で副団長3名 高橋武治、山口修一（故人）、並木 嶸（在ブラジル）、団員は山田正一、中野秀夫（故人）、荒畑吉五郎（在ブラジル）、峰岸義一、斉藤明雄、大附幸定、宇津木秀寿、そして4年の新井三郎と内海六三の諸君で、当時の野球部はキャプテンの北野英男・中里治夫（故人）・平岡忠次郎（元衆議院議員）・小沢賢治等が同窓でした。

川中応援団の歴史は我々より2年か3年前の頃から始まり、寺田市郎先輩（元埼銀支店長寺田マンション経営）が応援団長で活躍したことを覚えて居ります。我々の時代となり野球部の黄金時代をむかえて応援団も張り切ったものでした。我々応援団は殆ど柔道部の猛者が中心で校風の昂揚が唯一の目的でありました。

当時の県下の大会は旧浦和高等学校の校庭で行われ、全校生徒はゲートルを巻いて往復徒歩で八幡大菩薩と大書した幟をおしたてて応援に行ったもので、今なお小松中尉殿の勇姿が眼前に浮びます。

この年、秋の県大会優勝戦が浦高原頭で行われ一塁側に熊中、三塁側に我々が堂々の陣を張り、試合開始前、両校の応援団長、副団長がホームベースをはさんで、固い握手をかわし「勝敗は時の運、正々堂々と戦おう」と誓ったもので、紫と赤の応援旗が秋風にはためき先づ両校応援歌の応酬の後試合開始となったものでありました。残念ながらこの試合は熊中に敗れたと思う。

戦い敗れて、全校生徒が涙にくれた。夕陽が赫々と空を染めて小高い土手の上で幼い一年生が泣きくずれていた姿が今でも眼に映るのであります。

「空蒼茫と夕ざれば戦いいつかおさまりて……」の応援歌を歌うとき50年もたった今日でも胸があつくなる思いを禁じ得ません。あの時秋空高く雁が列をなして南の空へ飛び去って行ったのが非常に印象的でした。

筆者は川中卒後明大に進み、歩一に入隊、二・二六事件反乱軍として首相官邸襲撃、満州事変・支那事変に参加大東亜戦争でラウル、ガダルカナルに2年従軍、陸軍軍曹。帰還後三徳工業（現新報国製鉄 K. K.）へ入社昭和20年日本最初のストライキを指導、地労協の前身、協議会初代委員長、昭和21年第1回メーデー代表、市議会当選3回。 山本記

昭和53年度クラブ日より

華やかなりしかつての応援団(後編)

旧制27回 金子良雄

つい先日当時一年生だった人に会った。お茶を飲みながら懐旧談に花が咲いたが、いつか応援団のことにふれて「全員谷底に集まれ！」と集合がかかる。と皆青くなったものだ。と述懐されていた。今になるとそれが又一番若き日の思い出だと云われて私はホッと胸をなで下ろした。当時は、今日とは違って下級生は上級生には絶対服従という校風で、街角で上級生の姿を見るとパッと挙手の礼をしなければそのままではすまいと云う時代であった。谷底に集まれ！ 当時は暴力的な行為が何度かあったように思い出されるが今誰れにどうしたか全々思い出せない。ので、どうか若さの愛校精神の発露だったと御了解を戴きお許しを願いたいとひたすらお詫び申しあげる次第である。野球大会が近づくと放課後全員校庭に集合し出欠をとったものである。

在学中の思い出の中で前に少し書いた前橋中学球場の北関東大会のトラブルは忘れられない事件だった。対戦相手は高崎商業で一塁に北野君がいたと思う。中里治夫三塁手がレフトオーバーの本塁打を打ったがそれが桜の梢にあたって、フェアかファルかで紛糾が起った。現在と異って当時のグラウンドは誠にお粗末なもので外野は縄ばりの簡単なものでその上に桜の大木の枝が茂っている状況であった。小森球審（早大出身）はファルを宣告したのである。木造の粗末なスタンドにいた見物人たちもこの判定には不服で川中頑張れ、川中頑張れと総立ちになって、騒いだものだった。試合は負けたが小森球審が高崎

商業のコーチだったということも伝わって我々はおさまらなかった。その番我々応援団幹部は殺気だつて小森球審の宿へおしかけその責任を追求したのである。若い我々には理屈は抜きだった。あやうく暴力事件をひき起こす危険な状況になった時かけつけてくれた青木義寛氏（青木組の親分）のおかげで事なきを得たが今思い出しても冷汗ものだった。当時の学生気質は蜜カラの一高スタイルで今日のような女だか男だか判らないような時代とはおよそかけ離れたものであった。

その後水村、山本、綿貫、家村君等による川中黄金時代の到来と共に市民による川中応援団の黄金時代となったのである。昭和6、7年頃は川越市の中心は蓮馨寺付近で今の日活映画館が鶴川座といった時代で芝居や映画をやっていた。立門前の角に大黒屋と云うお菓子和氷の店があった。私が明大に入った頃で夏の大会が近づくと蓮馨寺境内に毎晩2、3千人の市民が集まって応援の練習をやったものだ。夕方破れたワイシャツ姿で街を歩くと子供達が「チャッ、チャッ、チャ」が来たといってゾロゾロと後について来た。境内の鐘撞堂には煌々と電灯が輝やき、多数の朝日の社旗が夏の夜空にひるがえっていた。三三七拍子とか一二三拍子とか川中の校歌や応援歌の練習が其処で一時間以上つづけられたものである。集まった善良な市民はお年寄りもいた若い人も子供達もいて皆心を一つにして川中の勝利のために大声で、そして手を真赤にして練習したものである。

特に私が感激したことは野球を全然知らない老婦人が私達の熱烈な応援練習を見て大宮球場へ応援に行くという状況だった。又神経痛の老婆が2時間にわたる応援練習を痛さをこらえ体をふるわせて頑張っていますと聞かされて深く感動させられた。時々キンカメの親父さんがシャガレ声をはりあげていた姿が今でも眼にみえるのである。流れる汗をふきふき応援練習が終わると角の大黒屋さんへ氷を飲みに行った。御主人の内田さんが「応援の練習があると言いつつ20円売上げがちがうから一日も長くやってもらいたい」と云われたこともある。何しろ当時は氷水一杯5銭の頃で今から考えると想像出来ないことで

時折、蓮馨寺の境内へ行くと真に感無量のものがある。

昭和6年の全国選抜中等野球大会にはじめて川中が選ばれた。夢の甲子園出陣で川越全市が湧きに湧いた。私は応援のために30日間を後援会から戴いて応援旗をもって勇躍出発した。東京の毎日新聞本社で激励をうけ相手も初陣の中京商業だからたいしたことにはない頑張るようにいわれて大阪入りをしたが、大阪についてみて中京商業は吉田投手を擁する優勝候補随一ときいて愕然としたのである。試合は予想どおり11対0で大敗した。私と鉄つあんの二人は甲子園の大鉄傘の下で応援旗をふり喉をからして応援した。大阪人は不人情な奴等でワーッと総立ちになったのでビックリすると「大学と中学との試合だ」と大アクビをしたのである。流石強心臓の二人もコソコソと旗をまいて逃げ出した苦い思い出がある。噂の通り中京商業は春夏の優勝をなしとげたのである。

初出場の甲子園行きで私は川越市議会へ寄附金の募金にいった。当時の議長は誰であったか失念したが「川越商業なら応援出来るが川中は県立だから応援出来ない」と云われて私は憤然と席をけた記憶がある。勿論寄附金は後日支出されたが、その時はまったく情ない思いをした。ある大学の友人から「金子、チンドンヤの真似はやめろ」と注意されたことがあった。私は次のように答えた。「チンドン屋の真似ではない。お年寄も若い人も子供も私の指揮によって一つの目的に結集する、こんな素晴らしいことはない、将来私が指導者になって市民と手を携へて一つの目的に邁進する時の勉強だ」と私は胸を張ったことを覚えている。

北関東大会の思い出は多い。桐生、前橋のグラウンドで我々市民応援団は名声をはくした。川中応援団といえば関東各地で筋金入りの応援団といわれたものである。今日の花の応援団は色々の楽器を持ったブラスバンドや赤や黄・青の房をもって美しい女の子が踊る華やかな応援振りである。時々工業高校の応援団の太鼓の音とどなる応援練習の声が聞こえる。ふと50年前の蓮馨寺境内の応援練習を想い起^{せがれ}こし隔世の感を深くするのである。4、5年前^{せがれ}の出身

校が埼玉代表として甲府のグラウンドで試合があった時私も応援に行った。三塁側に女子のブラスバンドが陣どって女子学生がタクトをとって応援していた。試合は押し気味で勝てる試合だったがホームランを打たれて逆転されてしまった。その時であった。敵は地元の有利さと、一塁側が風上と云うことにも力を得て「ワッショイ、ワッショイ」と云う声援と武田節の大合唱で球場を圧した。味方の投手は俄然乱れ、応援団の狂ったような声援、グラウンドは正にゴウゴウたる大音響の坩堝と化した。敗戦！ 私は茫然とタクト棒を握ってスタンドに立ちすくんでいる女子生徒の姿をみつめつづけていた。

まだまだ思い出はつきないし御紹介する人々が数多くあると思いますが、それは後日にゆずって、皆様の御健康をお祈りして拙い筆をおきます。

昭和54年度クラブだより

野球部の沿革

川越高校80年誌から

野球部

はじめに

川越中（旧称県立第三中学校）の野球部の記録が見られるのは、明治36年発刊された「校友会報」の「会則・第五章、第三十条」である。この条は前条の「本部ハ本会運動ニ関スル一切ノ事ヲ司ル」をうけ「本部ヲ分カチテ左の5部トス」1撃剣部 1柔道部 1野球部 1庭球部 1フットボール部——とある。さらに各部に幹事若干名を置き、其部員より之を定め運動部理事を以て幹事長とするとある。

この運動5部は明治37年及び38年には運動部、3科に分かれ、野球部は野球科となっている。

大正元年の記録には野球部費として「金六拾九円貳拾参銭」、さらに野球部マッチ費「金壹円参拾銭」が記され、他部と比較してみると野球部予算が庭球部の四拾五円貳拾銭より拾四円多く、運動部では一番高額が計上されている。今日の生徒会予算でも野球部は最高額である。さらに後記明治四十三年度校友会予算、支出の項では野球部は「金八拾七円八拾参銭」と計上され、ベース、キャッチャーミット、

グローブ、バット等の内訳が記されている。ちなみに、ボール五打、金三十円、バッティングバット十本、金五円五十銭、グローブ五個、金二十二円等となっている。今日の価格と比較するとおもしろいだろう。

1

野球部活動、試合の記録の初出は大正5年に始まっている。しかし試合内容は校内野球部の練習試合であって、回数は5回ゲーム、3時半に始まって4時50分に終了している。11月3日立太子札の折、大会が開かれ、「観球席には56人補佐の先生も見え」「北尋常小学校の生徒は引率されて来り応援につとめ、非常なる盛会なりき」娯楽のなかった当時とすると中学の校内野球にせよ、深い興味を呼んだのであろうか。

大正6年には野球部春季大会と称して、田中軍と矢部軍の試合が行なわれている。この試合は野球部部員を二分しての紅白戦ともいうべきもので、秋季大会も開かれ、多数の生徒の観戦が記録されている。

川越中学が対外試合をしはじめたのは大正8年からで所沢航空隊野球倶楽部とある。記録としては対飯能実業団との一戦が見られ、16A対14で本校軍の勝利となっている。また秋季10月3日には対埼玉師範戦が記され、22A対7で「多年鹿島台上で覇をとなし埼玉師軍を粉碎し、部史あって以来の大勝を博せり」とある。その他の試合としては対所沢飛翔クラブ、対浦和中学戦、所沢航空倶楽部、対熊中戦が見られる。

大正10年、対浦和中学との戦評には次のように記されている。「昨秋の復讐を為すべく、彼地に遠征す。本校軍必死になって戦ひしが」先制点を許す。そして、結局9対3でまたまた敗れるとある。

大正11年「関東大会」への出場の記事は「第1学期試験終了後、猛練習を開始し、7月22日より、本校雨天体操場を貸り受け合宿せり」とあり、その人員として左記の名があげられている。

増田先輩、平川龍夫、田中啓次、杉田一良、水村潤一、田代寛一、大河原雅雄、長又直、船津鞠吉、新井浩、伊藤善助。

以下その日付とともに記事を追うこととする。

27日 チーム結成

1	平川	5	田中	9	田代
2	長又	6	伊藤		
3	船津	7	浜野	補欠	水村
4	新井	8	大河原		平野

28日 抽選の結果、不戦1勝となり、金子、飯田両先生及び選手10名竜ヶ崎に出発、森田屋旅館泊。

29日 午前軽くウォームアップし、午後の試合に備ふ。相手は群馬県下の雄太田中学なり。——だが試合は「不利の立場に陥り挽回大いに勉めしも、遂に敗る」とある。

さらにこの時の思い出をつづった増田信千氏の記事を紹介してみよう。(一部省略「」内引用)

川中が関東大会に参加したのは「部員も多くなり本格的な練習開始3年目の大正11年であった」この野球部の創部というのは、いわゆる同好会的な部から剣道、柔道と同じ正式な部として認められた大正8年を示すものと思われる。これについては、本橋九蔵、小山辰吉両氏も一致して大正8年とされている。しかし既述したように、明治の33年には野球部の部名は見られ、大正元年にはすでに野球部に対する予算措置もされているので、当然正式な部として校友会に認められていたことがわかる。第19回卒の岩崎清録氏の寄稿では、大正5年から10年頃までが部の草創期となっており、それ以前は同好会的な部であったろうともいわれる。結局、大正元年から5年の間が不明ではあるが、これも校友会としては他部に比べ最高の予算を計上しているので、有名にして無実とは断じ難く、何らかの形で活動は継続していたのではあるまいか。

問題は明治の十数年の活動である。この記録（記憶にもとづく）が埋まれば川中野球史はさらに充実しかものとなろう。

「当時は竜ヶ崎中学が強く、この大会も竜ヶ崎中学で行われた」「大会は1回戦が不戦勝で、2回戦に関東大会の古豪太田中学と当って16対2（7回コールド）で敗れた。その時、平川主将は捕手のプロテクターを抱いてオイオイ泣きながら帰ったのを

覚えている。」

さらに田中啓治はこの大会参加について、「部長の飯田先生はとても喜ばれて、一同を集めて宣告」関東大会に出場させてやる、一同は小躍りして喜び「柔道場で合宿」するが「不運にも、出場日間近かになって下痢患者が数名出て」出発日、捕手の杉田出場不能となる。止むを得ず投手平川が捕手という具合に野手のポジション交替が急転行われ、先の平川の悲涙となるわけである。(以上川高倶楽部、「クラブだより」より)

またこの合宿練習に備えて、200円の募金活動が行われ、大会への熱意の昂揚がうかがわれる。

(岩崎氏)

大正12年、浦高主催県下中等学校野球大会が開かれ、対深商戦には4 A対2で勝、10月28日浦中を破った熊中と対戦するが「初め我が軍常に優勢に出でも最後の5分間にて同点5対5となり日漸く薄暮、暗くなりたる為に審判ノーゲームを宣告せられたり」

11月22・3日には、「前熊中コーチー小林晋助氏が、先に開催されたる浦高野球戦に於て我が野球部の他に優れたるを見て、我が野球部に興味を持たれ、又一は野球界の為、よきチームを作らんと欲して出張せられ労力を厭わず親切にコーチせられたり」とコーチ招請の記事がある。

なお大正14年の会誌には「野球応援歌」が3つほどあげられている。1番のみをそれぞれ転記する。

野球応援歌(その1)

1. 初雁城址の春秋を
臥薪嘗胆技を練り
光栄かたく心に誓ひ
勇み立ちたるわが選手

同(その2)

1. 猛球土をかんでとび
熱球高く雲に入る
行方追へども力なく
敵陣乱るるそのひまに
一塁、二塁奪ひつつ

進む味方の頼もしや

同(その3)

1. 大空高く気は澄みて
争覇の戦開かれぬ
血汐は胸にあふれつつ
壮なるかなわが選手

七五調の血気さかな文語詩であるが、詞そのものは典型的であって。どこの学校にも見られるような歌である。多分寮歌風に蜜声をはりあげて歌われたのであろう。

大正末の対抗試合の相手チームを見るとおもしろい。たとえば、東電鳳凰倶楽部、飯能実業団、三省堂、明治大学ホッケー部など。

2

大正15年には大正11年竜ヶ崎の大会以後、出場しなかった朝日新聞主催の北関東大会にのぞみ、1回戦不戦勝、2回戦優勝候補の栃木中学を(7-4)降したが、「田中(孝)投手が肩を痛め大久保一塁が代って健闘したが援助投手を欠いたため、遂に宇中に(5-1)惜敗するの已むなきに至った」(試合は八月初旬に行なわれた)なお、この年明大の岡田監督をコーチとして呼んでいる。

大正15年時のメンバーは左の通り。

(川 中)	6	岸田	9	石川
2 北野	3	田中(孝)	8	平岡
5 中里	7	安田	補欠	田中(信)
1 大久保	4	島田		山本

昭和4、5年に川中は朝日新聞社主催北関東大会で「大会の彗星」と呼ばれるような活躍をしている。

当時は部長、監督が野球の采配を振るうということではなく、常に大学チームからコーチを招きチームの強化をはかっている。明治大の中村、銭村、小林氏らの名前が見られる。

昭和初年から5年にいたる年月は、川中野球部の基礎固めの時期といってよいようである。昭和5年川中野球後援会、東京日日新聞社の主催・後援にな

る第1回全関東選抜野球大会が行なわれ、つぎのよ
うな成績を残している。

川中15A-10豊実
川中30-11深谷商
川中5A-2横浜商工実
優勝 川越中学

ちなみにこの年度の成績は42戦5敗1分であり、
この抜群の成績が昭和6年春の甲子園選抜の要因と
なった。

昭和6年、川越中学選抜大会へ出場。感激を伝える
記事を転載する。

「我が野球部に創立以来の福が舞い込む。突然2
月14日我等を驚嘆せしめた快報東日より来る。それ
はシーズンの魁として4月1日から大阪甲子園で
花々しく開会される東日、大毎主催の全国中等学校
選抜野球大会に見事関東の雄者と折紙をつけられ推
薦の栄誉を勝ち得たことだ」

この栄誉のかげには部長飯田先生の熱烈なる指導
のあったこと、先輩の協力があったことなどが併記
されている。

さらに特筆すべきことは、出発前日(3月24日)
最後の猛練習を「球界の元老飛田穂洲氏より寒風砂
塵を巻く中に受け、意気頗る振った」とあることだ。

甲子園大会では橋本主将が宣誓の栄誉をになわれ
たが、試合の方は中京商に惨敗(11-0)あらため
て全国レベルの高さを思い知らされたという。

埼玉はいうに及ばず、関東地区の野球はまだ全国
レベルに達していなかった。“井の中の蛙”この現
実を知った川中は、なお一層の練習にはげむことにな
る。

なお選抜出場決定の時は、大毎の飛行機が飛来、
空中より出場決定と選手氏名をのせた号外が川越市
内にばらまかれ、興奮した市民の熱気はいやがうえ
にも盛りあがったということである。

このあと川越中学野球部は黄金時代を迎えるに至
る。県大会ではことごとく川中が優勝。昭和6年の
記録を見ると

松 中	0	0	0	0	0	0	0	0
川 中	0	1	0	3	5	5	1	15

(7回コールド)

(川 中)	2	綿貫	7	森山
5 奥富	1	熊谷	3	伊藤
4 野本	6	粕谷	8	久米原
9 斎藤	6	横関		

この時代の投手・熊谷は投打にわたって関東一の
実力を以ていたろうといわれる。昭和6年時の監督
は物理教諭保泉海実先生であった。

ついで浦中と戦い川中13-10浦中と乱打戦の末勝
ちをおさめ、北関東大会に進んだが、甲子園への道
はとどされた。

以後昭和9年まで県下優勝はつづく。準決勝浦中
との戦いは(昭和9年)延長10回表スクイズバンド
で4-3とからくも勝ち、決勝では豊実と戦い、川
中23-1豊実と楽勝。メンバーの通り。

(川 中)	1	朴	6	増島
5	岸野	4	平岡	P . H 三上
7	小峰	2	大塚	6 浅野
8	斎藤	3	木村	9 高橋

本塁打=平岡、三塁打=小峰、二塁打=朴2、斎
藤、平岡、大塚

しかし甲子園への道は仇敵高崎商業によってはば
まれてしまう。この当時県下の三強は川中、浦和、
熊谷、Bクラスとして豊岡実、不動岡、春日部があ
げられた。

さて、この記録からおとせないのが伊丹監督のこ
とだ。伊丹氏は長い間神宮外苑長としてその職責を
果たされたが、又川高野球の恩人でもある。

日清生命時代、早大卒業間もない氏は、野球部で
鍛えた精神力で業績日本一をあげたことがあるそう
だ。氏のコーチ(監督)としての来校については、
日清生命の上司が飯田先生と親しく、その口ききで
勤務終了後來校、コーチされたということである。
コーチ2年目には川越に家を構えられ、選手育成に
専念されたそうだが、来校時には選手はすべて正門
に整列して迎えた。

昭和6年の選抜大会出場、県大会の優勝と川中野

球はまさに盛運を迎えていた。この時、かつての花形早大選手伊丹氏を迎えたのだから、市民の熱狂はすさまじく、「東京から川越への道のりは遠い、ぜひ川越に引っ越してもらいたい、家を一軒提供するから」と強引に伊丹氏を川越に連れて来たとのことだ。

監督をされたのは足かけ三年、丸二年の短い間であったが、早大野球の神髄は安倍－飛田－伊丹というけつがれており、その指導は記述についてよりも精神のあり方そのものについてのほうが多かった。

肩を抜いた朴投手が痛みに耐えながらピッチング練習をしていると、突如雷のような大声がふっかかり、キャッチャーの大塚をのかせた伊丹氏が素手のままで、ホームベースの前方にすわって「さあ投げろ」と身構えた。「お前にはこれで十分だ」

肩の痛みに耐えながら練習している朴選手のことを承知のうえである。

「くそっ」朴は怒った。おれの球を素手で、それもホームベースより前で、屈辱感に顔を紅潮させ伊丹氏の顔をにらみつける。やせても枯れてもエースピッチャーだ、朴はワインドアップするや、伊丹氏のグローブのような両手目がけて思い切り投げ込んだ。ピシッ。肉の音がして白球は伊丹氏の両手におさまっていた。

「よし、その調子だ」伊丹氏の顔は仏のように笑っていた。こんな形で伊丹氏は野球の精神、白球にかける魂のありようを教えていった。精神力に裏打ちされた時、力量は飛躍的にのびる。選手たちはぐいぐい力をたくわえ、伸ばしていった。肩を抜いたままの朴投手はこの夏、高崎との一戦で1－0と惜敗はしたものの、見事な好投を示したのである。

余談にわたるが、綿貫、朴（後の家村）氏はのちプロ野球創設期の東京セネターズに入団される。埼玉のプロ入り選手は、浦中の山崎氏を入れて三人のみだった。

川中野球部の黄金時代は、この伊丹、飯田先生によって築かれたといって過言ではあるまい。伊丹氏は9年秋川中を去られた。

野球部（いやこの際は川中というべきか）にとつての痛恨事は飯田先生の訃報であった。昭和10年5

月4日のことであった。

左に弔辞の一部を転記する。

本校教諭飯田亮先生、痛ヲ以テ昭和十年五月四日溘然トシテ逝去セラル 嗚呼悲シイ哉。

先生大正五年東京帝国大学国文科を卒業セラレ同九年八月本校ニ職を奉セラルルヤ爾來実二十有五年精勵格勤一日の如シ 此間高邁ナル識見ト精練潔白一点ノ私心ナキ資性トヲ以テ力ヲ子弟ノ薰陶ニ注キ加フルニ野球部發展ノタメニ身ヲ致サル（略）本校今日の隆運実ニ先生ニ負フ処最モ多シ今遽ニ幽明処ヲ異ニシ白玉楼中ノ人トナル悲痛惋惜ノ至ニ勝ヘス

茲ニ謹ンテ哀悼ノ意ヲ表シ弔詞ヲ捧ク

昭和十年五月六日

埼玉県立川越中学校長大谷徳馬

次に生徒の弔詞を紹介する。前半部は省略する。

先生カ本校ニ奉職ナサイマシタノハ大正九年八月 当時未タ名モナキ我カ野球部カ今日関東ノ雄者トシテコノ赫々タル名声ヲ得マシタノハ十有五年一日ノ如ク熱誠極リナキ先生ノ御指導ニ外ナリマセン 而モコノ光輝アル伝統ノ益々發揚セラレントスルニ当リ遽ニ先生易簣ノ悲シミニ遇ヒ真ニ我等一同指針ナキ航海ノ如ク茫トシテナス術ヲモ知リマセン（略）コノ哀悼コノ思慕ノ情ハ驅ッテ我等ノ血トナリ熱トナリ部員一同粉骨碎身一意多年ノ御恩顧ニ報イ奉ラネハナラナイト固ク誓フ次第デアリマス（後略）

埼玉県立川越中学校野球部総代

朴 相憲

なお朴（現家村）相憲氏は「慈父 飯田先生」という題の思い出を記されている。その概略を記してみる。

（概 略）

先生はどんな風の日、どんな寒い日でもグラウンドの片隅に立って監督された。選手の一人一人にそそぐ目は慈父のようにやさしく、しかし厳しい光も宿していた。

一人肩をきたえる練習をして帰ろうとする私に、先生は、その宿舎から使いをよこして呼びよせ、食事をさせ、風呂に入れて帰したりした。授業中

の厳しい先生の姿勢の一面に父親のような温かさがあった。

伊丹さんが来られたのも先生の人格の大なることによったものだろう。伊丹コーチは「甲子園に出場して部史に華かな1頁を飾れ、飯田先生のような部長さんは日本全国どこを探してもいない。日本一の部長さんだ」と選手を激励された。

練習を終え、自宅へ帰る選手一人一人に「腹をこわすな、寝冷えするな」と言葉をかけられ、選手のことを一時も忘れることがなかった。が、悲しいかな「朝日」の大会には、際どいところでいつも涙をのんだ、先生のお心はどんなであったろう。

と結んでいる。

また岩崎氏はこんな思い出話を語られた。

飯田先生は実に生徒の面倒見がよく、いつも生徒のために月給をはたいていろいろな援助をしてくださった。そのため月末にはサイフは空っぽということもあった。生徒の話も親身になって聞かれ、多くは語られなかったが、その暖かい気持ちで生徒を十分抱ようされていた。

また、国文学にも造けいが深く、子規研究にはげまれ、さらに筑前琵琶の本も残されていることは、岡部一雄氏によって紹介された通りである。

以上紙数の関係で昭和10年からのチームを紹介してみよう。

(昭和10年)	(昭和13年)	(昭和14年)
7 岸野	5 清水	6 中里
4 増島	4 中里	4 山中
2 大塚	6 松崎	2 牛窪
1 朴	2 牛窪	8 菅野
8 会川	7 菅野	3 山崎
5 烏田	1 会川	1 中沢
9 山崎	8 大野	5 小島
3 佐々木	9 渡井	7 烏田
6 浅野	3 山崎	9 渡井

昭和16年、日本は第二次大戦に突入した。中等野球の全国大会はこの年から5年間空白の時を迎える

のである。これは主に生徒を居住地ち足止めするという政府の政策からとられた措置であった。

3

昭和21年夏の大会で、川中は3回戦に進出しているが、浦和中に15-3と大敗している。以後22、3、4年と戦績の振るわない大会を迎えている。監督は家村氏が退き、代って山本氏が就任（昭和23年）されている。

山本氏は立教大学から東鉄に入り川高黄金時代を築かれた大先輩でしる。熊谷、綿貫、家村氏とつづく強力チームの主将としてもその活躍はめざましいものがあつた。

氏は東鉄に入ってもその素質を発揮されている。当時の東鉄（国鉄東京鉄道局）は今日のノンプロのはしりで、六大学で活躍した選手が入社後、野球選手として在籍している。戦後は県野連で福永会長のもとで審判部長として職責を果たされ、川高では家村氏のあとを受けて監督もつとめられた。川中時代5連覇の立役者であった。その2年後輩には綿貫氏がおられる。

綿貫氏は家村氏と共にセネタースに入られ、いずれの先輩も川中黄金時代の名選手である。

昭和26年度春季関東大会予選では、1回戦対鴻巣高2-0敗、夏季大会では準々決勝で対浦和商1-5敗となり、全成績（含練習試合）13勝8敗、1分と記録されている。

昭和28年、新学期を迎え「大先輩であられる土屋先生が御着任され、野球部の指導面を担当されることになった」と報じている。この年、行田高校との因縁試合で球史に汚点を残すこととなった。7月23日、雨の降る大宮高グラウンドで再試合が開かれた。試合の出来る状態ではなかったが、5回まで進行、川高は5-1で行田高をリードしていた。5回裏、降雨ますます激しくなり、試合はたびたび中断したが、審判は継続を命じ、不運にもこの回5点を入れられ6-5と逆転された。この間のことを埼玉高野連30年史は次のように報じている。

「川越高校対行田高校、この試合は朝からの雨で、とうてい試合の出来る状態ではなかった。まるで水の中、田んぼの中の試合だった。開始する

前、両軍と審判員の間には約束が出来、この雨の中開始するのなら9回までは必ず続けるとの事で試合は開始されたものであった。ところが5回終了と同時に審判員はゲームセットを宣告
審判員はさっさと帰ってしまった。

翌年、この件の反省に立って高野連では7回終了でなければ試合は成立しないことに決った。

昭和29年度、川高は夏季大会では川農、不動岡、熊谷、浦和商を連破して優勝、南関東大会では国府台を敗って準決に進出したが、千葉商に4-1で敗れている。この年度の戦績は練習試合をふくめて21勝9敗。

このあたりの戦績を島野昌甫氏の記録でたどってみよう。

「29年実に18年振りの県制覇、30年準優勝、33年記念大会では甲子園目前での惜敗」この時の記録は大宮高6-0川越高メンバーは次の通り。

(川 越)

9 栗原	3 古屋	1 吉田
6 北野	4 高橋	P.H 横田
8 石井	4 相良	5 杉田
7 鈴木	P.H 山崎	
2 正木	1 川辺	

この記念大会は、大宮工との2日続きの延長戦——1試合目は延長18回2-2、2試合目は2-2で延長、結局3-2で勝ったが、この時の疲労が残り、決勝は前記のスコアで敗れている。監督は島野氏であった。

氏は昭和53年度の川高倶楽部発行の「クラブだより」で小杉先生の思い出にふれ、後援会長としての氏がいかに野球部に貢献されたかを記しておられる。

さて翌34年、川越高校野球はついに念願の甲子園出場を果たすのである。時の監督、家村相太郎氏。氏は当時を顧りみられ、次のように話された。

選手の平均身長162センチ、いうまでもなく小柄な選手がスタミナ不足というのは常識。いかに短時間のうちにゲームをこなすかが課題であった。そのために、打たして取ることを心がけた。当然守備練

習は念入りにする。守りのチーム作りである。一点差でも勝ち勝ちである。

当時の最強校は大宮高だった。そのバッティングは群を抜いていた。大きい飛球は野外を襲う。しかし野手間を抜くか、スタンドに入らぬ限り点になりはしない。こういうチームは小技に弱い。バントで崩すほかない。作戦は図に当たった。

川高はこの大会で大宮を破り、すっかり自信をつけ、夏の大会にのぞんだ。川高は春日部、大宮工、川越商、鴻巣をいずれも僅差で破り西関東大会へ。代表決定戦では山梨の甲府工と対戦、2-1の接戦で破り甲子園出場が決定した。

(川 越)

4 内沼	9 島本	7 宮根
6 近藤	1 吉田	5 横田
8 杉田	3 飯島	2 高野

以上が優勝メンバーである。

なお甲子園での戦績は鎮西に3-1勝、高知商1-0で負。敗れはしたが、強豪高知商を相手に互角の試合を展開したことに大きな拍手がわいた。

翌年は準々決勝で伏兵所沢に破れる番狂わせで涙をのんだ。以後夏の大会では準々決勝まで進出しながら進学校の悩みが徐々に表面化し、3回戦で姿を消すことが多くなっていった。41年、1回戦、42年準々決。43年3回戦と3回敗退がつづくこととなる。

監督は目まぐるしく変った。家村—山本—家村—土屋—大久原—宮根。特に現監督宮根氏は大学を出ると直ちに川高に赴任、受験校として弱体化しつつあった川高野球部を強化、再建し直し、選手育成にも独自の方法を創案し、53年度秋季大会にはベスト8入りを果たした。一時11名になった部を総勢38名のチームに仕上げている。

川高野球部については、書きはじめると一冊の本が出来るとの材料があるが、紙幅の関係もあってこのあたりで筆をおくこととした。

重要な先輩、お世話いただいている方々についてなるべくふれるようにしたかったが、それもかなえられなかった。おことわりしておきたい。

なお蔭で川高野球部のために尽された薪屋の遠藤さんその他大勢の方々のおられたことを付記して、この記録の結びとする。

(文責 顧問・森光真幸)

草創時代の野球部

旧制19回卒 岩崎清録

私の在学は大正5年から10年3月までで、校長は服部、古賀、岡田の3先生3代に至ります。当時大正7年頃までは野球部の対抗試合は全く無く、無かったというよりも、県下のどの学校でも許可されなかったのではないかと思います。この頃は寄宿舎全盛時代でしたから、寄宿生の紅白試合か、又は通学生組との混成チーム試合でした。当日は動員をけなくとも、多数の生徒が運動場のクローバの上に、思い思いに陣取って楽しんで観戦していました。豪球の前田潔さんと、軟投技巧型の矢部四郎さん両投手が対照的であり、審判は一人で球塁審をやっていた勝田実さん。勿論ユニフォームなどの揃いは無く、中学生の草野球といった恰好でした。

大正8年、大塚秀仁、小林茂雄、中島尚一郎さんの呼びかけで、チームの編成が出来、野球部ここに始まると言えると思います。部長は東京高師出身の西村真先生でしたが、高師のサッカー選手だっただけに、赴任当時は川越にサッカーを普及させる意気込みだったと、述懐されたことがありました。このあたりから、放課後の基礎練習が始まりました。当時飛行船雄飛号に因んだ、所沢飛行場チームの雄飛クラブを、本校グラウンドに迎えたことがあります。それも平素の練習の成果を知りたい為と、暗中模索の野球からの脱皮をはかりたい為とで、早急に話しが進んだわけであります。尤もこれを迎える当校は、独乙文字のKの一字をつけたユニフォームは着ているが、スパイク靴の使用は全員ではないといった具合でしたが、とにかく対外試合は恐らくこれが嚆矢だったことを思えば、正に画期的であり野球部史の第一頁が始まったと言えましょう。この試合には大塚、中島の5年生の外、私を含めての4年3年2年の全員13名でした。この頃は、染織学校の校名だった

工業校では野球は始めてなく、県内では本校の外は、浦和中、熊谷中ぐらいのもので、埼玉師範、粕壁中、不動岡中などはどうだったのでしょうか。大正6年から始まった県下中等学校連合体育会には、勿論野球試合などなく、学校スポーツとしての野球が一般化されるには、ほど遠い微々たるものだったと思います。昭和43年の全国高校野球選手権大会埼玉県大会の出場校56チームを数えますと、何んとも今昔の感を深くします。

この頃の大学野球は、早慶黄金時代で明治がこれを追うといった頃でしたが、一高の内村裕之投手が早慶を連破したことが、球界のビッグニュースになり、雑誌野球界の表紙を一高の投手の写真が大きく飾った時代でもありました。

これも大正9年だったと思います。それは初めて校内を出ての試合をやったことです。私と増田君の二人で郭町の岡田校長宅を訪ね、飯能への遠征試合の許可をいただきに伺いました。この時も校名を表に出さないという条件があったように記憶しています。相手は飯能実業団でしたが—(実業団チームは県内では稀であって)—試合時間が長引いて、全員揃って川越へ帰れない事態になりました。飯能の自転車店から借りられる台数に限りがあった為、一部は飯能の大河原君宅にご厄介になりました。自転車組は飯能から入間川に出て、ここで西武線の終電車に乗るという芸当をやったわけです。

川越では、野球は本校だけだし、対外試合は大正8年からなので、野球試合の経験者も極めて少なかったわけです。ですから川越周辺に野球チームなしといったわけです。

大正9年11月、浦中から転校の神崎君の斡旋もあって、同校との試合があり、これ等が好い刺激となって野球の急速な勃興となりました。雄飛クラブの時は本塁はグラウンドの東南隅でしたが、その後略々現在と同じようにベースをとりました。この時私は主将でしたが、明石中学から転校してきた古屋重延君を得て—(雑誌野球界の明石中の記事から同君のことを知る)—それに大河原敬、増田信千、本橋九蔵、笹田泰治、杉田一良、田中啓治、大河原雅雄、桑島稔、守屋秀夫、加島仕郎、平川竜夫部員を

擁して、初めての対抗試合を持ったわけでした。部員の熱意、試合の積み重ね、それに大友金次郎部長先生の熱心さによって、対外試合を持てるようになったのでしょう。

練習には村本猶太郎先生がその長身を度々グラウンドに現はされて、ノックをして下さったのも懐かしい思い出であります。何しろ新聞紙上にスポーツ記事の載るのも極めて少い頃だし、川越では本校だけの野球部ですから、解説書を読んでの研究ですし、シートノックやスライディングの方法からして苦心したものであります。その後水村潤一、浜野清吉、渡辺鞆吉、杉浦要次等を擁する部にまで成長しました。当時の生徒定員650名のことを思えば、部員20名近いのですから、本校野球部の基礎これで堅まると、敢て言えると思います。

やはりこの当時ユニフォームの文字が一時KAWACHU だったのから、現在も使われているKAWAGOE の7字に改まり、総ての道具器具類なども完備しました。

私が卒業した大正10年には、茨城県竜ヶ崎中で開かれた夏の関東大会に、浦和熊谷の両中学が初出場しています。本校はこれに幾分遅れて、やがて明大の岡田源三郎中村峯夫コーチ時代、飯田亮先生の部長と伊丹安廣氏の献身的コーチ時代、立教のコーチ時代と、幾変遷を重ねて臆て花開いて、早大慶大法大立大に又幾多の高専校に、ノンプロ、プロ野球に、地元球界に等々と数多くの選手を輩出していきました。それと並行して選抜大会出場、臆て甲子園大会出場と、それを想いこれを考えますと感慨無量のものがあります。

なお草創時代に忘れることの出来ない人に、高沢町の綾部洋品店の主人があります。この方に審判は殆どお願いしていました。

飯田亮先生について——先生が本校に着任されて最初に担任されたのが私達の学年であり、お住いになられたのが、私の住んでいた郭町の家直ぐ前の二階家でもありました。それで先生の温顔には、朝夕接することが出来ました。先生は国文学の權威藤村作博士の愛弟子で、当時から琵琶歌などの作詩をしておられたと伺いました。私の持っていた『俳句

の作り方』の著者が飯田蘿月とあったので、そのことを先生にお訊ねするとやはり先生の著作とのことでした。お子さんのおられなかった先生でしたが、終始温和な親しい態度で、しかし田舎の中学生などに先生の学識の深さなど理解すべくもなかったが、先生にはそのようなものを感じさせ想わせるものをお持ちであった。

本校野球部に不滅の光を掲げ、ご自分を無にされてまで数多くの部員に何ものにも増して大きな力を与えられた先生は、蓋し偉大なる存在であると申し上げ得ると思います。

川越高校70年誌から

草創時代の野球部あとがき

旧制19回卒 岩崎清録

昭和45年4月発行の70周年記念誌に、私が在学した大正5年から10年頃までは、正に野球部の草創時代であるとの拙稿を寄せました。この記念誌の「70年のあしどり」の大正時代篇によると、「野球部の創設は本校創立の翌明治33年5月で、学友会組織のなかに既に野球部の名が存在しているが……端的に言えば有名無実に近いものであったかも知れぬ」との記載を見ることが出来ます。ちなみに明治38年度（1905年）学友会予算に野球部のが計上されたのがそもそも最初であって、野球用品購入費金27円90銭とあり、庭球部金18円、フットボール部金23円50銭となっております。

この学友会報は論説文苑等がまことに華かで、講話修学旅行運動会発火演習武術大会等の記事は豊富にあるが、野球のヤの字も載っておりません。ただ興味をそそられるのは、明治35年（1902年）6月本校生が誘い合せて同行7名、熊谷に遠足を試みて熊中生との交歓会をもち、寄宿舎に一泊する文中に同校の野球練習試合を見学したことが書かれてあります。これはおよそ野球に関する記事第1号でありましょう。—原文のまま—「ベースのマッチ始まる。ピッチャーの機敏なるキャッチャーの熟練せるベースマンの油断なき攻守ともいづれ劣らぬ達人とて見る余等さへ自ら肩こり気はり固唾を呑みて控えたる。

勝敗9回は勇壮活発の下に演じ終りぬ」と書かれてあり、その頃の野球なるものを推測する興味津々たるものがあります。

ひるがえって、学友会報に野球部記事の嚆矢としては、大正5年(1916年)に寄宿舎生10名と通学生8名での春季紅白戦で、結局5回までで9対8で終り、出場者は4、5年生のみで安打15の14、三振3の1となっています。次は今の天皇の立太子礼奉祝野球大会でこれも5回までで7対4、安打両軍とも15、四死球三振エラーとも零、盗塁10の5、このように春秋2回の校内試合が、次の大正6年にも5回までの変則試合で行われております。大正6年(1917年)学友全決算報告書に、野球部44円93銭、庭球部89円52銭、柔剣道部各々171円となっております。明治38年から大正6年までの12年間に、野球部の年間経費は17円3銭増となったに過ぎません。

70周年記念誌の「草創時代の野球部」の一文は、私の乏しい記憶のみを辿って寄せました。いま又その「あとがき」を書いておきたいのは——県高野連関係の方でも、川中は大正5年頃に部を創設したと思うと書いておられます。このように一般にはっきりしなかったのは、部の校外への動きがなかったためでありましょうか。私は改めて大正8、9年(1919-20年)の戦績を挙げると共に、先輩が野球への関心と愛着とをもって、春秋2回の校内試合だけにせよ、本校の野球を私達に受け継がせてくれたこと。そして今日までの伝統ある野球部の基盤を確固たるものにした、草創時代の部員の名を最後に挙げておきたいのです。

最初の対外試合は大正8年、所沢陸軍飛行場チームを迎えて、試合経過の記録は無いが敗戦に終り、次で大正9年(1920年)新チームにより、KAWACHUのユニフォームが初めて揃って新調され、対外試合は2学期からで4勝2敗の戦績は次のとおりです。

7月20日 対飯能実業団戦 於飯能

5 笹田	1 加島	8 宇野
6 平川	3 岩崎	9 浜野
7 増田	4 本橋	2 桑島

16:14 乱打戦で勝つ

9月19日 対飯実2回戦 於本校

11A:0 大勝

9月23日 対紅クラブ戦 於本校

6 平川	1 加島	8 大河原
7 古屋	3 岩崎	9 小山
2 増田	4 田中	5 笹田

15:3 大勝

10月3日 対埼玉師範戦 於本校

多年鹿島台上に覇を唱えた埼玉師範粉砕。21A:7

5年生部員3名で三塁打1二塁打3を挙げるの置きみやげあり。

11月1日 対所沢飛行場戦 於本校

前年零敗したぞ再び9:6で負。

11月14日 対浦中戦 於本校

県下最強の浦中を迎え、この日観衆約400。特に小学生多数の観戦あり、心強し。

1 加島	5 笹田	9 大河原敬
2 増田	6 平川	(9) 大河原雅
3 岩崎	7 古屋	
4 田中	8 杉田	

13:7 負

野球部長 大友金次郎先生

部員名一岩崎清録、古屋重延、大河原敬、増田信干、本橋九蔵、小山辰吉、羽島佑、守屋秀夫、笹田泰治、田中敬治、加島仕郎、平川竜夫、宇野四郎、杉田良、桑島稔、大河原雅雄、水村潤一、浜野清吉、杉浦要次、渡辺頼吉 以上

なお、県大会4連覇の黄金時代、昭和6年県下初の選抜大会出場、34年の甲子園初出場等について、また伊丹さん、ひとつばたご植樹のこと等は、適任のOBが書いてくれることでありましょう。飯田先生40年祭については、同窓会32号に既報されてあるので割愛します。

川越高校80年誌から

川 越 高 校 野 球 部 O B 会 会 報

平成 1 8 年 2 月 発 行 第 4 5 号

会 長 挨 拶

田 中 貞 夫 （高 7 回 卒）

OB 会の皆様、新年明けましておめでとうございます。

また、昨年は、OB 会の運営にご支援・ご協力を頂きまして、誠に有り難うございました。お陰様を持ちまして、無事に運営が出来ましたことをこの場をお借りいたしまして心より御礼申し上げます。

早いもので、私が会長に就任して 3 年が経ちますが、その間、OB 会の活性化のため、努力してきたつもりですが、中々成果が挙がらない状況です。

会の運営は、OB 会員の皆様の会費により運営しておりますが、会費の納入状況は、40%に満たない納入となっております。

また、年に 1 回の総会の出席状況につきましても、50 名に満たない状況となっております、非常に寂しい状況となっております。

私といたしましては、OB 会の趣旨である「現役選手への支援」「OB 会員の親睦」のため色々な形で OB 会の活性化に努めていきたいと考えておりますので、OB 各位のご協力重ねてよろしくお願いいたします。

最後に、川越高校野球部に多大なる貢献をしていただいた元監督の家村相太郎さん（中 3 4 回 卒）が昨年ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたしたいと思ひます。

また、OB 各位の今年のご健勝をご祈念申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。

「家村相太郎先輩を想う」

菅 間 昭 （高 3 回 卒）

昨年 1 0 月、9 0 年の長い生涯を終えられた家村相太郎先輩は、選手としてまた指導者として、私達野球部関係者が等しく誇りに思う輝かしい球歴の持主です。

朝鮮半島尉山生まれの家村さんは、朴相憲という名前で、昭和 8 年から 1 0 年まで 3 年連続して、川中野球部黄金時代のマウンドを死守し、北関東の強豪チームを相手に、甲子園を目指して大活躍をされました。

当時朴投手の人気は絶大で、街に行く姿を見かけた子供たちが「朴さんだ。朴さんだ」と後をついて歩いたものだったそうです。

反面、甲子園出場を期待されるプレッシャーも大きく、不調の時は黙って耐えなければならなかったし、最後の年、桐生中学との準決勝に惜敗した時は、申し訳ない思いで一杯だったと、直接ご本人から伺ったことがあります。

私達が、家村監督の下でプレーしたのは、昭和 2 3 年のシーズンでした。

家村さんは、現役時代に飯田先生や伊丹安広監督たちから教えられた野球への取り組み方を柱に、プロ野球や都市対抗での経験を交えて、懇切丁寧な指導を続けられました。

そのノックの技術は抜群でした。野手が捕球できるかどうかの際どい所に、計ったようにボールを飛ばす先輩の姿を今でもはっきりと思い浮かべることができます。

10月10日ご葬儀の際には、同期の大家敬三先輩からのお別れの言葉に、後輩たちの感謝の気持ちを加えた弔辞を田中貞夫OB会長がご霊前に捧げました。

そして、柩の中のご遺体を、思い出深いユニホームで覆い、幾度もその栄光を讃えた校歌の斉唱に後輩たちが声を揃えました。

家村さんは、野球部70年史の中で、「勉学する生徒には、スポーツを通じ人間として学びえるものがある」という言葉を遺されています。

現役の諸君たちが、この言葉の意味を噛みしめながら、それぞれの目標を定めて精進する姿を、これからも家村さんは見守って行かれると思うのです。

「家村相太郎先生（元監督）を偲ぶ」

宮根 七郎（高12回卒）

母校野球部の大先輩家村相太郎先生（元監督）が、昨年10月6日逝去されました。

多くのOB諸兄もご存じのように、先生は素晴らしい球歴と温厚・高潔な人格、尽きない野球愛とその造詣の深さをもって、長く高校野球の健全な発展に尽力されてきました。謹んで哀悼の意を表します。

先生の野球人としての礎を育んだ母校野球部の基礎は、慈愛・識見の豊かだった飯田亮先生（部長）とその知人を介して招かれた伊丹安広監督（早大OBで学生野球の神髄を極められた方）の熱心な指導によるところが大きかったと思われます。

この二人の偉大な指導者の薫陶を受けられたのち、野球経験を豊富に重ね、卓越した指導力を有した家村先生が再び母校の監督に就かれたのは、昭和33年9月私達が2年生の時でした。

先生は、学生スポーツのあり方や練習の取り組み方、技術の基本について、実に丁寧に

繰り返し話されました。また当初、「守りのしっかりとしたチームを目指せ」「好投手あるところに覇権あり」「栄光の影に涙あり」等話されたことを思い出します。

私達は、適切なご指導により10ヵ月後、先生の構想に近い、吉田（現姓丹代）投手を中心にした守りのチームに成長し、悲願の甲子園出場（夏の全国選手権大会）がかなえられました。伝統あるチームの一員として優れた指導者にお世話になれた幸せを心より感謝します。

昭和39年、私は、母校に奉職し、先生の後任監督を命じられて以来、長い間お力添えを頂いて参りました。

ここに、深くご逝去を悼み、先生のご功績とご指導に対して限りない敬意と感謝の念をささげ、ご冥福をお祈りする次第です。



甲子園出場50周年及び家村前監督を偲ぶ会
平成21年8月30日

高校野球を支えた人

川越高校を甲子園に 導いた

県立川越高等学校
野球部監督
故 家村 相太郎氏



1917年1月5日、韓国・京南生まれ。名前は朴相憲。8歳のときに家族で川越市に。中央小学校3年生のとき小遣いをためて買ったテニスボールでキャッチボールをしたのが野球の手始め。小学校4年生の時、家庭の事情で、10ヵ月ほど東京都中野区の尋常小学校に通った。そこで、早稲田の学生から教わったのが本格的な野球。5年生の秋、再び川越に戻ってから6年生まで「愛球」という少年野球チームの投手。よく勝ち、よく打つ。

小学校卒業を控えて、旧制川越中学の野球部長が家までスカウトに来た。父親は職人にしたくて工業学校に行かせたかったが、反対を押し切った。当時、川越中は強く、入学直前の1931年（昭和6年）春、埼玉県から初めて選抜大会に出場した。当時、号外といえど戦争と地震のときぐらいだったが、新聞社が飛行機を飛ばして、選手の顔写真入りの号外をまいた。

2年生で一塁手としてレギュラー入りし、3年から5年まで川越中野球部黄金時代のマウンドを死守。野球一筋の学生生活で北関東大会には毎年出場し、決勝まで勝ち進んだこともあるが甲子園には行けず。当時朴投手の人気は絶大で、街を行く姿を見かけた子供たちが「朴さんだ。朴さんだ」と後をついて歩いたそうだ。

卒業後、誕生間もない東京セネターズに入団。プロ野球選手としてのスタートを切った。4年半の契約満了後は、都市対抗野球で活躍。戦後、復活した新生セネターズに一時在籍。

監督暦は、50年と52年から56年までの天理高校が最初。54年に、初めて選抜に出場。

肺を患って川越に帰り、58年から川越高校の監督になって11ヵ月後の59年に夏の甲子園大会に初出場。体調は良くなかったが、後任がいなくて5年間務める。その後、習志野高や天理高でコーチ、天理大学でも監督を務める。晩年も母校・川越高校は勿論のこと後輩が監督を務める川越工、飯能、川越初雁、城西大川越高校を始め、アマチュア野球を指導してきた。

若き日、ノックの技術は抜群で、野手が捕球できるかどうかの際どい所に、計ったようにボールを打っていた。

指導法の一端を紹介したい。投手のボールの

握りを見て「君はその握り方以外で投げたことがありますか。あ、そう。では、こうした握り方、こうした握り方、いろいろ試してみてください。そして、君に最も合った握り方を見つけてごらん。」「彼の欠点であるここを治したいと考えています」に対して、「いや、あれは彼の癖です。いじることはないでしょう。その代わり、ここを伸ばしましょう」。決して押し付けず、そして、欠点に目をつぶり長所を伸ばそうとした。ある年、上級生に力の無いときがあった。ミーティングでの言葉はいつも「君たちは素晴らしい。今のまま育っていきましょう」と励ました。

以下、家村さんの野球論、高校野球感である。

野球は、お茶や生け花などの習い事と同じ。理屈ではなく、繰り返し繰り返しの経験を通して自分自身を発見していくものです。優勝というひとつの目標、希望と理想に向かっていく道中が人生と同じだと思うんです。行き着く過程で滑ったり転んだり、泣いたり、笑ったり、努力したり、歯をくいしばったり、それが生きている証（あかし）になります。

現在の高校野球は、技術はうまくなったし、テクニックもある。だけどパワーと持久力が足りない。まず走る。基礎練習を徹底的にやって、体全体バランスのとれた運動を続けなきゃいけない。

今の子は、楽をしてうまくなろうというんだなあ。ボール拾いや水くみはつらいだろうが、それを一生懸命やるということで何かを得るんですよ。それが学生スポーツの一番大事なことです。レギュラーになれるかどうかは別問題です。学生は勉強、スポーツを通して社会に出ていく基礎づくりの時期なんですから。

甲子園という目標がなければ励みにならない。試合だから勝ち負けはある。勝つためにはやるのは当然だが、相手を足払いしてでも勝てばいいというのは良くない。勝っても、負けても涙する野球をやれ、これが学生野球に一番大切なことです。



昨秋88歳で逝ってしまった。心からご冥福をお祈りします。

参考：朝日新聞（1992.1.13）・川高野球部70年史・川越高校野球部OB会報（第45号）



甲子園出場50周年及び家村前監督を偲ぶ会 平成21年8月30日



夏の大会激励会 平成7年7月9日

川越高校野球部OB会報



会長あいさつ

会長 青藤 栄（高22回）

盛夏の候、OB会の会員の皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

また、日頃よりOB会の活動にご協力、ご支援をいただきましてありがとうございます。

会の運営の中心となる総務担当は、市役所勤務のOBが主力となって仕事をしてくれています。感謝しています。木島副会長の定年も近く引継ぎをうまく行ない今後もよろしくお願いします。

5月18日、例年通り総会を開催、議題は全て承認されました。懇親会は41名がご出席くださり楽しいひと時を過ごすことができました。

選手権埼玉大会は7月9日に開幕です。今年も入場券の配布をします。応援よろしく願います。

さて、去る2月13日、宮根前監督（高校12回）がご逝去されました。大雪にも関わらず多くOBにご会葬にいただき、宮根先生の偉大さを改めて感じました。

先生は昭和34年の甲子園出場のメンバーです。小柄ですがレフトのレギュラー選手でした。日本体育大学卒業後、39年母校に奉職、56年までの17年間監督を勤められました。熱心な先輩諸氏の苦言も多く、ご苦労されたことと思います。

この間、夏は39、40、42年にベスト8、秋は46年、少数部員ながら決勝に進出しました。

50年から私は城西川越高校の監督になりました。6年間宮根監督とは数え切れないほど練習試合をさせていただきました。監督としての私の基になっていたことは高校時代の経験であり、宮根監督の教えでした。私は高校時代、全てのポジションを経験しました。ひとつの位置に慣れると別の位置に変えられました。不器用だから仕方ないかと思いつつも少し不満もありました。卒業後酒の席でそのことを愚痴ると「将来指導者になると思っていた。だから、色々なポジションを経験させたんだよ」との答が返ってきました。この様々な経験が指導者として生きたことはいまでもありません。

また、元監督谷巖さんも3月20日81歳の生涯を閉じました。谷さんには現役はもとより、マスターズチームの応援にも駆けつけていただきました。

ご遺族の方に心からお悔やみ申し上げ、先輩のご冥福をお祈りいたします。

皆様のご自愛、ご健闘をお祈りして挨拶といたします。

選手諸君の健闘を期待しています。

最後に宮根先生の好きだった『銀色の道』を紹介します。

『銀色の道』

作詞 塚田 茂

遠い遠い はるかな道は
冬の嵐が 吹いてるが
谷間の春は 花が咲いてる
ひとりひとり 今日ひとり
銀色の はるかな道

ひとりひとり はるかな道は
つらいだろうが がんばろう
苦しい坂も 止まればさがる
続く続く 明日も続く
銀色の はるかな道

続く続く はるかな道を
暗い夜空を迷わずに
ふたりの星よ 照らしておくれ
近い近い 夜明けは近い
銀色の はるかな道
はるかな道 はるかな道



OB会親睦ゴルフ 平成16年10月28日

川越高校で17年間監督を勤められた宮根七郎氏（高12回卒）が平成26年2月にご逝去されました。

宮根監督の後、野球部の監督を務めた舩橋博俊氏（高25回卒）鈴木和彦氏（高26回卒）と宮根監督と同期の4人のOBの方々に宮根監督との思い出等を書いていただきました。謹んでお悔やみ申し上げます。

宮根監督の思い出

高校第25回 舩橋 博俊

宮根監督追悼の特集に川高OBの一人として私も参加させていただきます。

練習や試合での思い出は他の方々も同じような経験をされているので、ここでは極力それ以外のことを思いつくままに書いていきます。

- ・入学前の春の合宿に参加した時、私は朝の新聞配達をしていた。監督に相談すると「他の人たちに迷惑がかからないように行ってきなさい」と言われ大変有難く思った。4時前に起床し先輩方の起床頃には配り終え戻っていた。その時にも声をかけていただいた。
- ・練習中の出来事だが、私のバッティングフォームを修正するため監督が肩や腕に触れて指導をされていた時、私のグリップがゆるみバットのヘッドが監督の頭にゴツンとあたった。一瞬監督の表情が変わったが怒られなかった。
- ・ある校内合宿の際、終了前日に私は食中毒をおこし夜中に激しく嘔吐した。翌日の合宿解散時に布団などの荷物とともにトヨエースで家まで送っていただき大きな迷惑をかけてしまった。
- ・2年秋季県大会、快進撃で決勝まで進んだが、私は当時怪我のため記録員としてベンチ入りした。監督からデータ集めを命じられ、次の対戦相手の試合を観て必死にメモを取り、帰りは監督の車（白のホンダN360、ナンバーは1478）に乗り報告をしながら川高に戻った。準決勝の春日部戦に勝利後の車中で「修学旅行に行くのをやめて関東大会に行こう」（関東大会の日程と修学旅行が重なっていた）と言われ「そうですね」と返事はしたが皆は修学旅行に行きたいだろうなと思っていた。決勝では熊谷商業に大敗し関東大会には行けなかった。（当時は優勝しなければ関東大会に行けなかった）
- ・夏の大会終了直後、用があり職員室に行ったとき担任ではなかったが進路の相談をしていただいた。私は自分の進路を決めかねていたが「教師になることも考えています」・「それならば・・・大学に行きなさい」ということで2ヶ月半ほどは本気になって目指した。結果的には断念したが監督の進路相談で私のやる気に火がつき集中して勉強できたことには大変感謝している。

大学入学後、時折川高の練習に参加した。その際大学の仲間（PL学園・浜松商業など）

やプロのトレーニング指導をしている教授から教えられたことなどを監督に伝えると、早速練習に取り入れていただいた。

- ・教育実習でもお世話になった。指導教官をしていただいたが「野球部の練習を手伝ってくれればいいから」と言われ、非常に気が楽になったことを覚えている。体育科の実習生というより野球部の実習生という状態であった。
- ・大学卒業間近の冬に同級生4人で監督宅を訪問し卒業後の報告などをした際に、お酒やご馳走などを振る舞っていただき奥様にも大変お世話になった。
- ・教師になった2年目（昭和53年）に監督から「もう川高から転任するかもしれないので、後任として来ないか」とお話いただいたが、教職経験も少なく野球部指導の経験もなかったので丁重にお断りした。
- ・新設校の坂戸西高校に赴任し（昭和55年）、野球部創設の準備の際、監督にお願いしたら、すぐに川高で使っていた道具類を大量にいただいた。新設校には道具を買う金など全くなかったので大変有難かった。
- ・その後再度「後任として川高に・・・」とお話しいただいたが、新設校での教育活動に精一杯取り組んでいたので、申し訳なく思いながら後輩の鈴木和彦先生を推薦した。昭和57年より鈴木先生が川高に赴任された。
- ・監督が新設鶴ヶ島高校に転任され野球部を作られた際にも坂戸西高とはすぐ近くだったので、練習試合で何度も手合わせをいただいた。ある試合後、選手の起用などを褒めていただき、指導者としても少し自信が持てた。
- ・教育局体育課を経て管理職になられてからも何かと声をかけていただいた。「管理職を目指してみないか。目指すのなら早いほうがいい」と指導いただいたが、私は「考えてみます」と中途半端な返答しかできなかった。退職間際の現在でも結果としての良悪は未だによくわからないままである。
- ・平成13年に私は漸く川高に赴任したが、その際も「他校での実績もあるのだからおまへのペースでやればいい」と言っていた。常時県大会出場、チャンスを掴んでさらにその上を目論み指導したが、病気のために3年と僅かしか川高での監督ができなかったことが悔やまれる。私が倒れた半月後に監督は態々グラウンドまで来られて、いろいろなお心遣いやお話を頂き大変感謝している。「俺も睡眠時無呼吸症なんだ。互いに気をつけような」との言葉に涙が流れた。
- ・東日本大震災の折、監督は大病を患い入院されていたと聞いた。睡眠時の話は以前から伺っていたので循環器の病気ではと思い躊躇いながらも監督宅に電話してみた。電話に出られた監督とかなりの時間話をさせていただいた。私の手術後の様子や普段の生活での留意点、精神面のコントロールなど経験したことを全てお伝えした。どれほど

監督のお役に立てたかはわからない。

長々と書かせていただいたが、まだ書き足りないほどである。監督と同様の職業を選び高校野球の指導者となり、多くの場面で監督の苦勞がわかることがある。無意識のうちに監督と自分を比較しながら教職生活を過ごしていたように思われ、宮根監督には心から感謝している。

あらためて宮根監督のご冥福をお祈りいたします。

追伸：宮根監督の通夜・葬儀の際に私は体調を崩し全く動ける状態ではなかった。監督にお別れもできていない。心を込めて「思い出」を書かせていただいたので、何とぞご容赦いただきたく思います。

宮根先生を偲んで

高26回 鈴木 和彦（元川越高校監督）

今年の2月13日に、前の川越高校野球部監督の宮根先生の訃報の知らせを受けました。「えっ」としか言葉が出ず、体調を崩されて入院されていた事を知らず、急な事で、すぐには信じられませんでした。OB会の席で、久しぶりにお会いした時の事が、つい先日のように思われます。

私は、昭和46年4月から、3年間、宮根先生にお世話になりました。甲子園出場のご経験もあり、投手を中心とした、守備のチーム作りを基本として、ご指導されました。また、当時としてはめずらしい、バーベルを使ったトレーニングも導入されていました。そして、ノックはとても上手で、まさにギリギリの所へ打球を打ってきます。内野手だった私は、必死に立ち向かっていったのを覚えています。

昭和57年4月から、宮根先生の後任として監督が決まった時、引き継ぎの場として、初音屋に席を設けていただきました。お酒をくみ交わしながら、『大人同志』の話をさせていただき、母校であるがゆえのご苦勞があることも知りました。先生のご自宅にも何度かお伺いし、ご子息の純君や奥さまに温かく迎えられたことも、良い思い出となっております。

お通夜の日、別れを惜しむかのような大雪の夜となりました。式の前に、先生のお顔を拝見させていただきました。安らかな表情であり、今にもノックバットを持ち「おい、行くぞ」と声が聞こえてくるようでした。きっと、これからも、川高野球部を見守ってくださることでしょう。

ご冥福をお祈りいたします。

宮根七郎君を偲んで

2番ショート 近藤育三良

昨年の12月に検査入院したとの連絡を受け、高野と見舞いに行った時、状況を聞き入院、リハビリで良い報告に行くものと安心した所、突然の訃報に良き友人を失って残念でなりません。

宮根七郎君（以下きみと呼ばせてもらいます）とは川越市内中学野球の同期でしたが、直接対戦した事はなかった様に思います。

川越高野球部へ一中エース吉田、城南中名内野手内沼、名細中エース宮根、初雁中エース私の4名が市内より入部し、甲子園を目指し、3年間基礎体力、技術を身につける為、基本練習を繰り返し、グラウンド整備、自宅でのボール縫い等先輩達の手助けを良く一緒にやりましたね。

2年の秋より新チームで君は、冷静沈着な守備でレフトのポジションを獲得しましたね。春季大会で優勝し、関東大会に出場、夏季大会は春に続き優勝し、西関東大会で初優勝し、念願の第41回甲子園大会に初出場することが出来ましたね。

甲子園の思い出の中で初戦鎮西相手に7回君の内野安打をきっかけに3点目が入って、初勝利した君は、当時の新聞での甲子園だよりの中で「喜んで暫くは、ボートしていました。校旗がセンターポールに上がって青空にくっきり浮かんだ時晴れ晴れした気持ちでした。」とコメントしていますね。

メンバー全員で校歌が歌えたことが大変うれしかった。君とは野球を通して甲子園という目標に向って一緒に行動した野球少年時代また、野球以外でも卒業後、約50年以上の付き合いで沢山の思い出があります。我が儘な所もあったと思いますが、気楽に付き合ってもらい有難うございました。

君のご冥福を心より祈ります。

最後の思い出

3番センター 杉田文男

2010年2月、いつものごとく宮根君とソバを食べようと電話を入れました。奥様が出られ、実は囲碁の最中突然倒れ緊急入院、即7時間に及ぶ手術、一命は取り留めましたが意識不明、戻ったら見舞ってくださいその時は連絡しますとのこと。一瞬目の前が真っ暗となり愕然となりました。

この時、何故か内沼君の奥さんに電話すると「何か起こったんでしょう」の一言。昨日、家紋の額縁の留め金、釣り紐の切れず突然落ちた 何か知らせたかったのではないか 予感を感じていた所との事。一緒に見舞いに行くことになりましたが、連絡が来るまでは「内沼君、

宮根君を助けて欲しい」の墓参り落ち着かない日々でした。

20日間の眠りが覚めたと聞き、即病院に駆けつけ、九死に一生を得たとホットすると同時に、内沼君本当にありがとう、本当に嬉しくて感謝感謝涙が流れてしまいました。

退院後は、リハビリに励み、回復の兆しも見え「明るく楽しく澆刺と」を合言葉に度々遊びに行き、雑談、春の桜見物、マスターズ試合の応援等、楽しい時を過ごしました。

昨年は暑い夏が続き体力消耗が激しく、年末の入院は体力回復を図ったものと信じておりました。

亡くなる一週間前もリハビリに付き合いながら、4月の桜の時期病氣平癒を願い、秩父観音巡礼の計画を話した矢先の2月13日、突然の悲報、誠に無念の一言でした。

4年前までは同期の中で一番元気だった宮根君。10人いた同期もついに4人となり、さびしい限りとなりました。しかし、君の温情と真摯な姿勢態度は生涯忘れることはありません。どうぞ安らかに眠りください。サヨウナラ

追伸 平成26年3月11日叙位叙勲 従五位瑞宝小紋章 宮根七郎殿

宮根君を悼む

5番ピッチャー 丹代（吉田）富保

高校野球の選手は夏の甲子園大会出場が究極の目標である。

思えば、五十数年前一九五九（昭和34年）年あの夏の時、甲子園大会に出場し、初勝利で校歌を聞くまでになった。

甲子園球児という宝を得た事は、宮根君を含めた我々の仲間は幸運でした。

高二的秋、OB 家村相太郎さんが監督に就任したときは、選手の平均身長が162センチの小兵チームで、出ると負け、為に冬の間、荒川の土手まで、毎日往復10キロを走りこみ、初手からの基礎練習で足腰を鍛えた。

この厳しい練習に我々が後ろ向きになるとき、宮根君は監督の意向を良く理解し、愚痴一つこぼさず、率先してチームを引っ張っていったことを思い出します。

そんな熱意を内に秘めた、人一倍きめ細やかな気遣いができる人だからこそ、その背景を基に、母校の監督を務め、体育会系であっても、高校の校長にまで登り詰めたのではないのでしょうか。すばらしいの一言です。

宮根君、72才は何としても早すぎる。さぞかし残念な思いだったでしょう。

いずれは、私も黄泉に行きます。その時は、多いに語らしましょう。 合掌

故宮根七郎君へ

8番キャッチャー 高野栄作

君が逝ってしまって淋しいよ。

あの頃、練習の帰りの電車には川越市駅で度々跨線橋を渡らず、山崎、杉田とともに、上り線に降り、下り線ホームに上がって乗っていたね。

2年の冬の練習は毎日のように上江橋まで走らされ、川原の砂場で色々やらされたね。俺の砂場でのかけ足の遅いのがずば抜けていたので、今も上江橋を通る時は見下ろして通過します。

山崎、近藤とともに、宮根も長い距離は強かったね。

俺たちより足が速く、肩も強いという者が途中でやめたからレギュラーになれたみたいなものだねという話をしたことがあったね。

だけど、県大会決勝鴻巣戦では、一死一・二塁で俺が四球で進めた後、宮根のスライズで点を取り、その1点で勝ち、甲府工業との決定戦では終盤、一塁ランナーの宮根が次の横田のヒットにエラーが絡み、一挙ホームに駆け込み2対1で勝ったんだよね。

また、甲子園でも鎮西戦の追加点も近藤の二塁打で宮根が一塁からホームまで走ったんだよね。

しかし、みんなよく守ったね。

投手吉田（丹代）は、捕り易いようにか、ミットを動かさなくてもよいように投げてくれた。守備もすばらしかった。

特に、川越工業戦ノーアウト1・2塁後のバント処理。三塁線上の小フライを捕り、セカンドに送りダブルプレーにしたのが忘れられない。三塁を踏み越していたのだから。

川越高等学校の甲子園物語（渋谷健先生） ～ OB 会報から ～

OB 会報 平成22年7月

川越高等学校の甲子園物語

渋谷 健

はじめに

昭和6年4月1日開幕の第8回全国選抜中等学校野球大会（通称・選抜大会）に、川越中学校（現・川越高等学校）が選抜されて出場した。川越高等学校の長い歴史の中でも、甲子園出場と言う名誉を担った第一回の快挙であった。

この出場決定の通知は、昭和6年2月14日に齎されたと聞く。長年に亘って川越中学校の野球部を愛する方々のご協力とご援助で、著名な伊丹安広氏（早稲田大学OB）を監督に招聘したことがその嬉しい話の始まりであった。大体、当時の選抜中等学校野球大会は、気候風土の関係もあってか、西高東低の傾向が極めて強く、これまで、関東・東北からは一校も出場する学校が無かったのを見ても分かる。

従って、この川越中学校の出場は、関東・東北地区からの甲子園出場の先鞭をつけた快挙であった。選抜大会は今日もそうだが、大阪毎日新聞社で開かれる選抜会議で決定されることになっているが、有名な伊丹監督の存在も、知名度からいって大きな影響はあったのであろう。

だが、組み合わせの結果は、不幸とでも言うべきか、実力校・中京商業学校に緒戦で当たることになった。当時の中京商業学校は、吉田投手と言う全国屈指の好投手を擁していた。この吉田投手は、甲子園三連覇の立役者でもあって、日本球界でも大活躍された方でもあり、大変なチームと出会ってしまったことになる。しかし、戦前、埼玉県からのこの選抜大会に出場できたのは、僅か三チーム（川越中学校一回、浦和中学校二回）のみだったことを考えれば、稀有なことで快挙でもあった。

しかし、試合は前述もした通りの、稀代の名投手吉田選手の前には如何ともし難く、僅か二安打、0対11で敗退してしまったが、出場できたと言う意義は大きいものがあった。

偶々、この大会の開会式で、川越中学校の野本主将が選手宣誓の榮譽を担えたことは、実に嬉しいニュースでもあり、誇るべきことでもあったであろう。これがその後の選手権大会出場に少なからぬ影響を与えたとすれば、川越中学校（川越高等学校）野球部史上に一段と光輝を放つことになると思う。

その後、埼玉県から選抜大会に出場するようになったのは、戦後からということから考えても、途轍もない大きな役割を果たしたと言っても過言ではあるまい。

これを契機に、当時強豪だった桐生中学校・高崎中学校・静岡中学校・千葉中学校等と言う名門校との練習試合が頻繁に行われるようになったと聞く。

その後、昭和7年から10年ごろまで、県内の大会では四連覇を成し遂げ、川越中学校野球部第一次黄金時代と呼ばれるようになった。この時期に、中心選手として活躍したのが家村相太郎氏（旧姓・朴相憲氏）で、二年生から五年生まで四年間、ピッチャー（中心選手）として大活躍、県下にその名を轟かせた。その方が、後に、選手権大会初出場（昭和三十四年）の主役（監督）となる訳だが、これら詳細については後述する。

甲子園（選手権大会）への道

昭和三十二年の夏の大会で、ベスト四に入って、南関東大会出場のチャンスを狙った。準々決勝であと一打が出ず、僅か一点差で敗退し、甲子園出場の夢はここで散ってしまった。その後、当時の監督・土屋教諭が一身上の都合で、その年度末で定時制に異動することとなった。

そこで、昭和三十三年度に入り、早速監督人事が急務となってきた。結局、現職教員の中には適格者がいないと言うことで、若手のOBを外部から抜擢しようということになり、昭和二十九年夏大会で優勝した当時の投手で、一橋大学に在学中の瀧野昌甫君を中心に、田中貞夫・並木英雄両君をサポート役をお願いし、集団指導体制で臨むこととなった。瀧野君は頭脳明晰、理論も確か、しかも優勝投手と言う実績もあり、選手を納得させるのには充分であった。ただ、就任早々の春の大会では、未だ態勢も整っておらず、この大会で優勝した熊谷高等学校に4-5で惜敗したが、先が見え、明るさが実感できたと言う印象であった。この時に二年生の吉田富保投手が初お目見えし、三年生で主戦の川辺投手を支えて頑張り、将来への期待を抱かせた。

吉田投手の懸命な努力（後で聞いた話だが、毎晩、瀧野監督の宿泊先の小杉歯科医院に呼ばれ、三十分以上のシャドウピッチングをさせられ、投法・指先に感覚を覚えさせられたという）の結果が、彼の投球技術を向上させ、スピードも増し、その剛速球は見るものがあつた。

この年は、選手権大会四十周年記念大会で、初めて各道府県から一校ずつ甲子園に出場出来るチャンスがあつたので、希望は湧いてきた。監督の方針としては、変化球の川辺投手を前半で、剛速球の吉田投手を後半に・・・と区分して投げさせる計画だったようだ。緒戦の、児玉高等学校戦は8-0で快勝、この辺から川越高等学校の属していたゾーンは雨に祟られて試合は延期が続

く。次の試合の羽生実業高等学校戦には14-0で蹴散らし、破竹の勢い、ついに準々決勝で宿敵・大宮工業高等学校と対戦、延長十五回戦えども0-0で決着がつかず、翌日再試合、これも延長十一回、やっと3-2で勝ったが、連日の熱戦と炎天ということもあり、疲労はピークに達していたようだ。一方のゾーンの大宮高等学校は天候に恵まれ、ゆったりとした日程で試合を進めてきていた。川越高等学校は連日の延長戦の翌日は、準決勝で川越工業高等学校と対戦、辛うじて2-1で勝ち、決勝に駒を進めた。休養充分の大宮高等学校との決勝戦、連戦と言うハンデを背負いながらの試合であった。結局、大宮高等学校に一安打に封じられ、0-6で敗れ去り、甲子園出場の夢は散った。

しかし、新聞等では「吉田投手の快投光る」の見出しが出るなど、吉田投手の力は本物になってきたように思えた。未だ二年生、来年が楽しみだ。

秋季大会はメンバーも一新し、雪辱を期したが、残念ながら準決勝で深谷商業高等学校に1-2で敗れてしまった。

ここで、一年間監督として貢献してくれた寫野氏が、大学の専門科目が多くなり、多忙を極め、学窓に戻ることになったので、後任の監督人事が必要になった。丁度、幸いと申したらよいのか、旧制川越中学校野球部OBで、嘗て県下四連覇の偉業に貢献され、その後プロ野球界で活躍され、都市対抗野球でも全国優勝、更に、奈良県の天理高等学校監督として甲子園出場と言う輝かしい実績を有して居る、家村相太郎氏（前述）が病氣療養のため、郷里川越に帰郷していると言う情報を入手した。

以前から面識もあり、尊敬もしていた方なので、早速お宅を訪問、母校の監督就任を要請した。ただ、療養中ということもあり、「ベンチに座っていて、無理をしない程度で指導して貰えれば」と言う条件を

出した。何日かお考えになったが、結果的には、監督就任を快諾していただき、秋季練習から指導してもらうことになった。「ベンチに座っているだけで」と言うお願いだったが、熱血漢の家村氏は、自らノックバットを持ての實踐指導には驚くと共に、感激し、お体に触らなければと心配もした。

いよいよ昭和三十四年に入る

家村体制の文字通りのスタートである。まずは春季大会だったが、地区予選では、豊岡実業高等学校を13-0で、次の飯能高等学校には5-0で何れも快勝して県大会に出場し、緒戦で、

大宮商業高等学校に1-0、準々決勝を熊谷農業高等学校に2-0で突破し、準決勝も大宮工業高等学校を3-2で降して、決勝戦に進む。宿敵・大宮高等学校を1-0で破り、輝く優勝旗を手にした。次いで、関東大会（甲府球場）に進むことができた。早速、家村効果が出てきたのかもしれないと思った。

関東大会では、甲府第一高等学校に5-2で勝利を博したが、次の試合が、東京代表の明治高等学校で、ここに0-1で敗れ去った。ただ、この明治高等学校が、関東大会を制覇したことで、自分たちの力も可なり有るとの自信を選手が持てたのは幸いだった。

家村監督の指導はソフトで、「よーし」「上手い」「その球」・・といったように、一つ一つ選手に励みを与える言葉を使う。人間誰しもそうだが、褒められれば嬉しいし、自信も付く。一方でノックはゆるい球を打つのだが、その位置が捕球の際グローブの僅か先を通るように打ち、「それもう一步」と呼びかけ、再度同じところへ打って、それが捕球できると「よく取れた。やれば出来るのだ」と言って自信を持たせ、次は更にその先のところへ・・といった具合で、守備範囲を広めるような指導に徹した。もともと投手力は抜群だが打力がもう一步なので、それなりに守備を鉄壁に・・という信念から行ったものと思う。

いよいよ夏の大会を迎えた。この大会はシードされ、二回戦からのスタートだ。春日部高等学校と対戦、これを10-0（七回コールドゲーム）で、三回戦では大宮工業高等学校を2-0（ノーヒットノーラン）で、四回戦では川越商業高等学校を2-0で、夫々撃破し、準決勝戦に進み、川越工業高等学校には2-0で勝利を収め、決勝戦に駒を進めた。対戦相手・鴻巣高等学校に1-0で快勝し、栄えある優勝旗を手にすると同時に次の西関東大会への出場権を得た。

吉田投手の好投は抜群で、全試合四十三イニング無失点、奪三振四十六個と言う大会新記録の金字塔を打ち立てた。守って勝つと言う家村監督の方針が実った結果だと思う。全試合を一人で投げきった吉田投手の存在があったればこそその成果であろう。不世出の大投手と持て囃されたが、成程と思わせる活躍ぶりであった。

全国の地区割り変更の年に当たり、本年度から実現した西関東大会（従来は南関東大会＝対千葉＝だったのが、対山梨になった）に臨み、山梨県代表の甲府工業高等学校と対戦することとなった。（従来は、各県四校づつの出場で争ったが、佐伯日本高等学校野球連盟会長の方針で、予選で敗れたものが甲子園に出場することは許せないと言うことで、この年は、各県一校となった）

理由は定かでないが、炎天下での甲府球場での開会式に、何故か埼玉県野球連盟会長の福永健

司代議士の挨拶が延々と続いた。暑さ最高の中でのこの行事に、選手一同はグロッキー気味、それが原因か、吉田投手も初めて失点し、結果的には2-1で勝ち、川越高等学校創立以来はじめての選手権大会出場が決定した。(これには裏話もあり、山梨側は予め福永氏の長演説を予測していたのか、整列した選手の大部分は補欠選手で、主力は涼しいところで休養していたと聞く)

当日のメンバーは。一番セカンド内沼、二番ショート近藤、三番センター杉田、四番ライト嶋本(二年生)、五番ピッチャー吉田、六番ファースト飯島、七番レフト宮根、八番サード横田、九番キャッチャー高野と言う顔ぶれであった。

甲子園出場決定と同時に、嬉しさを満喫しているばかりしては居られず、まして、現在のように新幹線が走っている訳でもない時期、大会(大阪)への移動手段の確保、宿舍の手配、資金の調達、応援グッズの整備等々難題が急速持ち上がっていた。選手やファンの喜びを横目で見ながら裏方作業は急ピッチで進めなければならない。そこで、甲子園常連校である宇都宮工業高等学校等にご指導いただき、最も効率的な方法はないか・研究やぶさかではなかった。それに、甲府からの帰路は私たち野球部は電車利用で楽だったが、応援団の方々は、未だ中央高速道路も無い時代、曲がりくねった細い道をバスで帰ると言うご苦労があったと聞き、申し訳なく思った。

栄誉を勝ち得て川越の戻った選手たちを驚かせたのは、予想を超えた歓迎振りであった。特に、川越市役所周辺では、ビルの屋上から紙吹雪の嵐が舞う中を歩くという快感、生まれて初めての経験であった。この嬉しさ、有り難さは終生忘れ得ないものであった。まさか、こんな歓迎を受けるとは全く予想していなかった。このことが事実として現出したのだから、驚天動地の心境であった。

ただ、学校当局も大変だったようだ。職員室でも、関根五郎治教頭を中心に、資金調達のためのプロジェクトチームを立ち上げ、生徒会長(新井幸男君)を中心に、応援のための具体的方策の研究に乗り出してもらった。ただ、当時の渡邊正紀校長は、ブラスバンド部の設置とか、校内放送施設の設置には、騒音が教育現場に相応しくないという理由で、許可してこなかったのが存在しない。これには応援団も困窮したようだった。結局は、当時の西宮市教育長さんが埼玉県のご出身ということを頼りに、西宮市内の高等学校等の協力が得られ、ブラスバンドの応援が可能になったが、殆どは学校から持参した太鼓三台が中心の応援だから、極めて寂しいものとなった。

諸準備も完了し、いよいよ甲子園へ向かう日を迎えた。川越市駅駅頭には多くの熱烈的なファンが見送りに集まってくれた。その中に、今春三月誕生した我が子(長男・文彦)を抱いた妻の姿

も見える。

新幹線などと言った文明の利器は未だ無い時代、東京駅から東海道線で一路大阪への長旅となった。川越高等学校に割り当てられた宿舎は、西宮市内のこじんまりした旅館、一応全員そこに落ち着く。この時期には、甲子園出場チームのスキャンダルを暴く傾向があり、種々のゴシップが伝えられていただけに、生徒たちの日常生活を見る部顧問である私の責任は重大であった。選手が練習に出かけた後、部屋を整理し、新聞記者等に指摘されないよう乱雑を改めておく。整理整頓に努める、これが結構大変な仕事であった。渡邉校長も応援のために来阪されて居られるようだったが、知人宅におられたのか、そこから直接球場へ見えられるので、普段の行動は把握できないような状態だった。

監督は対戦チームの練習風景を見て、戦力を把握する必要から、予め予告されていた練習球場に出かけたようだが、敵もさる者、別の球場を手配してそこで練習していたようで、見ることは出来なかった由、こんなところにも、早くも神経戦が始まっていた。

また、常連校はなんとも思わなかったと思うが、初出場校は驚きの連発。スポーツ用品会社からはバット類・バック類等が続々寄贈されるし、薬品会社からは栄養剤等が大量に、食品会社からは・・といった具合で、種々の贈答品で部屋は一杯になるくらい。この整理も私の仕事となる。

開会式を迎える。「川越」と書かれたプラカードを先頭に、堂々の入場行進。行進に参加している選手は勿論、観覧席で見えても感激したのだから、当事者たちは一生の思い出として残らだろう。

緒戦は八月一日、相手は九州の鎮西高等学校との対戦である。試合前に練習場へ行ってみると驚いた。相手の選手は屈強ぞろいで、投手の球は速く、バッティングは豪快、これでは勝利はなかなか難しいと思ったくらいだ。後で分かったことだが、この中に後で巨人軍で大活躍した末次選手が六番打者で居たことを知った。しかし流石はベテラン監督の家村氏、動ずるところ全く無し。「相手も高校生、普段の力を出せば勝てるよ」と。いざ、攻守を決めるじゃんけんで勝ったのに先攻をとった。普通、甲子園では九回裏の攻撃を心配し、まず守りから入るのが常識と考えていたのだが・・。それに対して、監督曰く。「相手が緊張して、落ち着かないうちに先取点を取ろう・・」と。

試合開始にあたって、監督から選手には、「最初は球が二つか三つに見える。それを思い切って振ると次第に落ち着いて、球が見えるようになる」と言っていたらしい。ところが、一回裏、

トップバッターの内沼が見事に左中間に三塁打。本人曰く。「最初から球が一つに見えた」とか、落ちていたのであろう。これを二番近藤四球、三番杉田のスライズ失敗があったが、相手側捕手の三塁悪投で内沼生還して一点、その間に近藤が三塁へ、杉田のスリーバンドスライズで近藤生還してさらに一点を挙げることができ、都合二点を先取することができた。

その後、五回裏、吉田投手が一点を許し、2-1となったが、七回、九番宮根のショート内野安打、一番内沼の送りバントで二塁へ、二番近藤の右中間二塁打で一点を取り計三点になり、後は吉田投手の好投で3-1で勝利することができた。スコアボードの上に揚がる校旗と「紫匂う武蔵野の・・・」の校歌を聞き、何とも言えない嬉しさと同時に、涙を禁じえなかった。こんなに感動を与えるものかと感じ、選手諸君や暑い中を応援していただいた応援団の皆様に感謝の念を強く感じ、頭の下がる思いがした。

参考までに、当日のメンバーを示せば、一番セカンド内沼、二番ショート近藤、三番センター杉田、四番サード横田、五番ピッチャー吉田、六番ファースト飯島、七番ライト嶋本（二年生）、八番キャッチャー高野、九番レフト宮根の諸君であった。試合終了後、帰りの阪神電車の車中で、応援団の一人が、「野球はお産と同じ。初産は苦しいが二番目・三番目は楽になるという。きっと近いうちに二度・三度と出場するよ」と大声で。周りに乗車している方々の目を気にしながら、私自身は嬉しく、また複雑な立場で聞いていた。

丁度大会中に大型台風が襲来し、試合は延期になるし、宿舍も海岸近くだったので浸水の恐れありということで戦々恐々だった。応援に来ていた生徒たちも、予定が次々に伸び、資金も不足し、同時に食糧調達に不便をきたし、引率の小川禎三先生が、私たちの宿舍に食糧調達に来られたくらいであった。聞けば、宿舍は道頓堀近くの大黒屋という旅館で、隣がキャバレーという繁華街だそうで、さぞ誘惑も多かったことだろうと想像されたが・・・。とは言え、私たち野球部も、逗留が延びれば延びるほど用意した資金が底をつく。「金送れ」と学校へたびたびの催促。きつと学校に残っておられた関根五郎治教頭以下、ご関係者は、頭を痛められたことであろう。申し訳ない気持ちと、これに応じてくださったご努力に感謝の気持ちで一杯であった。

やっと台風も去り、二回戦が行われたのは十四日後の八月十五日になってしまった。対戦相手は、高知商業高等学校、ここには山崎投手という抜群の力を持った選手（後に、法政大学で活躍後プロ野球へ）が居り、相当の強豪校とのこと。剛球投手の山崎を相手に、選手たちは大いに頑張った。時には得点できそうな場面もあったが、僅かなミスで得点できなかったこともあり、最

終的には九回、高知商業高等学校が当方のちょっとしたミスに乗り得点を挙げ、0 - 1で惜敗し、三回戦出場のチャンスを失った。この際、三塁塁審が、試合終了後、「実はランナーは三塁ベースを踏んでいなかった」と言っていた。審判としてこのようなことを言うのはどうかと思うが、それを見逃したこちらにも落ち度があったのだ。この時、相手側（高知）のスタンドからは、当時全国的に流行っていた「南国土佐を後にして・・・」（ペギー葉山）が鳴り響き、負けた悔しさも手伝い、今もってこの歌を聞くと、当時の悔しさ、残念さを思い出し、忘れえない曲になっている。

この甲子園出場を機に痛感したのが、学校にブラスバンド部の無いということであった。確かに、緒戦は、埼玉県ご出身の西宮市教育長さんのご厚意で、西宮市内の高等学校等の合同ブラスバンドの応援を頂いたが、次の試合には日程の遣り繰りがつかず、学校から持参の太鼓二～三個での応援という淋しさであった。何としても、この虚しさを防ぐためにも、ブラスバンド部を自前で持つ必要性を痛感し、部創設を心から願った。後に着任された西川好明校長の時代になって、待望のブラスバンド部が創設され、指導者として松本成二氏を迎え、いまでは県下有数のところにまで成長したが、今度は肝心の野球部が五十年間甲子園への道が閉ざされ、誠に残念至極である。

甲子園で活躍した野球部員に、何か慰労ができないかと考えた挙句、私の義兄（栗原敬）の勤務している会社（帝産オート）のご好意もあって、甲子園からの帰途、京都市内見物と五山の送り火（大文字山焼き）を見てもらう計画を立て、観光バスを仕立てて、ゆっくり市中の見物と私の知り合いの「ホテル松井」にご無理をお願いし、食事を楽しみ、そして有名な五山の送り火を觀賞してから東海道線で帰川した。春の選抜大会は昭和六年に出場しているが、夏の選手権大会は全くの初仕事、川越高等学校の歴史の中に燦然と輝き、残ることであろう。

帰校して暫くして、同じ年に甲子園に出場して大活躍した宇都宮工業高等学校の浜野監督から、郷土の市民を対象とした記念大会を行う計画を立てられ、その対象校としてわが川越高等学校を選んでいただき、宇都宮球場まで来てほしいとお話があった。喜んでこれをお受けし、宇都宮球場に向かう。先方の大井投手は、甲子園で大活躍した著名な選手だったが、こちらの吉田投手の好投もあり、接戦を演じ満場の観衆に喜んでいただいた。後日談だが、平成二十一年度選手権大会で準優勝した日本文理高等学校の監督が、その大井投手だったのも不思議な御縁を感じる。

その後、毎年のように今年こそ！と期待し続けて五十年、高校野球を真に発展させるには、川

越高等学校とか、浦和高等学校・熊谷高等学校といった県立の進学校が、何年にいっぺんかでよいから出場できれば大いに効果があると思うのだが・・

おわりに

平成二十一年八月三十日、甲子園出場五十周年記念式典（懇親会）を開き、往時を偲んだ。列席してくれた現役の諸君に、この思いが届けば幸いだとの思いが強かった。なんとか現実として実感できることを楽しみに・・。

（平成二十一年十一月記す）



渋谷健先生勲四等瑞宝章受章記念祝賀会 平成13年6月

■ 創立100周年の伝統校が親善試合（春日部高校との対抗戦）

11月14日 日曜日

1999年（平成11年）

発行所
埼玉新聞社
浦和市岸町6丁目12番11号
個別郵便番号336-8686
電話 代表048(862)3371~4
編集(直)862-3269~71
郵便振替 00180-2-20988

埼玉新聞

THE SAITAMA SHIMBUN

第19794号

（日刊）

©埼玉新聞社

1999

創立100周年の伝統校が親善試合

百年の伝統校対決は引き分け。今年創立百周年を迎えた川越高校と春日部高校の野球対抗戦が十三日、県営大宮公園球場で開かれた。現役選手とOBの活躍に声援を送った。

OB戦に参加したのは、両校とも六十人ほどの卒業生。イニングに年齢制限を設け、序盤は四十歳以上、中盤は三十四歳以上、終盤は二十九歳以下のOBが出場した。

午前中に行われた現役選手との練習試合は十一対五で春日部がまずは一勝。OB戦は両校とも「勝つことが一番の親善」「母校の校庭で練習した成果を出す」とやる気十分で臨んだ。試合は序盤、春日部が年配選手の活躍で五点をリード。

七回以降は川越の二十代選手が投打に春日部を圧倒し逆転、結局十一対八で川越が勝った。

「グラウンドに立つと

仲良く1勝1敗

OB戦は川越高、現役は春日部高

起こしながらブレし、ベンチとスタンドから盛んな声援が飛ぶ中、どの年代の選手も真剣にホー

ルを追っていた。昭和五十二年に春日部高校を卒業した元プロ野球選手でスポーツキャスターの青島健太氏は四番サードで出場。「タイムリーを打ってホッとしている。春高時代のチームメイトとプレーするのは卒業以来。楽しくプレーができた」と話した。

60歳代のOBも参加した川越高校と春日部高校の100周年記念野球対抗戦。13日、県営大宮公園球場



埼玉新聞 平成11年11月14日



創立100周年野球記念《川越高校VS春日部高校OB戦》 平成11年11月13日

飯田 亮先生記念碑建立80年祭

飯田 亮 先生の功績
— 記念碑建立 80 年祭にあたり —

野球部の創部は大正 8 年(1919 年)であるが、先生は大正 9 年からの在職 15 年間、まさに中等野球に大半を捧げられた生涯だった。大正 10 年の春、野球部長・監督に就任。時には私財を投じての情熱も、次の夏の甲子園大会前に無念にも急性肺炎で倒れた。

その教えそのものの象徴が現在校庭にある胸像碑といえる。胸像は 53 歳で急死された翌年の昭和 10 年(1935 年)11 月 1 日に OB、教え子の有志によって建立された。当時も今も公立校の校庭に一教師の胸像の存在は、まず例がなく、当局は猛反対したと聞く。

そして、その一番弟子と言える方が、故家村相太郎氏であろう。夏の甲子園出場時の監督だった氏は、グラウンドに入ると真先に碑に一礼した。教師の像は、野球部の父としてグラウンドを見守っている。

当時、川中の野球部は少ない部員でもよく頑張り抜き、先生の配慮で当時超一流の早稲田の伊丹氏などを招き技術向上は目覚ましく、県下の覇権を重ね関東でも有力チームに台頭した。

そして、昭和 6 年、見事春の選抜大会で甲子園に出場を果たした。

昭和 23 年、飯田先生の法要が、碑の建立 15 年を機に行われた。また、戦争から復員した先輩 OB と復活した現役野球部員との追悼試合も行なわれた。

記念碑の周辺整備工事に、明治神宮外苑のめいぼく「ひとつばたご」— 俗名なんじゃもんじゃ— の植樹をし、今日見事な成長ぶりをみせている。

昭和 34 年、夏の甲子園出場に際し、横田主将は「先生によって育てられた野球部の伝統を守り、高校生として恥ずかしくないプレーをしてきます」と語り、甲子園には飯田先生の写真を持ってゆき、ダッグアウトに飾った。

かつて投手で先生の教えを受けた家村監督は、その人柄をこう語っている。「毎日必ずグラウンドに来て私たち選手の動作を見守ってくれました。ボールやバットが足りない则自分の月給をさいて買ってくれ、当時 90 円ぐらいの月給だったと思いますが、野球部につぎ込んでたった 3 銭しか残らなかったという話さえあるくらいです。いま学生野球協会役員で有名な伊丹安弘さんを監督に招いたのも先生で、旧制浦和高校から教授にといわれても「川越が甲子園に行くまではどこにも行かない」といい、生涯を川越野球部にかけておられた。」と語っていた。

参考 (敬称略)

70 年史

川越高校野球部 OB 会報 (第 55 号)

球児を見守る碑

甲子園出場時の朝日新聞・埼玉新聞 提供

中 32 回卒 増島 良平

高 3 回卒 川合 敬三

高 3 回卒 川合 敬三

高 12 回卒 近藤育三良



記念碑建立80年祭 平成27年5月17日

世代超え 100年つなぐ



創部100周年の川越野球部は、南埼玉大会で紫村英敬監督(36)が初めて夏の指揮をとる。いつか母校の監督に……。現役時代の監督の存在が、いまにつながった。世代を超え、部にかかわる人々は途切れない。伝統校ならではのつながりが100年を支え、これからも支えていく。

川越 伝統の名の下に

下



練習試合でベンチで指示する川越の紫村英敬監督。川越市郭町2丁目

「試合後の監督の顔を見て、高校野球の続きがやりたくなったんだと思う」と話す紫村監督の原点は、18年前の2000年夏。川越の三塁手だった紫村監督は、頭上高く抜ける球をぼうぜんと見送った。埼玉大会3回戦の松山戦で九回裏、左越えサヨナラ本塁打を浴びた。試合後、部OBであり、「鬼の指導者」と恐れられてきた横田雅之監督の顔が涙でゆがんでいたことを鮮やかに覚えている。

「いつか自分も川高の監督に」と思い続け、教職を志すも教員試験は3度落ち、企業で数年間勤務。28歳で教員採用され、3年前



浦和西の横田雅之監督

に川越に赴任がなかった。3年間は野球部長を務め、今春監督に就任した。

当時の横田監督は56歳になり、浦和西野球部を指導しつつ、川越の部OBでつくるチームで自らも「マスタース甲子園」に出場を続ける。元高校球児が母校OBチームで再び甲子園出場を目指す大会で、15年に川越OBチームは40人ほどで

出場し、県大会を制覇。翌年の甲子園で一勝した。横田監督も投手として息子と参加。甲子園で勝ったときだけ演奏される「凱歌」が、応援部OBらによつて甲子園で披露された。「この年で甲子園の土を踏み、一勝できたのはOBの層の厚さがあってこそ。本当に川高でよかった」

部OBは現役部員も気にかける。

紫村監督の同期で投手だった結城敬晶さん(35)は年数回、練習を見に来る。

「育ててくれた仲間や先輩がいた部に、何かお返ししたい」と思うからだ。

左投げの結城さんは、現役時代に練習を見に来た三つ上のOBにスクリーンボールを教わり、決め球とした。いまの部員で左腕金井拓真君(3年)は、結城さんからスクリーンボールを習った。それを派生させたチェンジアップが決め球だ。「OBから戦うためのヒントをもらった。夏に勝って、なんとかそのお礼をしたい思いがある」

紫村監督は今後、定期的にOBチームを練習に招き、現役部員と交流させる考えだ。「多様な考え方を先輩から学び、部員たちが自ら考えて最適なものを吸収していったほしい」と期待する。世代を超え、これからもつながっていく。

川越の初戦は7月8日。紫村監督は「喜びを感じつつ、3年にとっても、自分にとっても悔いのない夏にします」

(今回で「地域とともに」編は終わります)

川高マスターズチームの足跡 (2007～2017)

○川高マスターズチームの結成

マスターズ甲子園とは、全国の高校野球OB/OGが出身校別に同窓会チームを結成し、甲子園出場を目指すというもので、2004年に第1回大会が開催されました。メンバーは34歳以下（ヤング）と35歳以上（アダルト）に分けられ、試合後半はアダルトしかプレーできない（試合前半はヤング・アダルトともに出場可）、投手は2イニングまでしか登板できないなどの固有のルールがあります。都道府県単位で予選を行い、代表となったチームは念願の甲子園球場で試合ができます。2018年6月現在、全国40都道府県で625校が参加しており、埼玉県では32校が参加し、熊本、愛媛に次ぐ全国3番目の規模となっています。

埼玉県では2006年夏に初回の大会を実施しました。翌2007年秋からは硬式球で上記固有のルールに基づいて開催され、これが第1回大会とされています。川越高校野球部OBチーム（川高マスターズ）は2007年に結成され、この第1回大会から参加しました。と、文字にすれば平坦ですが、川高マスターズが大会参加にこぎつけるまでは多くのハードルがありました。

発足のきっかけは2006年8月のマスターズ甲子園を紹介する新聞記事。これを見た高校41回の長瀬選手が関心を持ち、2007年2月に届いたOB会報の連絡先住所宛に必死に思いの丈を書いた手紙を送ります。手紙を見たOB会の動き

も素早く、1週間後にはOB会役員会で説明を行い、その場で用具購入等のための費用援助の英断もあり、大きな、着実な動きとなっています。その後も、立上げ期でもある県OB連盟への参加と各種の検討・調整、幅広い代への声掛け、練習場の確保等々…実際に、他の高校では、マスターズ甲子園への参加希望を持ちながら、幹事役が存在しなかったり、OB会の理解が得られなかったり、OB同士の連絡が繋がらなかったりして、参加へのハードルを越えられないため、いまだに参加に至らないチームがいくつもあります。

川高マスターズでは、これらの推進役を長瀬選手が一手に担いチームを前に進めてきました。この立上げ期のハードルを長瀬選手・OB会等の力でスムーズに乗り越えられた点は、やはり川高の伝統が持つ底力であると改めて感じます。

長瀬選手がOB会に手紙を送ってから3か月、2007年5月3日に川高グラウンドにて最初の練習を12名で行いました。世代を超えた川高の球児と一緒に野球をするのは、何とも不思議な感覚でした。シートノックでは、どういう順番で、どう進めるかなどを話し合っ



(初練習時の一コマ)

たわけではないのに、スムーズに流れていきます。これが伝統というものなのかもしれないと感動です。

○第1回大会

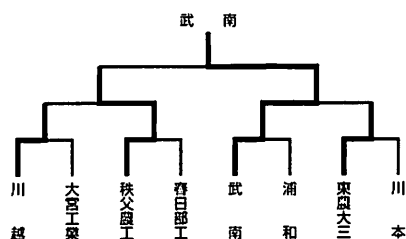
この練習の後にも月に1度の練習を重ね、11月3日に第1回マスターズ甲子園埼玉県予選が8校の参加で開催しました。監督を引き受けてくださった高校22回の斉藤(栄)選手（マスターズ甲子園では、監督を含め全員が選手です!）、それから高校32回から50回までの36名での参加です。

1回戦の相手は前年に甲子園出場を果たしている大宮工業高校OBチーム（以下、「OBチーム」の表記は省略）。試合の前半、ヤングチームはチャンスを作るものの得点に結びつかず0対1でアダルトチームに引き継ぎ、アダルトチームは5回に3点を挙げ逆転するも、6回に同点に追いつかれます。しかし7回に2点を追加し、最後の7回裏は無死1,2塁のピンチを無失点に切り抜け、5対3で歴史的1勝を飾りました。

正直、マスターズ甲子園の予選がこれ程しびれるものだとは思いませんでした。「この相手を倒さないと甲子園に行けない」「ここで打たないと勝てない」そんな大きなプレッシャーの中でプレーできたことに感動し、そしてその中で収めた勝利に感動し、また、現役時代に大宮工業に負けて夏を終えた選手も多かったことから、何とも言えない爽快感でした。

準決勝の相手は秩父農工高校。ヤングチームの終了時に2点ビハインド、そしてその後のアダルトチームも追加点を奪われ、1対12で敗れました。各代から有力選手が集まり、かなりの手応えがありましたが、甲子園への道は簡単ではないことを知った瞬間でした。

2007 第1回大会 (2007年11月)



○第2回大会

各都道府県からの参加が増える一方、マスターズ甲子園は11月頃に2日間の日程で開催され、最大で8試合、16チームしか参加できません。各都道府県への割当は都道府県内の参加校数を基に行われ、埼玉県も毎年は参加できません。次の埼玉県への割当は2010年で、2008年～2010年の優勝チームがクライマックスシリーズを行い、参加校を決めることになります。

前年に勝負の厳しさを味わい、捲土重来を期す2008年の第2回大会は、3月に関東遠征に来ていた新潟の現役高校生と練習試合を行ったのを皮切りに、5月のOB会総会前の練習、9月から10月に練習試合を3試合こなして大会に臨みました。活動2年目となり、メンバー各々が実力を把握し、コミュニケーションもよく取れるようになりました。攻撃・守備にもサインプレーを導入し、勝つために戦う集団になってきました。

マスターズ甲子園参加メンバーのほとんどは社会人で、仕事や家庭との兼ね合いがあることから、全選手が100%出席することができず、また前述のように前半（ヤング中心）、後半（アダルトのみ）ごとにチームを構成する必要があるため、多くの選手をメンバーに加えることが重要です。2008年は新規に3名の参加があった一方、（これも社会人ならではの）海外転勤等で活動に参加できなくなってしまった者もあり、28名での参加となりました。

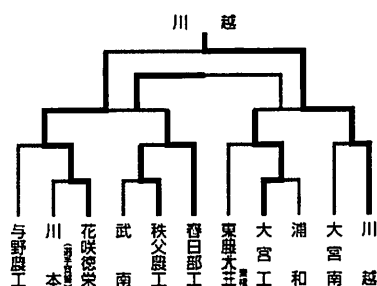
埼玉県大会の1回戦は初参加となる大宮南高校。現役時代に県準優勝・ベスト4を果たした世代が中心で、強打で大変強い相手です。試合はヤングチームが北川選手（高48回）、貝塚選手（高46回）が相手打線を4回まで1安打無失点に抑え、2対0でアダルトチームに引き継ぐと、アダルトチームも着実に加点し、相手の攻撃では緊張した場面が続いたものの、7対4で会心の勝利を挙げました。

準決勝の相手は大宮工業高校。前年のリベンジに燃える相手校との試合は簡単にはいきませんでした。先発の貝塚選手、金谷選手（高46回）が4回まで相手打線を無失点に抑え、攻撃陣も5点を取り、5対0でアダルトに引き継ぎ、アダルトも6回に3点を追加し8対0。楽勝かと思いきや、7回に3点、8回に5点を奪われ、8対8の同点に。マスターズの試合は、ルール上多くの投手の継投を要し、また全員が好調であることはそうそうないことから、どうしてもビグイニングが多くなります。

セーフティーリードはありません。この試合も嫌な流れになりましたが、9回表に斎藤（達）選手（高43回）が広い県営大宮球場のレフトフェンス直撃の2塁打を放ち、伊藤（彰）選手（高43回）が決勝打となるライト前ヒットを放ち、9対8で逃げ切りました。

決勝戦は準決勝の翌日（11月23日）開催で、相手は初参加の花咲徳栄高校です。試合はヤングメンバーが4回までに9得点を挙げ、連投の貝塚選手、金谷選手が4回を1失点に抑え、アダルトが5点を失い一時9対6となりましたが、6回裏に斎藤（達）選手、大塚選手（高36回）、岡村選手（高39回）のヒットそして稲葉選手（高38回）のランニングホームランで4点追加するなどして突き放し、最後は山下選手（高41回）が相手打線を抑えて16対8でゲームセット。大宮の夕焼け空に川高の校歌を響かせ、皆で喜びを分かち合いました。

2008 第2回大会 (2008年11月)

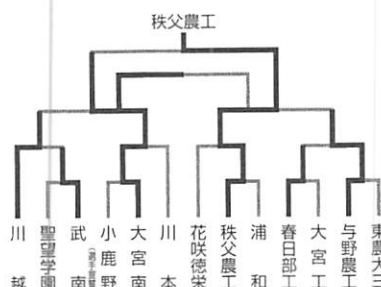


○甲子園出場決定まで

2009年の第3回大会は、初戦の武南高校に6点差を逆転されながらも最終的には18対8で勝利し、準決勝に駒を進めました。準決勝で大宮南高校に前年のリベンジをされ、8対9で敗れました。ヤングで7対3とリードしながら、

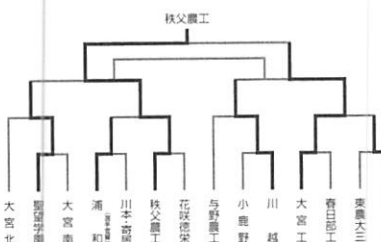
アダルトで1点しか加点できなかったのが悔やまれました。与野農工高校との3位決定戦には17対3で勝利し、3位となりました。

2009 第3回大会 (2009年11月)



2010年は春に第4回大会・クライマックスシリーズを開催し、秋に第5回大会を開催という変則スケジュールの年でした。初戦の小鹿野高校戦は18対7、2回戦の与野農工高校戦も30対11と危なげなく準決勝に進みましたが、準決勝の大宮工業高校戦は0対6と、大会史上初の完封試合を喫し敗れました（3位決定戦は聖望学園高校に13対6で勝利）。

2010 第4回大会 (2010年5～6月)



第3回大会、第4回大会はともに秩父農工高校が優勝し、この結果、6月27日のクライマックスシリーズは川高が秩父農工高校に連勝した場合のみ甲子園切符を手にするという、不利な条件での開催となりました。

第1試合は初回到近松選手（高56回）、奈良選手（高56回）の連

続2塁打で2点先制、3回にも中嶋選手（高41回）、稲葉選手（高38回）の連続2塁打で2点追加、4回も四死球に中嶋選手の2塁打で4点追加し、このリードを守り8対4で勝利し、第2試合へ望みを繋ぎました。

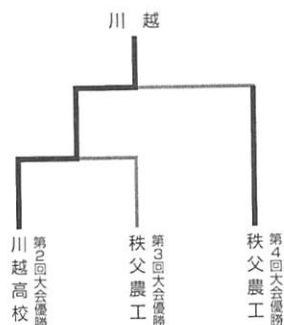
連戦となる第2試合も実力を発揮するためには、投手陣の連投対策・選手の疲労対策がネックとなりますが、ここでは斉藤監督の発案で、斉藤監督の城西川越高校監督時代の教え子で、スポーツトレーナーの手塚さんが心強いサポーターとしてベンチ裏に待機し、第1試合登板後・出場後の選手のマッサージを通じて大きな戦力となってくれました。

第2試合は序盤3点のリードを奪うものの、4回に追いつかれ、次第に引き離されます。9回裏を迎えて5対12。誰もが秩父農工高校の優勝を疑わなかった9回裏にドラマが起きます。山下選手、稲葉選手、中嶋選手、糸魚川選手

（高46回）の4連打に四球も絡め、2死からも青砥選手（高46回）、山下選手、稲葉選手の安打が飛び出し、なんとこの回一挙7点を取り同点に！最後は延長11回に稲葉選手がセンターに犠飛を放ち、13対12で大逆転勝ちを収めました。

何とも不思議な感覚でした。あまりの感動で声も出ず、ただただ涙が出てきます。でも涙が出てくるのに、何とも言えない達成感と、爽やかな心地よい気持ち。そして震えまくった友とのハイタッチ。この日の感動は生涯忘れることのないものです。

秩父農工	000	332	310	00		12
川越	102	010	107	01	×	13



(表彰式後の集合写真)

川越高OB 甲子園へ

2010年06月28日



◇マスターズ県予選／秩父農工破る

元高校球児のチームが覇権を争うマスターズ甲子園県予選大会(県高校野球OB連盟主催、朝日新聞社な

ど後援)で27日、川越高OBの全国大会への初出場が決まった。夢の舞台・甲子園への出場を高校時代には果たせなかった球児が再挑戦する大会で、世代を超えた熱い戦いが県営大宮球場で繰り広げられた。

今年の第4回大会は14校のチームがトーナメントに参加、秩父農工高OBが優勝した。過去2大会で県優勝チームに全国大会への出場権がなかったため、第2回優勝の川越と第3、4回優勝の秩父農工が27日、クライマックスシリーズに参加した。

秩父農工は試合を優位に進めたが、9回裏に川越が7点差を追いつき、延長戦になった。11回裏、川越の稲葉正選手(42)がサヨナラ犠飛を放ち、13―12で決着した。

スタンドからは選手たちの家族らが応援。稲葉正選手の双子の子ども、正訓君(9)と未紗さん(9)は正さんに「頑張れ。甲子園に連れてって」と精いっぱい大きな声で激励。「お父さんが打ってうれしい。頑張ったね」と喜んだ。

川越は11月14日午前8時45分から阪神甲子園球場で、熊本県代表と対戦する予定。

(出典:2010年6月28日asahi.com)

○マスターズ甲子園2010に参加

甲子園出場を決めた後の動きが、

また川高らしいものでした。応援してくれた応援部OB、高校45回の島さんが「できるだけ多くの応援部OBを集めるので、是非我々を甲子園に連れて行ってほしい。」と、そしてまた程なく吹奏楽部OB、高校47回の鈴木さんが「私たちにとっても悲願であった甲子園。演奏してもいいですか？よろしければ私が幹事になり集めます！」との連絡が長瀬選手に寄せられたのです（昭和34年に川高が夏の甲子園に出場した当時は、騒音が教育現場に相応しくないという理由で吹奏楽部がなく、加えて2回戦は地元西宮のプラスバンド部の応援もなく、淋しい応援だったとのこと。したがって、川高吹奏楽部はこれまで甲子園での応援の実績はなく、マスターズ甲子園で初めて野球部（OB）が吹奏楽部（OB）の応援を受けて試合をしたことになります。）。また、マスターズ甲子園出場に際しては多額の大会参加費を始め多くの出費を要するところ、OB会のご尽力により、多くのOBの皆様から130万円を超える募金を頂きました。OB会そして各OBの強力なバックアップにとにかく感謝の思いでした（その後の甲子園出場に際しても、OB会そして川高同窓会からはご寄付・支援金によるサポートを頂きました。）。

また、マスターズ甲子園出場に際しては多額の大会参加費を始め多くの出費を要するところ、OB会のご尽力により、多くのOBの皆様から130万円を超える募金を頂きました。OB会そして各OBの強力なバックアップにとにかく感謝の思いでした（その後の甲子園出場に際しても、OB会そして川高同窓会からはご寄付・支援金によるサポートを頂きました。）。

甲子園出場を機に、大森選手（高37回）のサポートにより、帽子、グラウンドコート、ベースボールTシャツ等の記念グッズを作成しました。その後帽子とベースボールTシャツは練習試合用のセカンドユニフォームとして定着す

ることになります。その後の甲子園出場に際しても記念グッズを作成し、出場回数を示す「☆」印を加えていっています。これはなかなか誇らしいです。

このほか、宿舎の確保（甲子園球場の目の前にある「夕立荘」を確保し、夕立荘はその後のマスターズ甲子園出場時も利用する定宿となります。）、大会本部への資料提出等、大変な各種調整を長瀬選手が一手に担い、大会を迎えます。

マスターズ甲子園 2010 登録メンバー		
■ヤング (34歳以下)		
背番号	氏名	年齢
6	落合 正幸	30
7	富永 泰隆	32
9	青砥 功英	34
10	松本 太郎	31
14	梶田 憲一	34
17	北川 智規	32
18	金谷 俊志	34
21	貝塚 健	34
27	上村 晋哉	32
27	糸魚川 友宏	34
31	近松 圭基	24
42	伊藤 真悟	24
56	奈良 匡平	24
■アダルト (35歳以上)		
背番号	氏名	年齢
1	山下 浄二	39
2	等々力 広太	35
3	神田 陽悟	35
5	鈴木 和彦	54
8	波田野 拓	48
12	平林 浩司	39
13	尾針 雄介	37
15	岡村 亨	41
16	長瀬 裕則	39
20	稲葉 正	42
25	長谷川 悟	59
26	平松 高	39
28	大塚 拓洋	44
29	大森 邦弘	43
30	齊藤 栄	58
32	鈴木 秀幸	48
33	中嶋 亮一	39
36	矢島 光夫	63
38	山村 剛太	39
40	手塚 和人	39
41	斎藤 達也	37
44	黒澤 修	37
45	長尾 聡	39
47	伊藤 彰洋	37
55	長田 和哉	63
67	新井 茂	66



(入場行進の様子)

大会初日の11月13日は開会式から始まります。入場行進の演奏は兵庫県警察音楽隊。そう、高校球児が行う甲子園大会と同じ演奏者による演奏に合わせての入場行進です。初めて甲子園の土を踏む瞬

間です。まだプレーしているわけでもないのに、鳥肌が立ち目が潤みます。

大会2日目、11月14日の第1試合はいよいよ川高マスターズの試合です。相手は熊本県代表の鎮西高校。そうです、昭和34年に夏の甲子園で川高が対戦したあの鎮西高校です。不思議な縁を感じます。当日は7時に球場入り、7時15分から室内練習場で30分間のアップ、7時50分にはアルプススタンドで待機します。この時驚くべき光景が飛び込んできました。応援部の面々が学ランを着て、準備に走り回っているではないですか。そして楽器を持った面々は吹奏楽部OB。その他、当時の部長先生、先輩、後輩たちが集結し、次々に激励の声をかけてくれます。こうして試合前のアルプススタンドが大同窓会と化しました。



(スタンドでの応援風景)

アルプススタンドでは応援部OB、吹奏楽部OBがそれぞれ30名程度、選手の家族や野球部OBを含めておよそ150名の応援団が結成されていました。第7回目を迎えるマスターズ甲子園でも、これだけの応援が集まったことはなく、大会実行委員会の長ヶ原委員長（現神戸大学教授）から「面白い学校が来ましたね。でもこれこそ大会開催の理念でもあり、事務局としてうれしく思います。」と

のお言葉を頂きました。応援部OB、吹奏楽部OBと一体での出場自体がマスターズ甲子園出場の他校にはほぼ例のない取組（通常は大会事務局が準備した地元中高の吹奏楽部が応援）で、関西圏以外では全国で川高のみです。

さて試合です。まずウグイス嬢が、あの甲子園球場独特のイントネーションで「1番センター伊藤君」と全員君付けで呼んでくれます。どこまでも高校野球の再現なのです。そして8時45分試合開始。後攻なのでまず守りからですが、信じられないほど単純なミスが出ます。甲子園球場の魔物というのは極度の緊張によって生まれるということ身を以て体験します。

1回の裏、川高の攻撃。3塁側のスタンドからは、川高生が愛してやまない校歌が生演奏で流れてきます。通常のマスターズ甲子園参加校は、甲子園球場近隣の中高吹奏楽部による応援となるため、校歌はテープで流れます。生演奏の校歌に感無量の思いで、スタンドの元川高生は大声で校歌を歌い、またベンチの選手も口ずさんでいました。そして、その後も川高オリジナルの応援歌で選手を鼓舞してくれました。

試合では、多くの選手を出場させるという方針のもと、打者は1打席、投手は1イニングを原則とし、計32名が出場を果たしました。前半のヤングチーム（甲子園では3回まで）は、伊藤（真）選手、奈良選手、近松選手の高校56回トリオがそれぞれ長打を放つなどして、4対5と互角の戦いを見せますが、アダルトチームで徐々に引

き離されます。川高も、ここまでチームを引っ張ってきた長瀬選手のセンター前ヒット、多くの教えずと共にグラウンドに立った川高元監督の鈴木（和）選手（高26回）の2塁打などで懸命の追撃。しかし、マスターズ甲子園では1時間半の時間制限が厳密に適用され、イニング・打席の途中でも打切りとなるため、7回途中で打切りとなり、6対11で敗れました。鎮西高校には現役時代に甲子園出場を果たしている選手も多く、打球は鋭く、投手もレベルが高かったです。

鎮西	302	033	0x		11
川越	310	002			6



（試合終了後、スタンドに挨拶）

野球部だけではなく、応援部のメンバーにとっても甲子園での応援は悲願であり、試合後は、応援部OBの計らいで、甲子園球場内のスペースを借り、懇親会を開催しました。試合には敗れたものの、達成感に満ちたメンバー達の話は盛り上がりました。



（試合後、応援頂いた皆さんとの1枚）

○「終わらない美学」

「『現役』の高校野球の魅力は、おそらく『終わりの美学』にある。

（中略）だが、オヤジはそう簡単に『終わりの美学』に殉じるわけにはいかない。（中略）『潔さ』というのは、しばしば『逃げ』と同義になってしまうのだから。『終わらない美学』-夢や憧れを持ち続けることの美しさを、僕たちはもっと信じていい。」これは、マスターズ甲子園応援団長の作家重松清さんの著書（夢・続投！マスターズ甲子園）でのコメントです。

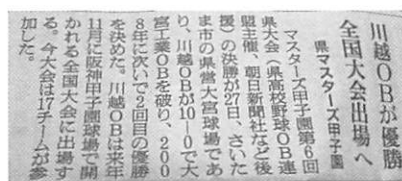
甲子園には出場できましたが、活躍できた者もいればそうでなかった者もあり、チームとしては勝利は手にできず、また、新たに加える仲間は（仲間とは）甲子園に出場していません。ここにも「終わらない美学」が存在します。

マスターズ甲子園2010出場後に、川高マスターズの事務局は長瀬選手から高校43回の尾針選手、斎藤（達）選手に代替わりし、また監督が斎藤（栄）選手（高22回）から波田野選手（高32回）に代わり、新たな体制で2度目の甲子園を目指すことになりました（斎藤（栄）選手は、その後監督として指導した城西川越高校でOBチームを立ち上げ、先述のスポーツトレーナーの手塚さんを始めとする教え子の皆さんとともに埼玉県予選に参戦し、川高マスターズとも練習試合・大会で度々対戦する良きライバルチームとなります。）。

2011年9月3日に斎藤（栄）選手の顧問就任式兼決起集会を養老乃瀧霞ヶ関店（富永選手（高48回）の実家で、マスターズチームの納

会等といえはこの店。各大会の模様を映像で振り返り毎度盛り上がりを見せます。)で開催し、第6回埼玉県大会に臨みます(2010年秋の第5回大会は、マスターズ甲子園と時期が重なることもあり、他の高校の甲子園出場機会へも配慮し出場を辞退)。

第6回大会は、初戦で早速城西川越高校と対戦し、ここはヤングで11点、アダルトでも14点と打線が爆発し25対2で勝利。続く所沢北高校戦は小刻みに加点し、ヤングで5対1とリード、アダルトでも点を加え、8対5で勝利しました。準決勝の与野農工高校戦は序盤から打線が爆発。ヤングの4回終了時点で19対1とリードし、アダルトでも着実に加点し、27対9で勝利しました。決勝は前回対戦(第4回大会)で完封負けを喫している大宮工業高校との対戦。リベンジに燃える川高は、ヤングで3対0とリードしてアダルトに引き継ぐと、5回裏には斎藤(達)選手の2塁打、貝塚選手の3塁打などで5点を加点。投手陣が安齊選手(高43回)、貝塚選手、平松選手(高41回)、山下選手、尾針選手の継投で相手打線を単打2本に封じ、大会史上2度目の完封試合でお返しし、優勝。マスターズ甲子園2012への出場を決めました。



(優勝を伝える朝日新聞の記事
(2011年11月28日))



〇2度目のマスターズ甲子園

2012年11月10日、2年ぶり2度目の甲子園は土曜日の開会式直後の第1試合。相手は富山県の強豪高岡商業高校です。応援部・吹奏楽部のOB50数名も一堂に会し、自前の心強い応援を得て、また直前まで選手起用のシミュレーションを重ねて試合に臨みました。

マスターズ甲子園 2012 登録メンバー

■ヤング (34歳以下)			■アダルト (35歳以上)		
背番号	氏名	年齢	背番号	氏名	年齢
4	林田 雅人	29	0	岡田 実	49
5	村松 崇広	23	1	山下 浄二	41
6	落合 正幸	32	2	等々力 広太	37
7	富永 泰隆	34	3	神田 陽信	37
22	上村 晋哉	34	8	波田野 拓	50
31	近松 主基	26	13	尾針 雄介	39
35	笠原 慎也	25	14	梶田 憲一	36
42	伊藤 真悟	26	15	岡村 亨	43
56	奈良 匡平	26	16	長瀬 裕則	41
58	村田 蒼	24	19	安齊 泰浩	39
			20	稲葉 正	44
			21	貝塚 健	36
			25	長谷川 信	61
			26	平松 高	41
			27	糸魚川 友宏	36
			28	大塚 拓洋	46
			32	鈴木 秀幸	50
			33	中嶋 亮一	41
			38	山村 剛太	41
			41	斎藤 達也	39
			44	黒澤 修	39
			45	長尾 聡	41
			47	伊藤 彰洋	39
			51	浅川 永次	51
			55	松本 康春	61
			67	新井 茂	68
			77	横田 雅之	50



(入場行進の様子)



(整列時。1番乗りを目指して
猛ダッシュです。)

試合は初回、エラー絡みで高岡商業に2点先制を許し、2回は近松選手の三塁打でチャンスを作るものの得点できず、3回までのヤングでは0対2。4回に1番等々力選手(高45回)の四球を足掛かりに、2番稲葉選手のライト前ヒット、3番伊藤(彰)選手のレフトへの犠牲フライで1点を返しますが、その裏高岡商業高校に2点を追加され、6回にも1点を奪われます。善戦空しく7回途中時間切れ、1対5で敗戦となりました。



(5回表、等々力選手のヒットで
盛り上がるベンチ)

川 越	000	100	0		1
高岡商	200	201	0x		5

高岡商業高校には元プロの投手もいるなど、走攻守で現役さながらのプレーを見せる好チームで、全国レベルの壁を改めて知ることとなりました。一方で、川高野球部元監督の横田(雅)選手(高32回)が、マスターズ甲子園2010での鈴木(和)選手と同様に、多く

の教え子と共に甲子園の土を踏み
ました。世代を越えた選手が集う
マスターズ甲子園ならではの出来
事でした。



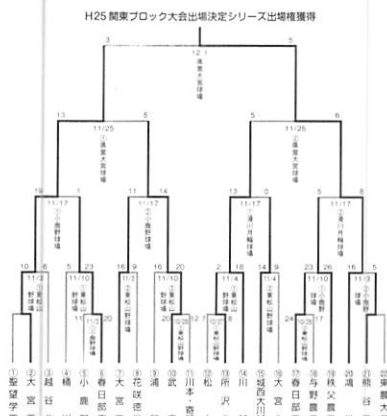
(応援部の雄姿)

試合後は、前回出場時と同様、
応援部・吹奏楽部との懇親会。前
回よりも広い、甲子園球場プレミ
アムラウンジを貸し切った開催
で、勝てなかったことを残念に思
いつつも、出場の感激を分かち合
いました。

○事務局交代と第7～9回大会

第7回マスターズ甲子園 埼玉県大会

2012年10月～12月開催



第7回埼玉県大会は、マスター
ズ甲子園2012を控えた2012年10月
から開催され、初戦は所沢北高校
に18対2で勝利し、次の準々決勝

も13対0で城西川越高校に勝利し
ましたが、準決勝で初出場の鴻巣
高校に5対6で敗れ、連覇はなり
ませんでした。

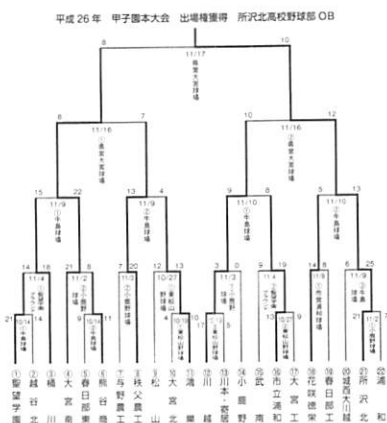
第8回大会は、まず初戦の川本
・寄居高校戦に17対5で快勝。2
回戦の小鹿野高校戦は、ヤングが
無安打に抑えられるなど、6回ま
で0対0の手に汗握る投手戦。7
回裏に富永選手のタイムリー3塁
打等で2点を先制し、8回にも1
点を追加し、投手陣は5投手の継
投で相手打線を無得点に抑え、マ
スターズらしからぬ3対0のスコ
アで勝利しました。

準々決勝の市立浦和高校は今大
会が初出場ですが、甲子園ベスト
4のメンバーが名を連ね、鴻巣高
校に続く大会初参加での優勝も囁
かれる強豪。川高マスターズとは
この後毎回のように大会で対戦す
るライバル校になります。試合は
2回表に6安打を集中され5点を
先制されます。その後も追いつけ
ますが追加点も許し、9回表に1
点追加されて6対8。敗色濃厚で
したが、9回裏に糸魚川選手の2
塁打で1点差とすると、最後は斎
藤（達）選手が、昭和63年夏の甲
子園に市立浦和が出場した際の
「さわやか旋風」の立役者である
星野投手から逆転サヨナラ2塁打
を放ち、9対8で劇的な勝利を収
めました。

この勢いで頂点まで駆け上がり
たかったところですが、甲子園は
やはり甘くありません。準決勝の
相手は過去2年連勝していた所沢
北高校。対川高戦勝利への執念は
凄まじく、終始リードを奪われ、
10対12で敗れました。

第8回マスターズ甲子園 埼玉県大会

2013年10月～11月開催



2014年からは川高マスターズの
事務局が交代し、高校46回の糸魚
川選手、貝塚選手、梶田選手が担
当となりました。迎えた第9回大
会。この大会から、金属バットの
使用が禁止となり、木製バットを
使用することになりました（おじ
さんになり足と肩の力が衰えても、
金属バットから弾き出される打球
の勢いは、太った体重も乗るため
か依然鋭く、かなり危険な状況で
した。）。初戦は昨年激闘を演じ
た市立浦和高校。苦手意識を持っ
ているであろう相手に対し、優位
に戦いを進めますが、アダルトで
ミスも絡み逆転を許し、9回に4
点を追加され、最終的には3対8
で初戦敗退となりました。

第9回マスターズ甲子園 埼玉県大会

2014年10月～11月開催



○「アゲイン」

2015年1月に、マスターズ甲子
園を題材とした映画「アゲイン」

(重松清原作)が公開されました。主演は中井貴一さんと、波瑠さん、柳葉敏郎さん、和久井映見さんらが出演する豪華キャストです。舞台は埼玉の「川越学院」高校。川越市内で撮影が行われた上に、重松さんの著書「熱球」の新潮文庫版の表紙では、川高野球部のベンチやバットの写真を使って貰っており、川高マスターズがモデルと思われる作品です。作品中の甲子園球場での試合の場面では、スタンドにて長谷川選手(高21回)や稲葉選手がエキストラとして参加した上、エンドロールでは山村選手(高41回)の甲子園でのプレー姿が映っています。全国のマスターズ選手向けに試写会が行われ川越学院が全国に知れ渡る中、川高マスターズもテンションを高め大会に向かいます。

そして第10回大会。今大会からは延長戦にタイブレーク方式(1イニング限り。1死満塁からスタート)が導入されました。

春日部工業高校との初戦は、奈良選手の逆転2ランなどで一時は3点をリードしますが、守備の乱れもあり、9回を終わって6対6の同点。タイブレーク方式の延長10回は1死満塁から1点を失い、さらに次の打者の打球はセンター前へ抜けようとする強い当たり。これをショートの下山選手が飛びつき何とかグラブに当て、はじかれた打球はセカンド富永選手の前に。これを富永選手が捌き春日部工業の攻撃を1点でしのぎ、その裏は稲葉選手のサヨナラヒットが飛び出し、8対7で初戦を突破しました。

準々決勝は3年前に敗れている鴻巣高校との対戦です。奈良選手、林田選手(高53回)、横田(一)選手(高64回)、富永選手の4連打で3点を先制しましたが、8回表に3対3の同点に迫られます。8回裏は神田選手(高45回)、山下選手、斎藤(達)選手の3連打で再度1点を勝ち越しますが、9回表に2点を失い5対6と逆に1点リードを許します。9回裏は2死まで追い詰められますが、糸魚川選手が値千金の同点打。2試合連続のタイブレークに持ち込みます。最後は10回裏、山下選手の犠飛により、6対5でサヨナラ勝ちしました。

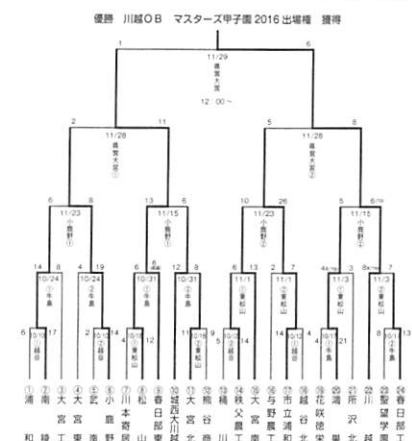
準決勝は優勝候補筆頭の市立浦和高校との対戦です。初回、林田選手のタイムリーなどで3点を奪った後は安打が出ずチャンスらしいチャンスが作れなかったものの、6回に貝塚選手の走者一掃の2塁打などで5点を奪いリードを広げます。その後何度もピンチを背負うものの何とかしのぎ、わずかなチャンスを生かした川高が安打数で上回る相手に8対5で勝利しました。

連戦となった決勝戦は投手陣が奮起し、いずれも連投となる結城選手(高53回)、山下選手、貝塚選手、渡辺選手(高45回)、安齊選手の継投で前年度優勝校の春日部東高校を1点に抑えます。打線はヤングのメンバーの活躍で4回までにリードした5点をアグルトのメンバーが守り切り、春日部東高校を6対1で破り、3度目の埼玉県大会優勝を果たしました。この結果、2010年、2012年に続き、

4年ぶり3度目の甲子園出場が決定しました。

第10回マスターズ甲子園 埼玉県大会

2015年10月~11月開催



参加しました。前夜祭では目立つことに力を入れ、ここからペースを作ります。翌11月5日は開会式、そして夜は定宿夕立荘にて、宿泊メンバーとご家族を中心に懇親会。そして11月6日8時から、いよいよ徳島県代表の鳴門渦潮高校戦を迎えます。

マスターズ甲子園 2016 登録メンバー		
■ヤング (34歳以下)		
背番号	氏名	年齢
4	林田 雅人	33
12	高石 悠	25
17	大谷木 達也	20
23	手塚 貴大	25
31	近松 主基	30
34	島田 建	25
36	齋藤 秀彦	33
39	横田 一樹	22
42	伊藤 真悟	30
46	紫村 英敬	33
48	結城 敬晶	33
50	上田 直樹	24
52	横田 祐樹	24
56	奈良 匡平	30
72	牛坂 泰洋	25

■アダルト (35歳以上)		
背番号	氏名	年齢
1	山下 淨二	45
2	等々力 広太	41
3	神田 陽悟	41
7	富永 泰隆	38
8	波田野 拓	54
11	渡辺 大	41
13	尾針 雄介	43
14	梶田 憲一	40
15	岡村 亨	47
16	長瀬 裕則	45
18	金谷 俊志	40
19	安齊 泰浩	43
20	稲葉 正	48
21	貝塚 健	40
22	上村 晋哉	38
24	中田 肇	47
25	長谷川 悟	65
26	平松 高	45
27	糸魚川 友宏	40
28	大塚 拓洋	50
29	大森 邦弘	49
30	斉藤 栄	64
32	鈴木 秀幸	54
33	中嶋 亮一	45
37	田部井 貞治	41
38	山村 剛太	45
41	斎藤 達也	43
43	柴田 大	50
44	黒澤 修	43
45	長尾 聡	45
47	伊藤 彰洋	43
51	浅川 永次	55
57	村上 知則	47
60	小沢 始	59
77	横田 雅之	54

鳴門渦潮高校は旧鳴門工業、旧鳴門一高の合併によりできた高校で、両校併せて計春9回、夏6回甲子園に出場している名門です。その実績どおり、好打者、好投手揃いでしたが、34歳以下のヤングメンバーは互角に戦い、3回まで0対0。35歳以上に出場が限定される4回以降はやや押されましたが投手陣が最少失点でしのぎます。打線は8回裏に反撃を開始し1点を返したものの9回表に1点を加えられ1対3に離されます。敗色濃厚の9回裏、大塚選手のヒット、山村選手の死球、パスボールで作

った1死2、3塁のチャンスに、梶田選手が左中間に起死回生の同点タイムリー3塁打。最後は相手のワイルドピッチで得点し、4対3でサヨナラ勝ちしました。

鳴門渦潮	000 011 001 3
川 越	000 000 013x 4



(サヨナラ勝ちの瞬間。川高サヨナラ勝ちの場面は、翌年の大会パンフレット・ポスター (以下) にも採用されました。)



投手陣 (結城選手、安齊選手、山下選手、貝塚選手、渡辺選手、尾針選手、横田 (雅) 選手、山村選手、安齊選手の継投) が踏ん張り、富永選手のファインプレーなど堅い守備で守り抜く川高マスターズらしい戦いができたことが土壇場での逆転に繋がりました。時間切れにならず9回裏に突入したのも、サヨナラ勝ちしたのも大会史上初の出来事でした。

また、マスターズ甲子園ならで

はのエピソードですが、横田 (雅) 選手と横田 (一) 選手 (高64回) が親子で甲子園の土を踏みました。横田 (雅) 選手は投手として無失点に抑え、横田 (一) 選手は安打を放つ活躍でした。



(波田野監督の胴上げ)

劇的なサヨナラ勝ちを受け、試合後甲子園球場内のプレミアムラウンジを借りて開催した応援部OB、吹奏楽部OBとの懇親会は異常なほどの盛り上がりで、応援部より、甲子園での勝利時限定の演目「凱歌」も披露されました。



(「凱歌」披露の様子)

母校のユニフォームで甲子園球場に立てること自体格別の思いですが、母校勝利のスコアを甲子園球場のスコアボードに刻むことができたのは感無量でした。これも全国一の熱さを持つ応援部OB、吹奏楽部OBの応援、また川高OB会、同窓会の物心両面のご支援、そして甲子園出場のたびのご寄付を始め、日頃より野球部OB等野球部関係者から頂くご理解、ご支援のおかげです。



(57年ぶりに川高勝利のスコアが刻まれた甲子園球場のスコアボード)

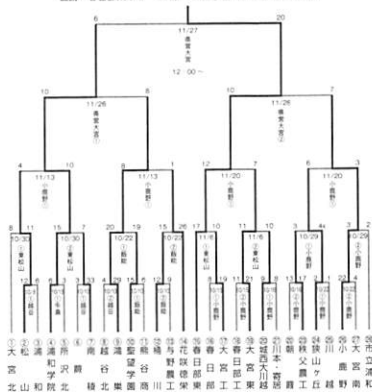
○第11回・第12回大会

マスターズ甲子園を直前に控えた2016年10月の第11回の県大会。初参加の狭山ヶ丘高校との初戦は、投手陣が踏ん張るも打線が相手投手陣に1点に抑え込まれ、1対2で敗れました。

第11回マスターズ甲子園 埼玉県大会

2016年10月～11月開催

優勝 春日部東OB 2017出場権 獲得



2017年からは、高校46回の3名に加え、高校48回の上村選手、富永選手を事務局に加え、新たなスタートを切ります。第12回県大会は、初戦の城西川越高校戦は7対2で勝ちましたが、2回戦では、ここ5大会で4度目の対戦となるライバル市立浦和高校に1対12で敗れました。

第12回マスターズ甲子園 埼玉県大会

2017年10月～11月開催



8校でスタートした第1回大会以降、埼玉県の参加校は年々増加し、優勝した2008年の第2回大会は11校、2011年の第6回大会は18校、2015年の第10回大会は24校、そして2018年6月現在の加盟校は前述のとおり32校に増えています。強豪の大宮東高校が第10回大会から、浦和学院高校が第11回大会から参加するなど、勝ち上がるのは年々難しくなっていますが、「終わらない美学」を胸に、4度目、5度目のマスターズ甲子園出場を勝ち取りたいと思っています。

○現役支援

川高マスターズ結成の一つの大きな目的はマスターズ甲子園出場ですが、もう一つの大きな目的として現役支援があります。

マスターズチームの選手を含め、野球部OBが何より願うのは現役チームの活躍です。現役チームの活躍のため、個々のOBが淡く抱く現役支援の思いを、マスターズチームが旗振り役となり具体的な形にまとめていく、そうした存在

を目指して活動しています。

ノック等のお手伝いや様々な形での指導を通じた支援を企画したほか、マスターズチームで材料購入・設計を担当し、大雪で潰れたブルペンのネットの再構築を行ったり、マスターズ活動で繋がった上下の代のネットワークを駆使して、OB会費の納付を督促したり、オンラインギフトを募り購入した用具を現役チームへ寄付したりしてきました。今後もより一層、現役チームに貢献できるよう活動していきます。



(ブルペンネット修復(15年3月))

○おわりに

マスターズ甲子園への挑戦を通じて、たくさんものを得ることができました。世代を超えた仲間を持つ素晴らしさ、川高OBであることの誇り、挑戦する気持ちに限りはないこと、日常たやすく口にする「感動」と違い、本当に感動した時にどうなるのかを知ったこと、等々...

今後とも、マスターズチームの活動を通じて、多くの貴重な経験を得るとともに、川高野球部の発展に貢献していきたいと思っています。

『小さな大投手 大沢 堯君』

彼と私が、初めて対戦したのは東上沿線中学校野球大会での準決勝戦だった。都幾川村の平中学なんて無名のチームがなぜここまで思いながら、どちらかというとなめた感じで試合に臨んだ。ところが打者一巡するまでは、手も足も出ない程ストレートの速さとキレのいいカーブであった。結果は総合力で上であった我々の初雁中学が勝ったが、私は大沢投手の印象が強烈に残った。

そしてわが川越高校に入学すると私のクラスの中に彼がいたではないか、声を掛けてみたらやはり本人であった。何か縁というか、胸が熱くなる思いがした。ここから三年間一緒に同じ釜の飯を喰うことになった。たまたま彼と私は運よく一年生の夏からベンチに入ることができ、互いによりきライバルとして練習に励んだ。二年生になり二人は二遊間のコンビで試合に出場、夏ベストエイトで敗退、この年先輩諸氏は、一人一人誰をとっても素晴らしい選手であり、常に優勝候補に挙げられるチームでしたが、監督不在の時期に当り実力が出せないまま終わってしまった。この年平田先輩と大沢との二枚看板で戦っていたら。今になっても残念に思えてならない。

三年生になってからは前年のチームと比べて半分の力量しかなかったが、大沢一人が孤軍奮闘、対戦相手を一、二点に押さえ、辛勝しながらという小粒なチームであったが、春季西部地区大会優勝、夏ベストエイトと我々の力量では十二分に力を出し切りよくここまでやれたと私は感じたが、大沢にしてみれば、もっとバックが援護してくれればと思っていたに違いない。彼は高校時代は下宿をしてまで野球に取り組む姿勢に加え、胸囲、腰囲は一m近く、身長は百六十センチ代ではあったがのびのある速球をもつ未完の投手であった。

そして法政大学進学後の彼の戦績はもの凄いい。東京六大学準硬式野球リーグでは連盟記録の通算38勝を記録し、第一回日韓親善野球大会には全日本のエースとして出場も果たした。大学時代のエピソードは、当時法政大学の硬式野球部は、松永監督があのだ、山本、富田の三羽鳥に加えエース山中の法政の黄金時代であったが、準硬式野球部にいい投手がいると、当時わざわざ松永監督自ら田淵を連れ、大沢の投球を実際に田淵に捕球させた結果、山中と二枚で使うからと硬式へ勧誘されたそうです。

社会人になっても、野球を捨てず全浦和に所属し又もエースとして、昭和四十九年から五十一年までの三年間、全日本クラブ選手権を連続優勝という輝かしい記録も達成した。

その翌年の五十二年、今度は埼玉県都市対抗予選において常連の日本通運浦和を3対1で破り、決勝戦の本田技研和光戦においては18回延長引き分け再試合0対2で敗れたものの二十七イニングを一人で投げ抜き、その年の最優秀選手に選定された。

以上のように彼はわが母校を卒業後の活躍が目立つわけだが、これは高校時代の彼はただ見よう見真似で投げただけで、良きコーチ、良き環境に恵まれなかったため、彼の素質が高校以降に開花したのであろう。

今後母校にも彼のような選手がいるかもしれないと思う時、選手育成、発掘という意味においても、野球人生を長く続けられたOBの方々に、少しでも母校を訪れていただき、アドバイスをお願いしたい。

最後に、もし、大沢に、十五センチの身長を神様が与えていれば、プロ野球で活躍したであろう。(高18回卒 伊藤 弘 記)

高校野球のころ

栗原秀夫氏（中42回卒）

私と同年代の「甲子園」という響きのよい3文字に引かれ、晴れの舞台を目指し中等野球（現在の高校野球）に打ち込んだ者たちにとっては、「あと十年早くか遅く生まれていたら」と誰しもが思っていることだろう。

昭和16年県大会で準優勝、二次予選の南関東大会出場の権利を得て、「甲子園」に一步近づいた時、横暴なる軍部による大会中止の通達はどうなにか球児たちに失望をもたらしたか計り知れない。「甲子園」という目標を失った我々野球部員はそんな中でも軍学校志願の生徒が我が物顔で振る舞うグラウンドの隅で小さくなって野球の練習に励んでいた。それは、本当に野球が好きだったからだ。

しかし中には、野球の思うように出来ない世相に失望し、学校を離れる者もあった。山中康弘君は、一年生からレギュラー選手として活躍していた優れた選手であった。甲子園大会が中止となるや中退し、海軍に一兵卒として志願してしまった。その後の消息は不明だが、恐らく野球の出来ない無念さを胸に秘め、若き生命を戦場で失ったのではないかと思う。昭和17年の晩秋、彼が水兵服姿でグラウンドに現れ、懐かしそうに私とキャッチボールをやったことを思い出す。野球を奪われた淋しそうな顔は忘れられない。そんな経験が、我々のような悲しい思いを青少年にさせてはいけないという思いから、私を半世紀の間、高校野球に没頭させた。

さて、教育の一環として「人間形成」を本質とした高校野球も時代とともに大きく変わった。

学生野球の父と慕われた故飛田穂洲氏は「へたでもよいから一生懸命練習に取り組むこと」を強調された。人間の心の中には誰だって怠け心が潜んでいる。それを戒めることから、邪な心で練習している選手の前に転がっ

たボールがぴょんと跳ね、目の覚めるような打球は、野趣の正面に飛ぶというコラムを書かれた。優れた選手でもいい加減な気持ちで練習している者は、試合の大事なところで失敗すると言われている。一本勝負の高校野球で番狂わせがあるのは、このことだろうか。

「一生懸命取り組む姿勢こそ高校野球の姿だ」と説かれている。

現在の高校野球はこうした「精神野球」は煙たがれ、「野球は楽しむものだ」という空気が広まっている。野球の世界もアメリカナイズされた考え方、練習の方法の波が押し寄せている。勿論それを否定するつもりは全くない。

しかし、高校野球では勝負が全てではなく、野球生活を通して「何かを得る」大切なものがあるのではないか。それを失ってはならないと思うし、もしそうになったら高校野球をやる意味はなくなる。体力技術に優れている最近の野球選手に精神的な面での物足りなさを痛感するのもそんなことが原因ではないだろうか。

飛田野球の薫陶を受けられた故伊丹安廣氏を監督に迎えられた黄金時代を築かれた伝統に輝く川高野球部の益々の発展と、選手諸君の健闘を心からお祈りする。

栗原秀夫氏のプロフィール

1926年 狭山市生まれ

51年 静岡県立焼津水産高校野球部
監督

72年 静岡県高等学校野球連盟理事長

75年 選抜高等学校野球大会選考委員
日本高等学校野球連盟常任理事

97年 退任

褒めるが勝ち？

寫野 昌甫（高7回卒）

大リーガーのバッティングフォーム

野茂やイチロー、松井や佐々木など日本人メジャーリーガーの活躍で大リーグがすっかり身近なものになってきた。テレビは連日「今日の松井は・・・イチローは・・・」と全打席映し出して、5-2だ5-1だと騒ぎたてている。試合の流れや勝負の分かれ目に関係なく日本人選手だけの凡打まで見せる報道の仕方は全く以ていただけないが、それはそれとして私が面白いと思うのは打つにせよ、投げるにせよ・・・メジャーの選手一人一人の型にはまらぬ個性の楽しさだ。イチローも松井も然りだが、特にバッティングフォームにいたっては全くテンテンバラバラでよくまあこうイロイロなのがいるもんだと感心する。

パワーとスピード、塀ぎわのプレーや塁上のクロスプレー、激突、闘争心・・・ベースボールと日本の野球の違いはよくいわれるが、その根幹のところは社会のあり方、文化の違いにあり、それがこのバッティング面での十人十色、各人各様の個性的なフォームに象徴的に現れている。

日本のプロ野球に来る外国人も例外ではないが、何故彼らはあれだけ個性的というか、テンテンバラバラの自分流なのか、アメリカは何事にも個性重視、個性尊重の社会だから野球選手が皆独特のスタイルを持っているのも不思議はないが、私がニューヨークにいた頃何度か近所の少年野球を見ていて、成程こういうことなのかなと思うことがあった。

小さい連中の野球だからエラー、暴投、落球・・・なんでもありである。黄色い声を張り上げてやたらと元気は良く、打つ方になると皆んな積極的にボールでもなんでもブンブン振り回してくる。ウンと小さいのが目より高い球を打って相手がエラーでもすればベンチは大騒ぎ、ワンバウンドを振って三振して

も「OK、OK、ナイストライ」「グッドチャレンジ」とコーチは積極性を褒める。

ヒットでも打てば「スゴイ、スゴイ」と拍手喝采、失敗しても「イイゾ、イイゾ、ナイスチャレンジ」と褒めてやる、だからヘルメットをあみだにかぶったチビッコも「ヨーン次ハヤルゾ」という顔つきで意気揚々と戻ってくる。

とにかくコーチはやたらと子供を褒める、ここがイイ、あそこがヨカッタと励ます。ボールを振っても、フライを落としても叱らない、怒らない、ヘンな恰好でも直さない、いじらない、子供たちはただノビノビと楽しげに歓声をあげている。ペナルティもない、グラウンド何周とか、皆んなの前で怒られるとか一度も見たことがない。

無論、筋肉も骨格もまだこれからの子供の野球だから勝負も関係ないし、疲れたら休んで決して無理はしない。そもそも鍛える、限界までやる、ヘトヘトになる、気合いを入れる、トコトン頑張るなどという考えは端から無い。つまり野球は面白くて、自由でノビノビしていて楽しいというのがスタートライン、子供たちは勝手気ままにバットを振り回してエラーも三振も気にせずただ野球を楽しんでいる。

コーチはこういう時はこうした方がイイとかこう握った方がイイくらいの指導もアドバイスもするだろうが、まずは子供のイイところ、得意なところ、個性や長所を見いだしてそこを引っ張り出して褒めて伸ばすのが役割だ。

誰だって褒められれば気持ちがいい、欠点や失敗を怒られ責められるより、ここがイイ、それがお前の個性だと褒められる方が嬉しいし自信もつく。自分の良いところ、他人と違う個性、長所を褒められ、才能があるものはそれをドンドン伸ばしていって上のレベルに行く、メジャーリーガー達のテンテンバラバラ、十人十色のバッティングフォームにはこうした子供の育て方、指導、教育について

の考え方が見え隠れしているのである。

「褒める」マジック

アメリカ人には左手で字を書く人が結構多い。日本だと箸とか書道とか右手で、となるが米国では家庭でも学校でも直さない。英語は左から右へ書くから左手では書き難いと思うが直されることはない。

野球に限らず学校でも、子供のイイところ、得意なことを見つけて褒める、長所や個性を見抜いて伸ばすというのが初等教育の基本で、細かいこと小さな欠点をいちいちあげつらったり、いじくったり、けなしたりしない。私の場合、子供が15才の時に駐在地のニューヨークのジュニア・ハイ9年生にいきなり転入させることとなった。それは文字通り「いきなり」という感じで、学校に連れて行くと、事情を聞いてESLとか教科書、給食などの説明がチョコチョコあって、日本語のできる子を指導役に紹介してくれて「じゃ、明日からいらっしやい」ということだった。

無論英語はしゃべれない、自意識も強まる年代だからアメリカの可愛い同世代の女の子の前で「トイレどこ？」も聞けない。勉強も全く分からない、先生や友達の言うことも聞き取れない、何もかも分からない、出来ない、どう行動していいか分からない・・・もう学校はイヤ、日本に帰りたいと二三週間ウチで泣き暮らしていた。

ある日、学校から呼び出しがかかった。見せたいものがあるので子供と一緒に学校に来てくれという電話だった。子供に聞いても日本ならイタズラもするがここまではまだ怒られるようなことはしていないと言う。お前の子供はまるっきり英語がダメで・・・という文句の一つも言われるかと恐る恐る出掛けた。カウンセラーの先生は四十代の女性だったがスキーのコーチもしているというキビキビした人で、一通りの自己紹介的やりとりの後「トシキは言葉が分からないのに・・・（ホラ、来た）とても頑張っていて・・・（オヤオヤ？）スバラシイ」と・・・何だか様子が

ヘンだ。

実は今日来てもらった訳は、とカウンセラーの先生は私達を広い展示室の様なところへ連れ出して、「あれを見てくれ、あれはこの子がCGの時間に描いた絵なのだが・・・」壁にかざられた一枚の絵を指差して「色のセンスがスバラシイし構図もとてもイイ、あんまりよく出来たのでこうしてここに張り出したのだ」と絶賛してみせた。

私の隣で神妙だが仏頂面だった子供もスバラシイ、スゴク良く描けていると大ぼめされてニコニコ顔だ。何しろアメリカに来て四週間余、右も左も分からない、どうすればいいか分からないパニック状態の子供、またそれが大問題の私達の家庭の中にパッと一筋の明るい光が射し込んだようなものだった。

帰りがけ、子供の語学力を心配する私に先生は「大丈夫、この子は今文化や言葉のカベを乗り越えようと頑張っている。大人だってたった一人で言葉の分からない、異文化の国、学校に放り込まれたらどうですか？何にも出来ない、分からないでしょう。この子は今体験している苦勞を乗り越えて精神面で一回りも二回りも大きくなれますよ」という意味のことを言って励ましてくれた。

この日を境に子供は学校に行くのを全く嫌がらなくなった。帰り道「あの先生の言っていたシージーて何だ？」と聞くと「コンピューター・グラフィックのことだよ」と一寸得意そうな顔をした。

一週間位経つと「今日、サダハル・オーとって一本足やったら結構ウケたよ」などと言うようになり、この「褒めるマジック」のおかげでアメリカ社会に溶け込んでいく自信が少し着いてきた様子だった。

あの日、カウンセラーの先生は本当に「絵」が良くて褒めたのか、子供が今一歩で心のハザードを乗り越えられると見て「褒める」マジックを仕掛けたのか、今となっては判然としないが私達にとっては劇的な効き目があったことだけは確かだ。

ストップウォッチと4秒のリズム

高12回卒 杉田 文男

定年を迎え、好きな野球観戦が多くなり、朝は大リーグ、夜はプロ野球。ある日ストップウォッチを持って見た時、新たな楽しみと発見を感じ、その後は常にストップウォッチを持参の観戦となりました。

野球は投手は打たせない、打者は打ち崩そうとしてゲームが進行し、勝敗は投手の出来次第「好投手あるとこ勝利あり」のもと、闘ぎ合いに一喜一憂するものです。そこで、攻走守が基本となり進行する中で、はっきりとしたリズムがあることをストップウォッチは教えてくれました。「ワンプレイ4秒のリズム」です。人間がリズムを起こす時すべてリズムを必要とすること、そして動作を正確、安定にするためには、誰もが同じリズムになること。要であり守備位置も移動しない投手の1球からスタートする投球リズムが4秒前後、これは大リーグ、プロ野球、高校野球ともに同じ。また、イチローがファーストまで3秒で走れたら、内野安打が倍増する。

次に各ボールの所要時間を記します。

- 投手セットポジションから投球 4秒前後のリズム
- 内野ゴロの正確なアウト処理 4秒以内
- 内野ゴロの速さ 1～3秒
- 外野フライ 3～5秒、ホームラン6秒以上
- 投手ストレート 130k台 0.4秒 120k台 0.5秒
110k台 0.6秒
- 盗塁阻止 捕球から2.5秒以内の送球
- ダブルプレー ボール廻し5.5秒以内で廻せないと取れない

以上のことから、守備に当てはめるとボールを4秒で処理するか出来ないかが重要な鍵を握っている。即ち<ワンプレイ4秒のリズム>で進行させること。攻撃はこの反対に4秒のリズムを崩す。4秒のリズムが崩れない場合、緊迫したゲームであり、崩れた場合荒れたゲームとなる。ボールをグローブとバットで如何に早く、あるいは遅く運ぶかのタイム競争である。

ゲームを4秒リズムに当てはめると、守りの場合、投手が150球投げるとすると600秒(10分) 攻撃は投手の150球に対処すると600秒(10分) 攻守合わせ20分以内で試合完了。(完全試合のドロー)

では、通常ゲームの2～3時間はなに？攻守交替、考える時間は大事であるがこれでは世界のメジャースポーツに入らないと思う。ホームランバッター、攻走守投備えた選手がいても勝てない現実。しかし、野球はこのロスタイムが、野村監督のシンキングベースボールが生まれる非常に重要な時間であり、それがまた大変楽しいのだ。

今までの野球観戦は、チームの作戦、個々の打力、守備力、走力、投力をみて、強い、弱いを判断し、喜んだり悔しがったりしていたが、投手の投げるリズム、打者のタイミングのとり方、＜ワンプレイ4秒のリズム＞を崩そうとしているか、また守ろうとしているか、投手のスピードを気にするのと同じ様にチームのスピードを意識することにより、陸上競技と同じタイム競争であることを教えてください。

皆さん、野球観戦はストップウォッチ持参で、また新しい楽しみが増す事請合いです。今年も夏の大会が始まります。ストップウォッチを持って、母校の応援に行き、若き血を蘇らせ、元気を貰いましょう。

＊ 参考として4秒リズムの目標

- 走力 ファースト 4秒 セカンド 8秒 サード 12秒
- 守備 捕球から送球 0.5秒
- 投力 30m 1.5秒 40m 2秒 60m 3秒
- 打力 スイングスピード 0.4秒
- バント 100%

特別寄稿

中等学校野球から高校野球へ

— 川越中学校から川越高校への歩み —

高3回卒 川合 敬三

毎年日本中を沸かせる高校野球は、今年で93回を迎える。しかし大正4年（1915年）に始まったこの大会は、昭和22年（1947年）の29回までは中等学校大会で、昭和23年から学制改革により高校野球と変わった。その間の97年間の内で太平洋戦争の前後6年間のみが中止されている。

さて我が母校の川中、川高は既に創立112年となり、野球部も間もなく創部100年を迎える。現在甲子園を目指す参加校は4000校を越えるが、第1回の参加校は全国で僅かに73校だった。そして大正8年に創部した母校が全国中等学校大会に参加したのは大正12年（1923年）の第9回大会の予選で、当時の全国参加校は約250校で県内は浦和、熊谷等3～4校に過ぎなかった。だがやがて中等野球は当時の野球熱に乗り現在の高校野球以上にブームを興し、全国的に大変な人気になる。当時の新聞、ラジオ等によれば野球は甲子園と神宮の6大学が人気で、大正・昭和の初期の熱狂ぶりは想像以上、川越市民の川中に送る声援は大変なもので、夏の県大会で連覇した頃は大宮球場まで市民の自伝車部隊が続き、夜は寺の境内で応援練習したという。私の義父もその一人で、よく聞かされた。

ここで蛇足ながら当時の旧学制度を簡単に述べると、中等学校とは小学校6年を終了（義務教育6年）し、進学する5年制の中学校、工業、商業、農業等の学校の総称であり、年齢は13～17才まで在学したので、いまの中・高一貫のような5年間となる。ただ現在浪人して大学に入るように、小学校からさらに高等科に進み1～2年遅れて入学する者も多く、19才まで在学したので甲子園の有名選手は大学級だった。中等野球の実力は中学1年から硬球に親しみ5年間鍛えられるので、高校野球以上の腕前の者も多く、当時の職業野球（プロ）に入団する選手も多くいたわけである。

さあ、わが川中・川高の本題に入りたい。上記のように中等学校野球から出発したわが母校は、中等野球時代は飯田先生無くしては語れない。野球部の創部は大正8年（1919年）であるが、先生は大正9年から在職15年間まさに中等野球時代の大半に捧げられた生涯だった。その教えそのものの象徴が現在校庭にある胸像碑といえる。胸像は53歳で急死された翌年の昭和10年にOB、教え子の有志によって建立された。そしてその一番弟子と言える方が、故

家村相太郎氏であろう。我々の監督だった氏は、グラウンドに入ると真先に碑に一礼した。全国でも珍しい公立校の一教師の像は、野球部の父としてグラウンドを見守る。今では部員のだれもが黙礼するのが伝統となり、城址のグラウンドで白球を追った者は忘れることはないと思う。

そして今、川越中学時代の母校の歩みを顧みると、創部以来30年間は生みの揺籃期から、甲子園に向かっての一直線であり、飯田先生を中心にひたすら文武両道を掲げ白球を追ったことだった。今も同じく厳しい入学試験を越えても旧制は日頃の学習に落第点があり、容赦なく成績は公開され途中で落伍する者も少なくない時代だった。野球部員も文武両道はもとより軍事教練、生徒指導は厳しく練習も同じだ。しかし川中の野球部は少ない部員でもよく頑張り抜き、先生の配慮で当時超一流の早稲田伊丹氏などを招き技術向上は目覚ましく、県下の覇権を重ね関東でも有力チームに台頭した。

そして昭和6年に見事春の選抜大会で甲子園に出場を果たし、更に野本主将が宣誓をしている。中等野球時代の川中は、県下の優勝が連続4年を含め6回、関東の選抜大会2回、その他準優勝も数回あり、戦争下に入り中止前の最後の全国大会県予選は準優勝だった。そして戦後の復活した大会は準決勝だったが、まさに中等野球の歴史は素晴らしい足跡を残している。当時の活躍された名選手の多くは既に鬼籍に入られた方が多い。しかし川中を卒業後も大学、実業団、プロと活躍された方、また社会的にそれぞれの分野で活躍された方々は数え切れないほどである。

さて、29年間続いた中等野球の歴史を引継いだのは新しい高校野球であり、すでに60年の歴史が流れた。中等野球からの歴史を受継いだのは現在の4000校のうちで約1000校ぐらいで、他は全て高校野球からの出発である。特に近年は私立校が主流で、中等野球は8割が公立校だった頃と反対になりつつある。

さあ、戦後昭和23年より中等野球から引継ぎした第30回大会以後の高校野球での母校の活躍はどうか、ここからはOBの方々も経験者が多く記憶がまだ鮮明なことであろう。簡単に主な記録を見ると、62年間でまずトップは昭和34年夏の西関東代表としての甲子園出場である。県下の優勝は3回（夏2回）、準優勝5回（夏2回）、ベスト4が3回（夏1回）、ベスト8が12回（夏7回）で前半は素晴らしいがやや失速し、残念ながら昭和48年度以降は振るわない傾向を示している。

今日も現役の後輩諸君は元気にグラウンドで練習に励んでいる。そして野球部の父と慕われる飯田先生の碑は、黙ってにこやかな温顔で見守ってくれる。歴史は繰り返されると言われるが、まさに川中、川高球児たちの努力はあくなく繰り返されていることなのだろう。御嶽山が見下ろす城址のグラウンドで流した汗の思い出は、OBたちのかけがいの無い青春の思い出だ。中等野球から高校野球は、それは川中から川高の歴史であり、私自身の6年間の流れでもある。

私たち高校3期生は、昭和20年の戦争末期に川越中学校に入学した。空襲警報を恐れながら緊張の入学式から始まった中学生活は、今は夢物語だ。軍隊式の挙手の挨拶、バットならぬ木銃の軍事教練、部活は柔道・剣道・相撲・滑空（グライダー）等で文化部はほとんど休部だった。しかし終戦後は全て一変する。暗い敗戦ムードを変えたのはスポーツの復活だった。

とりわけ野球は大変な人気で、おりから学制改革から「6・3制野球ばかりが上手くなり」と揶揄される始末だ。昭和20年（1945年）の終戦で翌年には中等野球大会は再開され、優勝した浪速商業の平古場投手は一躍有名になり、今のハンカチ王子以上かもしれない。わが川中も早速野球部が再開し、県予選に出場し準決勝まで進んでいる。その時の参加校は17校だった。私は中学3年になり野球部もすっかり組織化され、野球ブームが最高になった頃に入部した。兄二人は既に卒業していたが、川中で庭球、剣道部だったので野球部は大変だぞと言われたが踏み切った。その後高校3年まで頑張ったが、レギュラーになりこれからという時に目を病み完全燃焼出来なかったのが残念だった。しかし私たちは川中、川高の両方のユニフォームを着た唯一のメンバーだと自負している。特に昭和23年、飯田先生の法要を兼ねて戦争から復員した先輩OBとの追悼試合は思い出深く残っている。

現在は3年間の高校生活はすっかり定着した。しかし中高一貫の制度を見直すことは別として、若き世代の一時期に野球没頭したことは誰も忘れない。中等野球時代に素晴らしい成果を残してくれた先輩たち、そして高校野球時代にその伝統をしっかり受け継いだOB仲間は誰もが甲子園が共通の目標だった。くしくもそれは川中時代に選抜大会で、川高で夏の全国大会に、しかも新たに昨年はOBがマスターズ大会で夢を実現した。これからも決して夢ではない。いや勝敗よりも目標に向かって流す汗こそが青春の宝に変わるのではと思う。

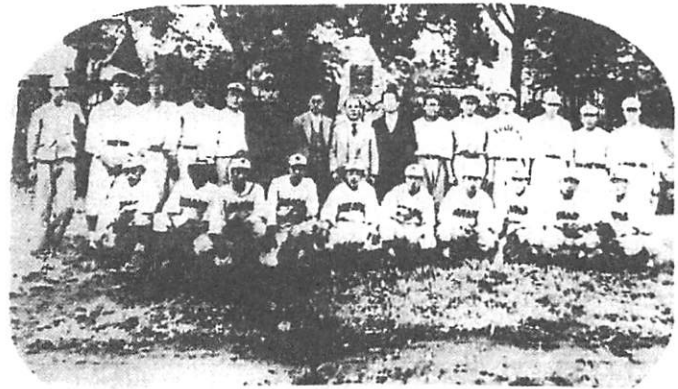
指導者、OBの皆さんも、後輩諸君の宝物を大切に応援していただければと思います。

いつの間にかOB仲間でも年長になった一人として、懐古談でご容赦いただきたい。

今年も現役、OBチームの健闘を心よりお祈りいたします。



飯田 亮先生記念碑
(昭和10年11月1日建立)



昭和11年 故飯田部長3回忌

飯田先生胸像碑（野球部七十年史より）

座談会「昔、遊びは野球だった。そして、甲子園で勝った。」

在京初雁会 創立 60 周年記念誌「講演と第二回例会の報告」

11) 高 鐘面 / 同進 3 年 2 月 1 日

試合開始 時 分 秒
 試合終了 時 分

所要時間 時間 分

種別	時間	分	秒	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
16	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

高 鐘面 / 同進 3 年 2 月 1 日

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151	1152	1153	1154	1155	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170	1171	1172	1173	1174	1175	1176	1177	1178	1179	1180	1181	1182	1183	1184	1185	1186	1187	1188	1189	1190	1191	1192	1193	1194	1195	1196	1197	1198	1199	1200	1201	1202	1203	1204	1205	1206	1207	1208	1209	1210	1211	1212	1213	1214	1215	1216	1217	1218	1219	1220	1221	1222	1223	1224	1225	1226	1227	1228	1229	1230	1231	1232	1233	1234	1235	1236	1237	1238	1239	1240	1241	1242	1243	1244	1245	1246	1247	1248	1249	1250	1251	1252	1253	1254	1255	1256	1257	1258	1259	1260	1261	1262	1263	1264	1265	1266	1267	1268	1269	1270	1271	1272	1273	1274	1275	1276	1277	1278	1279	1280	1281	1282	1283	1284	1285	1286	1287	1288	1289	1290	1291	1292	1293	1294	1295	1296	1297	1298	1299	1300	1301	1302	1303	1304	1305	1306	1307	1308	1309	1310	1311	1312	1313	1314	1315	1316	1317	1318	1319	1320	1321	1322	1323	1324	1325	1326	1327	1328	1329	1330	1331	1332	1333	1334	1335	1336	1337	1338	1339	1340	1341	1342	1343	1344	1345	1346	1347	1348	1349	1350	1351	1352	1353	1354	1355	1356	1357	1358	1359	1360	1361	1362	1363	1364	1365	1366	1367	1368	1369	1370	1371	1372	1373	1374	1375	1376	1377	1378	1379	1380	1381	1382	1383	1384	1385	1386	1387	1388	1389	1390	1391	1392	1393	1394	1395	1396	1397	1398	1399	1400	1401	1402	1403	1404	1405	1406	1407	1408	1409	1410	1411	1412	1413	1414	1415	1416	1417	1418	1419	1420	1421	1422	1423	1424	1425	1426	1427	1428	1429	1430	1431	1432	1433	1434	1435	1436	1437	1438	1439	1440	1441	1442	1443	1444	1445	1446	1447	1448	1449	1450	1451	1452	1453	1454	1455	1456	1457	1458	1459	1460	1461	1462	1463	1464	1465	1466	1467	1468	1469	1470	1471	1472	1473	1474	1475	1476	1477	1478	1479	1480	1481	1482	1483	1484	1485	1486	1487	1488	1489	1490	1491	1492	1493	1494	1495	1496	1497	1498	149
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----

[illegible][illegible]

講演と第二回例会の報告

西 信之(高一七回)

平成二十年十一月八日(土)、池袋西口「アレストラン・銀座ライオン」で、甲子園出場五十年の節目に当たり、「昔、遊びは野球だった。そして、甲子園で勝った。」と題して、当時、出場した方々をお招きして講演会を催すとともに第二回の例会を行いました。その概要を報告します。

(高島会長)

昭和三十四年の甲子園出場した野球部長渋谷健氏、当時牛若丸と称されたセカンド内沼稔氏、レフト宮根七郎氏をお招きし、当時のお話をさせていただくとともに、昭和六年の全国中等野球大会で初の甲子園出場をした話も交えて講演をお願いします。

(内沼稔氏)

甲子園出場したということでお招きいただき光栄です。あの当時は紅顔の美少年でしたが、今はご覧のとおりです。残念なことに、エースの吉田(丹代)君は腰痛のため欠席しますが、宮根君は十七、八年母校の野球部の監督をしていましたので、現場と学業との関係の話をしていただきます。

あつても結構勝つてという気分となつた。いよいよ夏の大会を迎えた。良い監督、悪い監督とは、的確に指示させるかどうかである。先攻・後攻を決めるとき、勝つたら先攻、負けて相手が後攻とつたらしめたと思えと、初戦は緊張するもので、ピッチャー、守備ともあがるものだ、先攻ならばバッター一人だけがあるだけだ、と指示を出した。

大会初戦は、春日部高校でピッチャーは国会議員となつた今井氏だったが先攻を取りコールド勝ち。二回戦はライバルの大宮工業で、大宮は、打倒川越高校ではなくピッチャーの吉田であった。家村監督は山崎マネジャーに偵察に行かせ、「大宮工業はピッチャーマウンドを2メートル前にして、外角低めを打つ練習をしている」という報告があった。そこで監督は、試合で全部インコースのシフトを徹底的に投げさせた。結果、ノーヒット・ノーランで勝つた。

続いて、川越商業、川越工業に勝ち、決勝は鴻巣高校に1対0で勝ち、吉田君は完封勝ちで、43インニング無失点、46個の三振の記録を作った。監督の的確な指示があればこそ、大宮工業に勝つことが大きな要因である。

さて、私どもは前年の慶応大学に行った北野氏や石井氏などのチームに比べ、格段に段差があり弱小チームの印象をもたれていた。ただ、ピッチャーの吉田君だけが県下で随一であり、何とかいけるのではないかと思っていました。そこに渋谷先生や後援会、OB会の支援で家村監督を招聘した、幸運の始まりでした。



内沼氏

一にも二にも高校野球は監督次第で、監督は、メンバーはそこそこでもエースの吉田君を鍛えればよいとの方針がもとで、翌年の夏の大会を焦点に一步一步と上がつていけば良いとの考えであった。

吉田君はオーバークラウドであったので、なるべく高い位置から投げる練習をさせられた。一日三百球でゴムを渡し、それ

西関東大会は、埼玉、山梨の地区割り、で、その年から始まった一県一校の一本勝負となり相手は甲府工業であった。皆さん当時は道路事情の悪しきなか、応援に来ていただきました。選手は余りの暑さにフラフラしているなか、三回に先制された。先制された経験はなかったもので、今日はまずい、と皆な思った。水を頭にあてながら、6回・7回に点を取りやっと甲子園に行けた。その時の思い出が昨日のように思い、時間が経てば経つほど感激が大きくなって来る。

甲子園に行きました。グラウンドが大きく観客も満員で、非常に緊張しました。手と足が一緒に出ました。入場行進では目が熱くなるほど感激したが、「何にもめげない川高魂を保持している」と肝に命じた。

一回戦は、熊本の鎮西高校で、巨人にいた末次が6番を打ち、プロに入った高城などがいた。再試合したら今から思えば勝てない相手だと思った。しかし、監督の指示により、先攻を取った。私は一番バッターで一S一Bのあと、目を瞑るような状態で大根切りでヒット、レフトがもたついていた、三塁打となった。一番近藤はフオアボール、三番杉田はスクイズ、そのとき監督は選手は見落とすといけなから

に触れないと一球に数えないということだった。もう一つは、ボールのリリースのタイミングでムチのようにしなやかに投げる、柔らかく握りリリースの瞬間に音のするように力を入れて投げると、ベース板の上で伸びてくる、と教えていた。一方、我々は打てないでも打てないであらうと、「エラーなし」「バント一発決める」、この二つが出来れば良いとのこと、守備練習、走塁、バントが中心であった。送りバントは九十パーセント成功した。そして、試合では「川高特有の頭を使つた野球」をすることだった。これが言いたいのです。(笑)

秋の大会の準決勝で深谷商業に2対1で負けた。家村監督は「これでいい、優勝したらマークされてしまう。」と言った。冬は上江橋まで北風の吹く中、苦しみながら横田主将を中心に走りこんだ。

昭和三十四年の春の大会で、常勝・大宮高校に九回サヨナラの1対0で勝ち優勝した。家村監督は「これでいい、夏の大会はシールドが取れる」と鼓舞した。

関東大会で多分対戦するであろう甲府工業に5対2で勝ち、次に、この大会で優勝した明治高校に0対1で負けた。家村監督は「いい試合だった」との褒め言葉で暗示にかかり、相手が強豪チームで

、大きなしぐさでバントのサイン(笑)、しかし、はずされキャッチャーが三塁にボールを送った、そこで川高の頭脳野球の真価が発揮し、三塁手が構える方向へ走り、キャッチャーのボールが私の肩に当たり、一点。一塁ランナーも三塁へ、次のバツター横田がスクイズ成功で2点入った。結局3対1で勝った。



甲子園初勝利 一校歌を聞くナイン

の試合は、高知商業、はなつから勝てない気がした。同じ通路に呉越同舟で待つていたら、相手の体格は一・七メートル以上、我々は一・七メートルもいかない（平均一・六二）、吉田だけが一・七三メートル、それだけで引けをとった。相手のピッチャーは法政大学からプロの東映にいった山崎であったが、お互い投げ合い8回まで〇対〇、しかし、九回ワンアウト一塁・二塁で、セカンドゴロでゲッツーを狙ったが、相手はわざとショート近藤の足に絡みついた。妨害、妨害と抗議している間、二塁ランナーがホームイン。新聞によると、三塁を踏まなかったとあったが、残念ながら確認しなかった。プロになったピッチャーの山崎は、真中低めの球は当ると振ってもキャッチャーに入っているというすごい奴だった。

最後に、多くの方々のご支援に感謝して、私の話は終わりにします。

（会員）〇B会ではできない話があるな！

（宮根氏・元川越高校野球部監督）

戦後の昭和二十三年に高校野球連盟が発足し、翌年の全国大会が開かれ熊谷高校が出場、二十六年には夏の甲子園で熊谷高校が準優勝した。埼玉県では川越商業、本庄高校などが強かったが、

打倒・熊谷高校であった。川越高校も二回位南関東大会に出た。しかし、当時は南関東大会で千葉県と争ったが、千葉県に勝てない時代が続いた。我々は暢気に川越高校には入れば勝てるよ程度で野球をやりたいということ入学した。



宮根氏

三十年代に入り、大宮高校が活躍し、我が川越高校や後半には、熊谷商業が台頭して来た。三十二年から三十八年にかけて大宮高校が優勝し、四回ほど甲子園にいった。その後、大型の大宮高校、パワーの熊谷商業、野本監督の上尾高校も強くなってきた。

四十二年には大宮高校が埼玉県で行われた国民体育大会で優勝した。四十三年には選抜大会で大宮工業が優勝し

た。大宮は大体この辺で甲子園関係は終る。その間、川越工業も甲子園に出場したが、五十年代に入り上尾高校の全盛時代となったなか、所沢商業も甲子園に出場した。

そうこうしているうち、私学のほうが強くなり、西武台高校が選抜に出たり、上尾の野本監督が移って選手をこそともつていった浦和学院、春日部共栄高校、聖望学園などが強いなか、五十年から六十年にかけて、ポツンポツンと四、五年ごとに鷺宮高校などの公立高校が出場していた。

我が母校は、二十三年から四十二年までの二十年間で、ベスト8に十五回入っている。甲子園に行くには、ベスト4に何回か入っており、この実績を見て、あと一、二回甲子園に行つてなければいけない。これが大きな課題で、大半は監督の責任であります。（笑）

一般的に云つて、「文武両道」を掲げる全国的進学校としての永遠の課題であります。唯、我が高校は全国的に有名な「伝統の力」がある。それは、一生懸命練習する選手、指導者、それに戦前から戦後にかけて、川越という町が野球部をおおいに支えてくれた。島野さんなどがこの流れをつくり、選手・指導者・応援して

くれる人が「三位一体」となつて、野球部を支え甲子園への流れとなった。

さて、昭和三十九年に新卒で、教員の任用で、渋谷健先生が面接された。母校の先生になる前に、外で勉強して来いと言われた。そうこうしているうち、家村監督が療養に専念することになり、当時の奥原野球部長などの要請により母校の監督となった。

平田、相羽、石井などの時代に甲子園に行けるぐらいのスラッガーがそろったときもあった。春は西関東大会で巨人に行った甲府商業に勝った。しかし、夏の大会はベストエイトで熊谷商業に負け、シックスで一週間休み寝込んでいた。しかし、新チームで練習に出てくるのでそうはいつてられない。

なかでも、四十二年国体の年、大宮高校など四校が強化指定された。強化費が川高がどうなったのかしらないが、夏の大会で延長十八回2対2の引き分け、再試合の十二回で勝った。十八年間の監督生活のなかでもよくやったという記憶に残る試合であった。

以後は、多くの方の支援がありながら、三回戦から準々決勝までで決勝にいけない、昭和五十年の秋の大会で決勝までいったが、良い成績を残せないことが申し

訳ないと思つてます。しかし、古い教え子は、最近、「監督は大変だったな」という声を挙げてくれていた。（笑い）

埼玉県も新設高校ラッシュとなり、昭和五十七年に鶴ヶ島高校へと、その後いくつか異動しました。思い出すのは、昭和四十五年から四十六年の頃、東大の安田講堂事件などがあり、あの時代の学生運動の雰囲気我が川越高校にも影響した。

そして私が川高に教員としてお世話になったころから、勉強勉強で大変な時代となった。我々の時代は一割は就職していたが、今は一〇〇％進学する。野球部も途中でやめたり、入ってくる人も少なくなってきた。そこで、頑張つていいところといった〇Bを連れてきて指導をしていただき安心して高校野球ができる環境づくりに苦労した。父兄には高校四年間と思つてくれという話もした。

教え子も三人ほど校長になったりしており、後輩も育つてきたので、バトンタッチをした。

私が甲子園出場といった良い思いをしたので何とか甲子園と思つていたが、成績を残せないのは能力ない監督であったが（そんなことはない、との声）、何とかの

「念で監督生活を送ることができました。（大拍手）」

（高島会長）

ここで、中等野球時代の話があります。飯田亮部長が熱心に指導に当られ甲子園に出場しました。（校庭に銅像が置かれている。）との声あり。

その当時は、中等野球界の勢力は、水原、川上、三原の活躍したように西高東低で、東は東北、北海道などは野球部などなかった。関東から一校枠の出場で、川越中学は甲子園から東方面では一番遠い「遠来の客」であった。そんなことで、野本主将が選手宣誓を堂々で行った。

（斉藤和夫氏（高一回））

私は、昭和6年の川越中学時代、飯田部長のもとで初めて、選抜大会に出場したメンバーの弟で、兄から聞いたことをそのままお話しします。初戦の相手は中京商業中学であったが、マンモス球場に圧倒され、皆な上がつたよう、イージーフライをボンボン落したりして大敗を喫した。中京にはショートの杉浦、東電に入った景浦、宮武などがいてスピードがまったく違いほとんど当らなかった。

（会員の声） 中京商業は現在甲子園で、一一〇勝を挙げており、その第一勝が川越中学ということで、永遠に残る記録

をわったことになる。(笑い)

(渋谷健氏当時の野球部長)



渋谷氏

野球部の中興の祖である家村相太郎監督は、甲子園に出た昭和6年に川越中学に入学、2年から一塁のレギュラーとなり最後はピッチャーをやり、7、8、9年と優勝をもたらした。昭和十一年セネタースに入り、都市対抗野球では、「オール京城」で昭和十四年には優勝などした経歴をもっていた。その後、天理高校、天理大学の監督、市立習志野高校のヘッドコーチをして全国優勝をした。これを記念してミニ優勝旗が家村氏に贈られたが、亡くなる二年前に、自分の家は女の子ばかりで仕方ないので、「お前のところ

に預ける」といつていまだそのミニ優勝旗は私のところに置いてあります。

昭和三十三年、胸を患っていたが「ベンチに坐っていただけでよい」とお願いし、川越高校の監督として就任していただいた。

さて、甲子園の主役はこのお二方が主役でした。私共は裏方に徹しましたが、ちょうどそのとき台風があつたので、選手は西宮の小さな宿屋におり、応援団は道頓堀の大黒屋に泊まっていたが、雨で試合が延び延びとなりお金がなくなると、西宮の宿舎まで何か食べ物と遠征費を応援団に回したことがあつた。

いざ甲子園に行ってみると、その当時、全国で珍しいプラスバンドのないチームであつた。その当時の母校では、渡辺校長の方針で、校内に放送装置もなく、「学園は静かであるべきだ」と言うことで、プラスバンドなどいらないことであつた。幸いにして、西宮市の教育長が埼玉県出身で、西宮市内の高校に呼びかけて応援演奏をしてくれた。しかし、高知商業の応援プラスバンドは当時流行った「南国土佐をあとにして」で、今でもつてこの歌を聴くと思ひ出す。

私の野球部長時代のなかで、島野主将が中心となり県大会で優勝したこと

がある。南関東大会に埼玉県4高、千葉県4校出場し、一回戦は勝つたが、次の相手は女性が多く、アレルギがあつたのか内野手はポロリポロリと、二回戦で負けた残念な思い出があつた。

昭和二十九年の準決勝の晩に差し入れがあつたものの中に、全員、夜は下痢状態になり、近くの医者である小杉医院や多くの医師に非常にお世話になった。今の規定では「健康管理上問題がある場合、棄権」であるが、そのとき、西武バスと交渉して大型の遊覧バスを借り受け、選手を横に寝せ空閒先生も一緒に行っていただき、酸素吸入器をもつていき、守備について帰ってくると手当てをして、かうじて優勝した。戦後、初めての優勝でした。

戦後初、南関東大会に出たら、「ようかん」やらなにやら差し入れが一杯あつた。ところがこれを生徒に食べさせて中毒でも起こさせたら大変と寝ずの番をしていたが、生徒は夜中に忍び込んできて、その管理に頭を悩ました。

次に、そのころの高校野球連盟の会長は佐伯氏で、県でベストフォーになると南関東大会に出場できるので、熊谷高校などは準決勝になると三軍をだしてくる。佐伯会長は、これはいけないと思ひ、地

区割りを昭和三十四年に変更して、一旦負けたら甲子園に行けないということにし、一県一高の西関東大会となった。甲府に行ったら、どういうわけか埼玉県出身の社会人野球の福永健司氏が開会式で挨拶した。これが炎天下のなかで、二十分以上の挨拶であつた。相手のチームはそれを知つてほとんどが補欠の人が並んでいた(影武者だの声)。福永氏は知らないだろうが、選手は頑張つてくれた。

新幹線もない時代、それまでの大会では、列車、宿の手配などはあらかじめやつておいたが、高野連の方針でこれからは決定しない間はこれをやつていけない、という面倒なこととなった。いざ、西関東大会出場が決まってから、急遽、寄付集めやら遠征の諸々の手配におおわらわであつた。幸い、生徒会長、マネージャーをやリットップバスターであつた内沼君がよくまとめてくれた。

なによりも、毎年度の高校野球記録集の一番上に「無四球」の吉田君の記録があり、それをみると思ひ出が甦る。

私が埼玉県高校野球連盟の会長になつてから西武球場で決勝が行われた。野口監督の川越工業が優秀なピッチャーが二人いて絶対に甲子園に行けると言われて

たが、立教高校と優勝を争つたが、ピッチャーの交代に齟齬をきたし、結局、立教高校が優勝した。戦後初めて、私学が甲子園に出場したのが立教高校であつた。ところが、立教高校が甲子園にいくと、大学野球と間違えたのか紙フビキを撒き散らすやらで、私は早速、全国高野連の会長に呼び出され埼玉県は何をしているのか、掃除しろとお叱りを受けた。

その後、浦和学院が出場したら、センターの鈴木健(後、プロの西武)は、ベンチからセンターにノロノロ行くので、塁審が注意するとその場で早足で足踏みしていた。また、タッチアウトするためキャッチャーがブロックするが、それは駄目と言われたが、3センチほど上げていたのが悪いかと抗議などした。そんなことで、埼玉県のチームが出場すると、ピッチャーが順調に投げていると投球の注意をするなど、それ以降調子が狂うということがあつた。

最後の三年間、全国高野連の副会長になつたが、牧野会長から他に三人いるなか、大会本部に泊るように云われた。本部に入ると審判と一緒に行動するので、五時に起床、さらに、会長が起きるまで正座で待つていなければなら

なかつた(野球道だ!、との声)。食事も審判の人は体育会系らしく食事が早い、私は一杯食べるのが精一杯だった。食事は生ものはいけない、ビールもダメだった。終れば、夜の九時になると、その日の審判の反省会に付き合はせられた。あの試合の審判の位置は適切だったかどうか、議論につきあはせられた。また、当時、野球トバクの疑いも騒がれており、審判共々タクシーに乗せられ球場へ行き、ネット裏に閉じ込められ外部と遮断させられた。

今は私学が中心であり、予算規模も圧倒的に違う。私学は多くは他県から来る選手が多い。地域との馴染み薄い。しかしながら、多くの方にお願ひしたいのは、川越、浦和、熊谷などが三年か五年に一回は公立高校が出場して欲しい。そうしたことが地元ファンが増える。

今日は甲子園出場者の寄せ書きの皿と甲子園の土を持ってきました。あとでご覧下さい。私の高校野球の思い出は以上の通りです。

(大拍手)

(関根憲治氏・高三回) 当時、父が川高の教頭をしており、学校にいけないといけないので行けないから、お前が行けと言われた。夜行列車で行つたが台風で遅

に着いたときは、甲子園に入ったのが、前の試合の九回も終った直後で、「南国土佐をあとにして」の応援に圧倒されたが頑張った。

(渋谷健氏) 関根五郎次教頭は、学校にいなければならなかったは、寄付集めに奔走されており、「金をくれ」という、その時に電報を送ったのは私だった。関根教頭は厳しい先生で、出勤には厳しく、そのおかげで貴重な教訓がまだに生きています。

(駒井正明氏・高四回) 私の仲間で野球部で皮のグローブを持っていた山田地区出身の松崎など多くの人がいました。会社は三井船舶の大阪支社に勤めたばかりで、その時期、台風で天候が悪いため待ち合わせなければならなかったで、応援に行けるかどうか判断できなかった。しかし、新規採用は二日間の休暇があり、伊丹に独身寮があり、近くなので応援に行ったが、内沼さんがサイレンが終らない三塁打を打ったときに着いた。上司に巨人の川上の出身の熊本工業の人で、鎮西高校は柔道界では一番で、野球はたいしたことがないといわれたが、体格が良すぎた。川越高校をみたら我々と同じで、かわい。あのころバスケをやっていた斎藤氏が一・八八メートルでダントツだった

が、私は一・六六メートル、六十三、四キロで大きいほうだったが、鎮西高校とは比較にならないくらい小さかった。が、勝った。

全国的に、川越高校は「文武両道」で、浦和、千葉など有名なところだが、知り合いがい関係をもっているのが多いといわれている。これに期待している。

(菅間五郎氏・高九回) 私は川高野球部出身を誇りに思っている。一年のときすごいピッチャーいて優勝、二年準優勝、三年のとき私はキャプテンになった。その年、川越商業と戦い、シード校でもあるし負けるはずないと思っていたが、相手は女性が多く、女性アレルギーで一口で負けた。(笑い)兄の昭(高六回)のスパイク、グローブの援助があり、東大で野球やれというので浪人をしていたら、大槻さんという先輩が松山高校の監督をやってくれといってきた。私は東大しか受けなかったで、浪人中でも監督を引き受けた。一番大変だったのは、ノックをして家の掃る和小便が赤くなった。胸もそのころから悪くなったかもしれない。その後は次回に話します。

(松井顯敏氏・高四回) ひとつだけ覚えてます。NHKのアナウンサーが九回裏二アウト、2&3でピンチヒッターを出し

たときベンチを暖めた人を出したら「勝負を諦めましたね」ということを言っていた。そのときの状況を覚えていたんだ。

(宮根氏) 渡辺という彼一人だけ試合に出られなかったが、キャプテン横田の代打で横田自らが家村監督に申し入れ出た。そして「思いっきり空をきった」、そしてゲームセットとなった。

(柴崎育久氏・高二回) 運動部、野球部三年でなく四年のつもりでケアする方策もあるのかなと思う。高校生でスポーツをやりたく、一浪覚悟で卒業後フットーすることも考えることが必要かなと思う。運動部はいい青年が入ってくる。

(岡部延夫氏・高二回) その当時、大阪に勤務していたとき、誰から電話がかかってきた。高二回は何円寄付ということとで応援したことがある。ラジオですつと聞いていたことを思い出す。「文武両道」は大変なことであると思う。

(石井勝巳氏・高二回) 高校野球でいえば、父が校医をしていた飯館高校が強かった。私は国立病院に勤めていたので、行けないので、弟があの暑い甲府に行った。

(猪鼻茂氏・高九回) 私の人生で高校野球は大きな存在だった。中学一年のとき熊谷高校が平安高校に決勝で負けたの

がきっかけで忘れられない。三十四年の甲子園、内沼氏の三塁打、いまだに憶えている。そのとき入社二年目で、会社の仕事をやるふりしながらテレビをみていた。私の社長は川島町出身の遠山氏で、社内報に号令一下、川越出身の人は職位の何号級の人は幾らという具合に載っており、なかば強制的形で寄付した。二回戦、熱中して見た。高知商業のピッチャーの山崎は打てない、しかし、健闘したことを社内で自慢した。ここ何年か菅間五郎氏の勝いで初雁球場へ応援に行っている。何とかもういっぺん甲子園へ行っていたら、何の憂いなくあの世に逝ける。

(加島篤人氏・高三十四回) 私は昭和五十七年卒です。宮根先生が体育の先生で、唯一の甲子園の選手であり生徒から尊敬されていました。私の息子も野球が好きで、ひよとして川越高校へけるかもしれないところです。(頑張れの声あり。)

今回、事務局会計より、在京初雁会創立五十五周年を記念し、会の旗を初めて作ったこと、及び、来年の母校創立百十周年記念同窓会会員名簿の広告の掲載を申し込んだことが報告されました。

第二十二號

大正十五年十二月發行

埼玉縣立川越中學校學友會

第22号

九四

練習日付は四月十九日、玉澤閣會を以て戦ふ。玉澤閣會は我國屈指の實業チムなるも我が選手は勇敢に戦ふ。試合は午後一時中玉澤先攻にて開始。

一對五澤戰

中			澤		
2杉	田村	久保田	6佐倉	飯沼	澤
4摩	田見野	保田	5市	岡	
6北	大	山	7		
8久	野		8松	本川	
9大	保田		4佐	原	
1中	山		5県		
3餅			6		
打	安三	四死	打	安三	四死
數	点打振	球	數	点打振	球
二	六	八	四	一	三
二	六	八	七	二	三
二	六	八	四	一	三

玉澤に博覧してより我が國乎は臥薪嘗膽の恥を悟りて練兵

二對廿一回卒業生

川 中		牟 農 生	
2杉	田村	1水	村島
5浮	田見	2魚	井
6浮	田見	6平	井
7北	見野	5馬	井
1田	中久	3淺	海田
8大	中久	4岩	田西
9田	中	9田	西島
3跡	保信山	7大	
打 得 安	四 元	打 得 安	四 元
數 点 打 振	元 球	數 点 打 振	元 球
二 八	二 八	二 五	二 四
二 〇 九	〇 九		
二 森 打	田 中	二 森 打	田 中
三 森 打	水 村		
本 森 打	津 見		

恩澤深き浦島グラウンドに再びの恨を呑みたる我が露は今又大
會を目前に控へ、金熱候くが如し八月十六日より他部に先立ち露
舞を開始す。金石をも砕かす真夏の日光を浴びて活躍する感
手の過程には必ずしも二階の日光を浴びて活躍する感
八月十六日、練習開始五年船津四組は
八月廿七日、院中巡行し來りしと泰田の爲中止

三夏季練習

川 中		牟 農 生	
2杉	田村	1水	村島
5浮	田見	2魚	井
6浮	田見	6平	井
7北	見野	5馬	井
1田	中久	3淺	海田
8大	中久	4岩	田西
9田	中	9田	西島
3跡	保信山	7大	
打 得 安	四 元	打 得 安	四 元
數 点 打 振	元 球	數 点 打 振	元 球
二 八	二 八	二 五	二 四
二 〇 九	〇 九		
二 森 打	田 中	二 森 打	田 中
三 森 打	水 村		
本 森 打	津 見		

恩澤深き浦島グラウンドに再びの恨を呑みたる我が露は今又大
會を目前に控へ、金熱候くが如し八月十六日より他部に先立ち露
舞を開始す。金石をも砕かす真夏の日光を浴びて活躍する感
手の過程には必ずしも二階の日光を浴びて活躍する感
八月十六日、練習開始五年船津四組は
八月廿七日、院中巡行し來りしと泰田の爲中止

五對內國通運

試合終つて晚餐の御馳進にあつたが午後八時鐘開空しく歸校

五對内國通運

九月十三日内國通運を迎へて戦ふ。主戦を失ひて意氣消沈する選手も、その大勝により元氣を恢復。試合は午後零時中内國運に開始。

六 成城中學野球戰

川 中		成 城	
5 2	水北村野田	3 4	山田兄澤水
6 6	岸津洗中	4 9	李塚
3 7	洗中久中	7 7	須鈴矢吉
5 4	田田久中	1 9	水澤原弟田
9 1	田田西信保學	5 6	塚
1		8 8	水永
打 得 安 三	四死球	打 得 安 三	四死球
數 點 打 振		數 點 打 振	
一 六 三 三 八 二		一 九 九 五 四 三	
二壘打……鈴木	矢野		
三壘打……木村	田中		

川	5	水	2	打	數	一六	二	三
	6	求	1					
	7	取	3					
	8	活	7					
	9	給	4					
	10	中	9					
	11	入	1					

第一圖（虎）西山、西平田四株に出て手塚抜矢先に生さぬ高嶺なり右澤の遊園に西山刺れ鈴水の右越二疊打に西平田、手生道、矢野喰いて右岡を抜く。二疊打を飛ばし齋藤、鈴水生道、吉原遊園手塚の左首安打に矢野生道、真田三郎（川）水塚

九六

[illegible]

七 東京齒科醫會

東	國
6	尾野五林
3	淺見栗枝
4	萩明武
7	原樹川名
1	老
9	
3	
8	
6	
打	安
數	得
二〇	六
二	五
二	五
三	五
本	林

東	西
6 門	尾野
5 淺	玉林
4 兒	原
3 疾	德川
2 明	名
1 武	
3 擲	
8 老	
6 堤	
打得	安三
數点	打板
二〇	六五二五
二叠打……	海老原
三叠打……	堤
木叠打……	尾野

八月廿八日 對東俱樂部二〇對二を以て大勝
八月廿九日 對K俱樂部一四戰一六對二大勝
同夜八時東電の水下、平田兩共コナ

ついでルールの研究

八月廿一日、引續き、コナキ、鎌倉を終り、兩兵衛京でら
（廿九日）野木川橋敷番一圓叙
前日の對馬佐保藩の長崎開港合に、屋下中南一層の元叙
以て餘に當る、川中先頭に開航。

K	俱	郎
4	田	伊
3	得	伊
2	津	津
1	河	原
7	大	島
9	矢	山
8	矢	山
打	安	三
數	点	板
二	四	四
一	二	三

本村 岸田 大久保

川	中	大	井
4	村野田	4	田竹
2	見津保	1	5
6	久	5	3
5	中	2	6
8	中	3	7
1	中	6	9
3	中	7	安
8	中	9	八
9	中	安	八
7	中	打	得
打	得	打	得
点	点	点	点
二	二	三	二
一	一	八	七
一	一	八	七

二強打……四竹

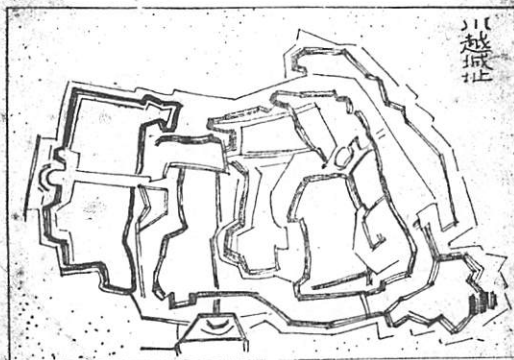
四 東電遠征對大井工場

木村主幹に代り北野拓手となり、猛練習一週にして遠征す

川	中	聖	電
4	水	9	林
2	北	8	森
5	岸	6	田
7	邊	4	下
3	久	2	取
8	保	6	奔
9	田	3	野
1	中	7	谷
	田	1	奔
	中		
打得安三	四	打得安三	四
數点打振球		數点打振球	
二二三五一		二二七五五	
二叠打……富谷			

九五

會報



會友學校學中越川立縣玉埼

報會友學

號三十二第

月二年三和昭

校歌

一葉匂ふ武蔵野の
秋の庭の規模廣く
秩父の嶺の遙ざなく
二師弟の情思濃かに
卒業はしらす實に著き
我が校風は三芳野の
三雲に棲る鳥の跡
大和心に西の才
高き壁を初歴の
天興し深き川に
進歩し學び舎は
切便の友誼亦厚く
習を精して勉をしく
社頭の梅と寒るなり
雪に春ぬる文の道
雄飛の望美ひて
遠望の月と輝かせ

第23号

野 球 部 記 事

忘れしめ去年の秋九月廿三日、我等は浦高に又々悲憤の涙を流さねばならなかつた。此の恨をどうして忘れる事が出来やう。唯、復讐の二字があるのみだ。母田主将を中心として春季休戦中より早く練習を開始し、勝利に、復讐にと精進した。

一、對富士印刷會社

四月十一日 新學期早々東京より、富士印刷會社を連へ第一戦を試み、接戦數分の後十一A對十にて勝つ。

二、對ハ俱樂部

五月二日 俱樂部を連へ本校庭に戦ふ、十三A對十一のスコアにて勝つ。

三、對埼玉縣師範學校

五月二十九日 埼玉よりの特選に對して、之を本校庭に連へ戦つ、午後三時川中先攻にて開始、本日大久保をアレーに送りたるも、尚餘の打撃強はるに及し、本校の打撃大に振る本體打三番打撃出して打順七周し、廿七對六の大差にて勝つ。閉戦六時五分。

川	中	師
野里保田田田島岡	北中大岸田安島桑平	田見羅川林木村田野
2 5 1 6 3 4 9 8 7	2 5 1 6 3 7 4 9 8	4 7 2 6 6 1 9 3 8
打安三 四 監 失	打安三 四 監 失	打安三 四 監 失
數打振球壘策	數打振球壘策	數打振球壘策
29 10 5 4 3 5	50 15 3 10 16 6	33 5 9 10 8 16

六月十日 假能實業野團第一回戦
四對四のまじり渡の爲ランダーとなる。
六月十三日 雨の爲延びくになつて居た。三省堂は遠征して来た。本校も雨後の爲選手もさうは打順にも位置にも大變動を來し、八A對七にて惜敗す。本年最初の敗戦なり。
六月二十日 再び本校庭に戦ふ、此度は本校もベストメンバーにて堂々たる陣を布いて對戦したが利あらず九對五にて再敗す。
六月二十七日 今年とは勝たねばならぬ。秋の大會準備として、場外の爲に浦高に遠征したが、十二對三にて惨敗した。

七、對三省堂二回戦

六月二十日 再び本校庭に戦ふ、此度は本校もベストメンバーにて堂々たる陣を布いて對戦したが利あらず九對五にて再敗す。

八、對浦和高等學校

六月二十七日 今年とは勝たねばならぬ。秋の大會準備として、場外の爲に浦高に遠征したが、十二對三にて惨敗した。

川	中	高
野里保田田田島岡	北中大岸田安島桑平	石木坂好高三加栗風
2 5 1 6 3 4 9 8 7	2 5 1 6 3 7 4 9 8	4 7 3 6 1 9 8 2 5
打安三 四 監 失	打安三 四 監 失	打安三 四 監 失
數打振球壘策	數打振球壘策	數打振球壘策
29 10 5 4 3 5	50 15 3 10 16 6	46 14 5 3 13 1

五、對假能實業野團第一回戦

六月十日 假能實業野團の招待を受け天覽山下の球場にて對戦。四對四のまじり渡の爲ランダーとなる。

六、對三省堂

六月十三日 雨の爲延びくになつて居た。三省堂は遠征して来た。本校も雨後の爲選手もさうは打順にも位置にも大變動を來し、八A對七にて惜敗す。本年最初の敗戦なり。

七、對三省堂二回戦

六月二十日 再び本校庭に戦ふ、此度は本校もベストメンバーにて堂々たる陣を布いて對戦したが利あらず九對五にて再敗す。

八、對浦和高等學校

六月二十七日 今年とは勝たねばならぬ。秋の大會準備として、場外の爲に浦高に遠征したが、十二對三にて惨敗した。

川	中	高
野里保田田田島岡	北中大岸田安島桑平	石木坂好高三加栗風
2 5 1 6 3 4 9 8 7	2 5 1 6 3 7 4 9 8	4 7 3 6 1 9 8 2 5
打安三 四 監 失	打安三 四 監 失	打安三 四 監 失
數打振球壘策	數打振球壘策	數打振球壘策
29 10 5 4 3 5	50 15 3 10 16 6	46 14 5 3 13 1

九、對明治大學ホツケ一部

六月二十八日 本校出身の小室氏の好意によりて、本校庭に連へ戦つ、最初苦戦なりしも第八回一撃に七點を得て斷然ランダーとなる。十五對十にて大勝す。

一〇、夏季練習並に

試験終了後直に夏季練習に入る。全宿せるもの岸田主將以下石川田中、大久保、北野、平野の六名、關東大會は日對に追つた後で、先鋒水村氏に選

粉	中	打得安機三冠亞刺補夾 點點打打抵冠冠殺殺殺
3	菊池	3 0 0 0 0 2 0 1 6 1 2
4	島田	2 0 1 3 0 0 6 6 3 0
2	仲上	5 0 0 0 0 0 0 8 3 6
7	渡邊	5 1 0 0 2 0 0 1 0 0
1	關口	5 0 0 0 1 0 0 1 8 1
9	國濟	4 0 0 0 1 1 0 0 0
5	館野	5 1 0 0 1 0 0 0 1 2
8	木村浩	4 2 1 0 0 0 0 0 0 0
6	木村隆	4 0 0 0 0 0 0 1 4 4
		78 4 2 3 5 3 0.33 20 9

中 川	打得安機三四盜則補失 斃傷 斃打打損匪盜殺殺殺
2 北 野	6 2 0 0 1 0 0 5 1 1
5 中 里	6 2 1 0 2 0 1 2 1 1
1 大久保	4 1 1 1 0 1 0 1 7 0
6 摩 田	3 0 1 0 1 0 1 2 2 4
3 田 中	6 0 1 0 2 0 0 3 1 0 0
7 安 田	6 0 1 0 0 0 0 5 0 0
4 島 田	5 0 0 0 2 1 0 4 2 1
9 石 川	4 1 0 0 0 1 1 0 0 0
6 平 岡	5 1 1 0 2 0 0 1 0 0
	47 7 6 1 10 4 2 33 13 7

日熱心ニ事ヲ行フニ志ヲ立テ、
三十三日、小室氏ハ總力を以テ明大春を新嘉坡國氏ナシメテ出來
テ、三日間ニ移リ、午前中ニ二般輪船ニルル大春出陣心得等ヲ綴
紙ニお託シトスルニ至る。
午後陸軍部總務課に出テラテテシテ、
イギリスンに懸力にヨクナシ、大春出陣前
實際ニハ戦線ニ至ル力にヨクナシ、大春出陣前
實際ニハ戦線ニ至ル力にヨクナシ、大春出陣前

二、 對飯能實業集團第三回戰

七月十八日、關東大軍前鋒ニ對シテ、飯能ニ進駐シテ行
ハ、強固ニテ敵ヲ築キテ十三日ニ殲滅ス。

大正十一年龍ヶ崎の大会以來絶へて出場しなかつた本校は、本年再び遠大な希望を以て宇都宮に開かれた北關東大会に出場した。八月一日宇都宮に出発、板屋旅館を本據として戦ふ、情しき事に田中投手が肩を痛めた大久保一壘が代つて健闘したが救助投手を欠いた爲、遂に宇都中に敗戦するの己むなきに至つた。

第一回戰 不戰一勝
第二回戰 對粉木中學校
八月二日、粉中は優勝候補の二に數へられ、殊に投手關口は當大

第七回 川三番丸退却して、最初は手足も足らずに得たやうだが、
諸川中日本最大最初のジャンプを果してつゝ殆ど全滅した
出、最後は頭部直撃の事案に、敵を倒した。義助の十時廿分川中
先攻にて開始、殊甚き苦戦を要す。

第八回 二死後久保田四球一失、岸田三安打で續きし甲申
中投殺、初創石川田に出で以下凡退

第九回 二死石川田田に出しのみ。(初創田三振捕獲誤殺)
球を選びし銀野の飛に接する、田中三振。(初木村浩平
本野除失)退失し久保田四球左直球右直球のスクイズ成
つて木村浩平退一を先取。

第十回 二死石川田田に出、捕逸に二塁せし殘壘。(初
第四二失に擊三退、二死後銀野遊高投に接して兩逸生還連
五打中堅に接し、二死後選りし投手の高に連打四點を占むと
材田退。(初二死大久保失、岸田田に出で、捕逸にのみ初めて
三塁を踏めるのみ爲(約三者凡退、)

第十一回 二死久保田田に出、一躍目の犠牲になし。(約三死
後國清三失銀野投殺)

第十二回 川北射野郎一失を出して牽制球に刺され中里一一
の後左翼前に大キムランを飛ばして一點をつぎ下凡退。(柳
三者凡退)

第十三回 川三番丸退却。(初為田三塁左に安打したる後援殺が
第四回同四對一のスコアで最後に入る。(川石川先づ退却を限ると

一八

一三、夏季練習後期

關東大會より二週間休養して八月十七日より又も練習を開始した。日増すは唯速高の大会のみ、關東大會の経験より推して、連日の練習は益々猛烈だ。

その間数度の試合に愈々試合馴れた。

、月二十二日 本校出身増田氏の盡力により横濱方面に好成績を得て、羽田球場に於て、午前中マッダラシンプレフシマンと相見えた。十三人對三にて大敗す。

全日 晝食後直に橋筋の娘星月俱樂部を對面し
東電の木下、平田兩氏特別加入し、第四回 八點を得て八對
七にて勝つ。

三

一七、對橫濱商工實業學校

「接戦にて七A 對六のクロススコアを以て勝つ。閉戦十五分

川	中	實	習
2	北中	5	元田
5	野里	7	水杉
1	久保	2	高田
6	大田	1	四山
3	保田	9	望山
7	田中	3	守屋
4	安田	3	貞野
9	島田	H.P.	(森)
4	山田	4	藤井
8	石川		
打安	三死	打安	三死
37	打振球	38	打振球
4	4	5	4

三月三十日 國に於て羽田球場にて陛下の御前神中を觀ふ、一分神中先攻にて開始、神中は大體來年度のチームなりしもの胸さへ、その上我疲勞は益々加はり十四對九にて破る。閉

神		中
8	大野	貫村
6	岩	崎川
2	湧	本
1.4	河	内
9	(加	野
9	平	邊
4.1	唯	橋
7	田	
3	高	
5		
打安	四壁	矢
敵打	死球	壘
37 9	2 5	3 8

凡たしも鈴木技師に謀られ、遊し大谷の二遊間安打も小野粘固
め打に無傷（一）北野遊固の球のみ。
第四回（宇）五打を遊固安ぜししも後援がす（川）三者凡退
第四回（宇）一死後佐藤二遊間に安打し盛壘大谷とのスタイブ成
て生還小野の左翼二壘打に粘固の遊固に空し（石）小川三割安
投に二壘なしも後援なし。
第五回（宇）五月女三割安投二進でしや續く三者凡打（川）三
者凡退。

字	中	打得安福三四空刺補失 數點打打低球空殺殺殺									
		3	4	5	6	7	8	9	0	1	2
芝	野	3	0	0	0	0	0	1	1	1	0
松	本	5	0	0	0	0	0	0	3	2	0
鈴	木	3	1	0	0	3	2	2	0	0	0
佐	藤	5	2	2	0	0	1	1	1	0	0
谷	谷	4	1	1	1	1	0	2	2	3	2
小	野	4	1	2	0	0	0	1	4	0	0
貼	潤	3	0	0	0	1	0	1	0	1	1
五	月女	3	0	1	1	0	0	0	3	2	1
福	田	3	0	0	1	0	0	0	2	5	0
		35	5	6	3	4	3	7	27	13	

二疊打 佐藤 小野 瑤晶 9

た。云ふも怠かな事ながらも一人投手があつたらと思はれた。有力な投手を有するチームは底力がある。

第七(中)二號後大谷へ失に出で、整し小川の遊、岡安打に生
深小川と二號紡圖の遊に還る(川)此北遊船。
と石川三右衛門は三遊間に安打にたたる北遊船。
第八(宇)三君凡馬(一)死後伊田左安打に出で田中の左飛
失に三疊を離れて刺る。
第九(凡)馬愈々最振(宇)三君凡馬、(川)安田三飛田遊機安
打た(宇)凡馬遊船にて刺し、此平岡の遊船に萬事
休し五對一に敵る。閉關十二時す。

川	中	打得安鐵三西亞利補失 數點打打球球疊疊設置 死
2	北野	3 1 1 0 0 1 1 4 1 1
5	中・里	4 0 0 0 0 0 0 1 1 3 3
1	大久保	4 0 0 0 0 0 0 0 1 7 1
9	岸田	4 0 1 0 1 0 0 0 3 1
3	田中	4 0 0 0 1 0 0 1 7 0 1
7	安田	4 0 0 0 0 0 0 0 2 0 0
4	島田	4 0 2 0 0 0 0 0 0 5 0
9	石川	4 0 0 0 1 0 0 0 0 0
8	平岡	4 0 1 0 0 0 0 2 0 0
		35 1 5 0 3 7 1 27 18 7

40-2000

附記 本縣の常磐線中は第一回戦にもろくも敗れたか、新造崎南は第三回戦迄残り高中で奮戦して本校と共に慶名を挙げた。そして結局前橋中學校が昨年に引續いて優勝し甲子園に於ても

二〇、對松山中學校		九月十日 開選に於ける浦島大會の予選に松中を本校に對し、敵手松山中校に先攻を以て開始		變へて勝つたは松中軍田中者知子と、最優は一點を獲つのみで十人對にて大勝。 開戦後時半	
中	松	中	松	中	松
田 藤	5	田 藤	5	野 本	失
原 田	2	井 金	2	里 保	三 安
川 岩	3	前 戸	3	久 中	四 死
1 9	1	宮 小	1	大 中	打 振
4.6	8	岩 小	8	岩 中	三 死
7 7	6.4	林 松	6.4	安 田	壘 壘
本 本				田 中	業 業
				平 田	
				1 3	
失 壘 死	打 安 三	失 壘 死	打 安 三	失 壘 死	打 安 三
4 死 壘	三 死 壘	4 死 壘	三 死 壘	4 死 壘	三 死 壘
7 1 2 6	24 3 7 1 2 6	7 1 2 6	24 3 7 1 2 6	7 1 2 6	24 3 7 1 2 6

場	師	打得安福三四盜刺補失 數點打打振飛飛殺殺殺
4	比田	2 0 0 0 0 1 0 1 1 1
5	若林	1 1 0 0 0 2 0 0 1 7
1	強久	3 0 1 0 0 0 1 3 0
1	小川	2 1 1 0 0 1 2 1 2
2	多比羅	2 0 1 0 0 1 2 5 1 1
3	岸	2 0 0 0 0 1 1 5 0 2
7	逸見	2 1 1 0 0 1 0 2 0
9	佐々木	2 0 0 0 0 1 0 0 0 1
8	大野	2 0 0 0 1 0 0 0 0 0
		12 3 4 9 1 8 5 17 10

燒 品 8

川 中		投得安欄三四盜刺補失 數點打打張球疊殺政策
2	北 野 里	1 2 0 6 0 5 0 2 2 1
5	中 中 里	5 2 2 1 1 0 0 3 3 1
19	大 久 保	2 2 1 0 1 3 2 0 3 0
9	(山 本)	1 0 0 0 0 0 0 0 0 0
6	岸 田	4 2 3 0 0 1 2 2 0 1
31	中 孝 田	4 2 2 0 1 1 0 6 1 0
73	安 田	5 4 3 0 0 0 3 1 1 0
4	魚 田	2 3 0 0 0 3 1 0 1 0
9	石 川	1 2 0 0 1 2 0 0 0 0
18	田 中 信	2 1 0 0 0 0 0 0 1 1
87	平 田	1 3 0 0 0 0 0 0 1 1
28		23 10 1 4 19 13 15 10 3

三疊打 中里 二疊打中里 殘疊10

第二回戰　對馬・南滿洲軍校
第四圖に於ては、準決勝に於て本校は宛角の頗る合せる選手を擁して戦つた。結果年長持勝との評判なりしが左に敗れたこととなり第一と稱する一勝者の者、今年には二つで勝ちを二期に破つて見せり、その部中の敗退として後援候補補正組生の對抗と事實上の口尻負決闘と云ふべし。川中は、基盤的に南に三脚地に隣り居れば陸路其な難ぶらぬが、陣の運びにつれて急き戦狂を行つた。そして中星の二番手が直接勝負ひいて遂に此大木に至った。終りに十九廿四日以後一時五分、場内先攻にて開戦し、球裏面から

iii

周	中	成	城
2	北	6	手
5	中	8.3	吉
1	久	2	荒
6	大	1.5	原
3	岩	2.6	野
7	田	7.1.5	水
4	安	0.8	澤
9	石	4.9	下
8	平	8.7	村
			澤
打安三	野四	打安三	盜失
振振振	球球	振振振	榮榮
316	5 8 3 4	172	2 6 0 11

[illegible][illegible]

場	商		打母安爐三 點點打打銀珠死 雙空四零殺業
6	葉	崎	4 0 0 0 1 1 0 0 2 1
9	鈴	水	3 0 2 1 0 1 0 0 0 0
5	葉	園	4 0 1 0 0 1 0 0 0 2
1	關	口	4 0 0 0 1 1 0 0 2 0
8	青	木	4 1 0 0 2 1 0 4 0 0
7	藤	森	4 1 1 0 0 0 0 0 1 0 0
3	栗	原	3 0 0 0 1 1 0 8 0 0
4	德	橋	4 0 1 0 0 0 0 1 0 0
2	大	石	3 0 0 0 0 1 0 1 0 0 0
			33 2 5 1 5 7 0 24 6 2

たが、番國口遊漁船と青木の投網に止めて獲物ならす五、六個、二下で川中大勝す。聞聞三時半、護身の大部分を五年に持て、今一年と二はの意氣物獲つた。海潮軍が海援圖に懸せめられながら、さう／＼と退く様を見れば、去年迄の我身の事が思ひ出され、感慨無量であつた。一方も優勝した様に喜んで我々には護援船の歡呼の中に雄姿颯々として引上げた。

1124

		打	得	安	三	四	盜	刺	捕	失		
		數	點	打	振	球	壘	殺	殺	殺		
川	中	5	6	3	1	8	4	7	9	9	6	6
山	本	4	2	2	0	0	0	1	0	1	1	1
友	光	3	2	0	0	2	1	1	1	0	3	2
水	村	3	2	2	0	0	1	2	1	2	0	0
都	篠	4	2	2	0	1	0	1	1	1	4	0
藤	田	4	2	1	0	0	0	2	0	0	0	0
竹	澤	4	2	1	0	0	0	2	0	0	0	0
栗	原	4	0	2	0	0	0	2	1	2	0	0
(中	島	3	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0
大	澤	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
(根	岸	3	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1
本	間	4	2	0	0	0	0	1	6	0	0	0
		33	12	9	0	7	3	10	21	11	4	

残塁3 本塁打都栗 二塁打 藤田

十一月十三日 本年度最後の試合を卒業生五俱樂部と行ふ。兩軍勢を揃へて激しく奮戦し、後半得点を重ね十三對七にて大勝す。

三〇 本校主催市内實業大會
十一月十四日、十五日 本校主催にて市内實業野球大會を開催す。参加十五チーム。

第一回戦
川中職員第二十二 9 勝 川産
東電川越支社 3 石川工場

第二回戦
川中職員第一 不戦一勝
川中職員第二 24 6 東電川越支社
東電川越支社 19 9 川中職員第二
即ち川中職員第一チーム優勝す。

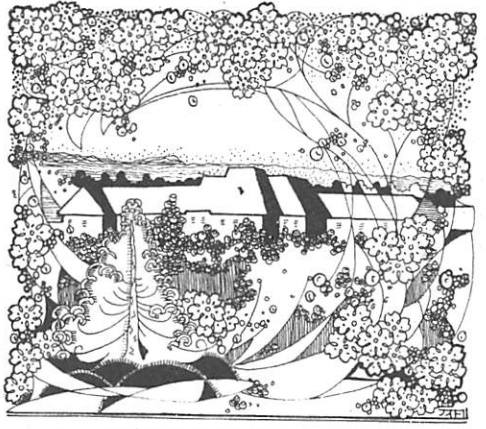
山口 山田 桑田 見永 中野 田
原 原 飯保 前吉 吉 岡 細 下
5.6 7 6.1 2 1.5 3 9 9 4 8

願わくば本年は野球部も多事多端であつた。新學期早より試合の数を重ね、久し振りに關東大會に出場して大に敗れたりとは言へず、其の最なほ、或は遠く横浜に遠征して技を練り、遂に本年の希望がたつて通の大會に優勝し、中野部校の戦を脱つた。我等の喜びに勝つた事はない。最初には勝つた大會に勝つ、最後に勝つて優勝し、勝つた大會に勝つた。嗚呼、幸といふ哉!! 選手もよく戦つたが、それと共に忘れてならないのは先輩木村氏の絶えざる努力である。後援を思ひがたい事務の余命をさして熱心に指導して下さつた事は、この立派な成績に對してこれだけ異つて力あつたからならぬ。勝つて優勝し上げればならぬ。之にて野球部史を閉づ。

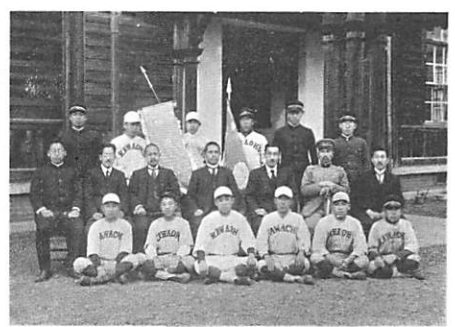
(江森英志記)

會報

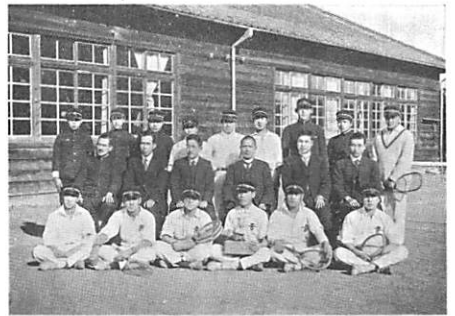
年周五廿
號益記



會友學校學中越川立縣玉埼



手 還 部 球 野



手 還 部 球 庭

及び木下明氏のコー

東電草			草		
(遊)	加島	摩海	(抽)	杉木	田村
(一)	渡香	海取	(中)	岸伊	田村
(抽)	大瓦	得丹	(二)	船時	田村
(二)	瓦鈴	丹湯	(投)	野原	津山
(三)	鈴熊	湯水	(有)	北浅	山原
(友)		水谷	(一)		野見
			(三)		
打數	四	得點	打數	三	得點
	四	一		一	二
	五	九		一	二

昨年の大会には、朝鮮新界の權威者、自他共に許した熊中軍に内應として一時彼の心腹を牽かしためた我が黨は大河原、内田杉浦、新井の四者を送り出したとは云へ、韓津を主將として韓東愈々固く私に今更の秋を待機して戰勝をなさざりなかつた。十三年度新ムベリは左の通り決した。

五月十五日K俱樂部之戦ふ。(球審渡部、壘審井上)

R 樂 俱 部				
(抽)	增		田	
(一)	本		橋	
(遊)	手		川	
(二)	疊		島	
(投)	水		村	
(三)	摩		波	
(右)	田		中	
(中)	矢		島	
(左)	吉		田	
打數	雙 疊	三 根	安 打	得 點
四九	一一	九	八	一四

六月一日、多田君を連れて生れたばかりの我が子と△はこゝに

川	中	軍
(遊)	岸	田
(一)	杉	回
(二)	伊	原
(指)	船	津
(三)	淺	見
(中)	木	村
(右)	栗	原
(找)	原	山
(左)	神	岡
打數	雙 壘	三 振
	安 打	得 點
三八	七	八
	八	七

草野好三				
(三)	小	林		
(左)	可	兒		
(一)	田	代		
(投)	桑	島		
(捕)	岸	田		
(右)	山	下		
(二)	八	木		
(中)	稻	垣		
(遊)	井	上		
打數	壘盤	三振	安打	得點
三九	八	三	七	五

川	中	軍
(遊)	岸	田
(一)	杉	田
(二)	伊	藤
(初)	船	津
(三)	淺	見
(投)	原	田
(中)	木	村
(右)	栗	原
(左)	神	山
打 數	筭 盤	三 安 打 得 點
三 七	八 七	三 三

五二年對一年試合

五月二年對一年試合

九月十日午後、より幹事連、後見監督、二年先攻にて開始。七回戰、八對三にて二年大勝す。他の年級は埼玉主運動會中學學校對戰大會接近にて付き中止。

八月十六日より一日、近江國心夏寺觀音堂へ行つた。貴族を見よの鑑賞會、かくて主幹を中心ナインメントは一となり、見よの鑑賞會の組織もなした。十六、十七日週末下、河野南氏の手招き、船津、伊豆、杉田、浅見、北野、を要けた。合宿者、船津、伊豆、杉田、浅見、北野。

九月十四日東京區恩俱樂部に再び遠征して來た。狂練習の結

電	速	得
東	橋	點
(投)	渡	安
(一)	加	三
(二)	大	級
(三)	骨	三
(四)	定	級
(五)	田	三
(六)	津	級
(七)	井	三
(八)	木	級
(九)	津	三
(一〇)	島	級
打	安	得
取	三	點
級	級	
三	七	
四	三	

第一回縣下少年野球大會

參加校、本校第二チーム。飯館、美成、橘川、旭、東金子、日東、中山、志木、高坂の各小學。

第一回戰（十月五日）

川 中	盤 中
(抽) 杉 四	(註) 儲 本
(二) 木 村	(抽) 大 谷 川
(註) 厚 田	(二二) 森 川
(一) 伊 田	(三) 森 川
(三) 淺 見	(投) 大 塚
(右) 北 野	(左) 高 橋
(左) 神 山	(中) 小 林
(中) 堀 原	(一) 木 村
(投) 船 津	(右) 清水
打四邊三安得 點死似打點 球	打四邊三安得 點死似打點 球
三 二 一三四二五	二 四 二四四六

縣下中等學校野球大會

九月二十三日待ちに待つた時は来た。腕を揮ふ時は来た。二十一日は雨に染られたが今日は天高く風澄んで絶好の試合日和であつた。

川	中
(拍)	杉田
(二)	木村
(遊)	岸田
(一)	伊藤
(三)	淺見
(右)	北野
(左)	神山
(中)	西原
(投)	船津
打數	得點
三六	一七
二七	〇七

た。敵も味方も互に不安だ。實力上懸念を感ずるべき今日の

試合を見んミツアツ運は早くくり詰めかける。男も立た選手の中に熱誠な態度の健兒は、最前部に附きた。やがて雨の勢を中に應援聲は本校先攻にて開始。時正午前九點。感奮混在した應援聲は本校先攻にて開始。時正午前九點。感奮混在

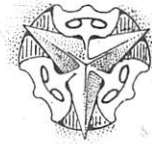
第一圖 (川形田衝突に出るが、後援健木村の安打に三塁へ送る。岸田のバントで生還、大倉中堅を繰り出し三塁九塁に走る)。(藤田選手は、大倉中堅を繰り出し三塁の暴投に出でしと、投球の凡通にて止む。(川一) (藤田)

中 川		倶 楽 部 K		中 川		龍 泉 殿	
(得)	田村 杉木	(左)	田村 杉木	(得)	原 久保	(三)	山 岸
(役)	田村 杉木	(中)	田村 杉木	(有)	大 久保	(一)	岸 井
(役)	杉木 若井	(役)	杉木 若井	(中)	中 木	(役)	入 角
(二)	田村 杉木	(二)	杉木 若井	(役)	中 木	(中)	中 木
(有)	田村 杉木	(有)	杉木 若井	(役)	中 木	(役)	中 木
(左)	田村 杉木	(左)	杉木 若井	(中)	中 木	(中)	中 木
(中)	田村 杉木	(中)	杉木 若井	(一)	中 木	(役)	中 木
(一)	田村 杉木	(一)	杉木 若井	(左)	中 木	(役)	中 木
打數	安打 得點	打數	安打 得點	打數	安打 得點	打數	安打 得點
四二	三七二	四〇	七四九	三〇	九六五七	二九	〇七二四

[illegible]

草 野 好 美				一 部 大			
4	八	水	林	4	柴	田	口
5	小	代	島	5	矢	口	里
3	田	島	田	6	失	崎	野
1	島	島	見	3	龜	林	林
2	岸	岸	田	6	小	青	田
7	可	岡	上	8	青	田	中
9	岡	岡	上	9	田	田	
8	井	井	井	1	田	田	
打数	安打	得点		打数	安打	得点	
三七	八	一五		三三	二〇	一一	

中	松	中	川
田井原崎野田	福新島尾小倉杉戸板	里井野田木宅原岡中	中大北岸鈴三栗平田
得點	三板	得點	得點
二	一六	四	四
二	二五	二	二九
打數	打數	打數	打數
二	二五	二	二九



14.12.23.

H.Y.

軍	田村	田原	見野	山原	得点
中	杉	水	北	伊	浅
2	4	1	6	3	5
4	1	6	3	5	9
1	6	3	5	9	7
6	3	5	9	7	8
3	5	9	7	8	
5	9	7	8		
9	7	8			
7	8				
8					
打	安				一〇
数	打				九
四	三				
八	振				

かくして通高の大会には再び惜敗したが、先に少年野球大会に今また市西野球大会に、優勝旗を獲得して好成績を挙げることが出来た。

あゝ一学期には前途甚だ暗鬱なりと我が野球部が通高数ヶ月に於て、斯の如き好成績を収め得たのは眞実の御指導宜し。

野球部授歌(その一)

一、初年度は春戦を
風雨管絃を操り
先聲がたく心に響ひ
勇み立ちたるわが選手。
二、勝敗わかれ時の場所
熱球猛打し何のその
ナイフの意氣を示すは今ぞ
振へ野球の雄男兒。
三、同(その二)
熱球土をんでさび
行方道へど力なく
敵陣亂るゝそのひまに
一息二息奮ひつゝ
進む味方の頼しや。

さて、選手の一致協同の精神と、そして不撓不屈の意氣と、練習とにより予ばなるまい。今年度の野球史こそ「精神一劃何事かならざらん」の金言を具體化して示したものと云ふし過言ではあるまい。

だが我が部は之で安全な者では決してない。まだ「改良革新すべき點は多々ある。我等は、我等が手に経験と得たる(一)なるべく試合に關して機敏なれ。(二)尙一層川中式を徹底せしめ(三)研究を怠るな以上の三つをこゝに繰返して本年度野球史を閉じよう。(續)徳大郎共記)

二、空蒼茫と夕されば
戦いつかさをまじりて
既に入目にあざやかに
ある勝を語るや
電句ふ應援旗
かざす我等の心地とや。
三、同(その三)
大空高く飛んで
争闘の戦場がわめ
血汐は胸にあふれつゝ
紅なるかたが選手
運命決する處の一撃
力の限りたかひて
最後の勝利を手に収め
かちささげん諸共。

一一九

年 表

－ 100年の足跡 －

年 度	卒業回	校 長	野球部長	監督・コーチ	主 将	大 会 記 録			備 考
						春 季	夏 季	秋 季	
大 8	中18	古 賀 毅	西 村 真		大塚 秀 仁		第 5 回 関東代表 竜ヶ崎中		開校20周年 対外試合初めて行われる
大 9	中19	岡 田 恒 輔	大友金次郎	村本猶太郎	岩 崎 清 録		第 6 回 関東代表 竜ヶ崎中		
大10	中20	野 山 忠 幹	飯 田 亮	飯 田 亮	増 田 信 千		第 7 回 関東代表 竜ヶ崎中		
大11	中21	野 山 忠 幹	飯 田 亮	飯 田 亮	平 川 竜 夫		第 8 回 関東代表 竜ヶ崎中 1 回戦 川越中 2 - 16 群馬太田中		選手権大会初出場
大12	中22	野 山 忠 幹	飯 田 亮	飯 田 亮	大河原雅雄		第 9 回 関東代表 宇都宮商	浦高主催 第 2 回県下中等学校野球大会 準決勝 川越中 4 - 2 深谷商 決 勝 川越中 5 - 5 熊谷中 (引分再試合) (再試合) 川越中 4 - 5 熊谷中	
大13	中23	野 山 忠 幹	飯 田 亮	飯 田 亮	渡 辺 嗣 吉 (旧姓船津)		第10回 関東代表 宇都宮中	浦高主催 第 3 回県下中等学校野球大会 1 回戦 川越中 5 - 6 熊谷中	
大14	中24	岩泉善太郎	飯 田 亮	飯 田 亮	杉 田 正 治		第11回 関東代表 前橋中	浦高主催 第 4 回県下中等学校野球大会 1 回戦 川越中 5 - 6 浦和中	
大15	中25	岩泉善太郎	飯 田 亮	飯 田 亮	岸田勝太郎		第12回 北関東代表 前橋中 2 回戦 川越中 7 - 4 栃木中 3 回戦 川越中 1 - 5 宇都宮中	浦高主催 第 5 回県下中等学校野球大会 1 回戦 川越中 23 - 3 埼玉師 準決勝 川越中 5 - 2 埼玉商 決 勝 川越中 10 - 9 浦和中	北関東大会出場 明治大学元監督岡田源三郎氏を コーチとして招聘
昭 2	中26	岩泉善太郎	飯 田 亮	飯 田 亮	田 中 孝 作		第13回 北関東代表 桐生中 1 回戦 川越中 14 - 1 不動岡中 2 回戦 川越中 2 - 10 前橋中	浦高主催 第 6 回県下中等学校野球大会	
昭 3	中27	岩泉善太郎	飯 田 亮	飯 田 亮	北 野 英 男		第14回 北関東代表 前橋中 1 回戦 川越中 12 - 7 栃木商 2 回戦 川越中 1 - 3 高崎中	桐生主催 北関東選抜野球大会 川越中 10 - 9 前橋商 浦高主催 第 7 回県下中等学校野球大会 1 回戦 川越中 9 - 15 熊谷中 川越主催 第 1 回関東選抜野球大会 準決勝 川越中 2 - 3 早稲田実	
昭 4	中28	岩泉善太郎	飯 田 亮	飯 田 亮	都 築 末 雄		第15回 北関東代表 前橋商 1 回戦 川越中 11 - 0 宇都宮農 2 回戦 川越中 2 - 10 宇都宮工		開校30周年 明治大学中村(峰)、小林、銭村 選手をコーチとして招聘
昭 5	中29	岩泉善太郎	飯 田 亮	飯 田 亮	山 本 三 郎		第16回 北関東代表 桐生中 2 回戦 川越中 8 - 2 佐野中 3 回戦 川越中 7 - 6 下野中 準々決勝 川越中 11 - 3 埼玉商 準決勝 川越中 6 - 9 高崎商	浦実主催 第 2 回県下中等学校野球大会 1 回戦 川越中 9 - 3 松山中 準決勝 川越中 6 - 2 浦和中 決 勝 川越中 13 - 2 熊谷中 桐生主催 北関東選抜野球大会 1 回戦 川越中 1 - 8 前橋中 宇都宮高農主催 北関東選抜野球大会 準決勝 川越中 16 - 5 宇都宮商 決 勝 川越中 4 - 2 宇都宮中 足利主催 全関東選抜野球大会 1 回戦 川越中 8 - 3 群馬師 2 回戦 川越中 2 - 6 前橋商	

								後援会主催第1回関東中等学校選抜大会 1回戦 川越中15-10豊岡実 準決勝 川越中30-11埼玉商 決 勝 川越中5-2横浜商工実習	
昭6	中30	岩泉善太郎	飯田 亮 大橋重五郎	岸田勝太郎 コーチ 山本三郎	橋本 定 (旧姓野本)	第8回 全国選抜中等学校野球大会 優勝広島商、準優勝中京商 2回戦 川越中0-11中京商 桐生主催 北関東選抜野球大会 準決勝 川越中8-11桐生中	第17回 北関東代表 桐生中 埼玉大会 1回戦 川越中15-0松山中 2回戦 川越中13-10浦和中 準決勝 川越中14-0熊谷中 決勝 川越中9-2豊岡実 北関東大会 1回戦 川越中7-6高崎商 準決勝 川越中8-9桐生中	宇都宮高農主催 北関東選抜野球大会 準決勝 川越中10-1豊岡実 決 勝 川越中9-3栃木中 水戸高主催 近県中等学校選抜野球大会 2回戦 川越中6-1水海道中 準決勝 川越中8-9水戸商	第8回選抜大会出場 飛田穂州氏をコーチとして招聘 埼玉県大会優勝
昭7	中31	岩泉善太郎	大橋重五郎	山本三郎	綿貫惣司		第18回 北関東代表 高崎商 埼玉大会 1回戦 川越中23-2松山中 2回戦 川越中4-0浦和中 準決勝 川越中5-0熊谷中 決 勝 川越中4-3埼玉商 北関東大会 1回戦 川越中3-1栃木師 準決勝 川越中4-5高崎商	後援会主催 関東選抜野球大会 準決勝 川越中5-3千葉中 決 勝 川越中5-2横浜商工実習	◇
昭8	中32	大谷徳馬	飯田 亮	伊丹安広	横関夏夫		第19回 北関東代表 栃木中 埼玉大会 1回戦 川越中14-3埼玉商 2回戦 川越中19-3柏壁中 準決勝 川越中7-0熊谷中 決 勝 川越中14-3浦和中 北関東大会 1回戦 川越中2-5高崎商	皇太子殿下行啓記念優勝盃 関東中等学校野球大会(神宮) 1回戦 川越中1-8桐生中	◇
昭9	中33	大谷徳馬	飯田 亮	伊丹安広	斉藤 栄		第20回 北関東代表 桐生中 埼玉大会 2回戦 川越中24-0本庄中 準決勝 川越中4-3浦和中 決 勝 川越中23-1豊岡実 北関東大会 1回戦 川越中6-7高崎商		◇
昭10	中34	木原元三	飯田 亮 大橋重五郎		家村相太郎 (旧朴相憲)		第21回 北関東代表 桐生中 埼玉大会 2回戦 川越中25-2不動岡中 決勝リーグ 川越中8-3川越商 川越中11-9浦和中 決 勝 川越中2-3豊岡実 北関東大会 1回戦 川越中11-0鹿沼農商 準決勝 川越中1-2桐生中		昭10.5.4 飯田先生逝去
昭11	中35	木原元三	梅沢仙州 平野 久		岸野利雄		第22回 南関東代表 千葉中 埼玉大会 1回戦 川越中47-0埼玉中 2回戦 川越中13-6川越商 準決勝 川越中8-3埼玉商 決 勝 川越中1-0豊岡実	摂政賜盃関東中等学校野球大会(神宮) 1回戦 川越中0-4桐生中	南関東大会に変更 埼玉大会優勝

							南関東大会 1 回戦 川越中 1 - 2 横浜商		
昭12	中36	木原元三	平野久		大熊喜代松		第23回 南関東代表 浅野中 埼玉大会 1 回戦 川越中 9 - 1 大宮工 2 回戦 川越中 2 - 6 浦和商		
昭13	中37	木原元三	平野久		清水正一		第24回 南関東代表 浅野中 埼玉大会 1 回戦 川越中 8 - 7 浦和中 2 回戦 川越中 9 - 2 大宮工 準決勝 川越中 6 - 10 浦和商		
昭14	中38	木原元三	平野久	山本三郎	牛窪栄吉		第25回 南関東代表 千葉商 埼玉大会 1 回戦 川越中 4 - 8 熊谷中		開校40周年
昭15	中39	木原元三	平野久	山本三郎	中里光男		第26回 南関東代表 千葉商 埼玉大会 1 回戦 川越中 0 - 4 浦和商		
昭16	中40	栗岡亀治	平野久	山本三郎	菅野繁利		第27回 本大会中止 埼玉大会 2 回戦 川越中 9 - 4 川越商 準決勝 川越中 1 - 0 大宮農商 決 勝 川越中 3 - 4 大宮工		戦争のため本大会中止 (地区大会のみ開催) 立教大学西本幸雄氏をコーチ として招聘
昭17	中41	栗岡亀治	平野久	山本三郎	土屋亮晃		埼玉大会 1 回戦 川越中 9 - 0 熊谷中 2 回戦 川越中 5 - 3 浦和中 準決勝 川越中 0 - 2 大宮工		本大会中止
昭18	中42	栗岡亀治	鈴木睦雄	山本三郎	土屋義夫				中止
昭19	中43 中44	小島承一			山下昌一				中止
昭20	中45	小島承一	白井正						中止
昭21	中46	福森治	横田米吉 白井正	徳田健吉	名坂弘	埼玉大会 2 回戦 川越中 9 - 0 与野農商 準々決勝 川越中 3 - 0 深谷商 準決勝 川越中 1 - 3 熊谷中	第28回 南関東代表 成田中 埼玉大会 2 回戦 川越中 12 - 2 埼玉中 準々決勝 川越中 3 - 15 浦和中	第1回秋季県民体育大会中等野球大会 1 回戦 川越中 7 - 8 川口1中	
昭22	中47 中48	日新義虎	白井正	徳田健吉	山川健夫	埼玉大会 1 回戦 川越中 8 - 5 正明中 2 回戦 川越中 ● - ● 浦和商	第29回 南関東代表 成田中 埼玉大会 1 回戦 川越中 4 - 8 大宮工	県下中等学校選抜野球大会(川越) 参加12チーム 記録不明	

年 度	卒業回	校 長	野球部長	監督・コーチ	主 将	大 会 記 録			備 考
						秋季(前年度)	春 季	夏 季	
昭23	1	日新義虎	白井 正	家村相太郎 山本三郎	井上毅一郎		埼玉大会 1回戦 川越4-8浦和商	第30回 南関東代表 成田 埼玉大会 (地区) 川越10-4川越工 1回戦 川越1-3大宮工	
昭24	2	荒井 実	白井 正 山口利道	山本三郎	田中幸夫	埼玉大会 1回戦 川越3-4柏壁 県民体育大会 1回戦 川越0-2大宮工	埼玉大会 2回戦 川越1-2浦和商	第31回 南関東代表 熊谷 埼玉大会 2回戦 川越6-10熊谷	開校50周年
昭25	3	荒井 実	山口利道	山本三郎	谷 巖	埼玉大会 準々決勝 川越4-9浦和	埼玉大会 2回戦 川越14-9不動岡 準々決勝 川越5-16本庄	第32回 南関東代表 千葉一 埼玉大会 2回戦 川越10-8所沢 3回戦 川越12-0熊谷農 準々決勝 川越3-12熊谷	
昭26	4	荒井 実	山口利道	山本三郎 田中幸夫	松崎日朗	県民体育大会 1回戦 川越4-2浦和 準決勝 川越3-4熊谷	埼玉大会 2回戦 川越0-1熊谷	第33回 南関東代表 熊谷 埼玉大会 2回戦 川越16-3慶応農 3回戦 川越7-5秩父 準々決勝 川越5-0本庄 準決勝 川越3-5鴻巣 南関東大会 1回戦 川越3-10銚子	
昭27	5	荒井 実	大川明治	田中幸夫	篠沢稔夫	埼玉大会 1回戦 川越3-4鴻巣	埼玉大会 1回戦 川越0-2鴻巣	第34回 南関東代表 成田 埼玉大会 2回戦 川越9-2所沢 3回戦 川越7-0慶応農 準々決勝 川越1-5浦和商	
昭28	6	渡辺正紀	渋谷 健	田中幸夫 伊藤慶一	大沼豊満	埼玉大会 2回戦 川越8-7浦和商 準決勝 川越1-7浦和	埼玉大会 (地区) 川越18-0川越農 2回戦 川越2-1大宮 準々決勝 川越5-6深谷商	第35回南関東代表 千葉一 埼玉大会 2回戦 川越7-1川越商 3回戦 川越5-7行田 (5回降雨コールド)	
昭29	7	渡辺正紀	渋谷 健	伊藤慶一 谷 巖	島野昌甫	埼玉大会 1回戦 川越8-1大宮 準々決勝 川越1-0熊谷商 準決勝 川越2-1浦和商 決 勝 川越1-7熊谷	埼玉大会 1回戦 川越4-6本庄	第36回 南関東代表 千葉商 埼玉大会 2回戦 川越10-0川越農 3回戦 川越15-1春日部 準々決勝 川越2-0不動岡 準決勝 川越2-0熊谷 決 勝 川越2-1浦和商 南関東大会 1回戦 川越3-0国府台 準決勝 川越1-4千葉商	18年振り埼玉大会優勝(夏)
昭30	8	渡辺正紀	渋谷 健	土屋亮晃	武藤温美	埼玉大会 (地区) 川越8-2所沢	埼玉大会 2回戦 川越0-1深谷商	第37回 南関東代表 成田 埼玉大会 2回戦 川越4-1春日部 3回戦 川越1-0大宮工 準々決勝 川越5-0川口工 準決勝 川越3-0川口	

								決勝 川越1-4鴻巣 南関東大会 1回戦 川越1-2千葉一	
昭31	9	渡辺正紀	渋谷 健	土屋亮晃	菅間五郎	埼玉大会 (地区) 川越2-2川越商 〃 川越2-1川越商 2回戦 川越3-6熊谷	埼玉大会 1回戦 川越4-3熊谷 準々決勝 川越2-17大宮工	第38回 南関東代表 千葉商 埼玉大会 2回戦 川越3-4川越商	
昭32	10	渡辺正紀	梅沢嘉一	土屋亮晃	野口静男	埼玉大会 (地区) 川越11-0飯能 〃 川越5-2川越工 準々決勝 川越8-1浦和 準決勝 川越3-1羽生実 決 勝 川越0-2熊谷	埼玉大会 (地区) 川越15-0松山 〃 川越4-0豊岡実 1回戦 川越1-12大宮	第39回 南関東代表 大宮 埼玉大会 2回戦 川越6-5与野 3回戦 川越4-0秩父 準々決勝 川越4-5大宮	
昭33	11	渡辺正紀	梅沢嘉一	土屋亮晃 島野昌南 コーチ 田中貞夫 並木英雄	石井 功	埼玉大会 (地区) 川越11-0所沢 〃 川越6-3慶応志木 1回戦 川越9-0岩槻実 準々決勝 川越2-1大宮工 準決勝 川越6-7川越商	埼玉大会 (地区) 川越4-0松山 準々決勝 川越5-6熊谷	第40回 埼玉代表 大宮 埼玉大会 2回戦 川越8-0児玉 3回戦 川越15-0羽生実 準々決勝 川越0-0大宮工 (延長15回引分) (再試合) 川越3-2大宮工 (延長11回) 準決勝 川越2-1川越工 決 勝 川越0-6大宮	第40回 記念大会
昭34	12	渡辺正紀	大久原秀雄	家村相太郎	横田 芳明	埼玉大会 (地区) 川越5-3松山 〃 川越2-1飯能 1回戦 川越1-0岩槻実 準々決勝 川越6-0浦和市立 準決勝 川越1-2深谷商	埼玉大会 (地区) 川越13-2豊岡実 〃 川越5-0飯能 1回戦 川越1-0大宮商 準々決勝 川越2-0熊谷農 準決勝 川越3-2大宮工 (延長11回) 決 勝 川越1-0大宮 関東地区大会 1回戦 川越5-2甲府一 準々決勝 川越0-1明治	第41回 西関東代表 川越 埼玉大会 2回戦 川越10-0春日部 3回戦 川越2-0大宮工 準々決勝 川越2-0川越商 準決勝 川越2-0川越工 決 勝 川越1-0鴻巣 (吉田投手43イニング無失点記録) 西関東大会 代表決定戦 川越2-1甲府工 甲子園大会 1回戦 川越3-1鎌西 2回戦 川越0-1高知商	開校60周年 選手権大会出場 西関東大会へ変更 春夏県大会優勝
昭35	13	西川好明	大久原秀雄	家村相太郎	嶋本正雄	埼玉大会 (地区) 川越3-12飯能	埼玉大会 (地区) 川越1-0松山 〃 川越1-0慶応志木 1回戦 川越2-1慶応志木 準々決勝 川越0-8大宮	第42回 西関東代表 大宮 埼玉大会 2回戦 川越3-0小松原 3回戦 川越2-1川越農 準々決勝 川越0-3所沢	
昭36	14	西川好明	大久原秀雄	家村相太郎	影森茂昭	埼玉大会 (地区) 川越8-1川越農 〃 川越2-0所沢 準々決勝 川越2-1浦和商 準決勝 川越1-2慶応志木	埼玉大会 1回戦 川越2-1浦和 2回戦 川越0-5大宮	第43回 西関東代表 甲府一 埼玉大会 2回戦 川越7-1川口 3回戦 川越2-0羽生実 準々決勝 川越1-4熊谷商工	
昭37	15	西川好明	大久原秀雄	家村相太郎	新井基之	埼玉大会 (地区) 川越5-12川越商	埼玉大会 1回戦 川越1-2深谷商	第44回 西関東代表 甲府工 埼玉大会 1回戦 川越4-0豊岡実 2回戦 川越3-1不動岡 準々決勝 川越0-4上尾	

昭38	16	西川 好明	大久原秀雄	大久原秀雄	小林 幸男	埼玉大会 (地区) 川越4-2 康応志木 ◇ 川越3-2 川越商 1回戦 川越1-3 大宮商	埼玉大会 2回戦 川越10-5 川越農 3回戦 川越2-0 熊谷商工 準々決勝 川越0-1 飯能	第45回 埼玉代表 大宮 埼玉大会 2回戦 川越4-0 熊谷商工 3回戦 川越4-2 深谷商 準々決勝 川越1-0 岩槻実 (延長12回) 準決勝 川越1-3 大宮商	第45回 記念大会
昭39	17	西川 好明	大久原秀雄	宮根七郎	平田 博邦	埼玉大会 (地区) 川越9-0 玉川工 ◇ 川越4-2 所沢 1回戦 川越1-6 熊谷商工	埼玉大会 1回戦 川越3-0 狭山工 2回戦 川越8-0 川口 3回戦 川越7-1 川越工 準々決勝 川越0-6 飯能	第46回 西関東代表 熊谷商工 埼玉大会 1回戦 川越7-0 児玉 2回戦 川越3-0 川越商 3回戦 川越4-0 大宮工 準々決勝 川越0-9 熊谷商工	
昭40	18	小久保宗平	大久原秀雄	宮根七郎	伊藤 弘	埼玉大会 (地区) 川越2-3 豊岡	埼玉大会 1回戦 川越10-2 狭山工 2回戦 川越8-1 深谷商 3回戦 川越5-4 小鹿野 準々決勝 川越0-7 上尾	第47回 西関東代表 熊谷商工 埼玉大会 2回戦 川越1-0 与野 3回戦 川越4-1 熊谷 準々決勝 川越1-9 大宮工	
昭41	19	小久保宗平	大久原秀雄	宮根七郎	小島 昭	埼玉大会 (地区) 川越15-0 川越農 ◇ 川越3-1 豊岡 ◇ 川越5-7 川越商	埼玉大会 1回戦 川越6-0 所沢 2回戦 川越1-6 与野	第48回 西関東代表 甲府工 埼玉大会 1回戦 川越1-6 児玉	
昭42	20	小久保宗平	大久原秀雄	宮根七郎	鈴木 義雄	埼玉大会 (地区) 川越7-0 玉川工 ◇ 川越5-1 狭山 2回戦 川越0-5 大宮	埼玉大会 1回戦 川越0-7 春日部	第49回 西関東代表 大宮 埼玉大会 1回戦 川越3-2 熊谷 2回戦 川越2-1 浦和工 3回戦 川越6-2 深谷商 (引分け、再試合) 準々決勝 川越2-8 川越工	
昭43	21	小久保宗平	大久原秀雄	宮根七郎	皆木 越治	埼玉大会 (地区) 川越5-7 川越商	埼玉大会 1回戦 川越7-2 鴻巣 2回戦 川越4-5 市立川口	第50回 埼玉代表 大宮工 埼玉大会 1回戦 川越2-1 大宮商 2回戦 川越7-0 寄居 3回戦 川越0-6 熊谷	第50回記念大会
昭44	22	福岡 鶴吉	野口 進	宮根七郎	斉藤 栄	埼玉大会 (地区) 川越2-3 玉川工	埼玉大会 1回戦 川越9-1 春日部工 2回戦 川越7-0 松山 3回戦 川越0-6 熊谷商	第51回 西関東代表 川越工 埼玉大会 1回戦 川越6-0 羽生実 2回戦 川越4-2 草加 (延長10回) 3回戦 川越1-2 熊谷商	開校70周年
昭45	23	福岡 鶴吉	野口 進	宮根七郎	相沢 明	埼玉大会 (地区) 川越1-0 狭山 ◇ 川越0-2 豊岡	埼玉大会 1回戦 川越11-1 狭山ヶ丘 2回戦 川越0-4 川越農	第52回 西関東代表 熊谷商 埼玉大会 1回戦 川越4-0 川越商 2回戦 川越1-4 上尾	
昭46	24	山村 良夫	野口 進	宮根七郎	篠原 久典	埼玉大会 (地区) 川越1-0 川越工 ◇ 川越0-6 豊岡	埼玉大会 1回戦 川越5-6 春日部工	第53回 西関東代表 深谷商 埼玉大会 1回戦 川越7-0 杉戸農 2回戦 川越1-0 春日部 3回戦 川越0-9 川口工	

昭47	25	山村良夫	安野 昇	宮根七郎	嶋田 斉	埼玉大会 (地区) 川越10-0 狭山ヶ丘 ◇ 川越12-0 越生 1回戦 川越3-0 春日部工 準々決勝 川越4-0 蕨 準決勝 川越5-0 春日部 決 勝 川越0-12熊谷商	埼玉大会 (地区) 川越5-6 越生	第54回 西関東代表 峡南 埼玉大会 1回戦 川越2-4 川口	
昭48	26	萩原辰之助	森光真幸	宮根七郎	鈴木和彦	埼玉大会 (地区) 川越2-0 川越農 ◇ 川越5-3 慶応志木 1回戦 川越3-2 幸手商 (延長12回) 準々決勝 川越0-7 大宮工	埼玉大会 (地区) 川越0-5 川越工	第55回 埼玉代表 川越工 埼玉大会 2回戦 川越5-2 与野農工 3回戦 川越1-2 川口工	第55回記念大会
昭49	27	萩原辰之助	森光真幸	宮根七郎	浅利 彰	埼玉大会 (地区) 川越4-1 狭山ヶ丘 ◇ 川越1-4 豊岡	埼玉大会 (地区) 川越0-3 所沢商	第56回 西関東代表 上尾 埼玉大会 2回戦 川越6-1 羽生実 3回戦 川越0-4 浦和市立	
昭50	28	小室忠良	森光真幸	宮根七郎	田中喜政	埼玉大会 (地区) 川越15-0 越生 ◇ 川越1-0 所沢商 ◇ 川越4-1 玉川工 2回戦 川越2-4 浦和	埼玉大会 (地区) 川越3-6 狭山ヶ丘	第57回 埼玉代表 上尾 埼玉大会 1回戦 川越5-3 大宮北 2回戦 川越2-3 上尾	各県1校代表となる
昭51	29	小室忠良	森光真幸	宮根七郎	古森茂幹	埼玉大会 (地区) 川越1-0 飯能 ◇ 川越2-5 城西川越	埼玉大会 (地区) 川越1-2 所沢	第58回 埼玉代表 所沢商 埼玉大会 2回戦 川越4-2 埼玉栄 3回戦 川越1-7 川口工	
昭52	30	小室忠良	森光真幸	宮根七郎	渡辺弘之	埼玉大会 (地区) 川越6-2 狭山工 ◇ 川越3-1 松山 2回戦 川越2-11秩父農工	埼玉大会 (地区) 川越6-3 狭山ヶ丘 ◇ 川越10-8 松山 1回戦 川越0-1 熊谷商	第59回 埼玉代表 川口工 埼玉大会 2回戦 川越2-5 越谷	
昭53	31	小室忠良	森光真幸	宮根七郎	嘉悦 勉	埼玉大会 (地区) 川越6-0 慶応志木 ◇ 川越5-1 松山 1回戦 川越2-3 与野	埼玉大会 (地区) 川越10-0 吉見 ◇ 川越1-0 豊岡 1回戦 川越4-5 秩父農工	第60回 埼玉代表 所沢商 埼玉大会 1回戦 川越4-2 越谷北 2回戦 川越11-0 富士見 3回戦 川越0-2 秩父農工	
昭54	32	飯島武司	吉田 正	宮根七郎	横田雅之	埼玉大会 (地区) 川越5-0 富士見 ◇ 川越5-2 立教 1回戦 川越6-1 白岡 2回戦 川越6-2 埼玉大深谷 準々決勝 川越3-9 川越商	埼玉大会 (地区) 川越5-2 狭山 ◇ 川越4-5 川越商	第61回 埼玉代表 上尾 埼玉大会 1回戦 川越5-3 羽生実 2回戦 川越7-3 児玉農工 3回戦 川越0-7 立教	開校80周年
昭55	33	飯島武司	吉田 正	宮根七郎	林 岳彦	埼玉大会 (地区) 川越0-5 所沢商	埼玉大会 (地区) 川越8-2 川越農 ◇ 川越1-3 川越商	第62回 埼玉代表 熊谷商 埼玉大会 1回戦 川越3-0 不動岡 2回戦 川越3-2 春日部 3回戦 川越5-1 草加 4回戦 川越2-4 川口工	

昭56	34	飯島武司	吉田 正	宮根七郎	茂垣 潔	埼玉大会 (地区) 川越6-2川越工 ◇ 川越5-1所沢 1回戦 川越1-3姿沼	埼玉大会 (地区) 川越14-1城北埼玉 ◇ 川越5-1所沢北 1回戦 川越1-4鴻巣	第63回 埼玉代表 熊谷商 埼玉大会 1回戦 川越5-2越谷南 2回戦 川越0-2越谷	
昭57	35	飯島武司	吉田 正	鈴木和彦	角田 仁	埼玉大会 (地区) 川越0-1日高	埼玉大会 (地区) 川越0-2川越工	第64回 埼玉代表 熊谷 埼玉大会 1回戦 川越9-0上尾沼南 2回戦 川越4-2大宮東 3回戦 川越4-8大宮	
昭58	36	宮島秀夫	吉田 正	鈴木和彦	吉田卓義	埼玉大会 (地区) 川越7-1坂戸西 ◇ 川越1-4川越西	埼玉大会 (地区) 川越0-1松山	第65回 埼玉代表 所沢商 埼玉大会 2回戦 川越4-0草加東 3回戦 川越4-3西武台 4回戦 川越1-4大宮東	
昭59	37	宮島秀夫	吉田 正	鈴木和彦	大森邦弘	埼玉大会 (地区) 川越2-6狭山ヶ丘	埼玉大会 (地区) 川越3-2所沢 ◇ 川越6-3狭山工 1回戦 川越1-4春日部共栄	第66回 埼玉代表 上尾 埼玉大会 2回戦 川越7-1草加 3回戦 川越1-7春日部工	
昭60	38	小室英夫	吉田 正	鈴木和彦	稲葉 正	埼玉大会 (地区) 川越1-0朝霞西 ◇ 川越3-15朝霞	埼玉大会 (地区) 川越5-3飯能 ◇ 川越13-6入間 1回戦 川越4-5幸手商	第67回 埼玉代表 立教 埼玉大会 2回戦 川越3-2狭山工 3回戦 川越5-4児玉 4回戦 川越4-6市立川口	飯田先生記念碑建立50年祭举行 (昭和60年10月27日)
昭61	39	小室英夫	吉田 正	鈴木和彦	柴田 稔	埼玉大会 (地区) 川越7-0坂戸西 ◇ 川越0-5立教	埼玉大会 (地区) 川越15-1川越農 ◇ 川越11-4所沢東 1回戦 川越0-1花咲徳栄	第68回 埼玉代表 浦和学院 埼玉大会 1回戦 川越5-0志木 2回戦 川越12-0三郷 3回戦 川越10-1越谷東 4回戦 川越0-1大宮工	
昭62	40	渋谷 健	吉田 正	鈴木和彦	佐伯秀司	埼玉大会 (地区) 川越16-0川越農 ◇ 川越1-7川越西	埼玉大会 (地区) 川越2-0富士見 ◇ 川越4-3川越西 2回戦 川越6-1埼工大深谷 3回戦 川越1-7大宮南	第69回 埼玉代表 浦和学院 埼玉大会 2回戦 川越3-4大宮工	
昭63	41	渋谷 健	吉田 正	鈴木和彦	山下浄二	埼玉大会 (地区) 川越9-2坂戸西 ◇ 川越1-2入間向陽	埼玉大会 (地区) 川越2-0新座 ◇ 川越3-2狭山経済 1回戦 川越4-8大宮東	第70回 埼玉代表 浦和市立 埼玉大会 2回戦 川越6-8熊谷工	

年 度	学校長	監 督	部 長	主 将	地区予選1回戦	地区代表決定戦	県大会1回戦	県大会2回戦	県大会3回戦	選手権大会出場校	備 考		
					夏1回戦	夏2回戦	夏3回戦	夏4回戦	夏5回戦				
昭和63年度秋	渋谷 健	鈴木 和彦	吉田 正	松澤 孝司	○7-4 城北埼玉	●2-10 坂戸				川越商業			
平成元年度春					●3-4 私越生								
平成元年度夏					●2-3 人間								
平成元年度秋				八木 和弥	○7-0 川越東	○10-0 川越南	○4-3 東和昌平	○6-2 熊谷	●3-4 熊谷商	大宮東			
平成2年度春					●1-9 所沢北								
平成2年度夏					○6-1 大宮西	○8-0 熊谷工	●3-7 浦和学院						
平成2年度秋	鈴木 良栄		鈴木 和夫	小澤 和也	●0-4 新座総合					春日部共栄			
平成3年度春					○3-2 新座総合	●3-7 狭山工							
平成3年度夏					○6-3 杉戸	○13-3 上尾南	○10-0 所沢東	●2-3 大宮工					
平成3年度秋					阿部 博光	●0-4 川越東						秀 明	
平成4年度春							●7-9 松山						
平成4年度夏						○3-2 武南	○6-5 小鹿野	●2-3 秩父農工					
平成4年度秋				芝山 忠司	●7-10 所沢					春日部共栄	春季より横田雅之監督		
平成5年度春					●2-10 坂戸								
平成5年度夏					○8-3 新座総合	○8-1 妻沼	●0-7 花咲徳栄						
平成5年度秋		森田 哲郎		○9-2 日高	●11-16 松山				浦和学院				
平成6年度春				○11-0 鳩山	●1-4 聖望学園								
平成6年度夏				○10-2 所沢西	○11-6 武南	○13-3 吉川	●0-7 春日部共栄						
平成6年度秋				上村 晋哉	●2-6 飯能						越谷西		
平成7年度春					○2-0 滑川	○4-2 秀明	●0-6 本庄						
平成7年度夏					○8-1 富士見	○9-3 久喜北陽	○4-2 獨協埼玉	●4-5 埼玉栄					
平成7年度秋		松本 太郎		○11-7 人間	●9-10 西武台				浦和学院				
平成8年度春				○7-1 城北埼玉	●1-9 狭山ヶ丘								
平成8年度夏					●2-5 早大本庄								
平成8年度秋	高橋 克己	落合 正幸	○9-3 豊岡	●8-10 滑川				春日部共栄					
平成9年度春			○13-1 所沢東	○3-2 立教	●4-9 本庄								
平成9年度夏			○3-2 志木	●3-5 春日部工									
平成9年度秋		末本 雅之	○9-6 所沢商	○2-1 西武台	●1-2 鷺宮			東-埼玉栄 西-滑川					
平成10年度春				●4-11 所沢西									
平成10年度夏				●0-1 川越工									

年 度	学校長	監 督	部 長	主 将	地区予選1回戦	地区代表決定戦	県大会1回戦	県大会2回戦	県大会3回戦	選手権大会出場校	備 考		
					夏1回戦	夏2回戦	夏3回戦	夏4回戦	夏5回戦				
平成10年度秋	大沢 幸夫	横田 雅之	高橋 克己	森 康隆	●2-4 川越初雁					聖望学園			
平成11年度春	橋本 恭明					●7-9 狭山清陵							
平成11年度夏							●4-8 深谷商						
平成11年度秋				須川 将憲		○7-3 慶応志木	●4-5 埼玉						
平成12年度春			○1-0 所沢北		○6-5 狭山ヶ丘		●4-7 春日部			浦和学院			
平成12年度夏			○6-2 寄居		○3-1 開智	●1-3 松山							
平成12年度秋			高沢 尚	遠藤 望	●1-3 秀明							花咲徳栄	春季より船橋博俊監督
平成13年度春					●2-5 所沢西								
平成13年度夏					●0-14 埼玉栄								
平成13年度秋				伊野 庸介	●0-1 東農大三							浦和学院	
平成14年度春		○7-1 埼玉平成			●1-3 川越西								
平成14年度夏		○10-9 不動岡			○6-3 熊谷商	●0-12 浦和学院							
平成14年度秋	船橋 博俊	岡田 稔	近松 悠紀	○7-3 川越西	○7-0 所沢		●1-12 鷺宮			聖望学園			
平成15年度春				○2-1 西武文理	○5-0 川越初雁	○6-2 越谷南	●0-4 松山						
平成15年度夏			○6-3 杉戸農	●0-4 本庄									
平成15年度秋			西尾 祐人	○4-0 所沢	○5-4 入間向陽		●1-2 所沢商			浦和学院	春季県大会より角田英雄監督		
平成16年度春		○4-3 入間向陽		○15-2 川越南		●3-12 浦和北							
平成16年度夏				○8-1 越生	○4-3 熊谷西	●2-7 正智深谷							
平成16年度秋		菊池 建太	角田 英雄	船橋 博俊	村田 誉	●11-13 所沢					春日部共栄	春季より吉野善行監督	
平成17年度春						○8-4 狭山ヶ丘	○3-2 所沢商		●0-2 東農大三				
平成17年度夏					○4-3 慶応志木	●3-7 春日部							
平成17年度秋			西尾 卓馬		●2-8 市川越						浦和学院		
平成18年度春	●0-2 所沢北												
平成18年度夏					○11-0 東野	○7-1 狭山経済	○3-1 浦和実	●0-5 東農大三					
平成18年度秋	吉野 善行				大澤 悟	●1-4 川越工						浦和学院	
平成19年度春			○2-1 川越南			●5-9 大井							
平成19年度夏			吉澤 優		石川 峻	●2-5 大宮北							
平成19年度秋						●4-10 入間向陽						南-浦和学院 北-本庄第一	
平成20年度春	●1-2 城北埼玉												
平成20年度夏		○2-1 狭山工				●1-4 所沢							

年 度	学校長	監 督	部 長	主 将	地区予選1回戦	地区代表決定戦	県大会1回戦	県大会2回戦	県大会3回戦	選手権大会出場校	備 考	
					夏1回戦	夏2回戦	夏3回戦	夏4回戦	夏5回戦			
平成20年度秋	吉澤 優	吉野 善行	船橋 博俊			○9-6 城西川越		●0-4 川口青陵		聖望学園		
平成21年度春	松下 幸夫		石井 瑞樹	●1-4 川越東								
平成21年度夏				○13-0 飯能	●2-5 三郷北							
平成21年度秋			岡田 実	中里 真	●4-5 埼玉平成						本庄第一	
平成22年度春					●2-3 坂戸西							
平成22年度夏					●1-2 本庄一							
平成22年度秋					●3-7 所沢商							
平成23年度春			松田 幸夫	須川 将憲	山田憲史郎	●0-7 飯能南					花咲徳栄	春季より岡田実監督
平成23年度夏						●8-9 不動岡						
平成23年度秋				柳澤有一郎		●2-4 山村学園						浦和学院
平成24年度春		村松 尚広			○5-3 坂戸西	○4-3 武蔵越生	●0-12 春日部共栄					
平成24年度夏		●6-13 獨協埼玉										
平成24年度秋		○9-2 秀明			●3-4 川越工							
平成25年度春	細田 宏	丸山桂之介		瀬尾 祐志	○8-1 川越総合	●9-10 狭山ヶ丘				浦和学院		
平成25年度夏					○5-4 朝霞西	●3-6 埼玉平成						
平成25年度秋		岡田 実		大野 拓真	○2-1 ふじみ野	●2-4 西武文理					春日部共栄	
平成26年度春					●1-7 山村学園							
平成26年度夏			岡村 能成	○10-0 進修館	○20-0 日高	●2-8 炭						
平成26年度秋					○9-1 飯能	●0-1 所沢商						
平成27年度春		青木 勇藤	紫村 英敬	市石 宙	○11-3 狭山経済	○1-0 豊岡		●8-9 久喜北陽		花咲徳栄		
平成27年度夏						●0-14 川越東						
平成27年度秋				柳澤 大輔	○8-1 所沢商	●2-6 狭山ヶ丘					花咲徳栄	
平成28年度春					○4-3 川越西	○5-4 入間向陽	●0-1 川越工					
平成28年度夏	○36-0 自由の森				●6-7 浦和東							
平成28年度秋	野口 恵汰				●3-6 市川越						花咲徳栄	
平成29年度春				○10-2 狭山工	○5-3 所沢	●0-3 川越東						
平成29年度夏					○5-2 桶川	○5-1 鴻巣	●8-14 星野					
平成29年度秋					○8-1 日高	●1-11 山村学園						
平成30年度春	飯田 敦			紫村 英敬	林 岳彦	三辻 翔	●3-9 所沢中央				南-浦和学院 北-花咲徳栄	春季より紫村英敬監督
平成30年度夏		○14-1 岩槻	○7-3 大宮光陵			●0-9 狭山ヶ丘						

川高野球部OB会規約

(名称)

第1条 本会は、川高野球部OB会と称する。

(事務所)

第2条 本会の事務所は、埼玉県立川越高等学校内に置く。

(目的)

第3条 本会は、会員相互の親睦融和を図り、かつ、母校野球部の育成発展を期することを目的とする。

(会員)

第4条 本会会員は、旧川中及び川高の野球部に在籍した者をもって組織する。

(役員)

第5条 本会に次の役員を置く。

- (1) 会 長 1 名
- (2) 副会長 若干名 4 会 計 2 名
- (3) 理 事 若干名 6 監 事 2 名

2 役員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(職務)

第6条 会長は、本会を代表し、会務を統括する。

2 副会長は、会長を助け、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

3 理事は、会長の命を受け事務を処理する。

4 監事は、会計を監査する。

(役員の選出)

第7条 役員は、総会で会員の中から選出し、会長及び副会長は、理事の互選によりこれを決定する。

(顧問及び相談役)

第8条 本会に顧問及び相談役を置くことができる。

2 顧問及び相談役は理事会に諮り、会長が委嘱する。

(会議)

第9条 総会は、会長が招集する。

2 通常総会は、毎年5月にこれを開き、次の事項を審議決定する。

- (1) 決算及び事業報告
- (2) 予算及び事業計画
- (3) その他本会の目的を達成するに必要な事項

3 臨時総会は、会員の3分の1以上の要求があった場合又は会長が必要と認めた場合に開催することができる。

4 理事及び幹事は、理事会を組織し、その職務を処理する。

(会計)

第10条 本会の会計年度は、4月1日から3月31日までとする。

2 経費は、会員の年会費、寄付金その他の収入でこれをまかなう。

(規約の変更)

第11条 本規約を変更するには、総会で出席会員の3分の2以上の賛成を得ることとする。

附 則

この規約は、平成25年5月19日から施行する。

川高野球部OB会慶弔規定

(目的)

第1条 この規定は、川高野球部OB会（以下「本会」という。）の会員に対する慶弔について必要な事項を定める。

(慶弔の種類)

第2条 慶弔の種類は、次に掲げるとおりとする。

- 1 見舞金
- 2 弔慰金
- 3 弔電
- 4 花輪（生花）
- 5 記念品

(対象者)

第3条 前条の慶弔の対象者は、次に掲げるとおりとする。

- 1 本会の育成・発展に顕著な功績を残した者
 - 2 特別な表彰を受けた者
 - 3 その他、本会の発展に寄与した者（会員以外の者を含む）
- 2 前項に規定する者のほか、弔電、花輪（生花）については、次に掲げるとおりとする。
- 1 弔電 本会会員全員（会費納入者のみ）
 - 2 花輪（生花） 会長が理事会に諮り決定した者

(その他)

第4条 この規定の定めるもののほか、慶弔に関し必要な事項は、会長が理事会に諮って定める。

附 則

この規約は、平成11年5月17日から施行する。

川越高等学校野球部百周年事業実行委員会名簿

委員長	田中 貞夫	高7回卒	副委員長	並木 英雄	高8回卒
副委員長	新井 茂	高14回卒	委員(会計)	林 和彦	高28回卒

川越高等学校野球部百年史編纂実行委員会名簿

委員長	齊藤 栄	高22回卒	副委員長	木島 宣之	高25回卒
副委員長	波田野 拓	高32回卒	副委員長	稲葉 正	高38回卒
副委員長	岡村 亨	高39回卒	副委員長	梶田 憲一	高46回卒
委員	石井 功	高11回卒	委員	松澤 孝司	高42回卒
委員	八木 和弥	高43回卒	委員	小澤 和也	高44回卒
委員	石原 利彦	高45回卒	委員	芝山 忠司	高46回卒
委員	岡崎 浩貴	高47回卒	委員	上村 晋哉	高48回卒
委員	松本 太郎	第49回卒	委員	落合 正幸	高50回卒
委員	田幡 悠嗣	高51回卒	委員	川中 真	高52回卒
委員	森 康隆	高52回卒	委員	紫村 英敬	高53回卒
委員	須川 将憲	高53回卒	委員	遠藤 望	高54回卒
委員	岡崎 丈弘	高55回卒	委員	近松 悠紀	高56回卒
委員	西尾 祐人	高57回卒	委員	村田 登	高58回卒
委員	西尾 拓馬	高59回卒	委員	吉武 亮	高60回卒
委員	牛坂 泰洋	高61回卒	委員	石井 瑞樹	高62回卒
委員	中里 真	高63回卒	委員	山田憲史郎	高64回卒
委員	村松 尚広	高65回卒	委員	大谷木達也	高66回卒
委員	大野 拓真	高67回卒	委員	石田 大樹	高68回卒
委員	高松 駿佑	高69回卒	委員	郷右近 亮	高70回卒
委員	荻野 光介	高71回卒			

題字 渋谷成子

編集後記

平成25年4月のOB会役員会にて川越高校野球部創部百周年の件が議題に上がり、その準備を役員全員で対応していくことが決まりました。

百年史編纂実行委員会を立ち上げ、平成28年10月に第1回実行委員会を川高同窓会室で開催し、編集作業が本格化しました。七十年史の作成に尽力した石井功氏（高11回）に出席いただきアドバイスを頂きました。

また、新井茂前会長（高14回）には様々な局面でご協力いただきました。

2年の年月をかけて、ここに百年史は完成しました。しかしながら、七十年史の足元にも及ばず、満足な出来とは言えません。

情報化社会の現在、ついていけない私に対して、若い役員のご協力、本当にありがとうございました。編集に携わったものの、素人ゆえ不備な面が多くありますがご容赦ください。

甲子園100回大会の年に母校が創部百周年。これにあやかり是非とも甲子園出場をと祈っていましたが3回戦敗退ということで叶いませんでした。しかし、甲子園101回大会が母校創部百一周年であり、母校の野球部の歴史は甲子園の歴史と共に刻まれていきます。私学の出場の多い昨今、いつの日か県立の進学校である母校が甲子園に出場し新しい風を吹かせて欲しいと思います。いや、母校でなくても良い。ここに挨拶文をいただいた高校、そして、全国の公立の進学校の甲子園出場を祈ってやみません。

百年史刊行にあたって、八田英二日本高野連会長をはじめとする多くの方々にお祝いの言葉をいただきました。また、新聞等各種資料を利用させていただきました。揮毫は故渋谷健先生（元日本高野連副会長）の奥様渋谷成子様をお願いしました。「健先生もOBも喜んでくれると思います」とお話ししたところ、快くお引き受けいただきました。本当にありがとうございました。（栄）

川越高校野球部百年史

平成 30 年 12 月 1 日発行

編 集 川越高等学校野球部百年史編纂実行委員会

発 行 埼玉県立川越高等学校野球部OB会

印 刷 川越印刷株式会社

